

EAP 対応 RADIUS サーバアプライアンス

FutureNet RAシリーズ ユーザーズガイド

Ver.1.20.0 対応版



目次

はじめに	6
第1章 本装置の概要	7
. 製品情報	8
. 各部の名称と機能 (RA-1300)	9
. 各部の名称と機能 (RA-1200)	13
. 各部の名称と機能 (RA-830)	17
. 各部の名称と機能 (RA-730)	20
. 動作環境	23
第2章 コンピュータのネットワーク設定	24
. Windows XP のネットワーク設定	26
. Windows Vista のネットワーク設定	27
. Windows 7 のネットワーク設定	28
. Windows 8 のネットワーク設定	29
. Mac OS X のネットワーク設定	30
第3章 設定画面へのログイン方法	31
. 設定画面へのログイン方法	32
. HTTPS アクセス時の CA 証明書のインポート方法	33
第4章 設定ウィザードによる設定	40
. 設定を始める前に	41
. 設定内容の詳細	44
1. 管理者	44
2. ネットワーク基本情報	45
3. 内蔵時計	46
4. ログ	47
5. スタティックルート	49
6. DNS	50
7. NTP	51
8. SNMP	52
9. CA - 基本情報	56
10. CA - RADIUS サーバ証明書	59
11. CA - HTTPS サーバ証明書	60
12. CA - LDAP クライアント証明書	60
13. CA - LDAP サーバ証明書	60
14. 管理画面へのアクセス	61
15. RADIUS - 基本情報	62
16. RADIUS - 二重化	64
17. RADIUS - ログ	65
18. RADIUS - アドレスプール	66
19. RADIUS - クライアント	67
20. RADIUS - アトリビュート	68
21. RADIUS - ActiveDirectory	70
22. RADIUS - LDAP	72
23. RADIUS - ユーザ基本情報	77
24. RADIUS - 認証アトリビュート	79
25. RADIUS - 応答アトリビュート	81

26. グループ ID	83
27. RADIUS - ユーザ証明書	84
28. RADIUS - ユーザプロファイル	85
29. RADIUS - ユーザ作成	86
30. AD ユーザ	96
31. LDAP ユーザ	97
32. ユーザ管理者	98
33. フィルタ	99
34. RADIUS 起動	101
35. 設定の保存	102
36. 完了	103
第5章 本装置管理者メニュー	104
画面構成	105
第6章 RADIUS 設定	107
. サーバ設定	108
1. 起動・停止	108
2. 基本情報	109
3. 二重化	111
4. アトリビュート	112
5. アドレスプール	114
6. クライアント	115
7. ActiveDirectory	116
8. LDAP	118
9. レルム (Ver 1.9.0以降のみ)	123
10. ログ	125
. プロファイル	127
1. ユーザプロファイル	128
2. ユーザ基本情報	129
3. 認証アトリビュート	131
4. 応答アトリビュート	133
5. グループ ID	135
6. 証明書	136
. ユーザ設定	139
1. ユーザ	139
2. AD ユーザ	148
3. LDAP ユーザ	149
4. ファイル読み込み	150
5. ユーザ検索	151
6. ユーザリセット	152
第7章 CA 設定	153
. CA/CRL 設定	154
. 証明書	158
第8章 管理機能	162
. ネットワーク	163
1. 基本情報	163
2. スタティックルート	164
3. フィルタ	165
4. DNS	167

5.NTP	168
6.SNMP	169
7.DHCP(Ver 1.10.0以降のみ)	173
. システム	176
1. 内蔵時計	176
2. ログ	177
3. 設定情報の保存・復帰	179
4. 設定情報の初期化	180
5. ファームのアップデート	181
6. 再起動	182
7. 停止	183
8. 管理者	184
9. 管理画面へのアクセス	185
10. HTTPS サーバ証明書	186
11. 設定情報の同期	187
第9章 運用機能	196
. ユーザ情報	197
1. ログイン情報	197
2. AD ユーザ情報	199
. ログ情報	200
1. システムログ	200
2. オペレーションログ	201
3. アクセスログ	202
4. 認証ログ	203
5. アカウンティングログ	205
. ネットワークテスト	207
1. 到達性確認	208
2. ルート確認	209
3. パケットキャプチャ	210
4. 名前解決確認	212
. システム情報	213
1. システム情報	213
2. DHCP リース情報	215
. サポート情報	216
第10章 ユーザ管理者メニュー	217
画面構成	218
第11章 ユーザメニュー	219
. ログイン	220
. パスワード	221
. CA/CRL	222
. 証明書	223
. 同期可能な設定情報・操作	224
第12章 一般ユーザによるPCの設定	225
. 設定例(EAP-TLS)	226
. 設定例(EAP-PEAP)	228
. 設定例(EAP-TTLS)	231
第13章 復旧操作	232
Init スイッチの操作	233

付録 A	最大数一覧	234
付録 B	サポートについて	238
付録 C	ユーザ設定情報のファイルフォーマット	241
付録 D	用語説明	253
付録 E	システムログ一覧	261
付録 F	同期・二重化構成におけるファームウェア更新手順	264
付録 G	親子連携	267
付録 H	認証ログの reason メッセージ一覧	273

はじめに

本書は、FutureNet RA-1300 / RA-1200 / RA-830 / RA-730のユーザーズガイドです。

ご注意

- 1 本装置の故障、誤動作、不具合、あるいは停電などの外部要因によって、通信の機会を逸したために生じた損害などの純粹経済損失につきましては、当社はいっさいその責任を負いかねますのであらかじめご了承ください。
- 2 通信情報が漏洩した事による経済的、精神的損害につきましては、当社はいっさいその責任を負いかねますのであらかじめご了承ください。
- 3 本書の内容の一部または全部を無断で転載、複写することを禁じます。
- 4 本書およびソフトウェア、ハードウェア、外観の内容について、将来予告なしに変更することがあります。
- 5 本書の内容については万全を期しておりますが、万一ご不審な点や誤り、記載漏れなどお気づきの点がありましたらご連絡ください。

商標の表示

「FutureNet」はセンチュリー・システムズ株式会社の登録商標です。

下記製品名等は米国Microsoft Corporationの登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows 95、Windows 98、Windows 2000、Windows Me、Windows XP、Windows Vista、Windows 7、Windows 8、ActiveDirectory

Macintosh、Mac OS Xは、アップル社の登録商標です。

その他、本書で使用する各会社名、製品名は各社の商標または登録商標です。

本ユーザーズガイドを読む前に

参考文献は以下のとおりです。

RFC 2865 Remote Authentication Dial In User Service (RADIUS).

RFC 2866 RADIUS Accounting.

RFC 2867 RADIUS Accounting Modifications for Tunnel Protocol Support.

RFC 2868 RADIUS Attributes for Tunnel Protocol Support.

RFC 2869 RADIUS Extensions.

RFC 3162 RADIUS and IPv6

RFC 3575 IANA Considerations for RADIUS (Remote Authentication Dial In User Service).

RFC 3579 RADIUS (Remote Authentication Dial In User Service) Support For Extensible Authentication Protocol (EAP).

RFC 3580 IEEE 802.1X Remote Authentication Dial In User Service (RADIUS) Usage Guidelines.

RFC 3748 Extensible Authentication Protocol (EAP).

RFC 4590 RADIUS Extension for Digest Authentication.

RFC 4675 RADIUS Attributes for Virtual LAN and Priority Support

第1章

本装置の概要

FutureNet RAシリーズの「製品概要」「特徴」「仕様」等については、弊社のWebサイトを参照してください。

FutureNet RA-1300

<https://www.centurysys.co.jp/products/securityserver/ra1300.html>

FutureNet RA-1200

<https://www.centurysys.co.jp/products/securityserver/ra1200.html>

FutureNet RA-830

<https://www.centurysys.co.jp/products/securityserver/ra830.html>

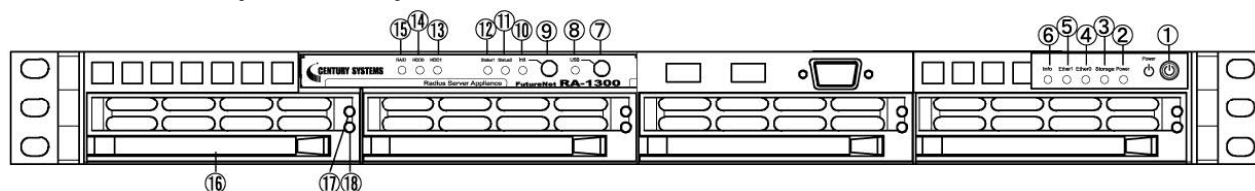
FutureNet RA-730

<https://www.centurysys.co.jp/products/securityserver/ra730.html>

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-1300)

製品前面 (RA-1300)



Power スイッチ

停止中(スタンバイ状態)にPower スイッチを押すと、システムが起動します。ただし、通電開始直後は、Power スイッチを押すまで30秒以上待つ必要があります。

起動中にPower スイッチを押すと、終了処理を行いスタンバイ状態に移行します。

起動中にPower スイッチを4秒以上押すと、強制的にスタンバイ状態に移行します。

ただし、本装置が破損する可能性があるため、非常時のみに使用してください。

通電を開始した場合の動作は、以前の停止状態に依存します。

正常に停止していれば、通電を開始してもスタンバイ状態のままです(起動しません)。

正常に停止していなければ、通電開始とともにシステムが起動します。

なお、通電を一旦停止した場合、再度通電を開始するまでに1分以上待つ必要があります。

Power LED ()

本装置の起動中は点灯()します。

停止中(スタンバイ状態)は消灯()します。

Storage LED()

内蔵ディスクへのアクセス時に点滅します(*)。

Ether0 LED ()

Ether1 LED ()

対応するEthernet ポートの状態を表示します。

未接続(Link down)時は、消灯します()。

接続(Link up)時は、点灯します()。

通信中は、点滅します(*)。

Information LED ()

電源ユニットの異常時や、温度やファン異常時に、点滅(*)または点灯()します。

点滅または点灯によって、ハードウェアに何らかの異常が発生したことを知らせますが、どのような異常かを特定することはできません。

USB スイッチ

本バージョンでは使用しません。

USB LED()

本バージョンでは使用しません。

Init スイッチ

システム起動時(通電開始時、またはPower スイッチ押下時)に本スイッチが押されている場合、システムは工場出荷状態で起動します。

約3秒間押し続けると、スイッチの押下が確定し、Init LEDが点灯します。この後、システムは工場出荷状態で起動します。

Init LED()

機器の起動・停止、設定の復帰、初期化などの状態を表します。

工場出荷状態での起動処理中、および初期化処理中に点灯()します。

通常の起動処理中、停止処理中、設定の復帰処理中は消灯()します。

詳細については、p.11の表を参照してください。

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-1300)

Status2 LED()

Status1 LED()

機器の状態を表示します。

詳細については、p.11の表を参照してください。

HDD1 LED()

HDD0 LED()

本バージョンでは使用しません。

RAID LED()

本バージョンでは使用しません。

RAID(HDDベイ)

前面に4個のHDDベイを配置しています。向かって左から0, 1, 2, 3とします。

0, 1にHDDを実装しています。2, 3は使用しません。RAID1に対応しています。

RA-1300が故障した場合、2台のHDDを同時に別のRA-1300に移設することが出来ます。

Activity LED()

Fail LED()

HDDベイ毎に、Activity LEDとFail LEDを装備しています。

Activity LEDは、アクセス時に点灯()します。

異常が発生した場合は、該当するHDDベイのFail LEDが点滅(＊)または点灯()します。

正常時は、消灯()しています。

故障時は、点灯()します。

リビルド中は、1Hz(on:50msec, off:500msec)で点滅(＊)します。

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-1300)

RA-1300のStatus1 LED、Status2 LEDおよびInit LEDの表示状態と、本装置の動作内容の関係を下表に記します。

本装置の動作	LEDの表示状態			備考
	Status1	Status2	Init	
停止中(スタンバイ状態)				-
機器起動				約1秒間
				約80秒間
	*			40秒以上(設定に依存)
機器再起動	*			約20秒間
				約1秒間
				約70秒間
	*			40秒以上(設定に依存)
機器停止	*			約20秒間
工場出荷状態での起動 (Initスイッチ押下)				約1秒間
				約3秒間
				約80秒間
	*			40秒以上(設定に依存)
起動処理完了				-
設定復帰 (強制同期を含む) (設定取得の設定更新時を含む)	*			40秒以上(設定に依存)
設定初期化	*			40秒以上(設定に依存)
設定復帰・設定初期化完了				-
RADIUSサービス起動中				-
ファームウェア更新 (再起動完了まで)	*	*		約30秒間
	*			約10秒間
				約1秒間
				約70秒間
	*			40秒以上(設定に依存)
ハードウェア異常	**	**	**	早い点滅(3~4Hz)

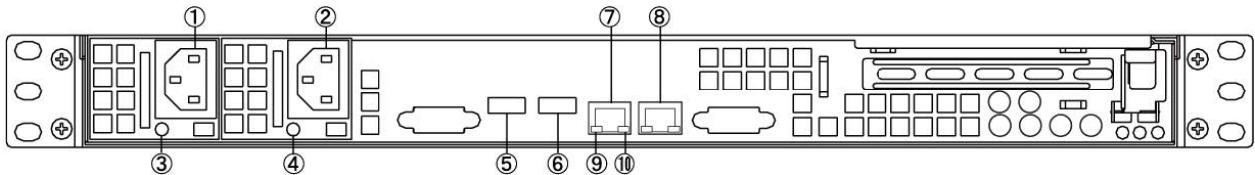
： LEDが消灯している状態です。
 ： LEDが点灯(緑色)している状態です。
 ： LEDが点灯(橙色)している状態です。

* : LEDが点滅(緑色)している状態です。
 1Hz(on:500msec, off:500msec)
 ** : LEDが高速点滅(緑色)している状態です。
 ** : LEDが高速点滅(橙色)している状態です。
 3 ~ 4Hz

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-1300)

製品背面 (RA-1300)



電源ケーブル差込口

電源ケーブル差込口

製品付属の電源ケーブルを接続するコネクタです。ケーブルは必ず付属のものをご使用ください。

本装置は、電源ユニット(400W)を2個搭載しています。

電源ユニット・ステータスLED(/)

電源ユニット・ステータスLED(/)

各電源ユニットに、LEDが1つあります。

機器起動時は緑色点灯()します。

停止中(スタンバイ状態)は橙色点灯()します。

USB0ポート

USB1ポート

本バージョンでは使用しません。

Ether0ポート

Ether1ポート

10BASE-T/100BASE-TX/1000BASE-T対応のEthernetポートです。

Activity LED()

Ethernetケーブルのリンク状態を示します。ランプは以下のようなパターンで点灯/消灯します。

Link Down : 消灯()

Link Up : 点灯()

通信中 : 点滅(★)

Speed LED(/)

Ethernetの接続速度を示します。LEDは以下のようなパターンで点灯/消灯します。

未接続 : 消灯()

10BASE-Tモード : 消灯()

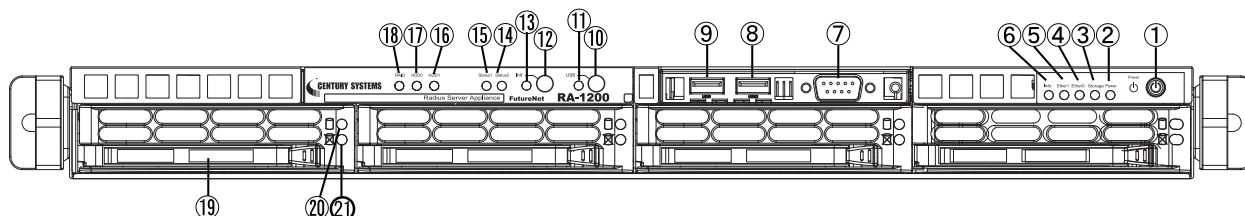
100BASE-TXモード : 緑点灯()

1000BASE-Tモード : 橙点灯()

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-1200)

製品前面 (RA-1200)



Power スイッチ

停止中(スタンバイ状態)にPower スイッチを押すと、システムが起動します。ただし、通電開始直後は、Power スイッチを押すまで30秒以上待つ必要があります。

起動中にPower スイッチを押すと、終了処理を行いスタンバイ状態に移行します。

通電を開始した場合の動作は、以前の停止状態に依存します。

正常に停止していれば、通電を開始してもスタンバイ状態のままです(起動しません)。

正常に停止していなければ、通電開始とともにシステムが起動します。

Power LED ()

本装置の起動中は点灯()します。

停止中(スタンバイ状態)は消灯()します。

Storage LED()

内蔵ディスク(RAIDを除く)へのアクセス時に点滅します(*)。

Ether0 LED ()

Ether1 LED ()

対応するEthernetポートの状態を表示します。

接続(Link up)時は、点灯します()。

未接続(Link down)時は、消灯します()。

通信中は、点滅します(*)。

Information LED ()

電源ユニットの異常時や、温度やファン異常時に、点滅(*)または点灯()します。

点滅または点灯によって、ハードウェアに何らかの異常が発生したことを知らせますが、どのような異常かを特定することはできません。

RS-232 ポート

本装置では使用しません。

USB2 ポート

USB1 ポート

本バージョンでは使用しません。

USB スイッチ

本バージョンでは使用しません。

USB LED()

本バージョンでは使用しません。

Init スイッチ

システム起動時(通電開始時、またはPower スイッチ押下時)に本スイッチが押されている場合、システムは工場出荷状態で起動します。

約3秒間押し続けると、スイッチの押下が確定し、Init LED が点灯します。この後、システムは工場出荷状態で起動します。

Init LED()

機器の起動・停止、設定の復帰、初期化などの状態を表します。

工場出荷状態での起動処理中、および初期化処理中に点灯()します。

通常の起動処理中、停止処理中、設定の復帰処理中は消灯()します。

詳細については、p.15の表を参照してください。

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-1200)

Status2 LED()

Status1 LED()

機器の状態を表示します。

詳細については、p.15の表を参照してください。

HDD1 LED()

HDD0 LED()

本バージョンでは使用しません。

RAID LED()

本バージョンでは使用しません。

RAID(HDDベイ)

前面に4個のHDDベイを配置しています。向かって左から0, 1, 2, 3とします。

0, 1にHDDを実装しています。2, 3は使用しません。RAID1に対応しています。

RA-1200が故障した場合、2台のHDDを同時に別のRA-1200に移設することが出来ます。

Activity LED()

21 Fail LED()

HDDベイ毎に、Activity LEDとFail LEDを装備しています。

Activity LEDは、アクセス時に点灯()します。

異常が発生した場合は、該当するHDDベイのFail LEDが点滅(＊)または点灯()します。

正常時は、消灯()しています。

故障時は、点灯()します。

リビルド中は、1Hz (on:50msec, off:500msec)で点滅(＊)します。

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-1200)

RA-1200のStatus1 LED、Status2 LEDおよびInit LEDの表示状態と、本装置の動作内容の関係を下表に記します。

本装置の動作	LEDの表示状態			備考
	Status1	Status2	Init	
停止中(スタンバイ状態)				-
機器起動				約1秒間
				約80秒間
	*			40秒以上(設定に依存)
機器再起動	*			約20秒間
				約1秒間
				約70秒間
	*			40秒以上(設定に依存)
機器停止	*			約20秒間
工場出荷状態での起動 (Initスイッチ押下)				約1秒間
				約3秒間
				約80秒間
	*			40秒以上(設定に依存)
起動処理完了				-
設定復帰 (強制同期を含む) (設定取得の設定更新時を含む)	*			40秒以上(設定に依存)
設定初期化	*			40秒以上(設定に依存)
設定復帰・設定初期化完了				-
RADIUSサービス起動中				-
ファームウェア更新 (再起動完了まで)	*	*		約30秒間
	*			約10秒間
				約1秒間
				約70秒間
	*			40秒以上(設定に依存)
ハードウェア異常	**	**	**	早い点滅(3~4Hz)

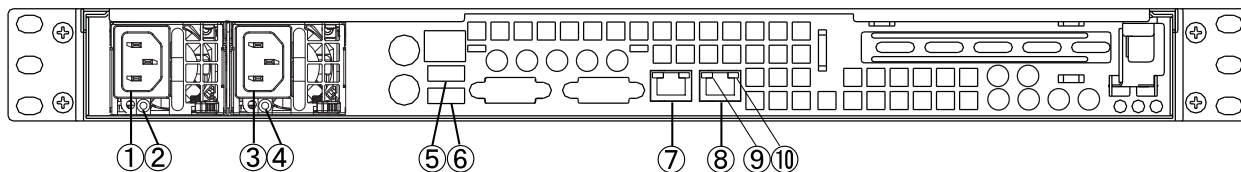
- : LEDが消灯している状態です。
- : LEDが点灯(緑色)している状態です。
- : LEDが点灯(橙色)している状態です。

- * : LEDが点滅(緑色)している状態です。
1Hz(on:500msec, off:500msec)
- ** : LEDが高速点滅(緑色)している状態です。
- ** : LEDが高速点滅(橙色)している状態です。
3~4Hz

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-1200)

製品背面 (RA-1200)



電源ケーブル差込口

電源ケーブル差込口

製品付属の電源ケーブルを接続するコネクターです。ケーブルは必ず付属のものをご使用ください。

本装置は、電源ユニット(400W)を2個搭載しています。

電源ユニットLED(/)

電源ユニットLED(/)

各電源ユニットに、LEDが1つあります。

機器起動時は緑色点灯()します。

停止中(スタンバイ状態)は橙色点灯()します。

USB0ポート

USB3ポート

本バージョンでは使用しません。

Ether0ポート

Ether1ポート

イーサネット規格のUTPケーブル(LANケーブル)を接続するEthernetポートです。

Auto MDI/MDI-Xに対応しています。ただし、Auto negotiationをOFFにした場合は、Auto MDI/MDI-XもOFFになります。

Speed LED(/)

Ethernetの接続速度を示します。LEDは以下のようなパターンで点灯/消灯します。

- 未接続 : 消灯()
- 10BASE-Tモード : 消灯()
- 100BASE-TXモード : 緑点灯()
- 1000BASE-Tモード : 橙点灯()

Activity LED()

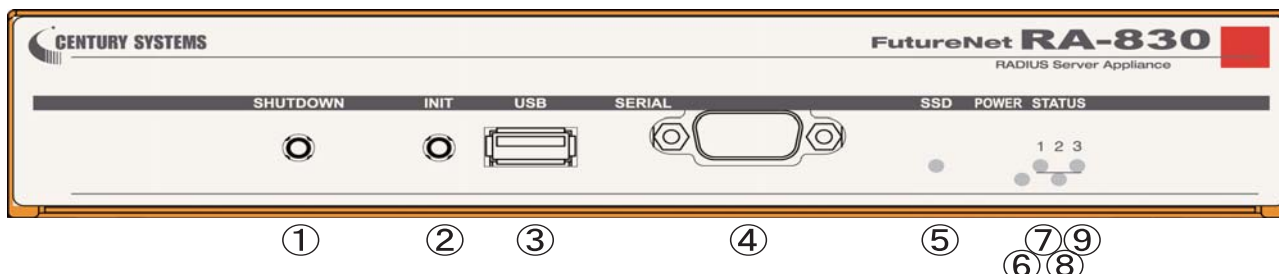
Ethernetケーブルのリンク状態を示します。ランプは以下のようなパターンで点灯/消灯します。

- Link Up : 点灯()
- Link Down : 消灯()
- 通信中 : 点滅(★)

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-830)

製品前面 (RA-830)



SHUTDOWN スイッチ

本装置を停止するときに使用します。起動処理が完了している状態で1秒以上押し続けてください。STATUS1 LED が点滅し、停止処理が始まります。

停止処理が完了するとPOWER LED が消灯します。POWER スイッチをOFFにしてください。POWER スイッチがONの場合、ACアダプタからの電源供給が一旦停止された後に再度開始されると本装置は自動的に起動します。

INIT スイッチ

本装置を初期化するときに使用します。

1. INIT スイッチを押しながら電源を投入します。
2. STATUS3 LED が緑色点灯するまで、INIT スイッチを押し続けたままにしておきます。
3. STATUS3 LED が緑色点灯したら、INIT スイッチを放します。本装置が工場出荷設定で起動します。

USB ポート

SERIAL ポート

本バージョンでは使用しません。

SSD LED

内蔵 SSD の状態を表示します。

使用中()、未使用()

SSD LED が点灯している状態でPOWER スイッチをOFFにすると内蔵SSDの故障の原因となりますのでご注意ください。

POWER LED

本装置の起動・停止の状態を表示します。

起動中()、停止中()

STATUS1 LED

STATUS2 LED

STATUS3 LED

本装置の状態を表示します。

詳細は、次ページを参照してください。

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-830)

RA-830 の STATUS LED および POWER LED の表示状態と、本装置の動作内容の関係を下表に記します。

LEDの表示状態				本装置の動作内容
POWER	STATUS1	STATUS2	STATUS3	
				- 停止状態(スタンバイ状態)
	*			- 起動処理中 - 設定復帰中(強制同期、設定取得を含む) - 停止処理中
	*			- 工場出荷状態での起動処理中 - 設定初期化中
				- 起動処理完了 - 設定復帰完了 - 設定初期化完了
				- RADIUS サービス起動中
	*	*		- ファームウェア更新中
	*	*	*	- 起動処理失敗 - ファームウェア更新失敗

: LED が点灯(緑色)している状態です。

* : LED が点滅(緑色)している状態です。

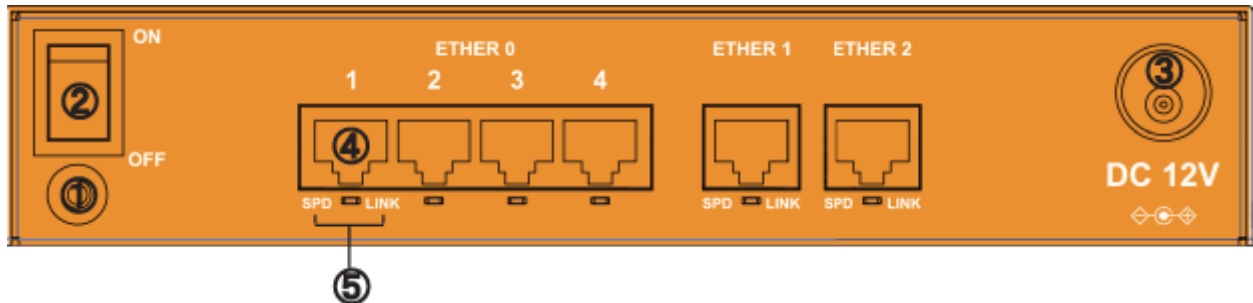
* : LED が点滅(赤色)している状態です。

: LED が消灯している状態です。

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-830)

製品背面 (RA-830)



FG(アース) 端子

保安用接続端子です。必ずアース線を接続してください。

POWER スイッチ

電源のON/OFFを行います。POWER LEDが点灯している時はOFFにしないでください。SHUTDOWNスイッチまたはGUIを使用して事前に本装置を停止してください。

DC 12V 電源コネクタ

製品付属のAC アダプタを接続します。

ETHER ポート (ETHER 0/ETHER 1/ETHER 2)

10BASE-T/100BASE-TX/1000BASE-T 対応の Ethernet ポートです。ETHER0 ポートはスイッチングハブです。

SPD/LINK LED

ETHERポートの接続速度およびLINK状態を表示します。

10BASE-T モードで接続時：

緑色点灯 () 通信時は緑色点滅 (*)

100BASE-TX モードで接続時：

緑色点灯 () 通信時は緑色点滅 (*)

1000BASE-T モードで接続時：

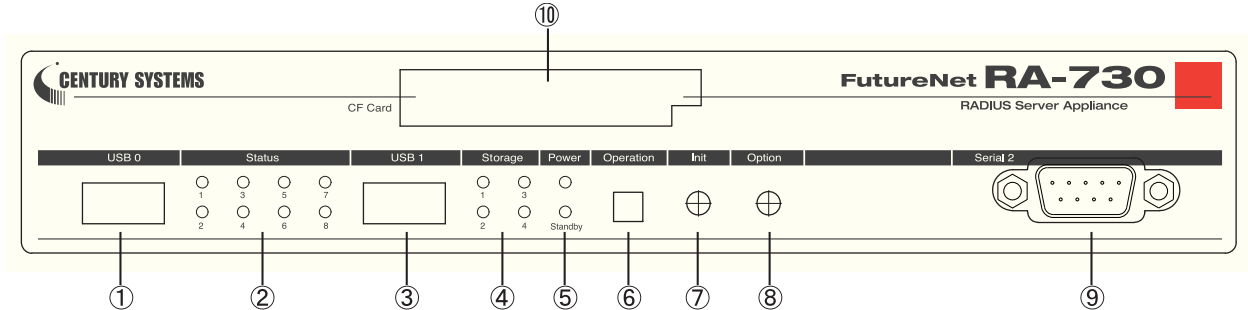
橙色点灯 () 通信時は橙色点滅 (*)

Link Down 時：消灯

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-730)

製品前面 (RA-730)



USB 0 ポート

使用しません。

Status LED

Status LEDの概要は、下記のとおりです。

- 1 (): ファームウェア更新ステータスを示します。
- 2 (): システムステータスを示します。
- 3 (): 初期化処理ステータスを示します。
- 4 (): RADIUSサービスステータスを示します。
- 5 (): 使用しません。
- 6 (): 使用しません。
- 7 (): 使用しません。
- 8 (): 使用しません。

なお、Status LEDの詳細については、次ページを参照してください。

USB 1 ポート

使用しません。

Storage LED

- 1 (): 使用しません。
- 2 (): 使用しません。
- 3 (): 内蔵ストレージまたはCFカードへのアクセス時に点滅(*)します。
- 4 (): 使用しません。

Power LED ・ Standby LED

本装置の起動・停止の状態を示します。

- Power LED (): 起動中に点灯()します。
Standby LED (): 停止中(スタンバイ状態)に点灯()します。

Operationスイッチ

- ・ 起動中に押すと、終了処理を行いスタンバイ状態に移行します。ただし、通常は設定画面の管理機能のメニュー「システム」から「停止」画面でシステム停止状態にしてください。
- ・ 起動中に4秒以上押すと、強制終了処理を行いスタンバイ状態に移行します。ただし、本装置が破損する可能性があるため、非常時のみに使用して下さい。
- ・ 停止中(スタンバイ状態)に押すと、システムが起動します。
- ・ なお、電源を投入すると、本スイッチを押さなくても起動処理が開始されます。

Initスイッチ

本装置を初期化するときには使用します。本装置の起動処理時に本スイッチが押された場合、工場出荷状態で起動します。

初期化が行われる場合、Status LED 3が点灯()します。

Optionスイッチ

使用しません。

Serial 2 ポート

使用しません。

CF カードスロット

使用しません。

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-730)

RA-730 の Status LED および Power LED、Standby LED の表示状態と、本装置の動作内容の関係を下表に記します。

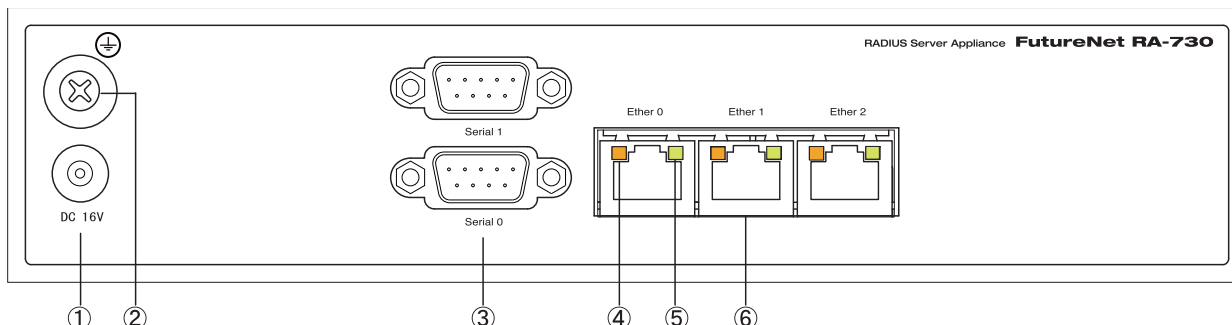
LEDの表示		本装置の動作内容
Status	Power Standby	
		- 停止中(スタンバイ状態)
		- 起動処理開始 (20 ~ 25秒程度)
*		- 起動処理中 - 設定復帰中(強制同期、設定取得の設定更新時も含む) - 停止処理中
*		- 工場出荷状態での起動処理中(Initスイッチ押下) - 設定初期化中
		- 起動処理完了 - 設定復帰完了
		- RADIUS サービス起動中(RADIUS 認証可能状態)
*		- ファームウェア更新中
* *		- 起動処理失敗(再起動は行わない) - ファームウェア更新失敗(再起動は行わない)
* * * *		- 重大なエラー (10秒後に再起動を開始)

- : LED が点灯(橙色)している状態です。
- *: LED が点滅(橙色)している状態です。
- : LED が点灯(緑色)している状態です。
- *: LED が点滅(緑色)している状態です。
- : LED が消灯している状態です。

第1章 本装置の概要

各部の名称と機能 (RA-730)

製品背面 (RA-730)



DC 16V 電源コネクタ

製品付属のAC アダプタを接続します。

FG(アース) 端子

保安用接続端子です。必ずアース線を接続してください。

Serial 0 ポート・Serial 1 ポート

使用しません。

SPEED LED

Ethernet ポートの接続速度を表示します。

10BASE-T モード ()

100BASE-TX モード ()

1000BASE-T モード ()

LINK/ACT LED

Ethernet ポートの接続状態を示します。

Link Up ()

Link Down ()

データ通信時 (* (点滅))

Ether 0・Ether 1・Ether 2

それぞれ、独立したセグメントとして動作します。

全てのEthernetポートは、Gigabit Ethernet (1000BASE-T)に対応しています。

イーサネット規格のUTP ケーブル(LAN ケーブル)を接続します。極性は自動判別します。

本製品をお使いいただくには、以下の環境を満たしている必要があります。

ハードウェア環境

- ・本製品に接続するコンピュータの全てに、10BASE-Tまたは100BASE-TX、1000BASE-TのLANボード/カードがインストールされていること。
- ・本製品と全てのコンピュータを接続するためのハブやスイッチングハブが用意されていること。
- ・本製品と全てのコンピュータを接続するために必要な種類のネットワークケーブルが用意されていること。

ソフトウェア環境

- ・TCP/IPを利用できるOSがインストールされていること。
- ・接続されている全てのコンピュータの中で少なくとも1台に、ブラウザがインストールされていること。弊社では、Microsoft EdgeやInternet Explorerで動作確認を行っています。

なおサポートにつきましては、本製品固有の設定項目と本製品の設定に関するOS上の設定に限らせていただきます。OS上の一般的な設定やパソコンにインストールされたLANボード/カードの設定、各種アプリケーションの固有の設定等のお問い合わせについてはサポート対象外とさせていただきますので、あらかじめご了承ください。

第2章

コンピュータのネットワーク設定

第2章 コンピューターのネットワーク設定

ネットワーク設定について

本製品の設定は、Web ブラウザが動くパソコンから本製品の設定画面へアクセスしておこないます。

工場出荷時には、**本製品の IP アドレスは「192.168.0.254」に初期設定**されているため、設定に使うパソコンのネットワーク設定を、事前にこの IP アドレスと通信できるように設定しておく必要があります。

本章では、設定に使うパソコン側のネットワーク設定の方法について、OS 毎に説明します。ご使用のパソコンの OS に合わせて参照し、設定をおこなってください。

第2章 コンピューターのネットワーク設定

. Windows XP のネットワーク設定

ここではWindowsXPが搭載されたコンピュータのネットワーク設定について説明します。

1 「コントロールパネル」 「ネットワーク接続」から、「ローカル接続」を開きます。

2 「ローカルエリア接続の状態」画面が開いたらプロパティをクリックします。

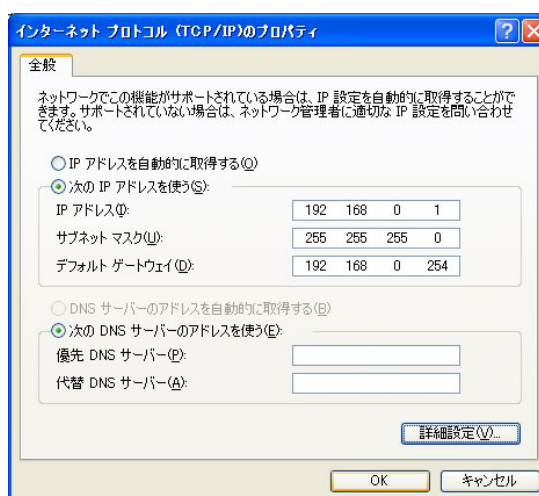


4 「インターネットプロトコル(TCP/IP)」の画面では、「次の IP アドレスを使う」にチェックを入れて以下のように入力します。

IP アドレス 「192.168.0.1」

サブネットマスク 「255.255.255.0」

デフォルトゲートウェイ 「192.168.0.254」



3 「ローカルエリア接続のプロパティ」画面が開いたら、「インターネットプロトコル(TCP/IP)」を選択して「プロパティ」ボタンをクリックします。

5 最後にOKボタンをクリックして設定完了です。これで本装置へのログインの準備が整いました。



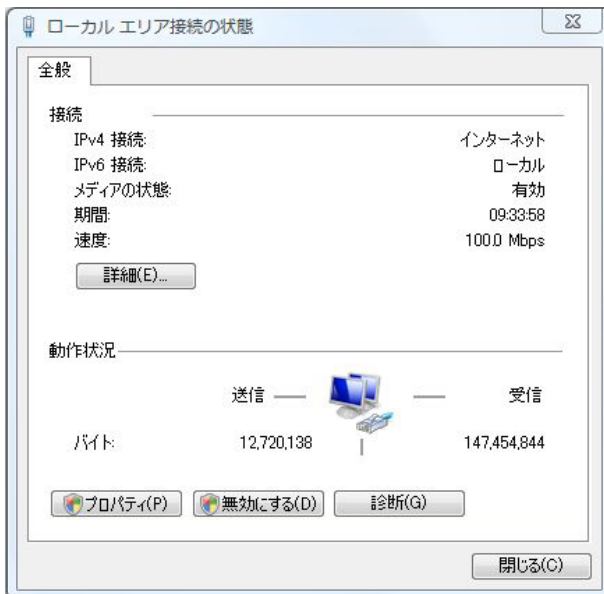
第2章 コンピューターのネットワーク設定

. Windows Vistaのネットワーク設定

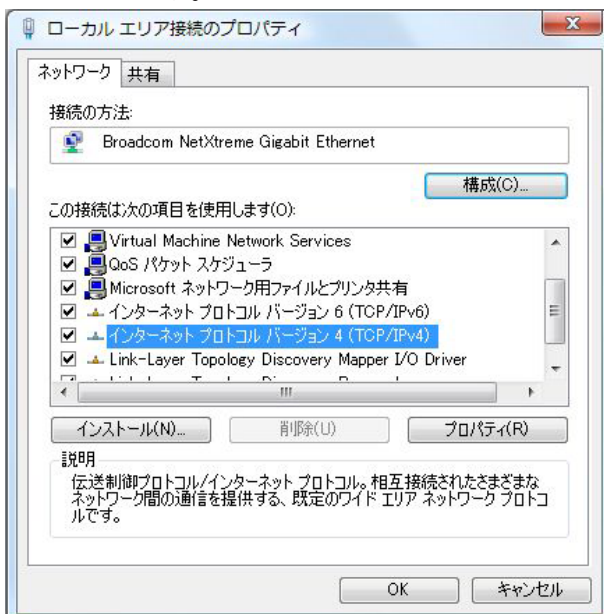
ここではWindows Vistaが搭載されたコンピュータのネットワーク設定について説明します。

1 「コントロールパネル」 「ネットワークと共有センター」 「ネットワーク接続の管理」 から、「ローカル接続」を開きます。

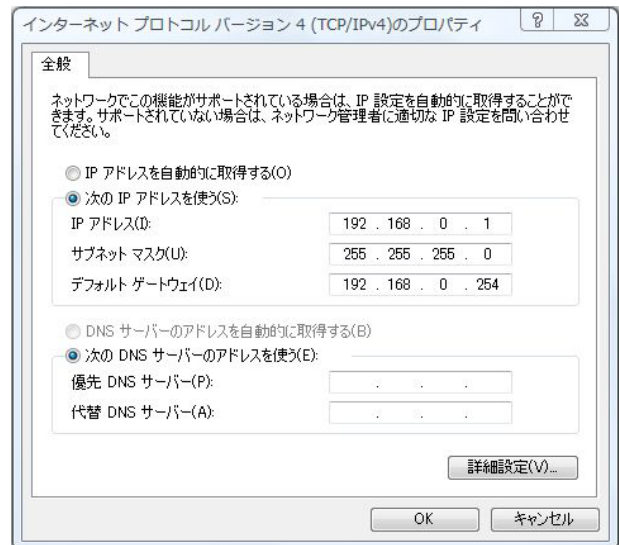
2 「ローカルエリア接続の状態」画面が開いたらプロパティをクリックします。



3 「ローカルエリア接続のプロパティ」画面が開いたら、「インターネットプロトコルバージョン4(TCP/IPv4)」を選択して「プロパティ」ボタンをクリックします。



4 「インターネットプロトコルバージョン4 (TCP/IPv4)」の画面では、「次の IP アドレスを使う」にチェックを入れて以下のように入力します。
IP アドレス「192.168.0.1」
サブネットマスク「255.255.255.0」
デフォルトゲートウェイ「192.168.0.254」



5 最後にOKボタンをクリックして設定完了です。これで本装置へのログインの準備が整いました。

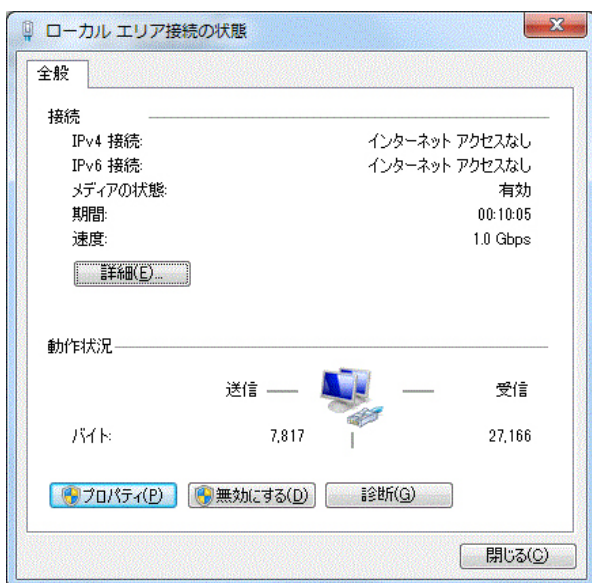
第2章 コンピューターのネットワーク設定

. Windows 7のネットワーク設定

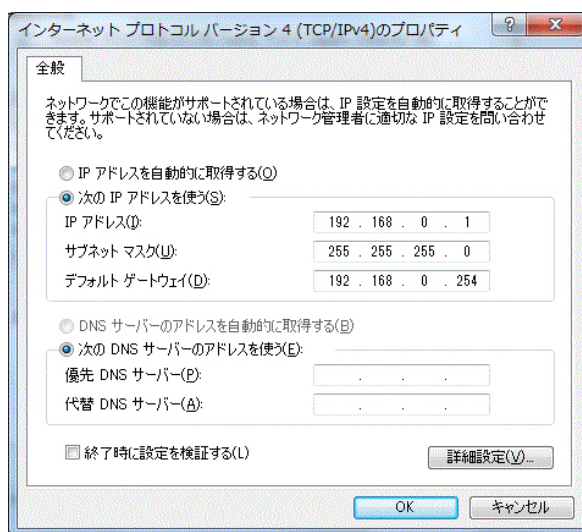
ここではWindows 7が搭載されたコンピュータのネットワーク設定について説明します。

1 「コントロールパネル」 「ネットワークとインターネット」 「ネットワークと共有センター」から、「ローカル接続」を開きます。

2 「ローカルエリア接続の状態」画面が開いたらプロパティをクリックします。

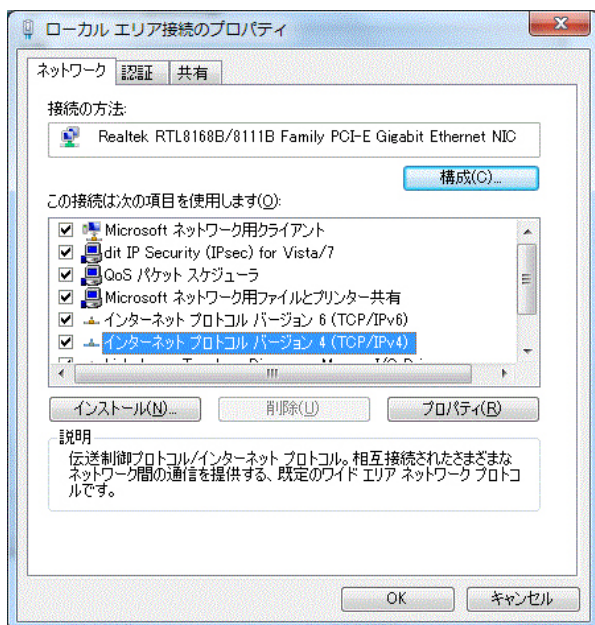


4 「インターネットプロトコルバージョン4 (TCP/IPv4)」の画面では、「次の IP アドレスを使う」にチェックを入れて以下のように入力します。
IP アドレス「192.168.0.1」
サブネットマスク「255.255.255.0」
デフォルトゲートウェイ「192.168.0.254」



3 「ローカルエリア接続のプロパティ」画面が開いたら、「インターネットプロトコルバージョン4(TCP/IPv4)」を選択して「プロパティ」ボタンをクリックします。

5 最後にOKボタンをクリックして設定完了です。これで本装置へのログインの準備が整いました。

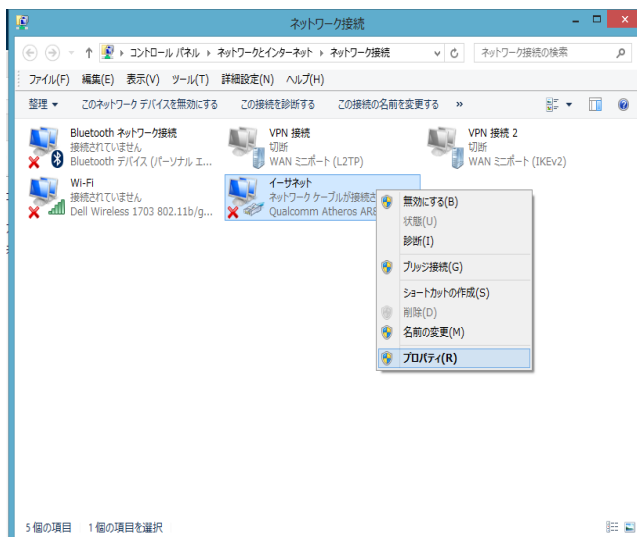


第2章 コンピューターのネットワーク設定

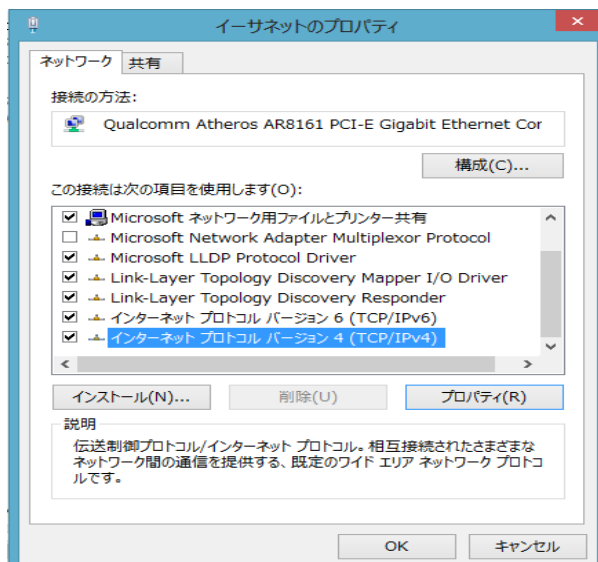
. Windows 8 のネットワーク設定

1 「コントロールパネル」 「ネットワークとインターネット」 「ネットワークと共有センター」から、「アダプターの設定変更」を開きます。

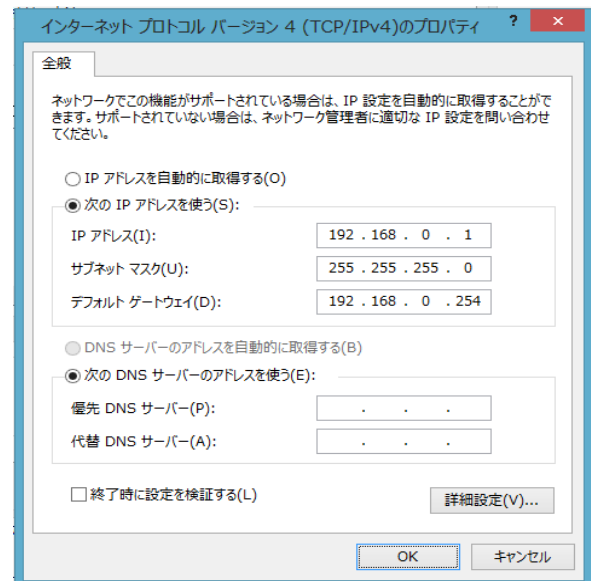
2 「ネットワーク接続」の画面が開いたら「イーサネット」のアイコンを右クリックしてプロパティを選択します。



3 「イーサネットのプロパティ」の「ネットワークタブ」で、「インターネットプロトコルバージョン4(TCP/IPv4)」を選択して「プロパティ」ボタンをクリックします。



4 「インターネットプロトコルバージョン4 (TCP/IPv4)」の画面では、「次の IP アドレスを使う」にチェックを入れて以下のように入力します。
IP アドレス「192.168.0.1」
サブネットマスク「255.255.255.0」
デフォルトゲートウェイ「192.168.0.254」



5 最後にOKボタンをクリックして設定完了です。これで本装置へのログインの準備が整いました。

第2章 コンピューターのネットワーク設定

. Mac OS Xのネットワーク設定

ここでは、Mac OS Xのネットワーク設定について説明します。

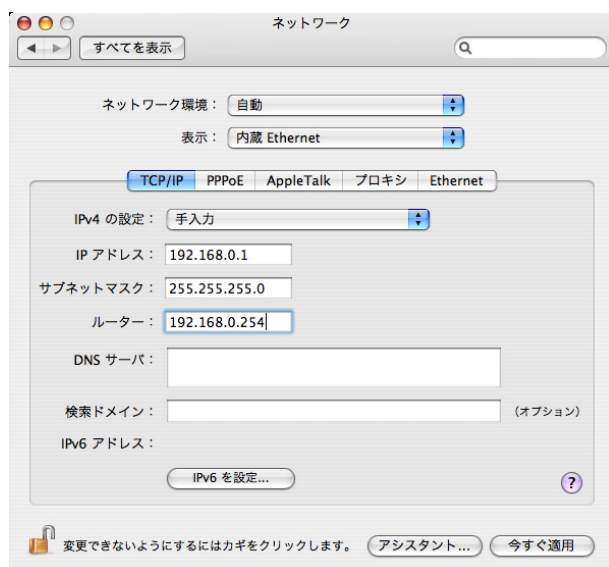
1 「システム環境設定」から「ネットワーク」を開きます。

2 ネットワーク環境を「自動」、表示を「内蔵 Ethernet」、IPv4 の設定を「手入力」にして、以下のように入力してください。

IP アドレス「192.168.0.1」

サブネットマスク「255.255.255.0」

ルーター「192.168.0.254」



3 ウィンドウを閉じて設定の変更を適用します。
これで、本装置へログインする準備が整いました。

第3章

設定画面へのログイン方法

第3章 設定画面へのアクセス

設定画面へのログイン方法

本装置はWebブラウザ上から設定をおこないます。この章ではWebブラウザでの設定画面へのログイン方法について説明します。

1 各種ブラウザを開きます。

2 ブラウザから設定画面にアクセスします。

本装置ではHTTP(ポート 80) , HTTPS(ポート 443)でのアクセスが可能です。

設定画面へのポート番号 (HTTP(80) , HTTPS(443)) を変更することはできません。

HTTP(ポート 80)でアクセスする場合

ブラウザのアドレス欄に以下のURLを入力してください。

http://192.168.0.254/

「192.168.0.254」は、Ether0ポートの工場出荷時のアドレスです。アドレスを変更した場合は、そのアドレスを指定してください。

HTTPS(ポート 443)でアクセスする場合

ブラウザのアドレス欄に以下のURLを入力してください。

https://192.168.0.254/

「192.168.0.254」は、Ether0ポートの工場出荷時のアドレスです。アドレスを変更した場合は、そのアドレスを指定してください。

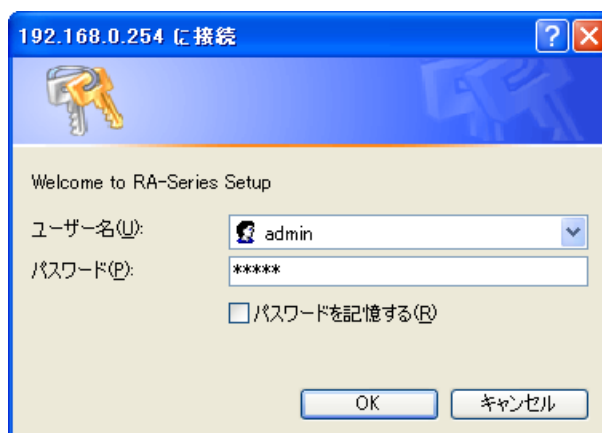
HTTPSアクセスについては「第3章 設定画面へのアクセス II.HTTPSアクセス時のCA証明書のインポート方法」を参照してください。

3 次のような認証ダイアログが表示されます。



4 ダイアログ画面にパスワードを入力します。

工場出荷設定のユーザー名とパスワードはともに「admin」です。ユーザー名・パスワードを変更している場合は、それに合わせてユーザー名・パスワードを入力します。



5 本装置の設定画面が表示されます。



第3章 設定画面へのアクセス

HTTPS アクセス時の CA 証明書のインポート方法

クライアント PC に CA 証明書がインポートされていない状態で本装置へ HTTPS (ポート 443) アクセスすると、「セキュリティの警告」画面が表示されます。HTTPS アクセス時の警告メッセージの対応として、CA 証明書をクライアント PC にインポートすることをお勧めします。

クライアント PC への CA 証明書のインポート手順は、OS、バージョン等により設定手順が異なります。

Windows XP Professional SP2

+

Internet Explorer 6

と

Windows Vista

+

Internet Explorer 7

の場合の設定手順を例示します。ご使用の環境に合わせてご参照ください。

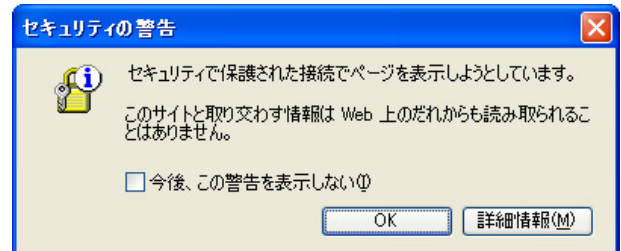
Windows XP Professional SP2

+ Internet Explorer 6

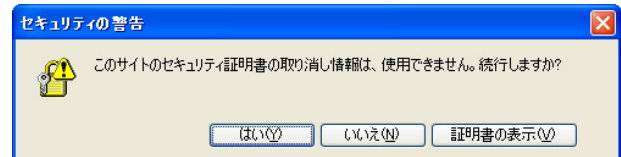
Windows XP Professional SP2 + Internet Explorer 6 を使用したクライアント PC における CA 証明書のインポート手順です。

CA 証明書がインポートされていない状態での HTTPS アクセス

CA 証明書がクライアント PC にインポートされていない状態で本装置へ HTTPS アクセスするとインターネットオプションの設定によって、以下のような警告画面が現れます。

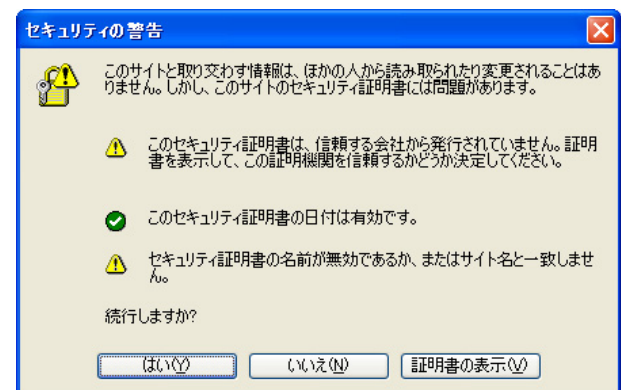


または、



インターネットオプション等の設定によってはこれらの警告画面が表示されないこともあります。

警告画面の「OK」(または「はい(Y)」)を選択すると、さらに次のような警告画面が現れます。



「はい(Y)」をクリックするとログイン用の認証ダイアログが現れますので、HTTP アクセスと同様にユーザ名とパスワードを入力してください。

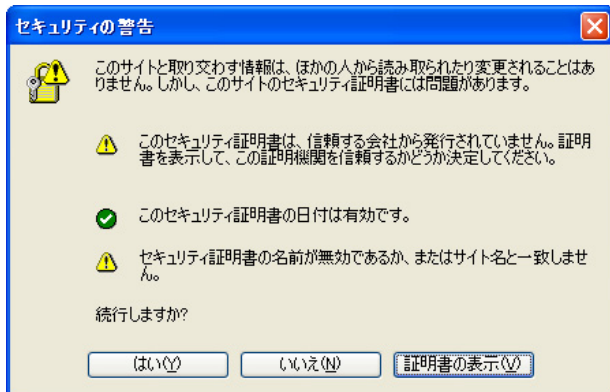
第3章 設定画面へのアクセス

HTTPS アクセス時のCA 証明書のインポート方法

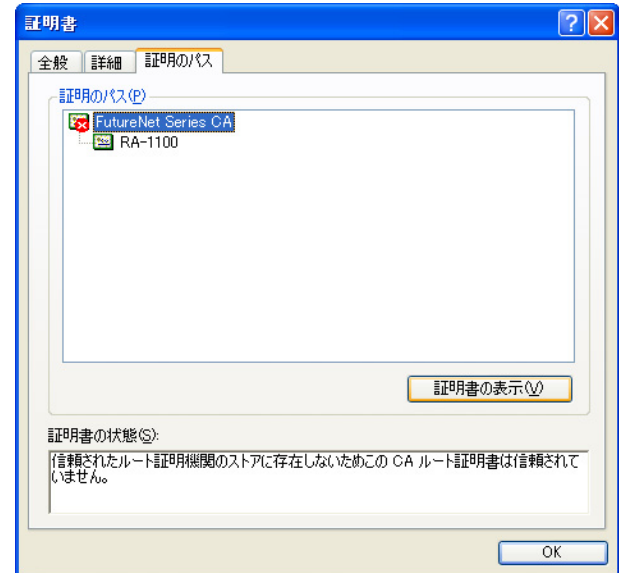
CA 証明書のインポート

あらかじめ取得しておいたCA証明書を実行すると証明書のインポートウィザードが開始されます。

CA 証明書を取得しておくのが難しい場合には、「セキュリティの警告」画面の「証明書の表示(V)」をクリックしてください。



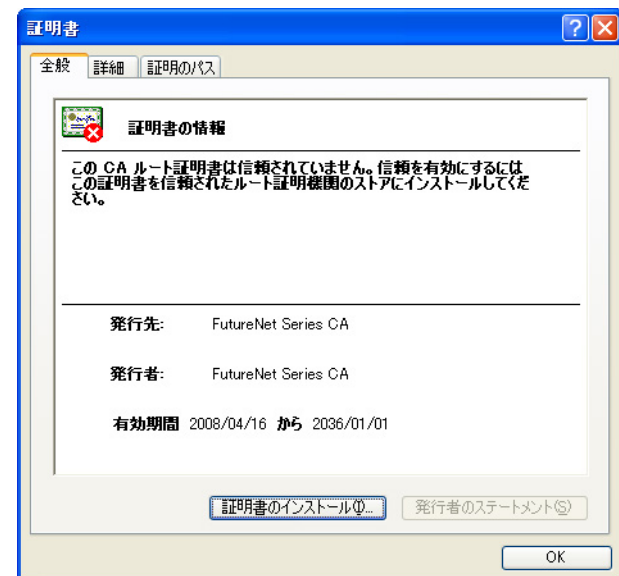
「証明のパス」タブを開き、「証明のパス(P)」に表示されている最上位証明書を選択して「証明書の表示(V)」をクリックします。



以下の画面が表示されます。



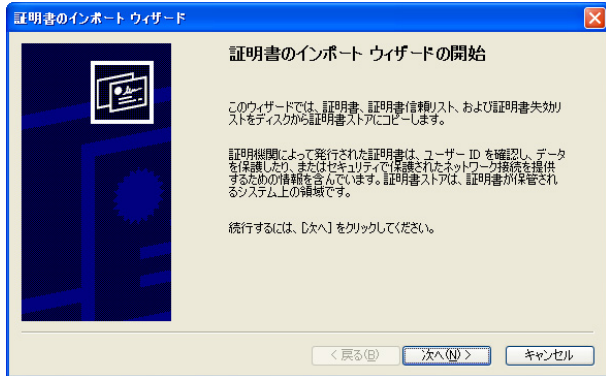
「全般」タブにある「証明書のインストール(I)」を開くと、CA証明書のインポートを開始することができます。



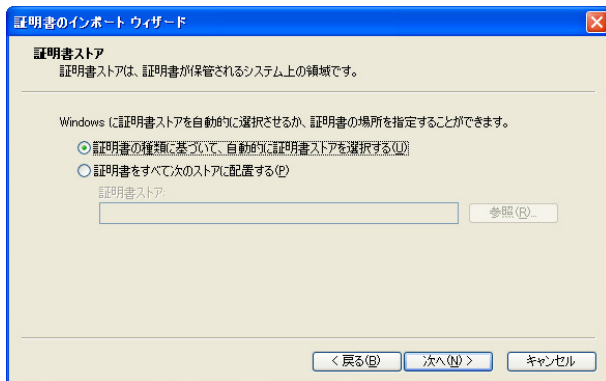
第3章 設定画面へのアクセス

・ HTTPS アクセス時の CA 証明書のインポート方法

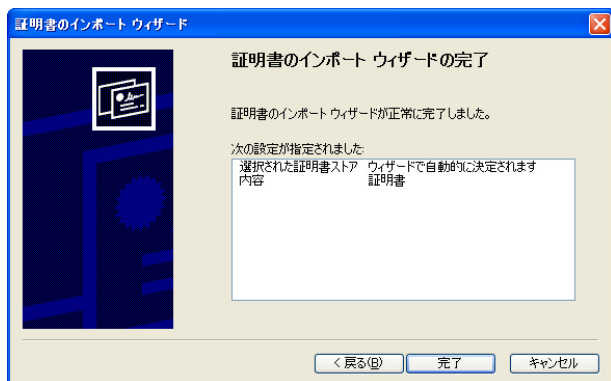
「証明書のインポートウィザード」が開始されたら「次へ(N)」をクリックしてください。



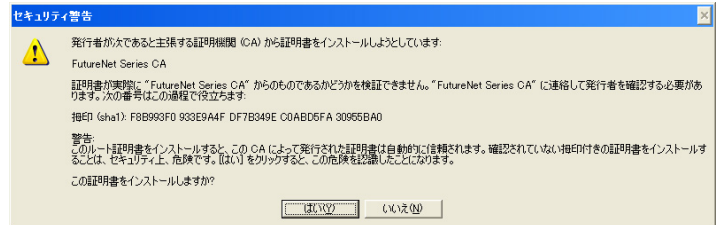
「証明書ストア」での証明書が保管される場所は「証明書の種類に基づいて、自動的に証明書ストアを選択する(U)」のままで次へ進みます。



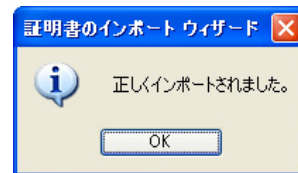
「完了」をクリックします。



ルート証明書のインストール確認メッセージが表示されますので、証明書の拇印が正しいことを確認し「はい(Y)」を選択してください。

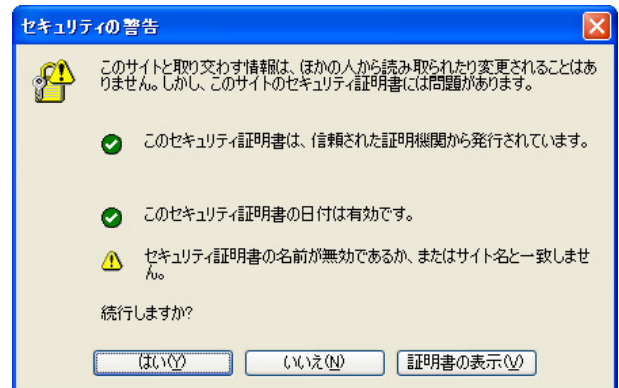


証明書のインポートが完了します。



CA証明書がインポートされた状態でのHTTPSアクセス

CA 証明書をクライアント PC にインポートした後に本装置へ HTTPS アクセスすると、以下のような警告画面が現れます。



これは、ホスト名(または IP アドレス)と証明書の CommonName が一致していないために発生します。

ログインするには「はい(Y)」を選択すると認証ダイアログが表示されます。

第3章 設定画面へのアクセス

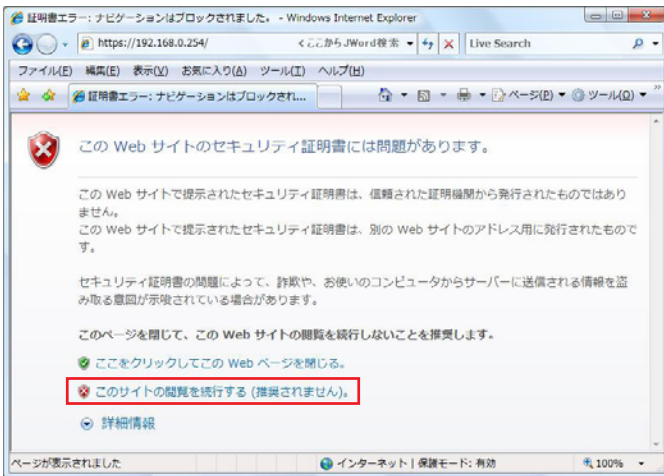
HTTPS アクセス時の CA 証明書のインポート方法

Windows Vista + Internet Explorer 7

Windows Vista + Internet Explorer 7を使用したクライアントPCにおけるCA証明書のインポート手順です。

CA証明書がインポートされていない状態でのHTTPSアクセス

CA証明書がクライアントPCにインポートされていない状態で本装置へHTTPSアクセスすると以下のような画面が表示されます。



「このサイトの閲覧を続行する(推奨されません)」をクリックするとログイン用の認証ダイアログが現れますので、ユーザ名とパスワードを入力してください。



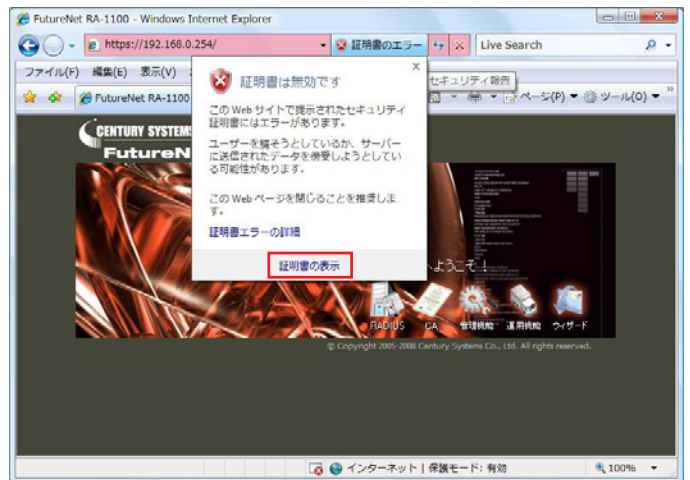
本装置の設定画面が表示されます。



CA証明書のインポート

あらかじめ取得しておいたCA証明書を実行すると証明書のインポートウィザードが開始されます。

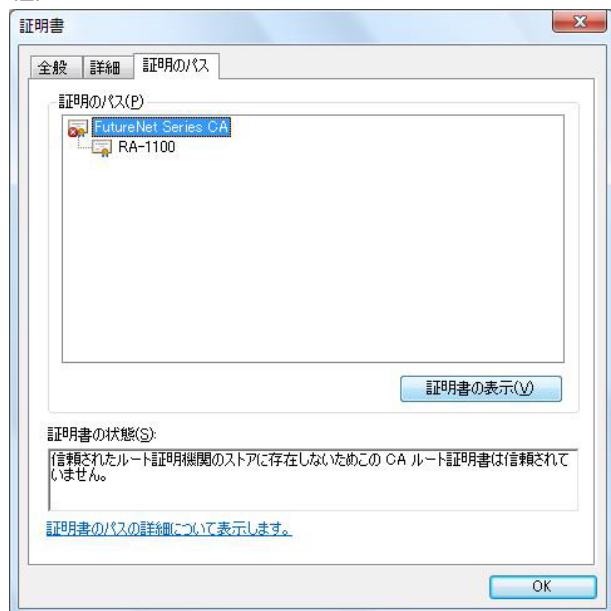
CA証明書を取得しておくのが難しい場合には、アドレスバーの隣に表示されている「証明書のエラー」をクリックして、最下部の「証明書の表示」を開きます。



第3章 設定画面へのアクセス

HTTPS アクセス時の CA 証明書のインポート方法

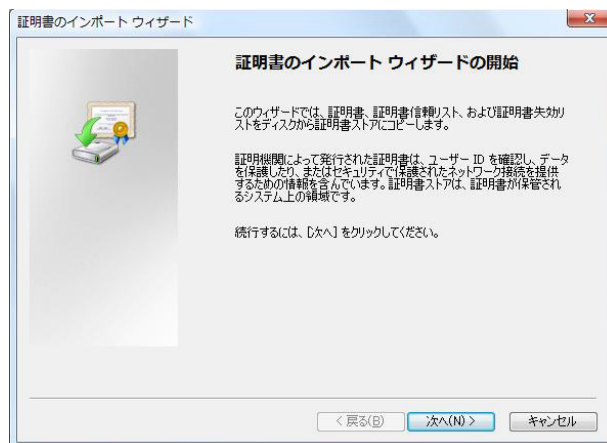
「証明のパス」タブを開き、「証明のパス(P)」に表示されている最上位証明書を選択して「証明書の表示(V)」をクリックします。



「全般」タブにある「証明書のインストール(I)」を開くと、CA証明書のインポートを開始することができます。

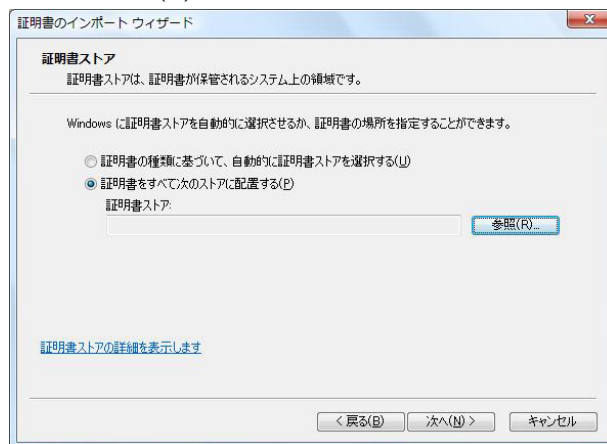


「証明書インポートウィザード」が開始されたら「次へ(N)」をクリックしてください。

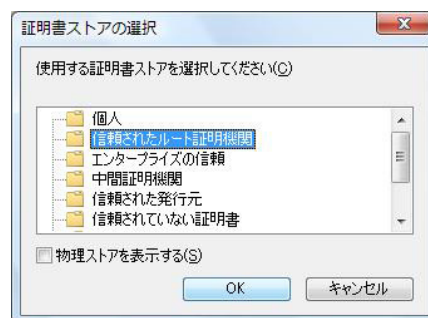


「証明書ストア」で証明書が保管される場所を指定することができます。

「証明書をすべて次のストアに配置する(P)」を選択して、「参照(R)」ボタンをクリックします。



証明書ストアは「信頼されたルート証明機関」としてしてください。



第3章 設定画面へのアクセス

HTTPS アクセス時の CA 証明書のインポート方法

「証明のパス」タブを開き、「証明のパス(P)」に表示されている最上位証明書を選択して「証明書の表示(V)」をクリックします。



「全般」タブにある「証明書のインストール(I)」を開くと、CA証明書のインポートを開始することができます。

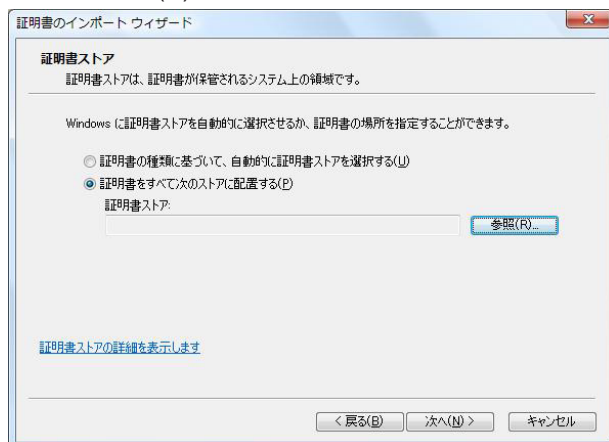


「証明書インポートウィザード」が開始されたら「次へ(N)」をクリックしてください。

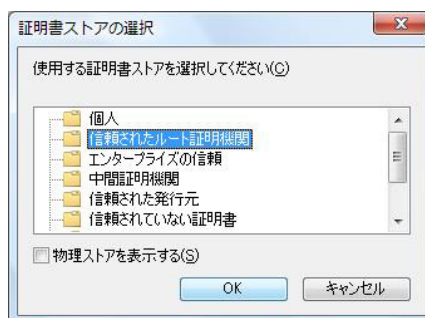


「証明書ストア」で証明書が保管される場所を指定することができます。

「証明書をすべて次のストアに配置する(P)」を選択して、「参照(R)」ボタンをクリックします。



証明書ストアは「信頼されたルート証明機関」としてしてください。

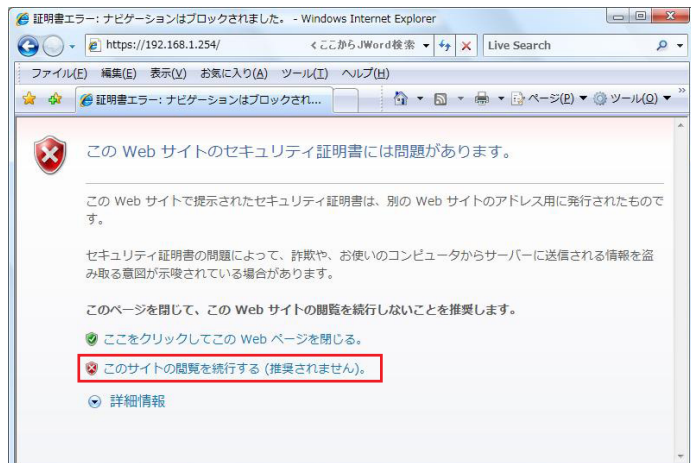


第3章 設定画面へのアクセス

・ HTTPS アクセス時の CA 証明書のインポート方法

CA 証明書がインポートされた状態での HTTPS アクセス

CA 証明書をクライアント PC にインポートした後にも本装置へ HTTPS アクセスすると、以下のような警告画面が現れます。



「このサイトの閲覧を続ける (推奨されません)」をクリックしてログインしてください。

CA 証明書をインポート後でも、HTTPS アクセスでログインすると、アドレスバーの隣の「証明書エラー」が表示されますが、これは、ホスト名(または IP アドレス)と証明書の CommonName が一致していないために発生します。



第4章

設定ウィザードによる設定

第4章 設定ウィザードによる設定

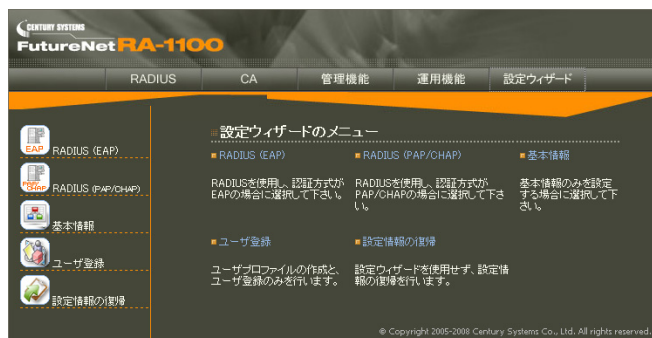
1. 設定を始める前に

設定ウィザードを使うと、画面に表示される順番に設定をおこなうことで、本装置に必要な設定を一通りおこなうことができます。初めて本装置にログインし、設定をおこなう場合には、設定ウィザードによる設定が適しています。

ただし、設定ウィザードを用いて親子連携機能の設定を行うことは出来ません。



ウィザードのアイコンをクリックすると次の画面が表示されます。



各ウィザードの設定内容

設定ウィザードは目的に応じて以下の5つの中から一つを選んで実行するようにします。

・RADIUS(EAP)

本装置をEAP認証で使う場合に最適のウィザードです。本装置のほぼ全ての設定項目を設定することができます。

・RADIUS(PAP/CHAP)

本装置をPAP/CHAP認証で使う場合に最適のウィザードです。RADIUSサーバの設定、ユーザ登録等をおこないます。証明書関連の設定は不必要なためおこないません。

・基本情報

本装置のIPアドレスの設定など、ターゲットのネットワークに設置するための最低限の設定のみをおこないます。RADIUSサーバの設定やユーザ登録はおこないません。RADIUSの設定は後回しにして、装置の設置のみをおこないたい場合に適しています。

・ユーザ登録

ネットワーク設定や、RADIUSサーバの設定が既に終わっている状態の時に、ユーザ情報の追加だけをおこないたい時に使用します。

・設定情報の復帰

別途用意した設定ファイルを読み込むだけのウィザードです。装置の設定を初期化した後、以前バックアップしてあった設定内容を読み込む時などに使います。

設定ウィザード画面の説明

設定ウィザードを選択すると、以降以下のような画面が表示されます。

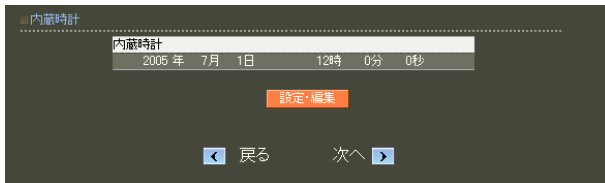


左下のフレームには必要な設定項目がリスト表示されます。現在設定をおこなっている項目が青色で、未設定の項目は灰色で、既に設定が終わった項目は白色で表示されます。

右下のフレームが設定情報を入力する画面になります。各設定項目に移動した直後にはその項目の現在の設定内容を表示する画面（以降表示画面と呼びます）が表示されます。表示画面には設定項目を前後に移動するための「次へ」ボタンと「戻る」ボタンがあります。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定を始める前に



次節ではRADIUS(EAP)のウィザードを例に各設定項目毎の設定内容を説明します。

RADIUS(PAP/CHAP)、基本情報、ユーザ登録の各ウィザードについては、次ページの表を参照して、該当する項目の説明をご覧ください。

設定を追加変更する場合には画面に応じて「設定・編集」ボタン、または「新規追加」ボタン、「編集」ボタンなどを押します。すると入力画面が表示されます。

設定を始める前に本装置の IP アドレスや、RADIUS クライアントの情報、設定するユーザ情報など、設定に必要なデータを事前に準備した上で設定を開始することをお勧めします。



設定内容を入力後「設定」ボタンまたは「実行」ボタンを押すと表示画面にもどります。設定された内容は直ちに保存され装置に反映されます。

次の設定項目へ進む場合には表示画面から「次へ」ボタンを押します。以前の設定をやり直す場合には「戻る」ボタンを押して戻ることができます。

第4章 設定ウィザードによる設定

. 設定を始める前に

	RADIUS (EAP)	RADIUS (PAP/CHAP)	基本設定	ユーザ登録
1. 管理者				
2. ネットワーク基本情報				
3. 内蔵時計				
4. ログ				
5. スタティックルート				
6. DNS				
7. NTP				
8. SNMP				
9. CA-基本情報				
10. CA-RADIUSサーバ証明書				
11. CA-HTTPSサーバ証明書				
12. CA-LDAPクライアント証明書				
13. CA-LDAPサーバ証明書				
14. 管理画面へのアクセス				
15. RADIUS-基本情報				
16. RADIUS-二重化				
17. RADIUS-ログ				
18. RADIUS-アドレスプール				
19. RADIUS-クライアント				
20. RADIUS-アトリビュート				
21. RADIUS-ActiveDirectory				
22. RADIUS-LDAP				
23. RADIUS-ユーザ基本情報				
24. RADIUS-認証アトリビュート				
25. RADIUS-応答アトリビュート				
26. RADIUS-グループID				
27. RADIUS-ユーザ証明書				
28. RADIUS-ユーザプロファイル				
29. RADIUS-ユーザ作成				
30. RADIUS-ADユーザ				
31. RADIUS-LDAPユーザ				
32. ユーザ管理者				
33. フィルタ				
34. RADIUS起動				
35. 設定の保存				
36. 完了				

表. 各設定ウィザード毎の設定内容一覧

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

1. 管理者

本装置ではログインするユーザの権限によって「本装置管理者」、「ユーザ管理者」、「ユーザ」の3種類のアカウントが用意されています。ここでは最も権限の強い本装置管理者のログインIDとパスワードを設定します。装置のセキュリティ確保のために推測されにくいパスワードを設定してください。

工場出荷設定のユーザー名とパスワードはともに「admin」です。

表示画面では本装置管理者のログインIDが表示されています。



設定を変更する場合は「編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

新しいログインIDとパスワードを入力してください。

本装置管理者変更

ログインID	<input type="text" value="admin"/>
パスワード	<input type="password" value="••••"/>

設定

ログインID

使用可能な文字は英数字および以下の記号と空白文字になります。

!"#\$%&'()*+,-./<=>?@[^_`{|}~

パスワード

使用可能な文字は、ログインIDの入力可能文字と以下の記号になります。

,;:¥

「設定」ボタンをクリックして設定完了です。

次のログインからは、新しく設定したユーザー名とパスワードを使ってログインしてください。

第4章 設定ウィザードによる設定

設定内容の詳細

2. ネットワーク基本情報

本装置のIPアドレスおよびデフォルトゲートウェイの設定をおこないます。

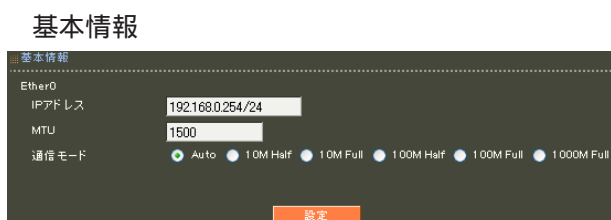


基本情報			
Ether0	IPアドレス	192.168.0.254/24	
	MTU	1500	<input type="button" value="編集"/>
	通信モード	Auto	
Ether1	IPアドレス	192.168.1.254/24	
	MTU	1500	<input type="button" value="編集"/>
	通信モード	Auto	
Ether2	IPアドレス	192.168.2.254/24	
	MTU	1500	<input type="button" value="編集"/>
	通信モード	Auto	
デフォルトゲートウェイ			<input type="button" value="編集"/>

(RA-730 の設定画面です。)

Ether0 , Ether1 , Ether2

(RA-1300・RA-1200 は、Ether0 と Ether1 のみ)
設定を変更する場合は、変更したいインタフェース欄の「編集」ボタンを押します。
次の入力画面が表示されます。



基本情報	
Ether0	
IPアドレス	<input type="text" value="192.168.0.254/24"/>
MTU	<input type="text" value="1500"/>
通信モード	<input checked="" type="radio"/> Auto <input type="radio"/> 10M Half <input type="radio"/> 10M Full <input type="radio"/> 100M Half <input type="radio"/> 100M Full <input type="radio"/> 1000M Full
<input type="button" value="設定"/>	

(RA-730 の設定画面です。)

IP アドレス

Ether ポートの IP アドレスとネットマスクを入力します。

ネットマスクは IP アドレスの後、' / '(スラッシュ) に続けてビット数表記で入力します。例えば、IP アドレスが 192.168.1.10 で、ネットマスクがドット区切り表記で 255.255.255.0 であれば以下のように入力します。

入力例) 192.168.1.10/24

複数の Ethernet ポートに同一ネットワークに属するアドレスを 設定しないで下さい。正常に動作しないことがあります。

MTU

「Path-MTU-Black-HOLE」現象が発生した場合等は、この値を変更することで回避できます。
通常は初期設定の 1500Bytes のままで利用してください。

通信モード

Ether ポートの通信速度・方式を選択します。
工場出荷設定では「自動」(オートネゴシエーション)となっていますが、必要に応じて通信速度・方式を選択してください。

デフォルトゲートウェイ

デフォルトゲートウェイ欄の「編集」ボタンを押すと次の入力画面が表示されます。

基本情報



基本情報	
デフォルトゲートウェイ	<input type="text"/>
<input type="button" value="設定"/>	

デフォルトゲートウェイ

本装置のデフォルトゲートウェイとなる IP アドレスを入力してください。

各項目に入力後、「設定」ボタンをクリックして設定完了です。

本装置のインタフェースのアドレスを変更した後は、設定画面にアクセスしているコンピュータの IP 設定もそれにあわせて変更し、変更した IP アドレスの設定画面に再ログインしてください。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

3. 内蔵時計

本装置の時刻を合わせます。

時刻を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。



内蔵時計

2008年 05月 01日 12時 00分 00秒

実行

内蔵時計

24時間単位で時刻を設定してください。

「実行」ボタンをクリックして設定完了です。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

4. ログ

ログに関する設定をします。
また、取得した各ログの転送先を設定します。

ログの取得とファシリティ	
システムログの取得	取得する
システムログのファシリティ	local0
オペレーションログの取得	取得しない
オペレーションログのファシリティ	local0
アクセスログの取得	取得しない
アクセスログのファシリティ	local0

設定・編集

ログ転送			
ファシリティ	転送先IPアドレス	編集	削除
local0	192.168.0.251	編集	削除

新規追加

ログの取得とファシリティ

現在の設定内容が表示されています。
設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

ログの取得とファシリティ変更

ログの取得とファシリティ変更	
システムログの取得	<input checked="" type="radio"/> 取得する <input type="radio"/> 取得しない
システムログのファシリティ	LOCAL0
オペレーションログの取得	<input checked="" type="radio"/> 取得する <input type="radio"/> 取得しない
オペレーションログのファシリティ	LOCAL0
アクセスログの取得	<input checked="" type="radio"/> 取得する <input type="radio"/> 取得しない
アクセスログのファシリティ	LOCAL0

設定

システムログの取得

システムログについて記録に残すかどうかを設定します。

システムログのファシリティ

システムログを「取得する」にした場合、システムログが出力されるファシリティを指定します。
プルダウンから選択してください。

オペレーションログの取得

オペレーションログについて記録に残すかどうかを設定します。

オペレーションログのファシリティ

オペレーションログを「取得する」にした場合、オペレーションログが出力されるファシリティを指定します。
プルダウンから選択してください。

アクセスログの取得

アクセスログについて記録に残すかどうかを設定します。

アクセスログのファシリティ

アクセスログを「取得する」にした場合、アクセスログが出力されるファシリティを指定します。
プルダウンから選択してください。

各項目に入力後、「設定」ボタンをクリックして設定完了です。
設定はすぐに反映されます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

ログ転送

各ファシリティ毎のログの転送先が一覧表示されています。

この画面で設定をおこなうシステムログ・オペレーションログ・アクセスログに加え、後で設定をおこなう認証ログ、アカウントングログも転送先の指定に従って転送されます。

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

ログ転送新規追加



ファシリティ

転送したいログのファシリティを指定します。プルダウンから選択してください。

転送先 IP アドレス

ログを転送するサーバを指定します。指定したマシン上でsyslogサーバを動かす必要があります。

転送先ポート

転送先のUDPポート番号を指定します。未指定の場合は、514が指定されたものとします。

各項目に入力後、「設定」ボタンをクリックして設定完了です。設定はすぐに反映されます。

設定可能な転送先IPアドレスの最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

ログ転送一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのエントリが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

本装置に記録できるログの数には上限があります（「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください）。継続的にログを取得される場合は外部のsyslogサーバにログを送信するようにしてください。

5. スタティックルート

本装置のスタティックルートの設定をおこないます。

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

スタティックルート新規追加



IPアドレス

あて先ホストまたはネットワークのIPアドレスを入力します。

あて先の範囲をネットマスクで指定します。

ネットマスクはIPアドレスの後、'/'(スラッシュ)に続けてビット数表記で入力します。例えば、IPアドレスが 192.168.1.0 で、ネットマスクがドット区切り表記で255.255.255.0の範囲であれば以下のように入力します。

入力例) 192.168.1.0/24

ホストを指定する場合は '/32' は付けずに IP アドレスで指定します。

入力例) 192.168.1.1

ゲートウェイ

IPアドレス欄で指定したアドレスへ送信するパケットを中継する、ルータのアドレスを入力します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定はすぐに反映されます。

設定可能なスタティックルートの最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

スタティックルート一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのエントリが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

第4章 設定ウィザードによる設定

. 設定内容の詳細

6. DNS

本装置が使用する DNS の設定をおこないます。

設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

DNS



プライマリサーバ

プライマリ DNS サーバの IP アドレスを入力します。

セカンダリサーバ

セカンダリ DNS サーバの IP アドレスを入力します。

各項目に入力後、「設定」ボタンをクリックして設定完了です。

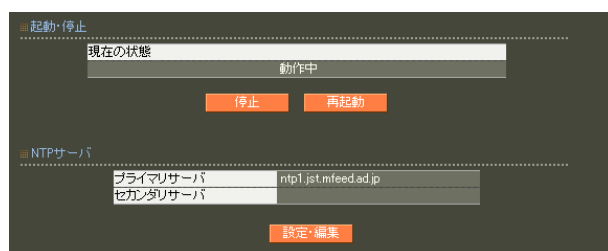
設定はすぐに反映されます。

第4章 設定ウィザードによる設定

設定内容の詳細

7.NTP

本装置は、NTPクライアント/サーバ機能を持っています。インターネットを使った時刻同期の手法の一つであるNTP(Network Time Protocol)を用いてNTPサーバと通信をおこない、時刻を同期させることができます。



起動・停止

現在NTPサーバが停止している場合には、「停止中」と表示されます。「起動」ボタンをクリックする事でNTPサーバが起動します。

NTPサーバが起動している場合には、「動作中」と表示されます。

「停止」ボタンをクリックする事でNTPサーバは停止します。また、「再起動」ボタンをクリックするとNTPプロセスが再起動します。

NTPサーバ

設定されているNTPサーバが表示されています。設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。



プライマリサーバ

プライマリNTPサーバのIPアドレスもしくはFQDNを入力します。

セカンダリサーバ

セカンダリNTPサーバのIPアドレスもしくはFQDNを入力します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

保存された設定内容を反映させるには、NTPサーバの再起動が必要になります。

「再起動」ボタンを押してください。

基準NTPサーバについて

基準となるNTPサーバには以下のようなものがあります。

- ・ntp1.jst.mfeed.ad.jp
- ・ntp2.jst.mfeed.ad.jp
- ・ntp3.jst.mfeed.ad.jp

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

8. SNMP

SNMP エージェントを起動すると、SNMP マネージャから本装置の MIB-II (RFC1213) の情報を取得することができます。

The screenshot shows the SNMP configuration interface. At the top, there is a status section with a progress bar labeled '現在の状態' (Current Status) and a button '再起動' (Restart). Below this is the 'SNMPサーバ' (SNMP Server) section, which contains a table of settings:

コミュニティ名	public
本装置の名称	RA-Series
本装置の説明	RADIUS_Appliance
本装置の設置場所	Location
本装置の管理者	Administrator
Trap送信先1	
Trap送信先2	
Trap送信先3	
Trap送信先4	
Trap送信先5	
CPU使用量閾値	90
メモリ空き容量閾値	16384

At the bottom of the settings table, there is a button labeled '設定・編集' (Settings/Editing).

起動・停止

現在 SNMP が停止している場合には、「停止中」と表示されます。「起動」ボタンをクリックする事で SNMP が起動します。

SNMP が起動している場合には、「動作中」と表示されます。「停止」ボタンをクリックする事で SNMP サーバは停止します。また、「再起動」ボタンをクリックすると SNMP プロセスが再起動します。

SNMP サーバ

管理者が設定変更できる項目について、現在の設定内容が表示されています。設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

The screenshot shows the input form for the SNMP configuration. It has the same layout as the previous screenshot, but the input fields are now active for editing. The '設定' (Settings) button is visible at the bottom.

コミュニティ名

任意のコミュニティ名を指定します。ご使用の SNMP マネージャの設定に合わせて入力してください。

本装置の名称

本装置の管理上の名前を入力します。通常 FQDNなどを指定します。

本装置の説明

本装置についての説明を入力します。

本装置の設置場所

本装置の物理的な設置場所を指定します。

本装置の管理者

本装置管理者への連絡先などを指定します。

Trap 送信先 1 ~ 5

Trap の送信先 (SNMP マネージャ) の IP アドレスを設定します。

デフォルト値はありません。

未設定の場合は trap の送信はしません。

最大 5 個まで設定可能です。

CPU 使用率閾値

CPU 使用率の閾値を設定します。

単位は % で、有効な値は 10 以上 100 未満の整数となります。

デフォルト値はありません。

設定されない場合は、対応する trap は送信されません。

CPU 使用率は、設定内容及びご利用状況によって変わります。

運用中の実際の使用率を元に、適当と思われる閾値を設定してください。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

メモリ空き容量閾値

メモリ 空き容量の閾値を設定します。
単位はKBで、有効な値は 1 以上の整数となります。
デフォルト値はありません。
設定されない場合は、対応する trap は送信されません。
メモリ空き容量については別項(後述)を参照して下さい。

メモリ空き容量は設定及びご利用状況によって変わります。
運用中の実際の空き容量を元に、適当と思われる閾値を設定してください。

各項目に使用可能な文字は以下となります。

- ・コミュニティ名、本装置の説明、本装置の設置場所
0-9, a-z, A-Z, -, _
- ・本装置の名称
0-9, a-z, A-Z, -, _, .
- ・本装置の管理者
0-9, a-z, A-Z, -, _, @, <, >, .

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

保存された設定内容を反映させるには、SNMP サーバの再起動が必要になります。

「再起動」ボタンを押して下さい。

メモリ空き容量

RA では、データの読み出し / 書き込み時にメモリをキャッシュという形で確保します。
一度キャッシュとして確保したデータは、メモリを介して処理が行われるため高速に動作します。
新たなデータの読み出し / 書き込み要求によりメモリ領域が必要とならない限り、キャッシュは解放されません。

(1.8.12 以降)

メモリ空き容量(csRASystemMemoryFree)には、このキャッシュが含まれます。

(1.8.11 以前)

メモリ空き容量(csRASystemMemoryFree)には、このキャッシュは含まれません。

したがって、連続して運用を続けると、メモリ空き容量(csRASystemMemoryFree)は逡減します。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

SNMP trap

ユーザが設定した SNMP マネージャに SNMP trap を送信します。

送信される trap は以下の通りです。

- ・ SNMP サービスを起動した時

Cold Start trap を送信します。

- ・ CPU 使用率がユーザ定義の閾値を超えた時
- ・ CPU 使用率がユーザ定義の閾値以下になった時

CPU 使用率を一定時間毎(1秒)に測定します。前回の測定値が閾値以下で、今回の測定値が閾値より大きい場合に trap を送信します。測定値が閾値より大きくなったことがあり、その後の測定値が一定回数(10回)だけ連続して閾値以下の場合に trap を送信します。SNMP サービス起動直後に閾値より大きい場合は trap を送信します。閾値以下の場合には送信しません。

- ・ メモリ空き容量がユーザが定義した閾値より小さくなった時
- ・ メモリ空き容量がユーザが定義した閾値以上になった時

メモリ空き容量を一定時間毎(1秒)に測定します。前回の測定値が閾値以上で、今回の測定値が閾値より小さい場合に trap を送信します。測定値が閾値より小さくなったことがあり、その後の測定値が一定回数(10回)だけ連続して閾値以上の場合に trap を送信します。SNMP サービス起動直後に閾値より小さい場合は trap を送信します。閾値以上の場合には送信しません。

- ・ Ethernet インタフェースが link down した時
- ・ Ethernet インタフェースが link up した時

Ethernet インタフェースの link up/down に応じて trap を送信します。

SNMP サービス起動直後に link down ならば trap を送信します。

link up ならば送信しません。

- ・ 電源の状態が変わった時
(RA-1300・RA-1200 のみ)

電源ユニットへの通電がなくなったり、電源ユニット自体が故障したりなど、注意が必要な状態になった場合に trap を送信します。

また、注意が必要な状態から正常な状態に戻った場合にも trap を送信します。

- ・ RAID の状態が変わった時
(RA-1300・RA-1200 のみ)

RAID で障害が発生した場合、リビルドが始まった場合、リビルドが終了した場合に trap を送信します。

第4章 設定ウィザードによる設定

. 設定内容の詳細

CPUやメモリ、電源、RAIDの状況は、GetRequestなどで取得できます。

例:

```
$ snmpwalk -v2c -c public 192.168.0.254 centurysys
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRASystemCPUUser.0 = INTEGER: 0
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRASystemCPUSystem.0 = INTEGER: 1
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRASystemCPUIdle.0 = INTEGER: 99
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRASystemMemoryTotal.0 = INTEGER: 4123252
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRASystemMemoryFree.0 = INTEGER: 4009080
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRAPowerStatus.0 = INTEGER: ok(1)
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRAPowerType.0 = INTEGER: type1(1)
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRARaidLdLevel.1 = INTEGER: raid1(2)
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRARaidLdStatus.1 = INTEGER: ok(1)
```

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

9.CA - 基本情報

本装置のCAの設定をおこないます。

「新規追加」をクリックすると次の入力画面が表示されます。

CA

バージョン 3

鍵長 2048

Signature Algorithm SHA-256

Subject

Common Name

email

Organizational Unit

Organization

Locality

State or Province

Country

有効期間

終了日時 年 月 日

パスフレーズ

パスフレーズ

失効リスト更新間隔

失効リスト更新間隔 365

設定

CA

バージョン

証明書のバージョンを示します。V3固定です。

鍵長

RSAの鍵の長さを選択します。

- ・ ~ ver1.11.0

鍵の長さは「512」、「1024」、「2048」のいずれかを選択することができます。

- ・ ver1.12.0 ~ ver1.13.1

鍵の長さは「1024」、「2048」のいずれかを選択することができます。

- ・ ver1.14.0 ~

鍵の長さは「2048」を選択することができます。

「512」、「1024」は十分安全とは言えません。

「2048」を推奨します。

Signature Algorithm

署名アルゴリズムを選択します。

- ・ ver1.8.4以前

「SHA-1」または「MD5」を選択することができます。

- ・ ver1.8.5 ~ ver1.11.0

「SHA-512」、「SHA-384」、「SHA-256」、「SHA-1」、「MD5」のいずれかを選択することができます。

- ・ ver1.12.0 ~ ver1.13.1

「SHA-512」、「SHA-384」、「SHA-256」、「SHA-1」のいずれかを選択することができます。

- ・ ver1.14.0 ~

「SHA-512」、「SHA-384」、「SHA-256」

のいずれかを選択することができます。

「SHA-1」、「MD5」は十分安全とは言えません。

「SHA-256」を推奨します。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

Subject

Subject には以下の項目があります。

- ・ Common Name

CA Name として、認証局名称を設定します。

- ・ email

認証局管理者のメールアドレス

- ・ Organizational Unit

一般には部署名を設定します。

- ・ Organization

一般には企業名、組織名を設定します。

- ・ Locality

市町村名を設定します。

- ・ State or Province

都道府県名を設定します。

- ・ Country

国名を設定します。

日本国内の場合は、「JP」とします。

有効期間

証明書有効期間を日数（終了日時）で設定します。

設定できるのは、2005年～2035年の間になります。

パスフレーズ

パスフレーズ

パスフレーズは5文字以上30文字以下で入力してください。

失効リスト更新間隔

失効リスト更新間隔

失効リストの更新間隔日数を設定します。

0-4000日の間で指定します。

- ・ ver1.9.2以降

0を指定した場合、次の更新 (Next Update) は、CA 証明書の有効期間の終了日時になります。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

この設定では、以下の項目が必須の設定項目になります。

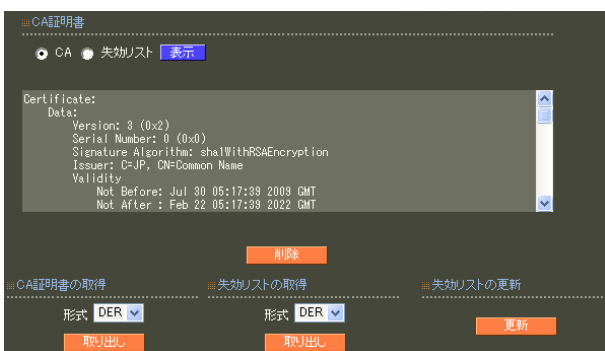
- バージョン(固定)
- 鍵長
- Signature Algorithm
- subject
 - ・ Common Name
- 有効期間
- パスフレーズ
- 失効リスト更新間隔

また、各項目に使用可能な文字は以下となります。

- ・ E-mailAddress
 - 0-9, a-z, A-Z, -.@_
- ・ Common Name
 - 制御コードを除く任意の半角文字
- ・ Organizational Unit/Organization/Locality/State or Province/
 - ver1.8.4以前: 0-9, a-z, A-Z, -_
 - ver1.8.5以降: 0-9, a-z, A-Z, -_' ,.SPACE
- ・ Country
 - A-Z

各項目に入力後、「設定」ボタンを押してCA証明書を発行します。

CAの設定を一度おこなうと、以降、「CA/CRL」メニューを選択した場合、次の画面が表示されるようになります。



この画面では以下の操作をおこなえます。

CA 証明書

CA/失効リストの表示

画面上部にある「CA」/「失効リスト」の選択ボタンを選んで「表示」ボタンを押すと、CAの内容または失効リストの内容が表示されます。

CAの削除

「削除」ボタンを押すと本装置で設定したCA証明書、CRL、各証明書を全て削除します。

CA証明書の取得

CA証明書欄で「取り出し」ボタンをクリックすることによりCA証明書を取り出すことができます。この際、取り出す形式を PEM または DER から選択することができます。

失効リストの取得

失効リストの取得欄で「取り出し」ボタンをクリックすることによりCRLを取り出すことができます。この際、取り出す形式を PEM または DER から選択することができます。

失効リストの更新

失効リストの更新欄で「更新」ボタンをクリックするとCRLが最新のものに置き換えられます。

・ver1.10.0以降

失効リスト更新間隔を、0-4000日の間で指定することができます。デフォルト値は、CA証明書を発行した時に指定した値です。0を指定した場合、次の更新 (Next Update) は、CA証明書の有効期間の終了日時になります。

失効リストが、失効リストの更新間隔で決められた日時よりも古い場合には、証明書自体が有効であっても証明書の認証は拒否されます。

失効リスト更新間隔で決められた期間中に一度以上、失効リストの更新をおこなうようにしてください。

また、RADIUSサーバに新しい失効リストを認識させるには、RADIUS(サービス)を再起動する必要があります。

第4章 設定ウィザードによる設定

設定内容の詳細

10.CA - RADIUS サーバ証明書

EAPによる認証に用いるサーバ証明書の作成をおこないます。

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

証明書プロファイル 新規追加

プロファイル名

証明書

バージョン 3

鍵長 2048

Signature Algorithm SHA-256

Subject

Organizational Unit

Organization

Locality

State or Province

Country

有効期間

開始日時 年 月 日 時 分

終了日時 年 月 日 時 分

Key Usage

digitalSignature nonRepudiation

keyEncipherment dataEncipherment

keyAgreement keyCertSign

cRLSign encipherOnly

decipherOnly

Extended Key Usage 指定しない

CRL Distribution Points

設定

「S/N」(シリアルナンバ)を押すと、次の証明書表示画面が表示され、発行内容を確認することができます。

証明書

Certificate:

Data:

Version: 3 (0x2)

Serial Number: 2 (0x2)

Signature Algorithm: sha1WithRSAEncryption

Issuer: C=JP, CN=Common Name

Validity

Not Before: Jul 30 06:28:47 2008 GMT

Not After: Nov 11 11:11:00 2011 GMT

証明書の取得

形式 PKCS#12

内容 CA証明書・証明書・私鍵

理由 設定して下さい

取り出し

失効

戻る

証明書の操作の詳細については「第7章 CA設定 II. 証明書 証明書の表示」を参照してください。

入力項目の詳細については、「第7章 CA設定 II. 証明書 証明書の作成」を参照してください。

各項目に入力後、「実行」ボタンを押して証明書を発行します。

証明書発行後は次の画面が表示されるようになります。

証明書

表示条件

全て 未失効

表示

No.	S/N	Subject	有効期間	失効日時
1	01	ra1100	2009-11-17 10:13:17	2011-01-01 01:01:00

(1件中 1件目を表示)

新規追加

第4章 設定ウィザードによる設定

・ 設定内容の詳細

11.CA - HTTPS サーバ証明書

本装置の管理画面アクセスにSSLを用いる場合の、サーバ証明書の作成をおこないます。

このメニューの操作は前の「10.CA-RADIUS サーバ証明書」と同一になります。

13.CA - LDAP サーバ証明書

ユーザ認証時にLDAPサーバ連携をおこなう場合で、StartTLSまたはLDAPSプロトコルにより通信を保護したい場合に、LDAPサーバ側の証明書を作成します。

このメニューの操作は「10.CA-RADIUS サーバ証明書」と同一になります。本証明書の作成後、この証明書を取り出して、LDAPサーバに設定をしてください。

12.CA - LDAP クライアント証明書

ユーザ認証時にLDAPサーバ連携をおこなう場合で、StartTLSまたはLDAPSプロトコルにより通信を保護したい場合に、本装置側の証明書を作成します。

このメニューの操作は「10.CA-RADIUS サーバ証明書」と同一になります。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

14. 管理画面へのアクセス

本装置の管理画面へアクセスするために必要な設定をおこないます。



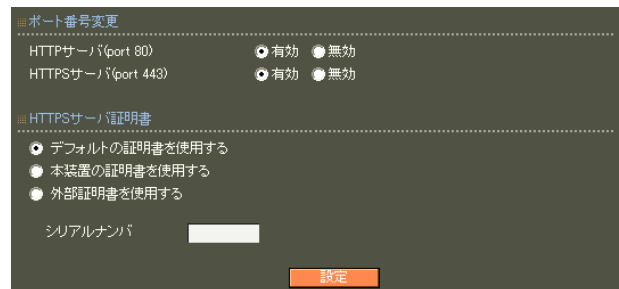
HTTPS サーバ証明書

「本装置の証明書を使用する」欄の「表示」ボタンは、HTTPS サーバ証明書で、「本装置の証明書を使用する」が設定されている場合にのみ表示されます。

このボタンを押すと証明書の内容が表示され、証明書の取得等ができます。

証明書の詳細については「第7章 CA設定 II. 証明書」を参照してください。

設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。



ポート番号変更

HTTP サーバ(port 80)/HTTPS サーバ(port 443)によるアクセスを有効にするか無効にするかを選択します。

必ずどちらかは有効にしておく必要があります。

HTTPS サーバ証明書

デフォルトで設定されている証明書、本装置のCAで発行したサーバ証明書、外部のCAで発行されたサーバ証明書のいずれを使用するか選択します。

「本装置の証明書を使用する」を選択した場合には、証明書のシリアルナンバを入力して証明書を指定してください。シリアルナンバは、16進数で入力します。

「外部証明書を使用する」を選択する場合は、事前に証明書をインポートしておく必要があります。

「デフォルトの証明書を使用する」は、初期設定のための一時的な利用を想定しています。

できるだけ本装置で発行した証明書または外部証明書を使用してください。

証明書の鍵長・Signature Algorithm は、それぞれ 2048・SHA-256 を推奨します。

各項目に入力後、「設定」ボタンをクリックして設定完了です。設定はすぐに反映されます。

第4章 設定ウィザードによる設定

設定内容の詳細

15. RADIUS - 基本情報

ポート番号、認証方式、RADIUS サーバの証明書
の指定など、RADIUS の基本的な情報の設定をおこな
います。

RADIUS サーバ証明書

「本装置の証明書を使用する」欄にある「表示」ボ
タンはRADIUSサーバ証明書が設定されている場合
にのみ表示されます。

このボタンを押すと証明書の内容が表示され、証
明書の取得等ができます。

証明書の詳細については「第7章 CA 設定 II. 証
明書」を参照してください。

基本情報の設定を変更する場合は「設定・編集」
ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

ポート番号

RADIUS では、認証 (Authentication) とアカウン
ティング (Accounting) の 2 つのポートを利用し
て、RADIUS クライアントとの通信をおこなってい
ますが、そのポート番号の設定をおこないます。

以下の 4 種類から選択します。

- 1645/1646
- 1812/1813
- 1645/1646、1812/1813 の双方
- 手動設定

手動設定の場合は、さらに使用したいポート番号
を指定します。

指定できるポート範囲は、1024 以上 60000 以下で、
認証用とアカウント用で異なるポート番号
を指定してください。

認証方式

利用するユーザ認証方式の選択をおこないます。
本装置では、以下の 5 つの認証方式をサポートし
ています。

- PAP/CHAP
- EAP-MD5
- EAP-TLS
- EAP-PEAP
- EAP-TTLS

使用する認証方式のチェックボックスをチェッ
クしてください。なお、「EAP-PEAP」または「EAP-
TTLS」を選択する場合は、「EAP-TLS」も選択し
ておく必要があります。

また、「EAP-TTLS」を選択する場合には TTLS 内部
認証で使う認証方式も同時に選択してください。

RADIUS サーバ証明書

認証で、「EAP-TLS」、「EAP-PEAP」または「EAP-
TTLS」を選択した場合には、RADIUS サーバ証明書
が必要となります。

証明書は事前に CA のメニューにて生成しておく必
要があります(「第7章 CA 設定」参照)。

証明書を作成した後、設定画面から「本装置の証
明書を使用する」を選択して、作成した証明書の
シリアルナンバを指定します。シリアルナンバは、
16進数で入力します。

有効期間内の証明書を設定して下さい。有効期間
外の場合は認証に成功しないことがあります(サブ
リクライアントに依存します)。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

アトリビュート・フォーマット

認証アトリビュートや応答アトリビュートなどに使用する際のアトリビュート・フォーマットを設定します。

「RFC 2865」の値を変更することで、

- Callback-Number
- Callback-Id
- Called-Station-Id
- Calling-Station-Id
- NAS-Identifier

の各アトリビュートのフォーマットを変更できます。

「RFC 非準拠」にした場合、これらのフォーマットは、text (ASCII 文字列)として扱われます。

「RFC 準拠」にした場合は、これらのフォーマットは、string (バイナリデータ) になります。

これらが

- 認証プロファイル
- 応答プロファイル
- ユーザ個別設定 (認証アトリビュート)
- ユーザ個別設定 (応答アトリビュート)
- LDAP アトリビュートマップ

に使用されている場合、本設定値を変更することはできません。

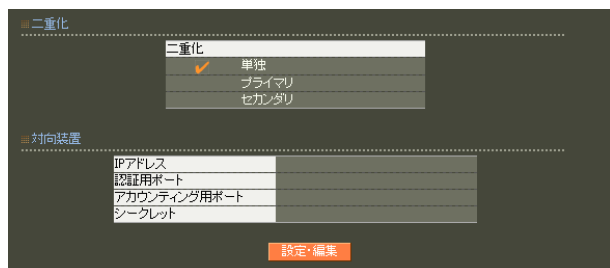
各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

第4章 設定ウィザードによる設定

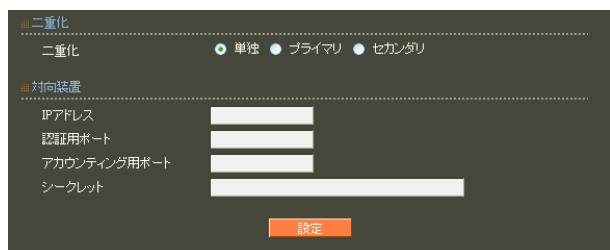
・設定内容の詳細

16.RADIUS - 二重化

本装置は、2台構成にて、冗長化機能を持たせる事ができます。



設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。



二重化

単独

本装置を単独で利用する場合に設定します。

プライマリ

セカンダリ

本装置を二重化構成で使用する場合に「プライマリ」または「セカンダリ」を指定します。二重化構成を取る装置の片方を「プライマリ」に、もう一方を「セカンダリ」に設定してください。

対向装置

二重化構成で使用する場合の、相手装置に関する情報を入力します。

IPアドレス

相手装置のIPアドレスを入力します。

認証用ポート

アカウント用ポート

シークレット

相手装置の設定内容と一致するように入力します。最大30文字まで入力することが可能で、使用可能な文字は英数字と空白文字および以下の記号です。

!#\$%&'()*+,-./:;<=>?@[^_`{|}~

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

二重化構成では、2台のRAの時刻同期を行ってください。

時刻同期には、NTP機能を利用することが可能です。

二重化構成におけるファームウェア更新については、「[付録F 同期・二重化構成におけるファームウェア更新手順](#)」を参照してください。

第4章 設定ウィザードによる設定

設定内容の詳細

17. RADIUS - ログ

RADIUS 関連のログについて、記録に残すログの種類を設定します。

取得内容		
User-Name		NAS-IP-Address
NAS-Port		Called-Station-Id
Calling-Station-Id		NAS-Identifier
NAS-Port-Type		Acct-Status-Type
Acct-Delay-Time		Acct-Input-Octets
Acct-Output-Octets		Acct-Session-Id
Acct-Session-Time		Acct-Input-Packets
Acct-Output-Packets		Acct-Terminate-Cause
Client IP Address		timestamp(yyyy-mm-dd hh:mm:ss)

設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

取得項目		
<input checked="" type="checkbox"/> User-Name	<input checked="" type="checkbox"/> NAS-IP-Address	
<input checked="" type="checkbox"/> NAS-Port	<input type="checkbox"/> Service-Type	
<input type="checkbox"/> Framed-Protocol	<input type="checkbox"/> Framed-IP-Address	
<input checked="" type="checkbox"/> Called-Station-Id	<input checked="" type="checkbox"/> Calling-Station-Id	
<input checked="" type="checkbox"/> NAS-Identifier	<input checked="" type="checkbox"/> NAS-Port-Type	
<input checked="" type="checkbox"/> Acct-Status-Type	<input checked="" type="checkbox"/> Acct-Delay-Time	
<input checked="" type="checkbox"/> Acct-Input-Octets	<input checked="" type="checkbox"/> Acct-Output-Octets	
<input checked="" type="checkbox"/> Acct-Session-Id	<input type="checkbox"/> Acct-Authentic	
<input checked="" type="checkbox"/> Acct-Session-Time	<input checked="" type="checkbox"/> Acct-Input-Packets	
<input checked="" type="checkbox"/> Acct-Output-Packets	<input checked="" type="checkbox"/> Acct-Terminate-Cause	
<input checked="" type="checkbox"/> Client IP Address	<input checked="" type="checkbox"/> timestamp(yyyy-mm-dd hh:mm:ss)	
<input type="checkbox"/> timestamp(epochtime)		

認証ログ

認証ログ

RADIUSによるユーザ認証に関する記録を残すかどうかを選択します。

ファシリティ

認証ログを「取得する」にした場合、認証ログが出力されるファシリティを指定します。プルダウンから選択してください。

不正パスワード

「記録する」を選んだ場合、パスワードが正しくないことが原因で認証失敗した時に、認証要求に含まれるパスワードが認証ログに記録されます。パスワードが記録されるのは、PAP または EAP-TTLS/PAP の場合に限られます。

アカウントティングログ

アカウントティングログ

RADIUSのアカウントティング記録を残すかどうかを選択します。

ファシリティ

アカウントティングログを「取得する」にした場合、アカウントティングログが出力されるファシリティを指定します。プルダウンから選択してください。

取得項目

記録に残したい項目を選んで、チェックボックスをチェックします。

項目の詳細については「第6章 RADIUS設定 1. サーバ設定 10. ログ」を参照してください。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

18.RADIUS - アドレスプール

端末に IP アドレスを割当てる場合に貸与する IP アドレスの領域を設定します。

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

アドレスプール新規追加



アドレスプール名

任意の名前を 20 文字以内で入力します。後に他のメニューでアドレスプールを割り当てる時に、ここで設定された名前が選択肢として表示されます。使用可能な文字は英数字およびハイフン(“-”)、アンダーバー(“_”)になります。

開始 IP アドレス

端末に貸与する IP アドレスの最初の IP アドレスを指定します。

終了 IP アドレス

端末に貸与する IP アドレスの最後の IP アドレスを指定します。開始 IP アドレスから終了 IP アドレスまでの間の IP アドレスがクライアントに貸与されます。ここで設定された値は、RADIUS アトリビュートの「Framed-IP-Address」の値となり、RADIUS クライアントに返信されます。

ネットマスク

サブネットマスクの値を登録します。ここで設定された値は、RADIUS アトリビュートの「Framed-IP-Netmask」の値となり、RADIUS クライアントに返信されます。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なアドレスプールの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

変更・削除

アドレスプール一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのアドレスプールが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

19.RADIUS - クライアント

本装置にアクセス可能なRADIUSクライアントを設定します。

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

クライアント新規追加



クライアント名

任意の名前を20文字以内で入力します。使用可能な文字は英数字およびハイフン(“-”)、アンダーバー(“_”)になります。

IPアドレス

RADIUSクライアントのIPアドレスを入力します。

シークレット

RADIUSクライアントとの認証や暗号処理に用いる文字列を入力します。RADIUSクライアント側でも同じ値が設定されている必要があります。

最大30文字まで入力することが可能で、使用可能な文字は英数字と空白文字および以下の記号です。

!#\$%&'()*+,-./:;<=>?@[]^_`{|}~

アドレスプール

端末にIPアドレスを割り当てる場合に、アドレスプール名を選択します。アドレスプールの選択肢には、前項の「アドレスプール」メニューで設定した名前が表示されます。IPアドレスを本装置から割り当てない場合には「指定しない」を選択します。

アドレスプールは後のメニュー「RADIUS- ユーザ基本情報」の中で割り当てることもできます。

ユーザ基本情報プロファイルのIPアドレス割り当てが指定されている場合、そのプロファイルを使用しているユーザへのIPアドレス割り当ては、プロファイル中の設定が優先して使われます。

本メニューのアドレスプールは、ユーザ基本情報プロファイルのIPアドレス割り当てが「未使用」のユーザ、または、「固定」で設定されているユーザの内、固定IPアドレスが指定されていないユーザにのみ適用されます。

本項のアドレスプールを設定してIPアドレスを割り当てるためには、本装置でRADIUSクライアントとして設定したアドレスがNAS-IP-AddressとしてAccess-Requestに含まれている必要があります。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なクライアントの最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

クライアント一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのアドレスプールが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

20.RADIUS - アトリビュート

RADIUS標準アトリビュート以外に、ベンダ固有アトリビュート(VSA)を使用したい場合に設定します。本メニューにて設定されたベンダ固有アトリビュートは、後のメニューにて、認証に使用するアトリビュートとして指定したり、認証応答に付加されるVSA設定値の指定に使えるようになります。



ベンダ一覧

登録されているベンダの一覧が表示されます。

ベンダ固有アトリビュート一覧

登録されているアトリビュートの一覧がベンダ毎に表示されます。

良く使われる標準のアトリビュートについてはベンダ「standard」として定義されています。「standard」として定義されているアトリビュートについては新規作成や、編集、削除はできません。

先にベンダの追加をおこないます。
ベンダ一覧の「新規追加」ボタンを押します。

ベンダ新規追加



ベンダ

追加したいベンダ名を入力します。最大20文字まで入力可能です。使用可能な文字は英数字およびハイフン(“-”)、アンダーバー(“_”)になります。

ベンダID

ベンダ毎に割り当てられているベンダIDを数値で入力します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

設定可能なベンダの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

削除

登録されているベンダを削除したい場合には「削除」ボタンを押すと削除されます。

ベンダ固有アトリビュートで使われているベンダは削除できません。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

続いて、ベンダ固有アトリビュート一覧から「新規追加」ボタンを押すと入力画面が表示されます。

ベンダ固有アトリビュート新規追加



ベンダ

選択されたベンダ名が表示されます。

タイプ名

ベンダ固有アトリビュート用にベンダから指定されているタイプ名を指定します。最大20文字まで入力可能です。使用可能な文字は英数字およびハイフン("-)、アンダーバー("_")になります。

タイプ

アトリビュート番号を指定します。1～255の整数値を入力してください。

フォーマット

アトリビュートのデータ型をプルダウンから選択してください。以下の5種類から選択できます。

- text
対象アトリビュートのデータ型がASCII文字列の場合に選択します。
- string
対象アトリビュートのデータ型がバイナリデータの場合に選択します。
- address
対象アトリビュートのデータ型がIPアドレス形式の場合に選択します。
- integer
対象アトリビュートのデータ型が整数の場合に選択します。
- ipv6address
対象アトリビュートのデータ型がIPv6アドレス形式の場合に選択します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なベンダ固有アトリビュートの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

変更・削除

ベンダ固有アトリビュート一覧に登録されているアトリビュートを編集または削除したい場合にはアトリビュートが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・ 設定内容の詳細

21.RADIUS - ActiveDirectory

ユーザ認証を Active Directory でおこないたい場合に設定します。

本設定をおこなうと、EAP-PEAP による認証要求を受けた場合に、設定された Active Directory サーバに問い合わせることで認証の可否を判断します。

Active Directory 連携	使用する
Active Directory サーバ	ad.example.com
ドメイン名	example.com
ドメイン名(Windows2000より前)	
所属グループ	Wireless
管理者ユーザID	operator
管理者パスワード	operator

「設定・編集」ボタンを押すと入力画面が表示されます。

ActiveDirectory

Active Directory 連携	<input checked="" type="checkbox"/> 使用しない <input checked="" type="checkbox"/> 使用する
Active Directory サーバ	ad.example.com
ドメイン名	example.com
ドメイン名(Windows2000より前)	
所属グループ	Wireless
管理者ユーザID	operator
管理者パスワード	operator

Active Directory 連携

Active Directory 連携機能を使用する場合に「使用する」を選択します。

Active Directory サーバ

- ・ 1.8.13 以降

使用しません。

DNS を使用してドメインコントローラを自動的に検索します。

- ・ 1.8.12 以前

ドメインコントローラを FQDN または IP アドレスで指定します。

ドメイン名

認証を受けるドメイン名を入力します。

ドメイン名(Windows2000 より前)

ドメインに設定された NetBIOS 名を設定します。Windows サーバ上で「ドメイン名(Windows2000 より前)」や「ドメイン名(Windows2000 以前)」などの名前で参照できます。

「ドメイン名」の先頭パートと同一の場合は省略可能です。

最大 15 バイトまで入力可能です。

使用可能な文字は、英数字およびハイフン(-)、アンダーバー(_)です。

所属グループ

認証を受ける所属グループ名を入力します。

空欄にするとグループ情報を用いずに認証をおこないます。

管理者ユーザ ID

認証情報の確認をおこなうための Active Directory のユーザアカウントを指定します。

このユーザは Administrators グループまたは Account Operators グループに所属しているか、または同等の権利が与えられている必要があります。

管理者パスワード

管理者ユーザ ID に対応したパスワードを入力します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

保存された設定内容を反映させるには、RADIUS サーバの再起動が必要になります。

RADIUS サーバの起動時に、RA はドメインに参加します。管理者ユーザ ID の権限で、Active Directory サーバにコンピュータアカウントを作成します。

第4章 設定ウィザードによる設定

設定内容の詳細

Active Directory 連携機能を利用する際の注意

- Active Directory 連携機能を利用するためには、DNSの設定(管理機能メニューの「ネットワーク」-「DNS」)で所属するドメインのDNSサーバが設定されている必要があります。
- Active Directory サーバと本装置の時刻がずれている場合、Active Directory サーバとの連携ができないことがあります。
- Active Directory サーバへの認証情報の問い合わせは、以下の手順で行われます。
 - 認証要求に含まれるユーザ名 (User-Name) から最初の ¥ 以前を取り除く。
 - (1) の結果に @ が含まれる場合、最後の @ より後ろの文字列がドメイン名(設定値)に一致していなければ問い合わせしない。
(1.9.0 以降のみ)
 - (1) の結果から最後の @ 以降を取り除く。
(1.9.0 以降のみ)
 - (3) の結果が空文字列であれば、問い合わせしない。(1.9.0 以降のみ)
 - (3) の結果に ¥ が含まれていれば、問い合わせしない。(1.9.0 以降のみ)
 - (3) の結果をユーザ名として Active Directory サーバへ問い合わせを行う。
- Active Directory 連携機能を有効にした場合、EAP-PEAP 認証では常に Active Directory サーバのユーザ情報が使用されます。LDAP 連携機能や本装置内に設定されたユーザ情報などは使われません。
- LDAP 連携機能において EAP-PEAP 認証を行う場合、Active Directory 連携機能と同時に使用することはできません。

Active Directory サーバへの対応状況

Active Directory サーバの各バージョンに対する RA の対応状況は以下の通りです。

Active Directoryサーバの version	対応しているRAの version			
	RA-1300	RA-1200	RA-830	RA-730
Windows Server 2016	1.20.0	1.15.0	1.17.0	1.15.0
Windows Server 2012 R2	1.20.0	1.10.0	1.17.0	1.10.0
Windows Server 2012	1.20.0	1.10.0	1.17.0	1.10.0
Windows Server 2008 R2	1.20.0	1.8.9	1.17.0	1.8.3
Windows Server 2008	1.20.0	1.8.9	1.17.0	1.8.3

但し、全ての環境において Active Directory サーバとの連携を保証するものではありません。

第4章 設定ウィザードによる設定

設定内容の詳細

22.RADIUS - LDAP

LDAPサーバと連携してユーザ認証をおこないたい場合に設定します。

PAP/CHAP、EAP-MD5、EAP-PEAP、EAP-TTLS/PAP、CHAP、EAP-TTLS/EAP-MD5による認証要求を受けた場合に、設定されたLDAPサーバを利用して認証の可否を判断することができます。

LDAP

LDAP	使用する
認証順序	Local → LDAP

設定・編集

LDAP属性マッピング一覧

RADIUS属性	LDAP属性	編集	削除
Framed-IP-Address	raFramedIP Address	編集	削除
Framed-IP-Netmask	raFramedIP Netmask	編集	削除

新規追加

LDAPサーバー一覧

No.	LDAP名	編集	削除
1	ldap	編集	削除

新規追加

これより、各設定について説明します。

LDAP

LDAPサーバ連携使用の有無と、使用する場合の認証順序が表示されています。

設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

LDAP

LDAP

LDAP

● 使用しない ● 使用する

認証順序

● Local → LDAP ● LDAP → Local

設定

LDAP

LDAPサーバ連携機能を使用する場合に「使用する」を選択します。

認証順序

LDAPサーバ上のユーザ情報に基づく認証と、本装置上に登録されたユーザ情報に基づく認証のどちらを優先しておこなうかを指定します。

「Local LDAP」を指定した場合、最初に本装置上で認証を試みます。そして認証要求されたユーザが本装置上に登録されていなかった場合にLDAPサーバ連携による認証をおこないます。「LDAP Local」の場合は逆に、LDAP上のユーザ認証が最初におこなわれます。

選択後「設定」ボタンを押してください。

LDAPサーバを使用する選択にした場合には続いてLDAPサーバの登録をおこなってください。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

LDAPアトリビュートマップ一覧

LDAPアトリビュートマップ機能を用いることで、LDAPサーバから応答アトリビュートを取得し、RADIUSクライアントに返すことが可能となります。応答アトリビュートはLDAPサーバでユーザ毎に設定します。

LDAPアトリビュートマップは、LDAPサーバ毎ではなく全体で共有されます。

設定可能なLDAPアトリビュートマップの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

設定情報の同期をおこなう設定の場合、本設定は対向装置へ同期されます。

「新規追加」ボタンを押すと入力画面が表示され、LDAPアトリビュートマップをひとつ作成することができます。

ここでは、LDAPサーバ上のアトリビュートからRADIUS応答アトリビュートへの変換ルールの組を設定します。

LDAPアトリビュートマップ新規追加



LDAPアトリビュートマップ新規追加

RADIUSアトリビュート Acct-Tunnel-Connection

LDAPアトリビュート

設定

RADIUSアトリビュート

RADIUSアトリビュートを選択します。任意のアトリビュートを選択することができます。

LDAPアトリビュート

LDAPサーバへ問い合わせる際の検索フィルタアトリビュートを設定します。

各LDAPサーバで設定された「ベースDN」や「フィルタアトリビュート」などと複合してLDAPサーバに問い合わせがおこなわれます。LDAPアトリビュートは「管理者ユーザID」の権限で読み出せる必要があります。

使用可能な文字は、下記の通りです。

0-9, a-z, A-z, -(0x2c), _(0x5f)。

最大文字数は「40(ver1.8.3以前は20)」で、デフォルト値はありません。

入力後に「設定」ボタンを押してください。

変更

既に設定されているLDAPアトリビュートマップのひとつを変更することができます。

RADIUSアトリビュートは編集することはできませんが、LDAPアトリビュートは変更可能です。

削除

既に設定されているLDAPアトリビュートマップのひとつを削除することができます。

第4章 設定ウィザードによる設定

設定内容の詳細

LDAP サーバー一覧

表示画面の下段には設定済みのLDAPサーバが一覧表示されています。1番のサーバから順にLDAPによる認証が試みられます。

「新規追加」ボタンを押すと入力画面が表示されます。

LDAP 新規追加



No.

このLDAPサーバの認証の順番を指定します。空欄にした場合には既存のLDAPサーバ設定の最後に追加されます。

既にLDAPサーバが登録されている番号を指定した場合には、今回作成するLDAPサーバがその番号で設定され、指定された番号から下の既存のLDAPサーバ設定が一つずつ後ろにずれて設定されます。

LDAP 名

識別用に任意の名前を20文字以内で入力します。

LDAP サーバ

LDAPサーバ名をFQDNまたはIPアドレスで指定します。

ポート

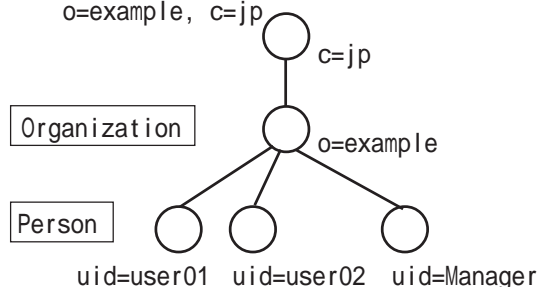
LDAPサーバのポート番号を指定します。指定できるポート範囲は、80, 443, 802番を除く1 ~ 1023の範囲になります。一般的にはLDAP(StartTLS含む)の場合には389、LDAPSの場合には636が使われます。

ベース DN

認証要求で送られたユーザ名をLDAPサーバに問い合わせる際の基点となるエントリのDistinguished Nameを指定します。

<入力例>

o=example, c=jp



図：ディレクトリツリーの例

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

バインド DN

認証要求で送られたユーザ名をLDAPサーバに問い合わせる際に用いるユーザのDistinguished Nameを指定します。

ユーザの検索に必要なアクセス権が与えられている必要があります。

バインド DNが未設定の場合は、LDAPサーバに匿名アクセスを行います。

<入力例>

uid=Manager, o=example, c=jp

パスワード

上記「バインド DN」に対応したパスワードを指定します。

バインド DNが未設定の場合(LDAPサーバに匿名アクセスを行う場合)は、設定しないで下さい。

フィルタオブジェクト

使用しません。

フィルタアトリビュート

認証要求で送られたユーザ名をLDAPサーバに問い合わせる際に、指定されたユーザ名に対応させる属性を指定します。

<入力例>

uid

LDAPサーバとしてActive Directoryを使用する場合には以下を指定するようにします。

sAMAccountName

セキュリティ

LDAPサーバと通信をおこなう場合のセキュリティプロトコルを指定します。

「None」を指定した場合には通信がLDAPでおこなわれ、暗号化等はされません。

「StartTLS」「LDAPS」が指定された場合にはそれぞれのプロトコルに従って通信がおこなわれます。

シリアルナンバ

セキュリティで「StartTLS」または「LDAPS」を選択した場合に、本装置が用いるクライアント証明書を指定します。

証明書はあらかじめCAメニューの「証明書」で生成しておく必要があります(「第7章 CA設定 II. 証明書」参照)。

使用する証明書のシリアルナンバを16進数で入力します。

有効期間内の証明書を設定して下さい。有効期間外の場合は認証に成功しないことがあります(LDAPサーバに依存します)。

証明書検証

「StartTLS」または「LDAPS」使用時にLDAPサーバの証明書を検証するか否かを指定します。

検証するにした場合、LDAPサーバの証明書が不正であった場合にはそのLDAPサーバは認証に使用しなくなります。

LDAPサーバ証明書のCNの値がサーバ名と異なっていた場合には不正な証明書とみなされます。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

設定可能なLDAPサーバの最大数は

「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

変更・削除

LDAPサーバ一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのエントリが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

LDAP連携機能における認証について

LDAPサーバと連携してユーザ認証をおこなう方法は3種類あります(ver1.8.3以前は1種類)。

(1) バインド(接続)

認証させたいユーザの権限でLDAPサーバにバインド(接続)できる場合に、PAPまたはEAP-TTLS/PAPで認証可能となります。

認証の可否はLDAPサーバが決定します。LDAPサーバでユーザにアクセス制限等が掛けられていれば認証に成功しません。

(2) 平文パスワード(ver1.8.4以降のみ)

LDAPサーバのuserPasswordアトリビュートに、平文のパスワードが設定されていて、かつRAに設定した管理者ユーザIDの権限でその値が読み出せる場合に、CHAP、EAP-MD5、EAP-PEAP、EAP-TTLS/CHAP、EAP-TTLS/EAP-MD5で認証可能となります。

LDAPサーバから読み出したパスワードの先頭に{CLEAR}または{CLEARTEXT}が付加されている場合、それらを無視します。

また、それらの大文字小文字は区別しません。{CLEAR}、{clear}、{Clear}などいずれの場合も無視します。

認証の可否はRAが決定します。LDAPサーバでユーザにアクセス制限等が掛けられていても、管理者ユーザIDの権限でパスワードの読み出しが可能であれば認証に成功します。

(3) NTLMハッシュ(ver1.8.4以降のみ)

LDAPサーバにNTLMハッシュが設定されていて、かつRAに設定した管理者ユーザIDの権限でその値が読み出せる場合に、EAP-PEAPで認証可能となります。

NTLMハッシュとは、UTF-16LEでエンコードされたパスワードをMD4を用いてハッシュした16バイトの値です。

LDAPサーバをRAと連携させるためには、sambaNTPasswordアトリビュート、またはcsRANTLMHashアトリビュートのいずれかに各ユーザのNTLMハッシュが設定されている必要があります。

また、その値は16バイトのハッシュ値を16進数表記で表した32バイトの文字列でなければなりません。(例: 00112233445566778899AABBCCDDEEFF)。大文字小文字どちらも使用可能です。

認証の可否はRAが決定します。LDAPサーバでユーザにアクセス制限等が掛けられていても、管理者ユーザIDの権限でNTLMハッシュの読み出しが可能であれば認証に成功します。

NTLMハッシュが部外者に漏洩しないように注意して下さい。NTLMハッシュを用いることで、ユーザ認証を不正に成功させることが可能です。

なお、EAP-PEAP認証においては、NTLMハッシュと平文パスワードの両方が設定されている場合には、NTLMハッシュを使用します。

LDAP連携機能を利用する際の注意

LDAP連携機能においてEAP-PEAP認証を行う場合、Active Directory連携機能と同時に使用することはできません。

Active DirectoryをLDAPサーバとして使用する場合、利用できる認証方式はPAPまたはEAP-TTLS/PAPのみです。

第4章 設定ウィザードによる設定

・ 設定内容の詳細

23.RADIUS - ユーザ基本情報

本装置では、同じ内容の設定を複数ユーザに対して容易に設定できるようにするために、共通の設定内容をあらかじめプロファイルとして定義しておくことができます。

プロファイルは、「ユーザ基本情報」、「認証アトリビュート」、「応答アトリビュート」、「証明書」、「グループID」に分けて設定することができ、このプロファイルを組み合わせて「ユーザプロファイル」とします。このユーザプロファイルを各ユーザの設定時に選択することで、ユーザ情報を素早く入力していくことができます。

ユーザ基本情報プロファイルは、認証方式やIPアドレスの割り当て方式などを指定するプロファイルです。ユーザ基本情報プロファイルは必ず一つ以上作成する必要があります。

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

ユーザ基本情報プロファイル新規追加



プロファイル名

任意の名前を20文字以内で入力します。

「ユーザプロファイル」メニューでユーザ基本情報プロファイルを設定する際に、ここで設定されたプロファイル名が選択肢として表示されます。

使用可能な文字は英数字およびハイフン(“-”)、アンダーバー(“_”)になります。

(他のプロファイルも同様です。)

認証方式

ユーザ認証方式の選択をおこないます。

本装置では、以下の7つの認証方式をサポートしています。

- PAP/CHAP
- EAP-MD5
- EAP-TLS
- EAP-PEAP
- EAP-TTLS/PAP, CHAP
- EAP-TTLS/EAP-MD5
- EAP-TTLS/EAP-PEAP

選択した認証方式については、「RADIUS- 基本情報」でも選択されていることを確認してください。「RADIUS- 基本情報」で選択されていない認証方式については、本メニューで選択しても認証はおこなわれません。

同時接続数

一人のユーザが同時にRADIUSサーバの認証を受けられる数を指定します。一人のユーザが同時に多数の接続をおこなうことを制限したい場合に用います。

設定可能な同時接続数は、「1」～「9」になります。また、空欄にした場合、同時接続数は無制限になります。

IPアドレス割り当て

ユーザ認証に成功した端末に対するIPアドレスの割り当て方法の設定です。

IPアドレス割り当てをおこなわない場合には「未使用」を選択します。

RADIUSクライアント装置が割り当てをおこなう場合には「RADIUSクライアント」を選択します。

本装置のアドレスプールを利用して割り当てる場合には、「アドレスプール」を選択します。

固定IPアドレスをユーザ毎に割り当てる場合には、「固定」を選択してください。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

アドレスプール

IPアドレス割り当てで「アドレスプール」を選択した場合に、設定をおこないます。「アドレスプール」の項目で設定した内容が選択肢に表示されますので、設定したいアドレスプールを選択します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なユーザ基本情報プロフィールの最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

ユーザ基本情報プロフィール一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのプロフィールが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

第4章 設定ウィザードによる設定

設定内容の詳細

24.RADIUS - 認証アトリビュート

認証時に認証方式に応じて送られるパスワードなどの情報に加え、RADIUSクライアントから送られてくるアトリビュートを認証に用いる場合に使用するプロファイルです。

このような認証をおこなわない場合には認証アトリビュートプロファイルを作成する必要はありません。

このプロファイルはユーザプロファイルで他のプロファイルとまとめられた上で、「ユーザ作成」メニューでユーザに適用されます。

プロファイル名	アトリビュート	値	編集	削除
auth1	NAS-IP-Address	192.168.0.251	編集	削除

認証アトリビュートプロファイル一覧

登録されている認証アトリビュートプロファイルの一覧が表示されます。

認証アトリビュート一覧

各認証アトリビュートプロファイルで定義されているアトリビュートの一覧が表示されます。

認証アトリビュートプロファイル一覧

新たに認証アトリビュートプロファイルを追加する場合には、一覧から「新規追加」ボタンを押してプロファイルの追加をおこないます。

認証アトリビュートプロファイル新規追加

プロファイル名

任意の名前を20文字以内で入力します。

「ユーザプロファイル」メニューで認証アトリビュートプロファイルを設定する際に、ここで設定されたプロファイル名が選択肢として表示されます。

入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能な認証アトリビュートプロファイルの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

削除

登録されているプロファイルを削除したい場合には一覧から「削除」ボタンを押すと削除されます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

認証アトリビュート一覧

認証アトリビュートプロファイルに対してアトリビュートの追加・編集・削除をおこないます。アトリビュートを追加する場合には、追加したい認証アトリビュートプロファイルの表中に表示されている「新規追加」ボタンを押します。以下の入力画面が表示されます。

認証アトリビュート新規追加



プロファイル名

選択したプロファイル名が表示されています。

アトリビュート

ユーザ認証に使用するアトリビュートをプルダウンから選択します。

選択できるアトリビュートは、あらかじめ本製品で定義されてあるものの他、「RADIUS-アトリビュート」で追加したベンダ固有アトリビュートも使用できます。

値

認証に使用するアトリビュートの値を定義します。選択したアトリビュートのフォーマットに応じて次のように入力します。

- ・text(ASCII文字列)
ASCII形式の文字列を入力してください。
設定可能な長さは、定義済みのstandardのアトリビュートで最大253文字、追加したベンダ固有アトリビュートで最大247文字です。
入力例: century

- ・string(バイナリデータ)
16進表記で入力してください。ただし、行頭に0xは不要です。
設定可能な長さは定義済みのstandardのアトリビュートで最大253オクテット(2~506文字)、追加したベンダ固有アトリビュートで最大247オクテット(2~494文字)です。
入力例: 63656e74757279
(“century”の文字コードデータ)

- ・address(IPアドレス)
IPv4アドレス表記で入力してください。
入力例: 192.168.0.1

- ・integer(整数)
負ではない整数値を入力してください。
設定可能な範囲は0~4294967295です。
入力例: 65536

- ・ipv6address(IPv6アドレス)
IPv6アドレス表記で入力してください。
入力例: fe80::1111

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能な認証アトリビュートの最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

認証アトリビュート一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのアトリビュートが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・ 設定内容の詳細

25. RADIUS - 応答アトリビュート

認証成功時にRADIUSクライアントに送るアトリビュートを指定するためのプロファイルです。指定するアトリビュートが無い場合には作成する必要はありません。このプロファイルはユーザプロファイルで他のプロファイルとまとめられた上で、「ユーザ作成」メニューでユーザに適用されます。



応答アトリビュートプロファイル一覧

登録されている応答アトリビュートプロファイル名の一覧が表示されています。

応答アトリビュート一覧

各応答アトリビュートプロファイルで定義されているアトリビュートの一覧が表示されています。

応答アトリビュートプロファイル一覧

新たに応答アトリビュートプロファイルを追加する場合には、一覧から「新規追加」ボタンを押してプロファイルの追加をおこないます。

応答アトリビュートプロファイル新規追加



プロファイル名

任意の名前を20文字以内で入力します。

「ユーザプロファイル」メニューで応答アトリビュートプロファイルを設定する際に、ここで設定されたプロファイル名が選択肢として表示されます。

入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能な応答アトリビュートプロファイルの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

削除

登録されているプロファイルを削除したい場合には一覧から「削除」ボタンを押すと削除されます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

応答アトリビュート一覧

応答アトリビュートプロファイルに対してアトリビュートの追加・編集・削除をおこないます。アトリビュートを追加する場合には、追加したい応答アトリビュートプロファイルの表中に表示されている「新規追加」ボタンを押します。以下の入力画面が表示されます。

応答アトリビュート新規追加



選択したプロファイル名が表示されています。

アトリビュート

RADIUSクライアントに送付するアトリビュートをプルダウンから選択します。選択できるアトリビュートは、あらかじめ本製品で定義されてあるものの他、RADIUSの「サーバ」メニューのアトリビュートで追加したベンダ固有アトリビュートも使用できます。

値

送付するアトリビュートの値を定義します。選択したアトリビュートのフォーマットに応じて入力します。入力の仕方は認証アトリビュートと同じです。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能な応答アトリビュートの最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

応答アトリビュート一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのアトリビュートが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

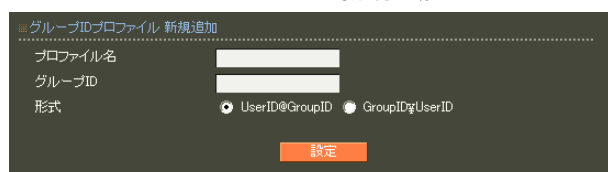
26. グループ ID

ユーザ ID を "user@centurysys.co.jp" または "CENTURYSYS¥user" のように、所属グループを表わす文字列を付加して指定するためのプロフィールです。

このようなユーザ ID を利用しない場合には作成する必要はありません。このプロフィールはユーザプロフィールで他のプロフィールとまとめられた上で、「ユーザ」メニューでユーザに適用されません。ユーザに適用した場合、そのユーザは、グループ ID も付加したユーザ名の形でのみ認証され、ユーザ ID 単独での認証には失敗するようになります。

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

グループ ID プロファイル新規追加



プロフィール名

任意の名前を 20 文字以内で入力します。「ユーザプロフィール」メニューでグループ ID を設定する際に、ここで設定されたプロフィール名が選択肢として表示されます。

グループ ID

ユーザ名に付加する文字列を指定します。最大 40 文字まで指定できます。使用可能な文字は英数字およびハイフン（" - "）、ピリオド（" . "）になります。

形式

グループ ID、ユーザ ID および区切り文字の結合の仕方を指定します。UserID@GroupID または GroupID¥UserID から選択します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なグループ ID プロファイルの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

変更・削除

グループ ID プロファイル一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのプロフィールが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

27.RADIUS - ユーザ証明書

ユーザ証明書を発行する際の共通項目をあらかじめ指定するためのプロファイルです。このプロファイルの作成は任意です。このプロファイルはユーザプロファイルで他のプロファイルとまとめられた上で、「ユーザ作成」メニューでユーザに適用されます。

変更・削除

証明書プロファイル一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのプロファイルが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

証明書プロファイル 新規追加

プロファイル名

証明書

バージョン 3

鍵長 2048

Signature Algorithm SHA-256

Subject

Organizational Unit

Organization

Locality

State or Province

Country

有効期間

開始日時 年 月 日 時 分

終了日時 年 月 日 時 分

Key Usage

digitalSignature nonRepudiation

keyEncipherment dataEncipherment

keyAgreement keyCertSign

cRLSign encipherOnly

decipherOnly

Extended Key Usage 指定しない

CRL Distribution Points

設定

各設定内容の詳細については、「第6章 RADIUS設定 II. プロファイル 6. 証明書」を参照して入力してください。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

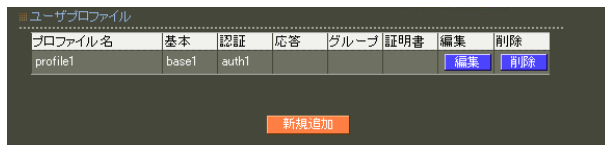
設定可能な証明書プロファイルの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

第4章 設定ウィザードによる設定

設定内容の詳細

28.RADIUS - ユーザプロフィール

最終的にRADIUSの「ユーザ作成」メニューでユーザに適用することになる、大元のプロフィールです。このプロフィールは「ユーザ基本情報」、「認証アトリビュート」、「応答アトリビュート」、「証明書」、「グループID」の各プロフィールを選択することで生成します。

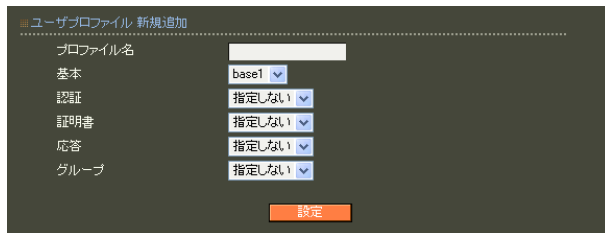


プロフィール名	基本	認証	応答	グループ	証明書	編集	削除
profile1	base1	auth1				編集	削除

新規追加

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

ユーザプロフィール新規追加



ユーザプロフィール 新規追加

プロフィール名

基本 base1

認証 指定しない

証明書 指定しない

応答 指定しない

グループ 指定しない

設定

プロフィール名

任意の名前を20文字以内で入力します。後に「ユーザ」メニューでユーザの追加や編集をおこなう際に、ここで設定されたプロフィール名が選択肢として表示されます。使用可能な文字は英数字およびハイフン(“-”)、アンダーバー(“_”)になります。

基本 (ユーザ基本情報)

認証 (認証アトリビュート)

証明書

応答 (応答アトリビュート)

グループ (グループID)

既に設定されている各プロフィールの名前が選択肢に表示されますので、割り当てたいプロフィールをそれぞれ選択します。

「ユーザ基本情報」以外のプロフィールについては、プロフィールを使用しない場合、「指定しない」を選択することもできます。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なユーザプロフィールの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

変更・削除

アドレスプール一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのアドレスプールが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

29.RADIUS - ユーザ作成

ユーザの登録やユーザへのプロファイルの割り当てをおこないます。

ユーザー一覧表示画面から「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。



ユーザ新規追加

ユーザ ID

登録するユーザ名を入力します。

ユーザ ID は、最大 20 文字まで入力する事が可能です。

使用可能な文字は英数字および以下の記号と空白文字になります。

!"#\$%&'()*+,-./<=>?@[^_`{|}~

パスワード

認証用パスワードを入力します。

パスワードは、最大 20 文字まで入力する事が可能です。

使用可能な文字は、ユーザ ID の入力可能文字と以下の記号になります。

,:;¥

プロファイル

このユーザに適用したいユーザプロファイルを選択します。「プロファイル」メニューで設定済みのユーザプロファイルが選択肢に表示されます。

固定 IP アドレス払い出し

IP アドレス

固定の IP アドレスをユーザに払い出す場合に、端末に割り当てる IP アドレスを登録します。

ここで設定された値は、RADIUS アトリビュートの「Framed-IP-Address」の値となり、RADIUS クライアントに返信されます。

この設定を有効にするためにはユーザに割り当てられたユーザ基本情報プロファイルの IP アドレス割り当てが「固定」に設定されている必要があります。

ネットマスク

サブネットマスクの値を登録します。

ここで設定された値は、RADIUS アトリビュートの「Framed-IP-Netmask」の値となり、RADIUS クライアントに返信されます。

この設定を有効にするためにはユーザに割り当てられたユーザ基本情報プロファイルの IP アドレス割り当てが「固定」に設定されている必要があります。

備考

備考

備考を設定することが出来ます。

備考は、最大 40 文字まで(日本語は 20 文字まで)

入力することができます。

使用可能な文字は次の通りです。

0 ~ 9、A ~ Z、a ~ z、空白文字、
-(マイナス・ハイフン)、.(ピリオド・ドット)、@、
日本語 (JIS X 0208:1997 に収録された 6879 文字)

いわゆる半角カナ(1バイトの片仮名)やいわゆる機種依存文字(例えば Shift_JIS の『丸付き数字』など)は使用できません。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

アカウントのロック

ロック

ユーザ毎に「ロックしない」「ロックする」のいずれかを選択します。

デフォルト値は「ロックしない」です。

それぞれの動作は下記の通りになります。

- ・「ロックしない」
 - ・RADIUS 認証要求には、認証処理をおこなった結果を応答する
 - ・GUI へのアクセスを許可する
- ・「ロックする」
 - ・RADIUS 認証要求には、常に Reject を応答する
 - ・GUI へのアクセスを許可しない

「ロックする」を選択している場合はユーザー一覧の「lock」欄に『 x 』が表示されます。

設定情報の同期をおこなう設定の場合、本設定は対向装置へ同期されます。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なユーザの最大数は

「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

認証方式が EAP-TLS の場合にはユーザ証明書のみを使って認証処理をおこないます。ユーザ ID およびパスワードは認証に使用しません。また、認証時にはユーザ証明書の Subject の Common Name を使ってユーザ ID との対応を取り、参照するプロファイルを決定します。

ユーザが登録されると、表示画面では次のようなユーザー一覧が表示されるようになります。

ユーザ

No.	lock	ユーザID	プロファイル	IPアドレス	詳細	証明書	備考
1	x	user01	profile1	-	表示	表示	
2		user02	profile1	-	表示	発行	

②件中 1-2件目を表示

新規追加

ユーザの編集削除や、証明書発行などの操作をこの画面からおこなうことができます。

第4章 設定ウィザードによる設定

. 設定内容の詳細

ユーザの詳細表示

ユーザー一覧表示画面において、詳細欄の「表示」ボタンを押すとユーザの現在の設定内容が表示されます。

ユーザ設定

ユーザID	user01
プロフィール	profile1
IPアドレス	
ネットマスク	
備考	
ロック	ロックしない

[編集](#) [削除](#) [ユーザー一覧](#)

ユーザ設定 (詳細)

ユーザプロフィール profile1

基本	b_profile	編集
認証方式	EAP-PEAP	
同時接続数		
IPアドレス割り当て	未使用	
アドレスグループ		

認証

[新規追加](#)

応答 response

Tunnel-Medium-Type	6	編集
Tunnel-Private-Group-ID	303	編集
Tunnel-Type	13	編集

[新規追加](#)

グループ

証明書

ユーザ設定

現在設定されているユーザ設定情報が表示されます。

ユーザ設定 (詳細)

プロフィールの選択によって適用されている設定内容が表示されます。

ユーザ設定

この画面からユーザの設定内容の編集、削除、およびユーザ個別設定をおこなうことができます。

編集

「編集」ボタンを押すとユーザ情報の編集画面が表示されます。

ユーザ変更

ユーザID	user02
パスワード	●●●●●●
プロフィール	profile1

固定IPアドレス払い出し

IPアドレス	
ネットマスク	

備考

備考	
----	--

アカウントのロック

ロック	<input checked="" type="radio"/> ロックしない <input type="radio"/> ロックする
-----	---

[設定](#)

変更したい内容を入力して「設定」ボタンを押すと変更内容が反映されます。

削除

「削除」ボタンを押すと表示されているユーザが削除されます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・ 設定内容の詳細

ユーザの個別設定

ユーザ設定（詳細）

ユーザの詳細表示画面の下段に表示されている認証方式や応答アトリビュートなどは、本来ユーザに適用されているユーザプロフィールに従って設定され、ユーザに適用されます。

しかしプロフィールから外れた形でユーザー一人一人に対して個別に設定したい場合には、この詳細表示画面から個別に設定をおこなうことができます。

個別設定は以下の各プロフィールで設定されている内容を上書きまたは追加する形でおこなわれます。

個別設定が可能なアトリビュート

- ・ 基本
- ・ 認証
- ・ 応答

ユーザに個別設定がされている場合には、ユーザの詳細表示画面で各項目について左右に二つの設定値が表示されるようになります。

左側の値はプロフィールによって本来設定される筈の値が表示されます。

また右側の値は個別設定によって設定されている値が表示されます。

- ・ 基本

変更

ユーザ基本情報プロフィールで設定される項目について個別設定をおこないたい場合にはユーザ基本情報プロフィールの行にある「編集」ボタンを押します。

編集画面が現れるので、個別設定したい内容を設定し、「設定」ボタンを押してください。

削除

個別設定を削除し、ユーザ基本情報プロフィールで設定された値に戻したいときには「削除」ボタンを押してください。

- ・ 認証
- ・ 応答

変更

認証アトリビュート、応答アトリビュートの個別設定は各アトリビュートの「新規追加」ボタン、または既存設定に対する「編集」ボタンでおこないます。

次のような設定画面が表示されます。

アトリビュート新規追加 (ユーザ: “ユーザ ID”)
アトリビュート

個別に設定したいアトリビュートを選択します。「編集」ボタンで設定画面を表示した場合には既に選択された状態で表示されます。

値

アトリビュートの値を設定します。

選択したアトリビュートのフォーマットに合わせて入力してください。

動作モード

「上書き」、「追加」、「削除」の中から選択します。(認証アトリビュートの場合は「追加」は選択できません。)

- ・ 上書き

プロフィールで同じアトリビュートが存在していた場合、プロフィールで設定されたアトリビュート値はこのユーザには適用されず、個別設定されたアトリビュート値のみが使われるようになります。

- ・ 追加

プロフィールで同じアトリビュートが存在していた場合、プロフィールで設定されたアトリビュート値と、個別設定されたアトリビュート値の両方がユーザに対して使われるようになります。

指定したアトリビュートがプロフィールに存在しない場合には、「上書き」と「追加」で動作に違いは有りません。

第4章 設定ウィザードによる設定

・ 設定内容の詳細

・ 削除

プロフィールで設定されたアトリビュートは本ユーザに対して適用されなくなります。「削除」を選択する場合には値は指定しないでください。

「設定」ボタンを押すと個別設定が適用されます。個別設定で登録可能なアトリビュートの最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

削除

個別設定したアトリビュートを削除する場合は削除したいアトリビュートの右側の「削除」ボタンを押してください。

ユーザが削除された場合、またはユーザに適用されるユーザプロフィールが変更された場合、そのユーザの個別設定は全て削除されます。

ユーザプロフィールでユーザ基本情報が変更された場合、そのユーザプロフィールが適用されているユーザのユーザ基本情報個別設定は削除されません。認証アトリビュート個別設定、応答アトリビュート個別設定についても同様です。

第4章 設定ウィザードによる設定

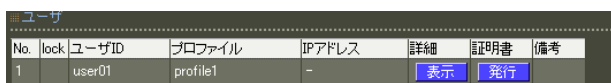
設定内容の詳細

ユーザ証明書の発行

EAP-TLS 認証を使用する場合には、ユーザ毎に証明書を発行する必要があります。

証明書が未発行のユーザは、ユーザー一覧表示画面の証明書欄に「発行」ボタンが表示されます。

(CA が作成されていない場合には「発行」ボタンは表示されません。先に CA メニューで CA を設定してください。)



No.	lock	ユーザID	プロフィール	IPアドレス	詳細	証明書	備考
1		user01	profile1	-	表示	発行	

「発行」ボタンを押すと、次のユーザ証明書の作成画面が表示されます。



証明書

バージョン: 3

鍵長: 2048

Signature Algorithm: SHA-256

Subject: Common Name, email, Organizational Unit, Organization, Locality, State or Province, Country

有効期間: 開始日時, 終了日時

拡張: X.509証明書v3拡張 (RFC3280)

Key Usage: digitalSignature, keyEncipherment, keyAgreement, cRLSign, decipherOnly, nonRepudiation, dataEncipherment, keyCertSign, encipherOnly

Extended Key Usage: 指定しない

CRL Distribution Points

Netscape拡張: nsCertType (client, server, email, objsign, sslCA, emailCA, objCA), nsComment

パスフレーズ: パスフレーズ

設定

証明書

バージョン

X.509のどのバージョンの証明書を発行するかを選択します。

・ ~ ver1.13.1

バージョンは「1」または「3」を選択することができます。

・ ver1.14.0 ~

バージョンは「3」を選択することができます。

鍵長

RSA の鍵の長さを選択します。

・ ~ ver1.11.0

鍵の長さは「512」, 「1024」, 「2048」のいずれかを選択することができます。

・ ver1.12.0 ~ ver1.13.1

鍵の長さは「1024」, 「2048」のいずれかを選択することができます。

・ ver1.14.0 ~

鍵の長さは「2048」を選択することができます。

「512」, 「1024」は十分安全とは言えません。

「2048」を推奨します。

Signature Algorithm

署名アルゴリズムを選択します。

・ ver1.8.4 以前

「SHA-1」または「MD5」を選択することができます。

・ ver1.8.5 ~ ver1.11.0

「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」, 「SHA-1」, 「MD5」のいずれかを選択することができます。

・ ver1.12.0 ~ ver1.13.1

「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」, 「SHA-1」のいずれかを選択することができます。

・ ver1.14.0 ~

「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」

のいずれかを選択することができます。

「SHA-1」, 「MD5」は十分安全とは言えません。

「SHA-256」を推奨します。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

Subject

・ Common Name

ユーザ ID が自動的に設定されます。(ユーザプロファイルでグループ ID が指定されている場合にはグループ ID も付加されます。) Common Name を変更することはできません。

入力欄には証明書プロファイルで設定されている内容が初期値として表示される他、パスフレーズにはユーザのパスワードが表示されます。以下の項目に入力をおこないます。

・ email

ユーザのメールアドレスを設定します。

・ Organizational Unit

一般には部署名を設定します。

・ Organization

一般には企業名、組織名を設定します。

・ Locality

市町村名を設定します。

・ State or Province

都道府県名を設定します。

・ Country

国名を設定します。

日本国内の場合は、「JP」とします。

有効期間

証明書有効期間の開始日時と終了日時を設定します。

終了日時は、CA 証明書の有効期間(終了日時)を超えることはできません。

日時は GMT(グリニッジ標準時)で指定します。

たとえば日本時間で 2006/12/31 23:59 まで有効にしたい場合には、「2006 年 12 月 31 日 14 時 59 分」と入力します。

パスフレーズ

パスフレーズ

パスフレーズを入力します。ユーザのパスワードが初期値として入力されています。パスフレーズは 5 文字以上 30 文字以下で入力してください。

パスフレーズにはユーザのパスワードが表示されます。

各項目に使用可能な文字は以下となります。

・ email

0-9, a-z, A-Z, -.@_

・ Organizational Unit/Organization/Locality/ State or Province/

ver1.8.4 以前: 0-9, a-z, A-Z, -_

ver1.8.5 以降: 0-9, a-z, A-Z, -_' ,.SPACE

・ Country

A-Z

第4章 設定ウィザードによる設定

設定内容の詳細

X.509 証明書 v3 拡張 (RFC3280)

下記設定項目は、X.509v3 がサポートしている拡張機能になりますが、認証アプリケーションに依存した項目となりますので、本設定に関しては認証されるアプリケーションの仕様を確認の上、設定をおこなってください。

以下に、それぞれのパラメータの説明を記します。

Key Usage

証明書に含まれている公開鍵の使用目的を示します。KeyUsage には以下の項目があります。

- digitalSignature
デジタル署名の検証に利用できることを表しています。
- nonRepudiation
否認防止を目的としたデジタル署名の検証に利用できることを表しています。
- keyEncipherment
鍵を送信する場合に、鍵を暗号化して利用できることを表しています。
- dataEncipherment
データの暗号化に利用できることを表しています。
- keyAgreement
鍵交換で利用できることを表しています。
- keyCertSign
証明書の署名の検証に利用できることを表しています。
- cRLSign
失効リストの署名の検証に利用できることを表しています。
- encipherOnly
keyAgreement が指定されている場合のみ有効で、鍵交換をデータの暗号化でのみ利用できることを表しています。
- decipherOnly
keyAgreement が指定されている場合のみ有効で、鍵交換をデータの復号化でのみ利用できることを表しています。

Extended Key Usage

Key Usage より詳細に、証明書に含まれている公開鍵の使用目的を示します。

Extended Key Usage には以下の項目があります。

- serverAuth
TLSサーバ認証に利用できることを表しています。
- clientAuth
TLSクライアント認証に利用できることを表しています。
- codeSigning
コード署名のために利用できることを表しています。
- emailProtection
電子メールの保護のために利用できることを表しています。

CRL Distribution Points

失効リストの配布点を入力します。本装置から失効リストを配布することもできます。その場合は以下の URL を入力します。

`http://(本装置のホスト名)/crl/crl.crl`

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

Netscape 拡張

nsCertType

Netscape で使用される証明書のタイプを指定します。nsCertType には以下の項目があります。

- client
クライアント認証に利用できることを表しています。
- server
サーバ認証に利用できることを表しています。
- email
S/MIME のクライアント認証で利用できることを表しています。
- objsign
Java 等のオブジェクトサインで利用できることを表しています。
- sslCA
SSL 認証局で利用できることを表しています。
- emailCA
S/MIME 認証局で利用できることを表しています。
- objCA
オブジェクトサイン認証局で利用できることを表しています。

nsComment

Netscape のコメントを示します。使用可能な文字は英数字およびハイフン(“-”)、アンダーバー(“_”)になります。

この設定では、以下の項目が必須の設定項目になります。

- バージョン
- 鍵長
- Signature Algorithm
- 有効期間
- 終了日時
- パスフレーズ

バージョン3のサーバ証明書を作成する場合には、通常最低限以下を指定するようにします。実際にどの Key Usage/Extended Key Usage が必須であるかは通信相手のソフトウェアに依存します。

- Key Usage
- digitalSignature
- keyEncipherment
- Extended Key Usage
- serverAuth

既にプロファイルで設定されている項目についても修正を加えることができます。

各項目に入力後、「実行」ボタンを押すと証明書が発行されます。

第4章 設定ウィザードによる設定

設定内容の詳細

ユーザ証明書の表示

既にユーザ証明書が発行されているユーザは、ユーザ一覧表示画面の証明書欄に「表示」ボタンが表示されます。

このボタンを押すと、そのユーザに対して発行されている全ての証明書が一覧表示されます。



S/N	Subject	有効期間	失効日時
01	user1	2006-01-01 00:00:00	2006-12-31 23:59:00
02	user1	2007-01-01 00:00:00	2007-12-31 23:59:00

この画面では次の操作がおこなえます。

証明書の追加発行

このユーザに対して新しい証明書を発行します。この後の操作は最初に証明書を発行する時と同じになります。

証明書の確認

「S/N」(シリアルナンバ)をクリックすることでその証明書の詳細内容を表示します。また、証明書の取得や失効などの操作をおこなうことができます。

「S/N」(シリアルナンバ)をクリックすると次の画面が表示されます。



S/N	Subject	有効期間	失効日時
01	user1	2006-01-01 00:00:00	2006-12-31 23:59:00
02	user1	2007-01-01 00:00:00	2007-12-31 23:59:00

この画面では次の操作がおこなえます。

証明書の取得

ユーザ証明書を本装置からダウンロードします。取り出す形式と内容を指定して「取り出し」ボタンを押します。

形式

「PKCS#12」、「PEM」、「DER」から一つ選択します。

内容

「CA証明書・証明書・私有鍵」、「証明書・私有鍵」、「証明書」、「私有鍵」から一つ選択します。

PKCS#12 を選択した場合

証明書と私有鍵のどちらか一方のみは選択できません。

PEM, DER を選択した場合

証明書と私有鍵を同時に取り出すことはできません。それぞれ別々に取り出してください。

証明書の失効

プルダウンメニューで失効理由を選択して、「失効」ボタンを押すと、証明書が失効します。失効理由は以下の中から選択します。

- ・ unspecified
理由を指定しません。
- ・ keyCompromise
秘密鍵の漏洩などにより、証明書の信頼性がなくなったことを表します。
- ・ CACompromise
CAの信頼性がなくなったことを表します。
- ・ affiliation Changed
証明書の内容が変更されたことを表します。
- ・ superseded
証明書が取り替えられたことを表します。
- ・ cessationOfOperation
証明書がその目的では必要なくなったことを表します。
- ・ removeFromCRL
失効リストから削除されたことを表します。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

30.AD ユーザ

Active Directory連携を使用する場合にユーザプロフィールを指定します。

Active Directory連携機能によって認証されたユーザは全て、ここで指定されたプロフィールが使われます。なお、プロフィールで記述された情報の中で、有効となるのは応答アトリビュート設定のみで、他の設定内容は使用されません。

設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

AD ユーザ



ADユーザ
ユーザプロフィール 指定しない
設定

ユーザプロフィール
使用するプロフィールを選択してください。

「設定」ボタンを押して設定完了です。設定はすぐに反映されます。

Active Directory連携はEAP-PEAP認証のみをサポートしているため、プロフィールでは認証方式がEAP-PEAPであるものを選択してください。応答アトリビュートを使用しない場合には、「指定しない」を選択することもできます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

31.LDAP ユーザ

LDAP連携を使用する場合にユーザプロフィールを指定します。

LDAP連携機能によって認証されたユーザは全て、ここで指定されたプロフィールが使われます。なお、プロフィールで記述された情報の中で、現バージョンで有効となるのは応答アトリビュート設定のみで、他の設定内容は使用されません。



プロフィールを設定したいLDAPサーバの「編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

LDAP ユーザ変更



ユーザプロフィール

使用するプロフィールを選択してください。認証方式が PAP/CHAP、EAP-MD5、EAP-PEAP、EAP-TTLS/PAP,CHAP、EAP-TTLS/EAP-MD5 のいずれか (ver1.8.3 以前は、PAP/CHAP、EAP-TTLS/PAP,CHAP のいずれか) であるプロフィールを設定することが出来ます。

応答アトリビュートを使用しない場合には、「指定しない」を選択することもできます。

「設定」ボタンを押して設定完了です。設定はすぐに反映されます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

32. ユーザ管理者

本装置の全ての設定をおこなうことができる本装置管理者の他に、RADIUSのユーザ情報の設定管理のみをおこなえるユーザ管理者を設定することができます。

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。
ユーザ管理者のログインIDとパスワードを入力します。

変更・削除

ユーザ管理者一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのエントリが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

ユーザ管理者新規追加



ログインID

使用可能な文字は英数字および以下の記号と空白文字になります。

!"#\$%&'()*+,-./<=>?@[]^_`{|}~

パスワード

使用可能な文字は、ログインIDの入力可能文字と以下の記号になります。

,:;¥

ロック

通常は「ロックしない」を選択します。

一時的にユーザ管理者がログインできないように設定したい場合に、「ロックする」を選択するようにします。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。
設定はすぐに反映されます。

設定可能なユーザ管理者の最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

第4章 設定ウィザードによる設定

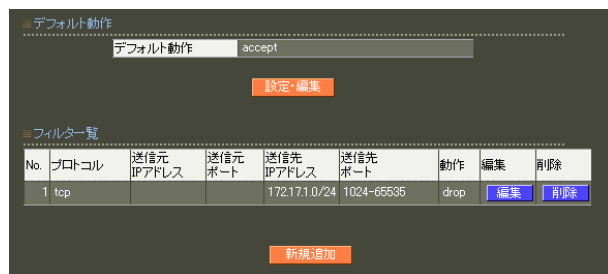
設定内容の詳細

33. フィルタ

本装置はパケットフィルタリング機能を搭載しています。フィルタ機能を使うと、本装置が受信するパケットに制限を加えることができます。

フィルタは以下の情報に基づいて条件を設定することができます。

- ・プロトコル(TCP/UDP/ICMP)
- ・送信元 / 送信先 IP アドレス
- ・送信元 / 送信先ポート番号



デフォルト動作

送受信されるパケットが、下のフィルター一覧のルールと全て一致しなかった場合のフィルタ動作が表示されています。

設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

デフォルト動作



accept

フィルタルールと一致しなかった時にパケットを通過させる場合に選択します。

drop

フィルタルールと一致しなかった時にパケットを破棄させる場合に選択します。

選択後「設定」ボタンをクリックして設定完了です。設定はすぐに反映されます。

デフォルトを「drop」に変更する場合には、フィルター一覧で必要な通信が許可されていることを事前にご確認ください。特に本装置の設定画面へのアクセスがフィルタルールで許可されるように忘れずに設定してください。本装置が使用するポートには次のものがあります。

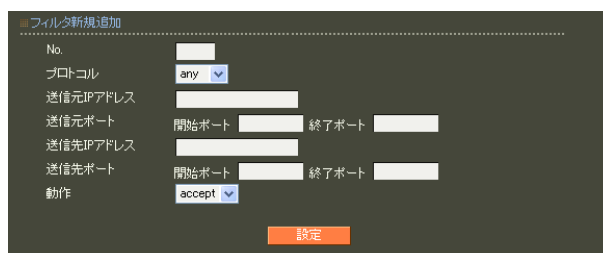
RADIUS認証ポート	UDP/(可変)
RADIUSアカウントングポート	UDP/(可変)
二重化・設定情報の同期	TCP/802 ~ 809
NTP	UDP/123
管理画面へのアクセス(HTTP)	TCP/80
管理画面へのアクセス(HTTPS)	TCP/443
ルート確認	UDP/33435 ~ 33435+(ttl*3)
SNMP	UDP/161
SNMP trap	UDP/162
DNS	UDP/53
LDAP	TCP/(可変)
SYSLOG	UDP/514
DHCP	UDP/67
切断要求	UDP/3799

フィルター一覧

フィルタルールが一行ずつ表示されています。本装置に送受信されるパケットはこの一覧の各行と上から順に比較され、最初に一致した行の動作がパケットに対して適用されます。どの行とも一致しなかった場合にはデフォルト動作が適用されます。

「新規追加」ボタンを押すと入力画面が表示されず。

フィルタ新規追加



第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

No.

この入力内容を登録する場所を指定します。既に設定されているルールの最後にこのルールを追加する場合には、現在設定されているルールの数に1を加えた数を入力します。既にルールが登録されている番号を指定した場合には、今回作成するルールがその番号で設定され、既存のルールの指定された番号から下のルールは番号が一つずつ後ろにずれます。

プロトコル

フィルタリング対象とするプロトコルを「any」、
「tcp」、
「udp」、
「icmp」の中から選択します。
「any」を選択した場合は任意のプロトコルとマッチします。

送信元 IP アドレス

フィルタリング対象とする、送信元の IP アドレスを入力します。ホストアドレスのほか、ネットワークアドレスでの指定が可能です。

<入力例>

単一の IP アドレスを指定する：

192.168.253.19 (" /32 " は付けない)

ネットワーク単位で指定する：

192.168.253.0/24

送信元ポート

フィルタリング対象とする、送信元のポート番号を入力します。

開始ポートと終了ポートを指定することで、その間のポート番号範囲が指定されます。

特定のポート番号のみを指定する場合は開始ポートと終了ポートに同じポート番号を入力するか、開始ポートのみを指定して終了ポートを空欄にしてください。

ポート番号を指定するときは、プロトコルもあわせて選択する必要があります。

「icmp」または「any」のプロトコルを選択して、ポート番号を指定することはできません。

送信先アドレス

フィルタリング対象とする、送信先の IP アドレスを入力します。ホストアドレスのほか、ネットワークアドレスでの指定が可能です。

入力方法は、送信元 IP アドレスと同様です。

送信先ポート

フィルタリング対象とする、送信先のポート番号を入力します。

開始ポートと終了ポートで範囲を指定します。指定方法は送信元ポート同様です。

動作

フィルタリング設定にマッチしたときにパケットを破棄するか通過させるかを選択します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定はすぐに反映されます。

設定可能なフィルタルールの最大数は

「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

フィルター一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのエントリが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

34.RADIUS 起動

起動・停止

現在 RADIUS サーバが停止している場合には次の画面が表示されます。



RADIUS サーバが起動している場合には次の画面が表示されます。



RADIUS サーバの起動

RADIUS サーバが停止状態の時に、「起動する」ボタンをクリックする事で、RADIUS サーバは起動します。

メニュー「15.RADIUS- 基本情報」で、一つ以上の認証方式が選択されていない場合には、RADIUS サーバは起動しません。

また、メニュー「19.RADIUS- クライアント」でクライアントが一つも定義されていない場合には、RADIUS サーバは起動しません。

RADIUS サーバの停止

RADIUS サーバが起動状態の時に、「停止する」ボタンをクリックする事で、RADIUS サーバは停止します。

RADIUS サーバの再起動

RADIUS サーバの各種設定を変更した場合には再起動が必要です。RADIUS サーバが起動状態の時に、「再起動」ボタンをクリックする事で、RADIUS サーバのプロセスが再起動します。

起動途中および再起動途中に他の操作をおこなわないでください。

第4章 設定ウィザードによる設定

・設定内容の詳細

35. 設定の保存

本装置の設定情報の保存をおこないます。

「設定の保存画面」にて設定情報を表示・更新する際、本装置のRSAの秘密鍵を含む設定情報等がHTTPSを使用しない場合ネットワーク上に平文で流れま

す。
設定の保存は、ローカル環境もしくはVPN環境等、セキュリティが確保された環境下でおこなう事をお勧めします。

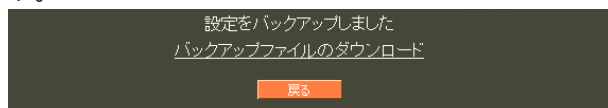
設定情報の保存



文字コード

設定を保存するときは、文字コードを「EUC(LF)」、「SJIS(CR+LF)」、「SJIS(CR)」の中から選択してください。

「保存」ボタンを押すと、以下の画面が表示されます。



「バックアップファイルのダウンロード」のリンクから、設定をテキストファイルで保存してください。

保存したテキストファイルには、本装置の設定がすべて記述されています。
このテキストファイルの内容を直接書き換えて設定を変更することもできます。

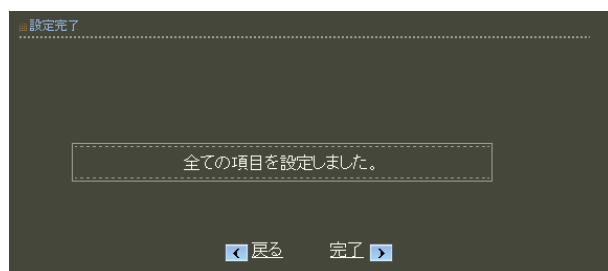
また、設定ファイルの一番上には以下の情報が表示されますので、サポートへのお問い合わせの際にお伝えください。

- Version :
RAを表す文字列・バージョン番号・ビルド番号・ファームの作成日付
- Serial Number :
本装置のシリアル番号
- User :
設定ファイルを取り出したユーザ名
- Address :
設定ファイルを取り出したクライアントのIPアドレス
- Date :
設定ファイルを取り出した日時

36. 完了

ウィザード設定完了のメッセージが表示されます。
「完了」ボタンを押すとウィザードが終了し、通常のメニュー画面に移ります。

設定完了



第5章

本装置管理者メニュー

第5章 本装置管理者メニュー

画面構成

各設定項目毎に個別に設定をおこなう場合にはウィザード以外のメニューを選択するようにします。



ウィザード以外のメニューアイコンをクリックすると以下のような画面が表示されます。



画面の上部には常に「RADIUS」「CA」「管理機能」「運用機能」「設定ウィザード」の5つのボタンが表示されています。上部のボタンをクリックすると、選択されたボタンに合わせたメニュー項目が画面左側に表示されます。この画面左側のメニューが表示される部分をメニューフレームと呼びます。メニューフレーム上のアイコンをクリックするとより詳細なメニュー項目が表示されます。



この最下層のメニューを選択することで、その項目の現在の設定内容が画面右側に表示されます。



次の章からは全メニュー項目について、この表示画面を基点として、設定方法と設定内容について説明します。なお、設定ウィザードについては4章で説明済みのため省略します。

第5章 本装置管理者メニュー

画面構成

本装置管理者でログインした場合のメニュー階層は次のようになります。

RADIUS	サーバ	起動・停止	
		基本情報	
		二重化	
		アトリビュート	
		アドレスプール	
		クライアント	
		ActiveDirectory	
		LDAP	
		レルム(Ver 1.9.0以降のみ)	
		ログ	
		プロファイル	ユーザプロファイル
			ユーザ基本情報
	認証アトリビュート		
	応答アトリビュート		
	グループID		
	証明書		
	ユーザ	ユーザ	
		AD ユーザ	
		LDAP ユーザ	
		ファイル読み込み	
		ユーザ検索	
ユーザリセット			

CA	CA/CRL	
	証明書	

管理機能	ネットワーク	基本情報
		スタティックルート
		フィルタ
		DNS
		NTP
		SNMP
		DHCP(Ver 1.10.0以降のみ)
		システム
	ログ	
	設定情報の保存・復帰	
	設定情報の初期化	
	ファームのアップデート	
	再起動	
	停止	
	管理者	
	管理画面へのアクセス	
	HTTPSサーバ証明書 (Ver.1.11.0以降のみ)	
	設定情報の同期	

運用機能	ユーザ情報	ログイン情報
		ADユーザ情報
	ログ情報	システムログ
		オペレーションログ
		アクセスログ
		認証ログ
		アカウントティングログ
	ネットワーク テスト	到達性確認
		ルート確認
		パケットキャプチャ
	システム情報	名前解決確認
		システム情報
	サポート情報	DHCPリース情報 (Ver 1.10.0以降のみ)
		サポート情報

設定ウィザード	RADIUS(EAP)	
	RADIUS(PAP/CHAP)	
	基本情報	
	ユーザ登録	
	設定情報の復帰	

第 6 章

RADIUS 設定

1. 起動・停止

RADIUS のメニュー「サーバ」から「起動・停止」を選択します。

現在 RADIUS サーバが停止している場合には次の画面が表示されます。



RADIUS サーバが起動している場合には次の画面が表示されます。



RADIUS サーバの起動

RADIUS サーバが停止状態の時に、「起動する」ボタンをクリックする事で、RADIUS サーバは起動します。

メニュー「サーバ」の「基本情報」で、一つ以上の認証方式が選択されていない場合には、RADIUS サーバは起動しません。また、メニュー「サーバ」の「クライアント」でクライアントが一つも定義されていない場合には、RADIUS サーバは起動しません。

RADIUS サーバの停止

RADIUS サーバが起動状態の時に、「停止する」ボタンをクリックする事で、RADIUS サーバは停止します。

RADIUS サーバの再起動

RADIUS サーバの各種設定を変更した場合には再起動が必要です。RADIUS サーバが起動状態の時に、「再起動」ボタンをクリックする事で、RADIUS サーバのプロセスが再起動します。

起動途中および再起動途中に他の操作をおこなわないでください。

2. 基本情報

このメニューでは、ポート番号、認証方式、RADIUSサーバの証明書の指定など、RADIUSの基本的な情報の設定をおこないます。

RADIUSのメニュー「サーバ」から「基本情報」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。

「本装置の証明書を使用する」欄の「表示」ボタンはRADIUSサーバ証明書が設定されている場合のみ表示されます。

このボタンを押すと証明書の内容が表示され、証明書の取得等ができます。

証明書の詳細については「[第7章 CA設定 II. 証明書](#)」を参照してください。

基本情報の設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

ポート番号

RADIUSでは、認証 (Authentication) とアカウントリング (Accounting) の2つのポートを利用して、RADIUSクライアントとの通信をおこなっていますが、そのポート番号の設定をおこないます。以下の4種類から選択します。

- 1645/1646
- 1812/1813
- 1645/1646、1812/1813 の双方
- 手動設定

手動設定の場合は、さらに使用したいポート番号を指定します。指定できるポート範囲は、1024以上60000以下で、認証用とアカウントリング用で異なるポート番号を指定してください。

認証方式

利用するユーザ認証方式の選択をおこないます。本装置では、以下の5つの認証方式をサポートしています。

- PAP/CHAP
- EAP-MD5
- EAP-TLS
- EAP-PEAP
- EAP-TTLS

使用する認証方式のチェックボックスをチェックしてください。なお、「EAP-PEAP」または「EAP-TTLS」を選択する場合は、「EAP-TLS」も選択しておく必要があります。

また、「EAP-TTLS」を選択する場合にはTTLS内部認証で使う認証方式も同時に選択してください。

RADIUSサーバ証明書設定

認証で、「EAP-TLS」、「EAP-PEAP」または「EAP-TTLS」を選択した場合には、RADIUSサーバ証明書が必要となります。

証明書は事前にCAのメニューにて生成しておく必要があります(「[第7章 CA設定 II. 証明書](#)」参照)。

証明書を作成した後、設定画面から「本装置の証明書を使用する」を選択して、作成した証明書のシリアルナンバを指定します。シリアルナンバは、16進数で入力します。

有効期間内の証明書を設定して下さい。有効期間外の場合は認証に成功しないことがあります(サブリカントに依存します)。

アトリビュート・フォーマット

認証アトリビュートや応答アトリビュートなどに使用する際のアトリビュート・フォーマットを設定します。

「RFC 2865」の値を変更することで、

- Callback-Number
- Callback-Id
- Called-Station-Id
- Calling-Station-Id
- NAS-Identifier

の各アトリビュートのフォーマットを変更できます。

「RFC 非準拠」にした場合、これらのフォーマットは、text (ASCII 文字列)として扱われます。

「RFC 準拠」にした場合は、これらのフォーマットは、string (バイナリデータ) になります。

これらが

- 認証プロファイル
- 応答プロファイル
- ユーザ個別設定 (認証アトリビュート)
- ユーザ個別設定 (応答アトリビュート)
- LDAP アトリビュートマップ

に使用されている場合、本設定値を変更することはできません。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

保存された設定内容を反映させるには、RADIUS サーバの再起動が必要になります。

3. 二重化

本装置は、2台構成にて、冗長化機能を持たせる事ができます。

RADIUS のメニュー「サーバ」から「二重化」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。

設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

二重化

単独

本装置を単独で利用する場合に設定します。

プライマリ

セカンダリ

本装置を二重化構成で使用する場合には「プライマリ」または「セカンダリ」を指定します。二重化構成を取る装置の片方を「プライマリ」に、もう一方を「セカンダリ」に設定してください。

対向装置

二重化構成で使用する場合の、相手装置に関する情報を入力します。

IPアドレス

相手装置の IP アドレスを入力します。

認証用ポート

アカウント用ポート

シークレット

相手装置の設定内容と一致するように入力します。最大 30 文字まで入力することが可能で、使用可能な文字は英数字と空白文字および以下の記号です。

!#\$%&'()*+,-./:;<=>?@[^_`{|}~

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

保存された設定内容を反映させるには、RADIUS サーバの再起動が必要になります。

二重化構成では、2台の RA の時刻同期を行ってください。

時刻同期には、NTP 機能を利用することが可能です。

二重化構成におけるファームウェア更新については、「[付録F 同期・二重化構成におけるファームウェア更新手順](#)」を参照してください。

4. アトリビュート

RADIUS標準アトリビュート以外に、ベンダ固有アトリビュート(VSA)を使用したい場合に設定します。本メニューにて設定されたベンダ固有アトリビュートは、「プロファイル」メニューにて、認証に使用するアトリビュートとして指定したり、認証応答に付加されるVSA設定値の指定に使えるようになります。

RADIUSのメニュー「サーバ」から「アトリビュート」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。

ベンダ	ベンダID	削除
standard	0	
CenturySystems	20376	削除

ベンダ固有アトリビュート一覧	属性名	値	タイプ
CenturySystems	termination-action	29	integer
	Tunnel-Assignment-Id	82	text
	Tunnel-Client-Auth-Id	90	text
	Tunnel-Client-Endpoint	66	text
	Tunnel-Connection-Id	68	text
	Tunnel-Medium-Type	65	integer
	Tunnel-Preference	83	integer
	Tunnel-Private-Group-Id	81	text
	Tunnel-Server-Auth-Id	91	text
	Tunnel-Server-Endpoint	67	text
	Tunnel-Type	64	integer

ベンダー一覧

登録されているベンダの一覧が表示されます。

ベンダ固有アトリビュート一覧

登録されているアトリビュートの一覧がベンダ毎に表示されます。良く使われる標準のアトリビュートについてはベンダ「standard」として定義されています。「standard」として定義されているアトリビュートについては新規作成や、編集、削除はできません。

先にベンダの追加をおこないます。

ベンダー一覧の「新規追加」ボタンを押します。

ベンダ新規追加

ベンダ

追加したいベンダ名を入力します。最大20文字まで入力可能です。使用可能な文字は英数字およびハイフン(“-”)、アンダーバー(“_”)になります。

ベンダID

ベンダ毎に割り当てられているベンダIDを数値で入力します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

設定可能なベンダの最大数は

「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

削除

登録されているベンダを削除したい場合には「削除」ボタンを押すと削除されます。

ベンダ固有アトリビュートで使われているベンダは削除できません。

ベンダ固有アトリビュート一覧の中で、追加したいベンダの欄の「新規追加」ボタンを押すと入力画面が表示されます。

ベンダ

選択されたベンダ名が表示されます。

タイプ名

ベンダ固有アトリビュート用にベンダから指定されているタイプ名を指定します。最大20文字まで入力可能です。使用可能な文字は英数字およびハイフン(“-”)、アンダーバー(“_”)になります。

タイプ

アトリビュート番号を指定します。
1 ~ 255 の整数値を入力してください。

フォーマット

アトリビュートのデータ型をプルダウンから選択してください。以下の5種類から選択できます。

- text
対象アトリビュートのデータ型がASCII文字列の場合に選択します。
- string
対象アトリビュートのデータ型がバイナリデータの場合に選択します。
- address
対象アトリビュートのデータ型がIPアドレス形式の場合に選択します。
- integer
対象アトリビュートのデータ型が整数の場合に選択します。
- ipv6address
対象アトリビュートのデータ型がIPv6アドレス形式の場合に選択します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なベンダ固有アトリビュートの最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

ベンダ固有アトリビュート一覧に登録されているアトリビュートを編集または削除したい場合にはアトリビュートが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

「プロファイル」メニューで使われているアトリビュートは削除できません。

5. アドレスプール

端末に IP アドレスを割当てる場合に貸与する IP アドレスの領域を設定します。

本メニューにて設定されたアドレスプールを、次節の「クライアント」メニューまたは「プロファイル」メニューにて選択することで、実際の運用が可能になります。

RADIUS のメニュー「サーバ」から「アドレスプール」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。

アドレスプール名	開始IPアドレス	終了IPアドレス	ネットマスク	編集	削除
pool1	192.168.1.1	192.168.1.100	255.255.255.0	編集	削除

新規追加

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

アドレスプール新規追加

アドレスプール新規追加

アドレスプール名

開始IPアドレス

終了IPアドレス

ネットマスク

設定

アドレスプール名

任意の名前を 20 文字以内で入力します。後に他のメニューでアドレスプールを割り当てる時に、ここで設定された名前が選択肢として表示されます。

使用可能な文字は英数字およびハイフン（“-”）、アンダーバー（“_”）になります。

開始 IP アドレス

端末に貸与する IP アドレスの最初の IP アドレスを指定します。

終了 IP アドレス

端末に貸与する IP アドレスの最後の IP アドレスを指定します。

開始 IP アドレスから終了 IP アドレスまでの間の IP アドレスがクライアントに貸与されます。

ネットマスク

サブネットマスクの値を登録します。

ここで設定された値は、RADIUS アトリビュートの「Framed-IP-Netmask」の値となり、RADIUS クライアントに返信されます。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なアドレスプールの最大数は

「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

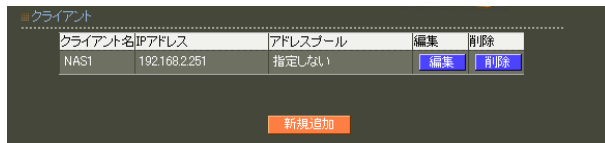
アドレスプール一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのアドレスプールが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

「クライアント」メニューまたは「プロファイル」メニューで使われているアドレスプールは削除できません。

6. クライアント

本装置にアクセス可能なRADIUSクライアントを設定します。

RADIUSのメニュー「サーバ」から「クライアント」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

クライアント新規追加

クライアント名

任意の名前を20文字以内で入力します。使用可能な文字は英数字およびハイフン("-)、アンダーバー("_")になります。

IPアドレス

RADIUSクライアントのIPアドレスを入力します。

シークレット

RADIUSクライアントとの認証や暗号処理に用いる文字列を入力します。RADIUSクライアント側でも同じ値が設定されている必要があります。

最大30文字まで入力することが可能で、使用可能な文字は英数字と空白文字および以下の記号です。

!#\$%&'()*+,-./:;<=>?@[]^_`{|}~

アドレスプール

端末にIPアドレスを割り当てる場合に、アドレスプール名を選択します。

アドレスプールの選択肢には、前項の「アドレスプール」メニューで設定した名前が表示されます。IPアドレスを本装置から割り当てない場合には「指定しない」を選択します。

アドレスプールは次節「プロファイル」の中で割り当てることもできます。ユーザ基本情報プロファイルのIPアドレス割り当てが指定されている場合、そのプロファイルを使用しているユーザへのIPアドレス割り当ては、プロファイル中の設定が優先して使われます。本メニューのアドレスプールは、ユーザ基本情報プロファイルのIPアドレス割り当てが「未使用」のユーザ、または、「固定」で設定されているユーザの内、固定IPアドレスが指定されていないユーザにのみ適用されます。

本項のアドレスプールを設定してIPアドレスを割り当てるためには、本装置でRADIUSクライアントとして設定したアドレスがNAS-IP-AddressとしてAccess-Requestに含まれている必要があります。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

保存された設定内容を反映させるには、RADIUSサーバの再起動が必要になります。

設定可能なクライアントの最大数は

「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

クライアント一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのアドレスプールが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

7.ActiveDirectory

ユーザ認証を Active Directory でおこないたい場合に設定します。

本設定をおこなうと、EAP-PEAP による認証要求を受けた場合に、設定された Active Directory サーバに問い合わせることで認証の可否を判断します。

RADIUS のメニュー「サーバ」から「Active Directory」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。

「設定・編集」ボタンを押すと入力画面が表示されます。

ActiveDirectory

Active Directory 連携機能を使用する場合に「使用する」を選択します。

Active Directory サーバ

- 1.8.13 以降
使用しません。
DNS を使用してドメインコントローラを自動的に検索します。
- 1.8.12 以前
ドメインコントローラを FQDN または IP アドレスで指定します。

ドメイン名

認証を受けるドメイン名を入力します。

ドメイン名(Windows2000 より前)

ドメインに設定された NetBIOS 名を設定します。Windows サーバ上で「ドメイン名(Windows2000 より前)」や「ドメイン名(Windows2000 以前)」などの名前で参照できます。

「ドメイン名」の先頭パートと同一の場合は省略可能です。

最大 15 バイトまで入力可能です。

使用可能な文字は、英数字およびハイフン(-)、アンダーバー(_)です。

所属グループ

認証を受ける所属グループ名を入力します。空欄にするとグループ情報を用いずに認証をおこないます。

管理者ユーザ ID

認証情報の確認をおこなうための Active Directory のユーザアカウントを指定します。

このユーザは Administrators グループまたは Account Operators グループに所属しているか、または同等の権利が与えられている必要があります。

管理者パスワード

管理者ユーザ ID に対応したパスワードを入力します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

保存された設定内容を反映させるには、RADIUS サーバの再起動が必要になります。

RADIUS サーバの起動時に、RA はドメインに参加します。管理者ユーザ ID の権限で、Active Directory サーバにコンピュータアカウントを作成します。

Active Directory 連携機能を利用する際の注意

・Active Directory 連携機能を利用するためには、DNSの設定(管理機能メニューの「ネットワーク」-「DNS」)で所属するドメインのDNSサーバが設定されている必要があります。

・Active Directory サーバと本装置の時刻がずれている場合、Active Directory サーバとの連携ができないことがあります。

・Active Directory サーバへの認証情報の問い合わせは、以下の手順で行われます。

- (1) 認証要求に含まれるユーザ名 (User-Name) から最初の ¥ 以前を取り除く。
- (2) (1) の結果に @ が含まれる場合、最後の @ より後ろの文字列がドメイン名(設定値)に一致していなければ問い合わせしない。
(1.9.0 以降のみ)
- (3) (1) の結果から最後の @ 以降を取り除く。
(1.9.0 以降のみ)
- (4) (3) の結果が空文字列であれば、問い合わせしない。(1.9.0 以降のみ)
- (5) (3) の結果に ¥ が含まれていれば、問い合わせしない。(1.9.0 以降のみ)
- (6) (3) の結果をユーザ名として Active Directory サーバへ問い合わせを行う。

・Active Directory 連携機能を有効にした場合、EAP-PEAP 認証では常に Active Directory サーバのユーザ情報が使用されます。LDAP 連携機能や本装置内に設定されたユーザ情報などは使われません。

・LDAP 連携機能において EAP-PEAP 認証を行う場合、Active Directory 連携機能と同時に使用することはできません。

Active Directoryサーバへの対応状況

Active Directoryサーバの各バージョンに対するRAの対応状況は以下の通りです。

Active Directoryサーバの version	対応しているRAの version			
	RA-1300	RA-1200	RA-830	RA-730
Windows Server 2016	1.20.0	1.15.0	1.17.0	1.15.0
Windows Server 2012 R2	1.20.0	1.10.0	1.17.0	1.10.0
Windows Server 2012	1.20.0	1.10.0	1.17.0	1.10.0
Windows Server 2008 R2	1.20.0	1.8.9	1.17.0	1.8.3
Windows Server 2008	1.20.0	1.8.9	1.17.0	1.8.3

但し、全ての環境においてActive Directoryサーバとの連携を保証するものではありません。

第6章 RADIUS設定

サーバ設定

8.LDAP

LDAPサーバと連携してユーザ認証をおこないたい場合に設定します。

PAP/CHAP、EAP-MD5、EAP-PEAP、EAP-TTLS/PAP、CHAP、EAP-TTLS/EAP-MD5による認証要求を受けた場合に、設定されたLDAPサーバを利用して認証の可否を判断することができます。

RADIUSのメニュー「サーバ」から「LDAP」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。

The screenshot shows the LDAP configuration page with the following sections:

- LDAP:** A form with a 'LDAP' field set to '使用する' and a '認証順序' field set to 'Local → LDAP'. A '設定・編集' button is below.
- LDAPアトリビュートマップ一覧:** A table mapping RADIUS attributes to LDAP attributes.
- LDAP サーバ一覧:** A table listing LDAP servers.

RADIUSアトリビュート	LDAPアトリビュート	編集	削除
Framed-IP-Address	raFramedIPAddress	編集	削除
Framed-IP-Netmask	raFramedIPNetmask	編集	削除

No.	LDAP名	編集	削除
1	ldap	編集	削除

LDAP

LDAPサーバ連携使用の有無と、使用する場合の認証順序が表示されています。

設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

LDAP

The dialog box shows the following options:

- LDAP: 使用する
- 認証順序: Local → LDAP LDAP → Local

LDAP

LDAPサーバ連携機能を使用する場合に「使用する」を選択します。

認証順序

LDAPサーバ上のユーザ情報に基づく認証と、本装置上に登録されたユーザ情報に基づく認証のどちらを優先しておこなうかを指定します。

「Local LDAP」を指定した場合、最初に本装置上で認証を試みます。そして認証要求されたユーザが本装置上に登録されていなかった場合にLDAPサーバ連携による認証をおこないます。

「LDAP Local」の場合は逆に、LDAP上のユーザ認証が最初におこなわれます。

選択後「設定」ボタンを押してください。LDAPサーバを使用する選択にした場合には続いてLDAPサーバの登録をおこなってください。

第6章 RADIUS 設定

. サーバ設定

LDAP アトリビュートマップ一覧

LDAP アトリビュートマップ機能を用いることで、LDAPサーバから応答アトリビュートを取得し、RADIUSクライアントに返すことが可能となります。応答アトリビュートはLDAPサーバでユーザ毎に設定します。

LDAPアトリビュートマップは、LDAPサーバ毎ではなく全体で共有されます。

設定可能なLDAPアトリビュートマップの最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

設定情報の同期をおこなう設定の場合、本設定は対向装置へ同期されます。

「新規追加」ボタンを押すと入力画面が表示され、LDAPアトリビュートマップをひとつ作成することができます。

ここでは、LDAPサーバ上のアトリビュートからRADIUS応答アトリビュートへの変換ルールの組を設定します。

LDAPアトリビュートマップ新規追加



LDAPアトリビュートマップ新規追加

RADIUSアトリビュート Acct-Tunnel-Connection

LDAPアトリビュート

設定

RADIUSアトリビュート

RADIUSアトリビュートを選択します。任意のアトリビュートを選択することができます。

LDAPアトリビュート

LDAPサーバへ問い合わせる際の検索フィルタアトリビュートを設定します。

各LDAPサーバで設定された「ベースDN」や「フィルタアトリビュート」などと複合してLDAPサーバに問い合わせがおこなわれます。LDAPアトリビュートは「管理者ユーザID」の権限で読み出せる必要があります。

使用可能な文字は、下記の通りです。

0-9, a-z, A-z, -(0x2c), _(0x5f)。

最大文字数は「40(ver1.8.3以前は20)」で、デフォルト値はありません。

入力後に「設定」ボタンを押してください。

変更

既に設定されているLDAPアトリビュートマップのひとつを変更することができます。

RADIUSアトリビュートは編集することはできませんが、LDAPアトリビュートは変更可能です。

削除

既に設定されているLDAPアトリビュートマップのひとつを削除することができます。

第6章 RADIUS 設定

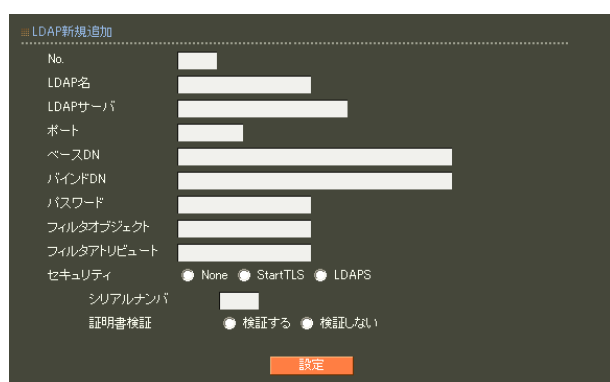
サーバ設定

LDAP サーバ一覧

表示画面の下段には設定済みのLDAPサーバが一覧表示されています。1番のサーバから順にLDAPによる認証が試みられます。

「新規追加」ボタンを押すと入力画面が表示されます。

LDAP 新規追加



No.

このLDAPサーバの認証の順番を指定します。空欄にした場合には既存のLDAPサーバ設定の最後に追加されます。既にLDAPサーバが登録されている番号を指定した場合には、今回作成するLDAPサーバがその番号で設定され、指定された番号から下の既存のLDAPサーバ設定が一つずつ後ろにずれて設定されます。

LDAP 名

識別用に任意の名前を20文字以内で入力します。

LDAP サーバ

LDAPサーバ名をFQDNまたはIPアドレスで指定します。

ポート

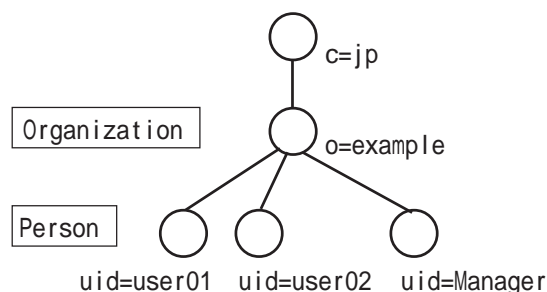
LDAPサーバのポート番号を指定します。指定できるポート範囲は、80、443、802番を除く1～1023の範囲になります。一般的にはLDAP(StartTLS含む)の場合には389、LDAPSの場合には636が使われます。

ベース DN

認証要求で送られたユーザ名をLDAPサーバに問い合わせる際の基点となるエントリのDistinguished Nameを指定します。

<入力例>

o=example, c=jp



図：ディレクトリツリーの例

サーバ設定

バインドDN

認証要求で送られたユーザ名をLDAPサーバに問い合わせる際に用いるユーザのDistinguished Nameを指定します。

ユーザの検索に必要なアクセス権が与えられている必要があります。

バインドDNが未設定の場合は、LDAPサーバに匿名アクセスを行います。

<入力例>

uid=Manager, o=example, c=jp

パスワード

上記「バインドDN」に対応したパスワードを指定します。

バインドDNが未設定の場合(LDAPサーバに匿名アクセスを行う場合)は、設定しないで下さい。

フィルタオブジェクト

使用しません。

フィルタアトリビュート

認証要求で送られたユーザ名をLDAPサーバに問い合わせる際に、指定されたユーザ名に対応させる属性を指定します。

<入力例>

uid

LDAPサーバとしてActive Directoryを使用する場合には以下を指定するようにします。

sAMAccountName

セキュリティ

LDAPサーバと通信をおこなう場合のセキュリティプロトコルを指定します。

「None」を指定した場合には通信がLDAPでおこなわれ、暗号化等はされません。

「StartTLS」「LDAPS」が指定された場合にはそれぞれのプロトコルに従って通信がおこなわれます。

シリアルナンバ

セキュリティで「StartTLS」または「LDAPS」を選択した場合に、本装置が用いるクライアント証明書を指定します。

証明書はあらかじめCAメニューの「証明書」で生成しておく必要があります(「第7章 CA設定 II. 証明書」参照)。

使用する証明書のシリアルナンバを16進数で入力します。

有効期間内の証明書を設定して下さい。有効期間外の場合は認証に成功しないことがあります(LDAPサーバに依存します)。

証明書検証

「StartTLS」または「LDAPS」使用時にLDAPサーバの証明書を検証するか否かを指定します。

検証するにした場合、LDAPサーバの証明書が不正であった場合にはそのLDAPサーバは認証に使用しなくなります。

LDAPサーバ証明書のCNの値がサーバ名と異なっていた場合には不正な証明書とみなされます。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

保存された設定内容を反映させるには、RADIUSサーバの再起動が必要になります。

設定可能なLDAPサーバの最大数は

「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

LDAPサーバ一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのエントリが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

サーバ設定

LDAP連携機能における認証について

LDAPサーバと連携してユーザ認証をおこなう方法は3種類あります(ver1.8.3以前は1種類)。

(1) バインド(接続)

認証させたいユーザの権限でLDAPサーバにバインド(接続)できる場合に、PAPまたはEAP-TTLS/PAPで認証可能となります。

認証の可否はLDAPサーバが決定します。LDAPサーバでユーザにアクセス制限等が掛けられていれば認証に成功しません。

(2) 平文パスワード(ver1.8.4以降のみ)

LDAPサーバのuserPasswordアトリビュートに、平文のパスワードが設定されていて、かつRAに設定した管理者ユーザIDの権限でその値が読み出せる場合に、CHAP、EAP-MD5、EAP-PEAP、EAP-TTLS/CHAP、EAP-TTLS/EAP-MD5で認証可能となります。

LDAPサーバから読み出したパスワードの先頭に{CLEAR}または{CLEARTEXT}が付加されている場合、それらを見捨てます。

また、それらの大文字小文字は区別しません。

{CLEAR}、{clear}、{Clear}などいずれの場合も無視します。

認証の可否はRAが決定します。LDAPサーバでユーザにアクセス制限等が掛けられていても、管理者ユーザIDの権限でパスワードの読み出しが可能であれば認証に成功します。

(3) NTLMハッシュ(ver1.8.4以降のみ)

LDAPサーバにNTLMハッシュが設定されていて、かつRAに設定した管理者ユーザIDの権限でその値が読み出せる場合に、EAP-PEAPで認証可能となります。

NTLMハッシュとは、UTF-16LEでエンコードされたパスワードをMD4を用いてハッシュした16バイトの値です。

LDAPサーバをRAと連携させるためには、sambaNTPasswordアトリビュート、またはcsRANTLMHashアトリビュートのいずれかに、各ユーザのNTLMハッシュが設定されている必要があります。

また、その値は16バイトのハッシュ値を16進数表記で表した32バイトの文字列でなければなりません。(例: 00112233445566778899AABBCCDDEEFF)。大文字小文字どちらも使用可能です。

認証の可否はRAが決定します。LDAPサーバでユーザにアクセス制限等が掛けられていても、管理者ユーザIDの権限でNTLMハッシュの読み出しが可能であれば認証に成功します。

NTLMハッシュが部外者に漏洩しないように注意して下さい。NTLMハッシュを用いることで、ユーザ認証を不正に成功させることが可能です。

なお、EAP-PEAP認証においては、NTLMハッシュと平文パスワードの両方が設定されている場合には、NTLMハッシュを使用します。

LDAP連携機能を利用する際の注意

LDAP連携機能においてEAP-PEAP認証を行う場合、Active Directory連携機能と同時に使用することはできません。

Active DirectoryをLDAPサーバとして使用する場合、利用できる認証方式はPAPまたはEAP-TTLS/PAPのみです。

9. レルム(Ver 1.9.0以降のみ)

RADIUS Proxy 機能 (認証要求やアカウントング要求を他のサーバに転送する機能) を使用したい場合に設定します。

本装置では、認証要求やアカウントング要求に含まれるユーザ名 (User-Name)の最後に現れる @ より後ろの文字列をレルムとして扱います。

受信した要求に含まれるレルムの値によって、要求を本装置で処理するか、他サーバへ転送するか (RADIUS Proxy) を選択することができます。

RADIUS のサーバメニューから「レルム」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



「新規追加」をクリックすると、入力画面が表示されます。

レルム新規追加

レルム名	centurysys
種別	指定文字列
優先度	100
指定文字列	centurysys.co.jp
一致条件	完全一致
動作	forward
転送先サーバ1	192.168.254.1
認証ポート1	1812
アカウントングポート1	1813
シークレット1	secret123
転送先サーバ2	192.168.254.2
認証ポート2	1812
アカウントングポート2	1813
シークレット2	abc123XYZ

[設定]

レルム名

設定したいレルムを表す任意の名前を入力します。最大20文字まで入力可能です。使用可能な文字は英数字およびハイフン(“-”)、アンダーバー(“_”)になります。

種別

設定するレルムの種別を「指定文字列」、「デフォルト」、「レルムなし」から選択します。

「デフォルト」は任意のレルムを表します。いずれの「指定文字列」にも一致しなかった場合に適用されます。

優先度

設定するレルムの適用順序を決めるための優先度を「1～9999」の整数で入力します。優先度の値が小さいレルム設定から順番に一致判定が行われます。

「種別」が「指定文字列」の場合のみ入力します。

「種別」が「デフォルト」の場合は「64000」が、「レルムなし」の場合は「65000」が自動的に反映されます(変更不可)。

指定文字列

設定するレルムの内容を表す文字列を入力します。最大40文字まで入力することが可能で、使用可能な文字は英数字およびハイフン(“-”)、ドット(“.”)になります。大文字・小文字の区別はしません。

「指定文字列」選択時のみ入力必須

一致条件

設定するレルムに一致するか判定するための条件を「完全一致」、「後方一致」から選択します。

「指定文字列」選択時のみ入力必須

動作

設定するレルムに一致した場合に行われる動作を選択します。要求を他サーバへ転送したい場合は「forward」を、本装置で処理する場合は「local」を選択します。

サーバ設定

転送先サーバ1

転送先プライマリサーバをIPアドレス形式で入力します。

「forward」選択時のみ入力必須

認証ポート1

転送先プライマリサーバの認証ポートを入力します。指定可能なポート番号は「1024 ~ 60000」の整数です。

「forward」選択時のみ入力必須

アカウントングポート1

転送先プライマリサーバのアカウントングポートを入力します。指定可能なポート番号は「1024 ~ 60000」の整数です。

「forward」選択時のみ入力必須

シークレット1

転送先プライマリサーバとの認証や暗号処理に用いる文字列を入力します。最大30文字まで入力することが可能で、使用可能な文字は英数字と空白文字および以下の記号です。

!#\$%&'()*+,-./:;<=>?@[^_`{|}~

「forward」選択時のみ入力必須

転送先プライマリサーバ側でも同じ値が設定されている必要があります。

転送先サーバ2

転送先のセカンダリサーバをIPアドレス形式で入力します。省略可

認証ポート2

転送先のセカンダリサーバの認証ポートを入力します。指定可能なポート番号は「1024 ~ 60000」の整数です。省略可

アカウントングポート2

転送先セカンダリサーバのアカウントングポートを入力します。指定可能なポート番号は「1024 ~ 60000」の整数です。省略可

シークレット2

転送先セカンダリサーバとの認証や暗号処理に用いる文字列を入力します。省略可
最大30文字まで入力することが可能で、使用可能な文字は英数字と空白文字および以下の記号です。

!#\$%&'()*+,-./:;<=>?@[^_`{|}~

転送先セカンダリサーバ側でも同じ値が設定されている必要があります。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

保存された設定内容を反映させるには、RADIUSサーバの再起動が必要になります。

設定可能なレルムの最大数は

「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

レルム設定は「設定情報の同期」の対象となります。親子連携との併用はできません。

[付録 G 親子連携参照](#)

変更・削除

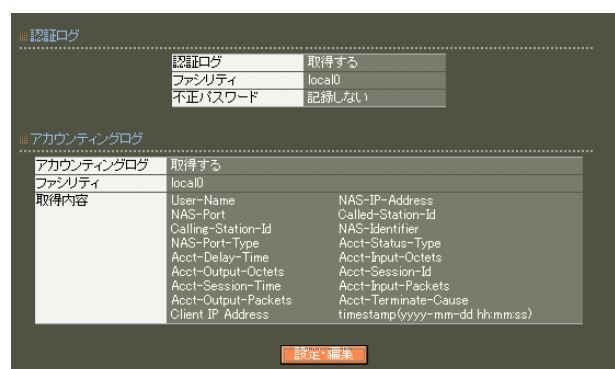
レルム一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのレルムが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

10. ログ

RADIUS 関連のログについて、記録に残すログの種類を設定します。

なお、RADIUS 以外のログについては、管理機能のメニュー「システム」「ログ」の中で設定します。

RADIUS のサーバメニューから「ログ」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。



認証ログ

認証ログ

RADIUS によるユーザ認証に関する記録を残すかどうかを選択します。

ファシリティ

認証ログを「取得する」にした場合、認証ログが出力されるファシリティを指定します。

プルダウンから選択してください。

不正パスワード

「記録する」を選んだ場合、パスワードが正しくないことが原因で認証失敗した時に、認証要求に含まれるパスワードが認証ログに記録されます。

パスワードが記録されるのは、PAP または EAP-TTLS/PAP の場合に限られます。

アカウントングログ

アカウントングログ

RADIUS のアカウントング記録を残すかどうかを選択します。

ファシリティ

アカウントングログを「取得する」にした場合、アカウントングログが出力されるファシリティを指定します。

プルダウンから選択してください。

取得項目

また、記録に残したい項目を選んで、チェックボックスをチェックします。

各項目は以下の内容となります。

- User-Name
認証するユーザ名です。
- NAS-IP-Address
アクセスサーバの IP アドレスです。
- NAS-Port
アクセスサーバのポート番号です。
- Service-Type
サービスの種類を表しています。
- Framed-Protocol
PPP 等のプロトコルの種類を表しています。
- Framed-IP-Address
ユーザに割り当てる IP アドレスです。
- Called-Station-Id
NAS の電話番号、着信番号です。

・サーバ設定

- Calling-Station-Id
ユーザの電話番号、発信者番号です。
- NAS-Identifier
NASの識別子です。RADIUSサーバがNASを識別する為の文字列です。
- NAS-Port-Type
接続時のポートの種類を表しています。
- Acct-Status-Type
Start(接続開始), Stop(接続終了)などのアカウントの種類を表しています。
- Acct-Delay-Time
遅延時間を表します。
- Acct-Input-Octets
受信したバイト数を表しています。
- Acct-Output-Octets
送信したバイト数を表しています。
- Acct-Session-Id
セッションIDを表しています。
- Acct-Authentic
RADIUSクライアントの認証方法を表しています。
- Acct-Session-Time
接続時間を表しています。
- Acct-Input-Packets
受信したパケット数を表しています。
- Acct-Output-Packets
送信したパケット数を表しています。
- Acct-Terminate-Cause
切断理由を表しています。
- client IP address
NASのアドレスです。実際の送信元IPアドレスです。
似た項目に、NAS-IP-Addressがありますが、NAS-IP-AddressはRADIUSサーバでNASを一意に特定できればいいので、実際の送信元アドレスとは異なっている場合があります。

- timestamp(yyyy-mm-dd hh:mm:ss)
パケットを受信した時刻です。
「2004-10-31 19:05:20」のフォーマット(2004年10月31日 19時05分20秒)です。
- timestamp(epoc time)
パケットを受信した時刻です。
1970-01-01 00:00:00からの経過秒数です。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

保存された設定内容を反映させるには、RADIUSサーバの再起動が必要になります。

「取得する」に設定したログは、管理機能のメニュー「システム」「ログ」の中で、本装置に記録するか、他の装置のsyslogデーモンに転送するかを設定することができます。

. プロファイル

本装置では、同じ内容の設定を複数ユーザに対して容易に設定できるようにするために、共通の設定内容をあらかじめプロファイルとして定義しておくことができます。

ユーザの追加変更をおこなう際には、このプロファイルを選択することで、ユーザ毎の入力を省略することができます。

プロファイルは、「ユーザ基本情報」、「認証アトリビュート」、「応答アトリビュート」、「証明書」、「グループID」に分けて設定することができ、このプロファイルを組み合わせて「ユーザプロファイル」とします。

このユーザプロファイルを各ユーザの設定時に選択することで、ユーザ情報を素早く入力していくことができます。

本メニューではこのプロファイルの設定をおこないません。

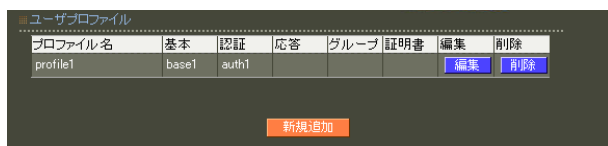
. プロファイル

1. ユーザプロファイル

最終的にRADIUSの「ユーザ」メニューでユーザに適用することになる、大元のプロファイルです。このプロファイルは次節以降の「ユーザ基本情報」、「認証アトリビュート」、「応答アトリビュート」、「証明書」、「グループID」の各プロファイルを選択することで生成します。

先に上記5つのプロファイルを作成した上で設定をおこなうようにしてください。

RADIUSのメニュー「プロファイル」から「ユーザプロファイル」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

ユーザプロファイル新規追加



プロファイル名

任意の名前を20文字以内で入力します。

後に「ユーザ」メニューでユーザの追加や編集をおこなう際に、ここで設定されたプロファイル名が選択肢として表示されます。

使用可能な文字は英数字およびハイフン("-)、アンダーバー("_")になります。(他のプロファイルも同様です。)

基本 (ユーザ基本情報)

認証 (認証アトリビュート)

証明書

応答 (応答アトリビュート)

グループ (グループID)

既に設定されている各プロファイルの名前が選択肢に表示されますので、割り当てたいプロファイルをそれぞれ選択します。

「ユーザ基本情報」以外のプロファイルについては、プロファイルを使用しない場合、「指定しない」を選択することもできます。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なユーザプロファイルの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

変更・削除

アドレスプール一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのアドレスプールが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

ユーザプロファイルの編集をおこなって設定を変更した場合、そのユーザプロファイルを使って定義されているユーザにも変更された設定が反映されます。

ユーザの設定に使われているユーザプロファイルは削除できません。

「ユーザ」メニューで設定を変更して、削除したいユーザプロファイルがどのユーザでも使われていないようにした後で、削除するようにしてください。

2. ユーザ基本情報

認証方式や IP アドレスの割り当て方式などを指定するプロファイルです。

ユーザ基本情報プロファイルは必ず一つ以上作成する必要があります。

このプロファイルはユーザプロファイルで他のプロファイルとまとめられた上で、「ユーザ」メニューでユーザに適用されます。

RADIUS のメニュー「プロファイル」から「ユーザ基本情報」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

ユーザ基本情報プロファイル新規追加

プロファイル名

任意の名前を 20 文字以内で入力します。

「ユーザプロファイル」メニューでユーザ基本情報プロファイルを設定する際に、ここで設定されたプロファイル名が選択肢として表示されます。

認証方式

ユーザ認証方式の選択をおこないます。

本装置では、以下の 7 つの認証方式をサポートしています。

- PAP/CHAP
- EAP-MD5
- EAP-TLS
- EAP-PEAP
- EAP-TTLS/PAP, CHAP
- EAP-TTLS/EAP-MD5
- EAP-TTLS/EAP-PEAP

選択した認証方式については、RADIUS のサーバメニューの「基本情報」でも選択されていることを確認してください。サーバメニューの「基本情報」で選択されていない認証方式については、本メニューで選択しても認証はおこなわれません。

同時接続数

一人のユーザが同時に RADIUS サーバの認証を受けられる数を指定します。一人のユーザが同時に多数の接続をおこなうことを制限したい場合に用います。

設定可能な同時接続数は、「1」～「9」になります。また、空欄にした場合、同時接続数は無制限になります。

IP アドレス割り当て

ユーザ認証に成功した端末に対する IP アドレスの割り当て方法の設定です。

IP アドレス割り当てをおこなわない場合には「未使用」を選択します。

RADIUS クライアント装置が割り当てをおこなう場合には「RADIUS クライアント」を選択します。本装置のアドレスプールを利用して割り当てる場合には、「アドレスプール」を選択します。固定 IP アドレスをユーザ毎に割り当てる場合には、「固定」を選択してください。

アドレスプール

IP アドレス割り当てで「アドレスプール」を選択した場合に、設定をおこないます。

サーバメニューの「アドレスプール」で設定した内容が選択肢に表示されますので、設定したいアドレスプールを選択します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なユーザ基本情報プロファイルの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

変更・削除

ユーザ基本情報プロフィール一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのプロフィールが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すと実行できます。

プロフィールの編集をおこなって設定を変更した場合、そのプロフィールを使って定義されているユーザにも変更された設定が反映されます。

ユーザプロフィールの設定に使われているユーザ基本情報プロフィールは削除できません。「ユーザプロフィール」メニューで設定を変更してから削除するようにしてください。

. プロファイル

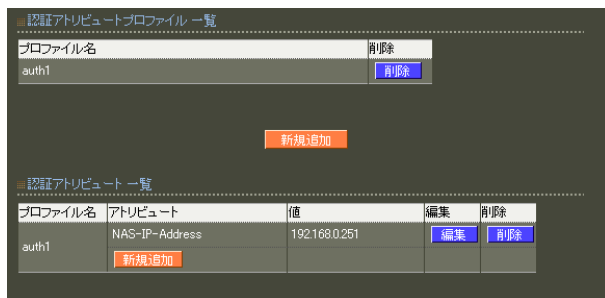
3. 認証アトリビュート

認証時に認証方式に応じて送られるパスワードなどの情報に加え、RADIUS クライアントから送られてくるアトリビュートを認証に用いる場合に使用するプロファイルです。

このような認証をおこなわない場合には認証アトリビュートプロファイルを作成する必要はありません。

このプロファイルはユーザプロファイルで他のプロファイルとまとめられた上で、「ユーザ」メニューでユーザに適用されます。

RADIUS のメニュー「プロファイル」から「認証アトリビュート」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。

**認証アトリビュートプロファイル一覧**

登録されている認証アトリビュートプロファイルの一覧が表示されます。

認証アトリビュート一覧

各認証アトリビュートプロファイルで定義されているアトリビュートの一覧が表示されます。

認証アトリビュートプロファイル一覧

新たに認証アトリビュートプロファイルを追加する場合には、一覧から「新規追加」ボタンを押してプロファイルの追加をおこないます。

認証アトリビュートプロファイル新規追加**プロファイル名**

任意の名前を 20 文字以内で入力します。

「ユーザプロファイル」メニューで認証アトリビュートプロファイルを設定する際に、ここで設定されたプロファイル名が選択肢として表示されます。

入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

登録可能な認証アトリビュートプロファイルの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

削除

登録されているプロファイルを削除したい場合には一覧から「削除」ボタンを押すと削除されます。

ユーザプロファイルの設定に使われている認証アトリビュートプロファイルは削除できません。「ユーザプロファイル」メニューで設定を変更してから削除するようにしてください。

. プロファイル

認証アトリビュート一覧

認証アトリビュートプロファイルに対してアトリビュートの追加・編集・削除をおこないます。アトリビュートを追加する場合には、追加したい認証アトリビュートプロファイルの表中に表示されている「新規追加」ボタンを押します。以下の入力画面が表示されます。

認証アトリビュート新規追加



プロファイル名

選択したプロファイル名が表示されています。

アトリビュート

ユーザ認証に使用するアトリビュートをプルダウンから選択します。

選択できるアトリビュートは、あらかじめ本製品で定義されてあるものの他、RADIUSの「サーバ」メニューのアトリビュートで追加したベンダ固有アトリビュートも使用できます。

値

認証に使用するアトリビュートの値を定義します。選択したアトリビュートのフォーマットに応じて次のように入力します。

- text(ASCII文字列)

ASCII形式の文字列を入力してください。設定可能な長さは、定義済みのstandardのアトリビュートで最大253文字、追加したベンダ固有アトリビュートで最大247文字です。

入力例: century

- string(バイナリデータ)

16進表記で入力してください。ただし、行頭に0xは不要です。

設定可能な長さは定義済みのstandardのアトリビュートで最大253オクテット(2~506文字)、追加したベンダ固有アトリビュートで最大247オクテット(2~494文字)です。

入力例: 63656e74757279

(“century”の文字コードデータ)

- address(IPアドレス)

IPv4アドレス表記で入力してください。

入力例: 192.168.0.1

- integer(整数)

負ではない整数値を入力してください。

設定可能な範囲は0~4294967295です。

入力例: 65536

- ipv6address(IPv6アドレス)

IPv6アドレス表記で入力してください。

入力例: fe80::1111

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能な認証アトリビュートの最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

認証アトリビュート一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのアトリビュートが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

プロファイルの編集をおこなって設定を変更した場合、そのプロファイルを使って定義されているユーザにも変更された設定が反映されます。

. プロファイル

4. 応答アトリビュート

認証成功時に RADIUS クライアントに送るアトリビュートを指定するためのプロファイルです。指定するアトリビュートが無い場合には作成する必要はありません。このプロファイルはユーザプロファイルで他のプロファイルとまとめられた上で、「ユーザ」メニューでユーザに適用されます。

RADIUS のメニュー「プロファイル」から「応答アトリビュート」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



応答アトリビュートプロファイル一覧

登録されている応答アトリビュートプロファイル名の一覧が表示されています。

応答アトリビュート一覧

各応答アトリビュートプロファイルで定義されているアトリビュートの一覧が表示されています。

応答アトリビュートプロファイル一覧

新たに応答アトリビュートプロファイルを追加する場合には、一覧から「新規追加」ボタンを押してプロファイルの追加をおこないます。

応答アトリビュートプロファイル新規追加

プロファイル名

任意の名前を 20 文字以内で入力します。

「ユーザプロファイル」メニューで応答アトリビュートプロファイルを設定する際に、ここで設定されたプロファイル名が選択肢として表示されます。

入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

登録可能な応答アトリビュートプロファイルの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

削除

登録されているプロファイルを削除したい場合には一覧から「削除」ボタンを押すと削除されます。

ユーザプロファイルの設定に使われている応答アトリビュートプロファイルは削除できません。「ユーザプロファイル」メニューで設定を変更してから削除するようにしてください。

. プロファイル

応答アトリビュート一覧

応答アトリビュートプロファイルに対してアトリビュートの追加・編集・削除をおこないます。アトリビュートを追加する場合には、追加したい応答アトリビュートプロファイルの表中に表示されている「新規追加」ボタンを押します。以下の入力画面が表示されます。

応答アトリビュート新規追加



プロファイル名

選択したプロファイル名が表示されています。

アトリビュート

RADIUSクライアントに送付するアトリビュートをプルダウンから選択します。選択できるアトリビュートは、あらかじめ本製品で定義されてあるものの他、RADIUSの「サーバ」メニューのアトリビュートで追加したベンダ固有アトリビュートも使用できます。

値

送付するアトリビュートの値を定義します。選択したアトリビュートのフォーマットに応じて次のように入力します。

- text (ASCII 文字列)
ASCII形式の文字列を入力してください。設定可能な長さは、定義済みのstandardのアトリビュートで最大253文字、追加したベンダ固有アトリビュートで最大247文字です。
入力例: century

- string (バイナリデータ)
16進表記で入力してください。ただし、行頭に0xは不要です。
設定可能な長さは定義済みのstandardのアトリビュートで最大253オクテット(2 ~ 506文字)、追加したベンダ固有アトリビュートで最大247オクテット(2 ~ 494文字)です。
入力例: 63656e74757279
("century"の文字コードデータ)

- address (IPアドレス)
IPv4アドレス表記で入力してください。
入力例: 192.168.0.1

- integer (整数)
負ではない整数値を入力してください。設定可能な範囲は0 ~ 4294967295です。
入力例: 65536

- ipv6address (IPv6アドレス)
IPv6アドレス表記で入力してください。
入力例: fe80::1111

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能な応答アトリビュートの最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

応答アトリビュート一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのアトリビュートが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

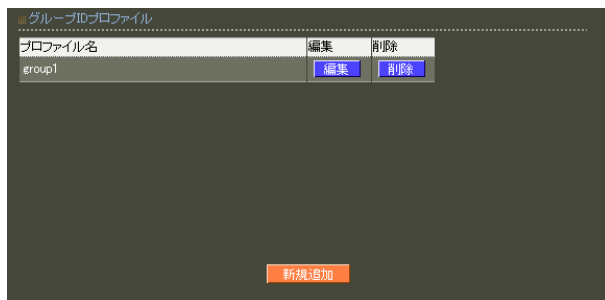
プロファイルの編集をおこなって設定を変更した場合、そのプロファイルを使って定義されているユーザにも変更された設定が反映されます。

. プロファイル

5. グループ ID

ユーザ ID を "user@centurysys.co.jp" または "CENTURYSYS¥user" のように、所属グループを表わす文字列を付加して指定するためのプロファイルです。このようなユーザ ID を利用しない場合には作成する必要はありません。このプロファイルはユーザプロファイルで他のプロファイルとまとめられた上で、「ユーザ」メニューでユーザに適用されます。ユーザに適用した場合、そのユーザは、グループ ID も付加したユーザ名の形でのみ認証され、ユーザ ID 単独での認証には失敗するようになります。

RADIUS のメニュー「プロファイル」から「グループ ID」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

グループ ID プロファイル新規追加



プロファイル名
任意の名前を 20 文字以内で入力します。「ユーザプロファイル」メニューでグループ ID を設定する際に、ここで設定されたプロファイル名が選択肢として表示されます。

グループ ID
ユーザ名に付加する文字列を指定します。最大 40 文字まで指定できます。使用可能な文字は英数字およびハイフン("-)、ピリオド(".")になります。

形式
グループ ID、ユーザ ID および区切り文字の結合の仕方を指定します。UserID@GroupID または GroupID¥UserID から選択します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なグループ ID プロファイルの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

変更・削除

グループ ID プロファイル一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのプロファイルが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

プロファイルの編集をおこなって設定を変更した場合、そのプロファイルを使って定義されているユーザにも変更された設定が反映されます。

ユーザプロファイルの設定に使われているグループ ID プロファイルは削除できません。「ユーザプロファイル」メニューで設定を変更してから削除するようにしてください。

6. 証明書

ユーザ証明書を発行する際の共通項目をあらかじめ指定するためのプロファイルです。

このプロファイルの作成は任意です。

このプロファイルはユーザプロファイルで他のプロファイルとまとめられた上で、「ユーザ」メニューでユーザに適用されます。

RADIUS のメニュー「プロファイル」から「証明書」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。



証明書プロファイル新規追加 プロファイル名

任意の名前を 20 文字以内で入力します。

証明書

バージョン

X.509 のどのバージョンの証明書を発行するかを選択します。

・ ~ ver1.13.1

バージョンは「1」または「3」を選択することができます。

・ ver1.14.0 ~

バージョンは「3」を選択することができます。

鍵長

RSA の鍵の長さを選択します。

・ ~ ver1.11.0

鍵の長さは「512」、「1024」、「2048」のいずれかを選択することができます。

・ ver1.12.0 ~ ver1.13.1

鍵の長さは「1024」、「2048」のいずれかを選択することができます。

・ ver1.14.0 ~

鍵の長さは「2048」を選択することができます。

「512」、「1024」は十分安全とは言えません。
「2048」を推奨します。

Signature Algorithm

署名アルゴリズムを選択します。

・ ver1.8.4 以前

「SHA-1」または「MD5」を選択することができます。

・ ver1.8.5 ~ ver1.11.0

「SHA-512」、「SHA-384」、「SHA-256」、「SHA-1」、「MD5」のいずれかを選択することができます。

・ ver1.12.0 ~ ver1.13.1

「SHA-512」、「SHA-384」、「SHA-256」、「SHA-1」のいずれかを選択することができます。

・ ver1.14.0 ~

「SHA-512」、「SHA-384」、「SHA-256」

のいずれかを選択することができます。

「SHA-1」、「MD5」は十分安全とは言えません。
「SHA-256」を推奨します。

. プロファイル

Subject

Subject には以下の項目があります。

- Organizational Unit
一般には部署名を設定します。
- Organization
一般には企業名、組織名を設定します。
- Locality
市町村名を設定します。
- State or Province
都道府県名を設定します。
- Country
国名を設定します。
日本国内の場合は、「JP」とします。

各項目に使用可能な文字は以下となります。

- Organizational Unit/Organization/Locality/
State or Province/
ver1.8.4 以前: 0-9, a-z, A-Z, -_
ver1.8.5 以降: 0-9, a-z, A-Z, -_' , .SPACE
- Country
A-Z

有効期間

開始日時

終了日時

証明書有効期間の開始日時および終了日時を設定します。

設定できるのは2005年 - 2035年の間になります。

日時はGMT(グリニッジ標準時)で指定します。

たとえば日本時間で 2006/12/31 23:59 まで有効にしたい場合には、「2006年12月31日14時59分」と入力します。

この設定では、以下の項目が必須の設定項目になります。

バージョン

鍵長

Signature Algorithm

X.509 証明書 v3 拡張 (RFC3280)

下記設定項目は、X.509v3 がサポートしている拡張機能になりますが、認証アプリケーションに依存した項目となりますので、本設定に関しては認証されるアプリケーションの仕様を確認の上、設定をおこなってください。

以下に、それぞれのパラメータの説明を記します。

Key Usage

証明書に含まれている公開鍵の使用目的を示します。

KeyUsage には以下の項目があります。

- digitalSignature
デジタル署名の検証に利用できることを表しています。
- nonRepudiation
否認防止を目的としたデジタル署名の検証に利用できることを表しています。
- keyEncipherment
鍵を送信する場合に、鍵を暗号化して利用できることを表しています。
- dataEncipherment
データの暗号化に利用できることを表しています。
- keyAgreement
鍵交換で利用できることを表しています。
- keyCertSign
証明書の署名の検証に利用できることを表しています。
- cRLSign
失効リストの署名の検証に利用できることを表しています。
- encipherOnly
keyAgreement が指定されている場合のみ有効で、鍵交換をデータの暗号化でのみ利用できることを表しています。
- decipherOnly
keyAgreement が指定されている場合のみ有効で、鍵交換をデータの復号化でのみ利用できることを表しています。

. プロファイル

Extended Key Usage

Key Usage より詳細に、証明書に含まれている公開鍵の使用目的を示します。Extended Key Usage には以下の項目があります。

- serverAuth
TLSサーバ認証に利用できることを表しています。
- clientAuth
TLSクライアント認証に利用できることを表しています。
- codeSigning
コード署名のために利用できることを表しています。
- emailProtection
電子メールの保護のために利用できることを表しています。

CRL Distribution Points

失効リストの配布点を入力します。本装置から失効リストを配布することもできます。その場合は以下の URL を入力します。

http://(本装置のホスト名)/crl/crl.crl

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能な証明書プロファイルの最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

証明書プロファイル一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのプロファイルが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

ユーザプロファイルの設定に使われている証明書プロファイルは削除できません。

「ユーザプロファイル」メニューで設定を変更してから削除するようにしてください。

1. ユーザ

ユーザの登録やユーザへのプロファイルの割り当てをおこないます。

ユーザ登録をおこなう場合には、先にメニュー「プロファイル」で、登録するユーザに合わせたユーザプロファイルを作成しておく必要があります。

RADIUS のメニュー「ユーザ」から「ユーザ」を選択すると、現在設定されているユーザー一覧が表示されます。

No.	lock	ユーザID	プロファイル	IPアドレス	詳細	証明書	備考
1	x	user01	profile1	-	表示	表示	
2		user02	profile1	-	表示	発行	

(2件中 1-2件目を表示)

新規追加

ユーザに関する各種設定やユーザ証明書に関する操作をこの画面からおこなうことができます。

ユーザー一覧表示画面から「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

ユーザ 新規追加

ユーザID

パスワード

プロファイル

固定IPアドレス払い出し

IPアドレス

ネットマスク

備考

備考

アカウントのロック

ロック ロックしない ロックする

設定

ユーザ新規追加

ユーザ ID

登録するユーザ名を入力します。

ユーザ ID は、最大 20 文字まで入力する事が可能です。

使用可能な文字は英数字および以下の記号と空白文字になります。

!"#\$%&'()*+,-./<=>@[]^_`{|}~

パスワード

認証用パスワードを入力します。

パスワードは、最大 20 文字まで入力する事が可能です。

使用可能な文字は、ユーザ ID の入力可能文字と以下の記号になります。

, ; ¥

プロファイル

このユーザに適用したいユーザプロファイルを選択します。「プロファイル」メニューで設定済みのユーザプロファイルが選択肢に表示されます。

固定 IP アドレス払い出し

IP アドレス

固定の IP アドレスをユーザに払い出す場合に、端末に割り当てる IP アドレスを登録します。

ここで設定された値は、RADIUS アトリビュートの「Framed-IP-Address」の値となり、RADIUS クライアントに返信されます。

この設定を有効にするためにはユーザに割り当てられたユーザ基本情報プロファイルの IP アドレス割り当てが「固定」に設定されている必要があります。

ネットマスク

払い出すサブネットマスクの値を登録します。

ここで設定された値は、RADIUS アトリビュートの「Framed-IP-Netmask」の値となり、RADIUS クライアントに返信されます。

この設定を有効にするためにはユーザに割り当てられたユーザ基本情報プロファイルの IP アドレス割り当てが「固定」に設定されている必要があります。

備考

備考

備考を設定することが出来ます。

備考は、最大40文字まで(日本語は20文字まで)入力することができます。

使用可能な文字は次の通りです。

0 ~ 9、A ~ Z、a ~ z、空白文字、
-(マイナス・ハイフン)、.(ピリオド・ドット)、@、
日本語(JIS X 0208:1997に収録された6879文字)

いわゆる半角カナ(1バイトの片仮名)やいわゆる機種依存文字(例えばShift_JISの『丸付き数字』など)は使用できません。

アカウントのロック

ロック

ユーザ毎に「ロックしない」「ロックする」のいずれかを選択します。

デフォルト値は「ロックしない」です。

それぞれの動作は下記の通りになります。

- ・ロックしない
 - ・RADIUS認証要求には、認証処理をおこなった結果を応答する
 - ・GUIへのアクセスを許可する
- ・ロックする
 - ・RADIUS認証要求には、常にRejectを応答する
 - ・GUIへのアクセスを許可しない

「ロックする」を選択している場合はユーザー一覧の「lock」欄に『x』が表示されます。

設定情報の同期をおこなう設定の場合、本設定は対向装置へ同期されます。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定可能なユーザの最大数は

「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

認証方式がEAP-TLSの場合にはユーザ証明書のみを使って認証処理をおこないます。

ユーザIDおよびパスワードは認証に使用しません。また、認証時にはユーザ証明書のSubjectのCommon Nameを使ってユーザIDとの対応を取り、参照するプロファイルを決定します。

ユーザの詳細表示

ユーザー一覧表示画面において、詳細欄の「表示」のボタンを押すとユーザの現在の設定内容が表示されます。

ユーザ設定

現在設定されているユーザ設定情報が表示されます。

ユーザ設定(詳細)

プロファイルの選択によって適用されている設定内容が表示されます。

ユーザ設定

この画面からユーザの設定内容の編集、削除、およびユーザ個別設定をおこなうことができます。

編集

「編集」ボタンを押すとユーザ情報の編集画面が表示されます。

変更したい内容を入力して「設定」ボタンを押すと変更内容が反映されます。

削除

「削除」ボタンを押すと表示されているユーザが削除されます。

ユーザ個別設定

ユーザ設定(詳細)

ユーザの詳細表示画面の下段に表示されている認証方式や応答アトリビュートなどは、本来ユーザに適用されているユーザプロファイルに従って設定され、ユーザに適用されます。

しかしプロファイルから外れた形でユーザー一人一人に対して個別に設定したい場合には、この詳細表示画面から個別に設定をおこなうことができます。個別設定は以下の各プロファイルで設定されている内容を上書きまたは追加する形でおこなわれます。

個別設定が可能なアトリビュート

- ・ 基本
- ・ 認証
- ・ 応答

第6章 RADIUS設定

ユーザ設定

ユーザに個別設定がされている場合には、ユーザの詳細表示画面で各項目について左右に二つの設定値が表示されるようになります。

左側の値はプロファイルによって本来設定される筈の値が表示されます。また右側の値は個別設定によって設定されている値が表示されます。

・基本

変更

ユーザ基本情報プロファイルで設定される項目について個別設定をおこないたい場合にはユーザ基本情報プロファイルの行にある「編集」ボタンを押します。編集画面が現れるので、個別設定したい内容を設定し、「設定」ボタンを押してください。

削除

個別設定を削除し、ユーザ基本情報プロファイルで設定された値に戻したいときには「削除」ボタンを押してください。

・認証

・応答

変更

認証アトリビュート、応答アトリビュートの個別設定は各アトリビュートの「新規追加」ボタン、または既存設定に対する「編集」ボタンでおこないます。次のような設定画面が表示されます。



アトリビュート新規追加 (ユーザ: " ユーザ ID ")
アトリビュート

個別に設定したいアトリビュートを選択します。「編集」ボタンで設定画面を表示した場合には既に選択された状態で表示されます。

値

アトリビュートの値を設定します。選択したアトリビュートのフォーマットに合わせて入力してください。

動作モード

「上書き」、「追加」、「削除」の中から選択します。(認証アトリビュートの場合は「追加」は選択できません。)

・上書き

選択した場合、プロファイルで同じアトリビュートが存在していた場合、プロファイルで設定されたアトリビュート値はこのユーザには適用されず、個別設定されたアトリビュート値のみが使われるようになります。

・追加

選択した場合、プロファイルで同じアトリビュートが存在していた場合、プロファイルで設定されたアトリビュート値と、個別設定されたアトリビュート値の両方がユーザに対して使われるようになります。指定したアトリビュートがプロファイルに存在しない場合には、「上書き」と「追加」で動作に違いは有りません。

・削除

選択した場合には、プロファイルで設定されたアトリビュートは本ユーザに対して適用されなくなります。「削除」を選択する場合には値は指定しないでください。

「設定」ボタンを押すと個別設定が適用されます。個別設定で登録可能なアトリビュートの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

削除

個別設定したアトリビュートを削除する場合は削除したいアトリビュートの右側の「削除」ボタンを押してください。

ユーザが削除された場合、またはユーザに適用されるユーザプロファイルが変更された場合、そのユーザの個別設定は全て削除されます。

ユーザプロファイルでユーザ基本情報が変更された場合、そのユーザプロファイルが適用されているユーザのユーザ基本情報個別設定は削除されます。認証アトリビュート個別設定、応答アトリビュート個別設定についても同様です。

ユーザ証明書の発行

EAP-TLS 認証を使用する場合には、ユーザ毎に証明書を発行する必要があります。

証明書が未発行のユーザは、ユーザー一覧表示画面の証明書欄に「発行」ボタンが表示されます。

(CA が作成されていない場合には「発行」ボタンは表示されません。先に CA メニューで CA を設定してください。)

No.	lock	ユーザID	プロフィール	IPアドレス	詳細	証明書	備考
1		user01	profile1	-	表示	発行	

「発行」ボタンを押すと、次のユーザ証明書の作成画面が表示されます。

証明書

バージョン

X.509のどのバージョンの証明書を発行するかを選択します。

• ~ ver1.13.1

バージョンは「1」または「3」を選択することができます。

• ver1.14.0 ~

バージョンは「3」を選択することができます。

鍵長

RSA の鍵の長さを選択します。

• ~ ver1.11.0

鍵の長さは「512」, 「1024」, 「2048」のいずれかを選択することができます。

• ver1.12.0 ~ ver1.13.1

鍵の長さは「1024」, 「2048」のいずれかを選択することができます。

• ver1.14.0 ~

鍵の長さは「2048」を選択することができます。

「512」, 「1024」は十分安全とは言えません。

「2048」を推奨します。

Signature Algorithm

署名アルゴリズムを選択します。

• ver1.8.4 以前

「SHA-1」または「MD5」を選択することができます。

• ver1.8.5 ~ ver1.11.0

「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」, 「SHA-1」, 「MD5」のいずれかを選択することができます。

• ver1.12.0 ~ ver1.13.1

「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」, 「SHA-1」のいずれかを選択することができます。

• ver1.14.0 ~

「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」

のいずれかを選択することができます。

「SHA-1」, 「MD5」は十分安全とは言えません。

「SHA-256」を推奨します。

Subject

• Common Name

ユーザ ID が自動的に設定されます。(ユーザプロフィールでグループ ID が指定されている場合にはグループ ID も付加されます。) Common Name を変更することはできません。

入力欄には証明書プロフィールで設定されている内容が初期値として表示される他、パスフレーズにはユーザのパスワードが表示されます。以下の項目に入力をおこないます。

• email

ユーザのメールアドレスを設定します。

• Organizational Unit

一般には部署名を設定します。

• Organization

一般には企業名、組織名を設定します。

• Locality

市町村名を設定します。

• State or Province

都道府県名を設定します。

• Country

国名を設定します。

日本国内の場合は、「JP」とします。

有効期間

証明書有効期間の開始日時と終了日時を設定します。

終了日時は、CA 証明書の有効期間(終了日時)を超えることはできません。

日時は GMT(グリニッジ標準時)で指定します。

たとえば日本時間で 2006/12/31 23:59 まで有効にしたい場合には、「2006年12月31日14時59分」と入力します。

パスフレーズ

パスフレーズ

パスフレーズを入力します。ユーザのパスワードが初期値として入力されています。パスフレーズは5文字以上30文字以下で入力してください。

パスフレーズにはユーザのパスワードが表示されます。

各項目に使用可能な文字は以下となります。

• email

0-9, a-z, A-Z, -.@_

• Organizational Unit/Organization/Locality/ State or Province/

ver1.8.4 以前: 0-9, a-z, A-Z, -_

ver1.8.5 以降: 0-9, a-z, A-Z, -_' ,.SPACE

• Country

A-Z

X.509 証明書 v3 拡張 (RFC3280)

下記設定項目は、X.509v3 がサポートしている拡張機能になりますが、認証アプリケーションに依存した項目となりますので、本設定に関しては認証されるアプリケーションの仕様を確認の上、設定をおこなってください。

以下に、それぞれのパラメータの説明を記します。

Key Usage

証明書に含まれている公開鍵の使用目的を示します。KeyUsage には以下の項目があります。

- digitalSignature
デジタル署名の検証に利用できることを表しています。
- nonRepudiation
否認防止を目的としたデジタル署名の検証に利用できることを表しています。
- keyEncipherment
鍵を送信する場合に、鍵を暗号化して利用できることを表しています。
- dataEncipherment
データの暗号化に利用できることを表しています。
- keyAgreement
鍵交換で利用できることを表しています。
- keyCertSign
証明書の署名の検証に利用できることを表しています。
- cRLSign
失効リストの署名の検証に利用できることを表しています。
- encipherOnly
keyAgreement が指定されている場合のみ有効で、鍵交換をデータの暗号化でのみ利用できることを表しています。
- decipherOnly
keyAgreement が指定されている場合のみ有効で、鍵交換をデータの復号化でのみ利用できることを表しています。

Extended Key Usage

Key Usage より詳細に、証明書に含まれている公開鍵の使用目的を示します。

Extended Key Usage には以下の項目があります。

- serverAuth
TLSサーバ認証に利用できることを表しています。
- clientAuth
TLSクライアント認証に利用できることを表しています。
- codeSigning
コード署名のために利用できることを表しています。
- emailProtection
電子メールの保護のために利用できることを表しています。

CRL Distribution Points

失効リストの配布点を入力します。本装置から失効リストを配布することもできます。その場合は以下の URL を入力します。

`http://(本装置のホスト名)/crl/crl.crl`

Netscape 拡張

nsCertType

Netscape で使用される証明書のタイプを指定します。nsCertType には以下の項目があります。

- client
クライアント認証に利用できることを表しています。
- server
サーバ認証に利用できることを表しています。
- email
S/MIME のクライアント認証で利用できることを表しています。
- objsign
Java 等のオブジェクトサインで利用できることを表しています。
- sslCA
SSL 認証局で利用できることを表しています。
- emailCA
S/MIME 認証局で利用できることを表しています。
- objCA
オブジェクトサイン認証局で利用できることを表しています。

nsComment

Netscape のコメントを示します。使用可能な文字は英数字およびハイフン(“-”)、アンダーバー(“_”)になります。

この設定では、以下の項目が必須の設定項目になります。

バージョン

鍵長

Signature Algorithm

有効期間

• 終了日時

パスフレーズ

バージョン3のサーバ証明書を作成する場合には、通常最低限以下を指定するようにします。実際にどのKey Usage/Extended Key Usageが必須であるかは通信相手のソフトウェアに依存します。

Key Usage

• digitalSignature

• keyEncipherment

Extended Key Usage

• serverAuth

既にプロファイルで設定されている項目についても修正を加えることができます。

各項目に入力後、「実行」ボタンを押すと証明書が発行されます。

第6章 RADIUS設定

ユーザ設定

ユーザ証明書の表示

既にユーザ証明書が発行されているユーザは、ユーザ一覧表示画面の証明書欄に「表示」ボタンが表示されます。このボタンを押すと、そのユーザに対して発行されている全ての証明書が一覧表示されます。



S/N	Subject	有効期間	失効日時
01	user1	2006-01-01 00:00:00	2006-12-31 23:59:00
02	user1	2007-01-01 00:00:00	2007-12-31 23:59:00

この画面では次の操作がおこなえます。

証明書の追加発行

このユーザに対して新しい証明書を発行します。この後の操作は最初の証明書を発行する時と同じになります。

証明書の確認

「S/N」(シリアルナンバ)をクリックすることでその証明書の詳細内容を表示します。また、証明書の取得や失効などの操作をおこなうことができます。

「S/N」(シリアルナンバ)をクリックすると次の画面が表示されます。



この画面では次の操作をおこなうことができます。

証明書の取得

ユーザ証明書を本装置からダウンロードします。取り出す形式と内容を指定して「取り出し」ボタンを押します。

形式

「PKCS#12」、「PEM」、「DER」から一つ選択します。

内容

「CA証明書・証明書・私有鍵」、「証明書・私有鍵」、「証明書」、「私有鍵」から一つ選択します。

PKCS#12 を選択した場合

証明書と私有鍵のどちらか一方のみは選択できません。

PEM, DER を選択した場合

証明書と私有鍵を同時に取り出すことはできません。それぞれ別々に取り出してください。

証明書の失効

プルダウンメニューで失効理由を選択して、「失効」ボタンを押すと、証明書が失効します。失効理由は以下の中から選択します。

- unspecified
理由を指定しません。
- keyCompromise
秘密鍵の漏洩などにより、証明書の信頼性がなくなったことを表します。
- CACompromise
CAの信頼性がなくなったことを表します。
- affiliation Changed
証明書の内容が変更されたことを表します。
- superseded
証明書が取り替えられたことを表します。
- cessationOfOperation
証明書がその目的では必要なくなったことを表します。
- removeFromCRL
失効リストから削除されたことを表します。

失効した証明書は取得できません。

2.AD ユーザ

Active Directory連携を使用する場合にユーザプロフィールを指定します。

Active Directory連携機能によって認証されたユーザは全て、ここで指定されたプロフィールが使われます。なお、プロフィールで記述された情報の中で、現バージョンで有効となるのは応答アトリビュート設定のみで、他の設定内容は使用されません。

RADIUSのメニュー「ユーザ」から「AD ユーザ」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

AD ユーザ



ユーザプロフィール

使用するプロフィールを選択してください。

「設定」ボタンを押して設定完了です。
設定はすぐに反映されます。

Active Directory連携はEAP-PEAP認証のみをサポートしているため、プロフィールでは認証方式がEAP-PEAPであるものを選択してください。
応答アトリビュートを使用しない場合には、「指定しない」を選択することもできます。

3.LDAP ユーザ

LDAP連携を使用する場合にユーザプロフィールを指定します。

LDAP連携機能によって認証されたユーザは全て、ここで指定されたプロフィールが使われます。なお、プロフィールで記述された情報の中で、現バージョンで有効となるのは応答アトリビュート設定のみで、他の設定内容は使用されません。

RADIUSのメニュー「ユーザ」から「LDAP ユーザ」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



LDAP名	ユーザプロフィール	編集
ldap	profile1	編集

プロフィールを設定したいLDAPサーバの「編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

ユーザ変更



LDAPユーザ変更

ユーザプロフィール profile1

設定

ユーザプロフィール

使用するプロフィールを選択してください。

認証方式が PAP/CHAP、EAP-MD5、EAP-PEAP、EAP-TTLS/PAP,CHAP、EAP-TTLS/EAP-MD5 のいずれか (ver1.8.3 以前は、PAP/CHAP、EAP-TTLS/PAP,CHAP のいずれか) であるプロフィールを設定することが出来ます。

応答アトリビュートを使用しない場合には、「指定しない」を選択することもできます。

「設定」ボタンを押して設定完了です。設定はすぐに反映されます。

4. ファイル読み込み

ユーザをまとめて作成したい場合に使用します。あらかじめユーザ作成に必要な情報をテキストファイルで用意しておき、本メニューで読み込ませることでユーザを一括作成します。プロファイルやユーザ証明書も作成することができます。

RADIUSのメニュー「ユーザ」から「ファイル読み込み」を選択すると次の画面が表示されます。

RADIUS ユーザファイル読み込み



ファイル形式

ファイルの形式を選択します。

設定ファイル

作成したいユーザ情報が書かれているファイル名を指定します。

設定ファイルの書き方の詳細については「[付録C ユーザ設定情報のファイルフォーマット](#)」を参照してください。

利用可能な文字コードは、「EUC-JP」または「Shift_JIS」です。

念のため、管理機能メニューの「システム」-「設定情報の保存・復帰」で現在の設定を保存してからファイル読み込みをおこなうことをお勧めします。

設定ファイルの読み込み時には画面入力の場合と同様に入力チェックがおこなわれます。

例えば証明書のパスフレーズが4文字以下の場合にはエラーとなります。設定ファイルにエラーとなる情報が含まれていた場合、その行以降の内容は設定に反映されません。

RA間で同期を行っている環境において、設定ファイルにエラーとなる情報が含まれていた場合、MASTERではエラー以降の設定は反映されません（エラー以前の設定は反映されます）。SLAVEではエラー以前・以降全ての設定が反映されません。

エラーが発生し、同期しているRA間の設定に差分が生じた場合は、強制同期などを使用して全てのRAの設定が同じになるようにして下さい。

詳細は『[第8章 管理機能「11. 設定情報の同期」](#)』や『[付録G 親子連携](#)』を参照してください。

一度に設定するユーザ数が多い場合やユーザ証明書を作成する場合には処理に時間がかかります。途中で他のメニューを操作しないようにして下さい。

5. ユーザ検索

登録済みのユーザから条件に合うユーザを検索表示します。

RADIUS のメニュー「ユーザ」から「ユーザ検索」を選択すると検索画面が表示されます。

各検索条件を指定します。

ユーザ条件

ユーザ ID、グループ ID、備考、およびロックを指定します。

ユーザ ID は、部分的な文字列を指定することでその文字列を含むユーザ ID を検索することができます。ロックは、「指定しない」、「ロックされていない」、「ロックされている」を選択できます。デフォルト値は「指定しない」です。

プロフィール条件

検索に使用する「プロフィール名」を選択します。

基本条件

ユーザ基本情報プロフィールで設定されている内容に基づいて、詳細に検索条件を指定することができます。

アトリビュート条件

アトリビュート条件を指定する場合、認証アトリビュートで検索をするか応答アトリビュートで検索をするかを「種別」で指定します。

次に検索するアトリビュート名およびそのアトリビュートの値を指定します。値には部分的な文字列を指定することでその文字列を含むアトリビュートを検索することができます。

値を指定しなかった場合は選択したアトリビュート名が使われていれば値に関係なく検索されます。

証明書条件

ユーザ証明書に基づいた検索条件を指定します。以下の選択肢の中から選択します。

- ・指定しない
証明書に基づいた検索条件を指定しません。
- ・未発行
証明書が発行されていないユーザを検索します。
- ・無効
証明書が発行されているが、失効または期限切れにより現在有効な証明書が無いユーザを検索します。
- ・有効
使用可能な証明書が発行されているユーザを検索します。
- ・期限切れ間近
1ヶ月以内に証明書の有効期限が切れるユーザを検索します。

第6章 RADIUS設定

ユーザ設定

検索条件を指定して「検索」ボタンを押すと、全ての条件と一致するユーザが一覧表示されます。1ページあたり、100件まで表示されます。

ユーザID	ユーザプロフィール	基本	認証	応答	グループ	証明書	IPアドレス	詳細	証明書	備考
user01	profile1	b_profile		response			-	表示	発行	
user02	profile1	b_profile		response			-	表示	発行	

(2件中 1-2件目を表示)

戻る

この画面から「ユーザ」メニュー同様、ユーザの編集、削除、および証明書の発行操作をおこなうことができます。

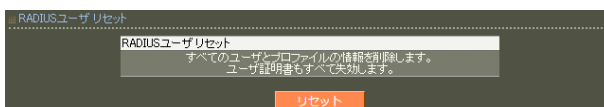
ユーザに個別設定がされていた場合には、個別設定された値に従って検索されます。

ユーザ条件の備考に日本語を使用した場合、検索にマッチしないはずのユーザが検索結果に表示されることがあります。

6. ユーザリセット

すべてのユーザとプロフィールの情報を削除します。ユーザ証明書もすべて失効します。

RADIUS ユーザリセット



第7章

CA 設定

CA / CRL

本装置のCAの設定をおこないます。
CAのメニュー「CA/CRL」を選択します。初期状態ではCAは設定されていません。
「新規追加」をクリックすると次の入力画面が表示されます。

CA

バージョン

証明書のバージョンを示します。V3固定です。

鍵長

RSAの鍵の長さを選択します。

- ~ ver1.11.0
鍵の長さは「512」, 「1024」, 「2048」のいずれかを選択することができます。
- ver1.12.0 ~ ver1.13.1
鍵の長さは「1024」, 「2048」のいずれかを選択することができます。
- ver1.14.0 ~
鍵の長さは「2048」を選択することができます。

「512」, 「1024」は十分安全とは言えません。

「2048」を推奨します。

Signature Algorithm

署名アルゴリズムを選択します。

- ver1.8.4 以前
「SHA-1」または「MD5」を選択することができます。
- ver1.8.5 ~ ver1.11.0
「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」, 「SHA-1」, 「MD5」のいずれかを選択することができます。
- ver1.12.0 ~ ver1.13.1
「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」, 「SHA-1」のいずれかを選択することができます。
- ver1.14.0 ~
「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」のいずれかを選択することができます。

「SHA-1」, 「MD5」は十分安全とは言えません。

「SHA-256」を推奨します。

Subject

Subject には以下の項目があります。

- Common Name
CA Name として、認証局名称を設定します。
- email
認証局管理者のメールアドレス
- Organizational Unit
一般には部署名を設定します。
- Organization
一般には企業名、組織名を設定します。
- Locality
市町村名を設定します。
- State or Province
都道府県名を設定します。
- Country
国名を設定します。
日本国内の場合は、「JP」とします。

有効期間

証明書有効期間（終了日時）を設定します。
設定できるのは、2005年～2035年の間になります。

パスフレーズ

パスフレーズ

パスフレーズは5文字以上30文字以下で入力してください。

失効リスト更新間隔

失効リスト更新間隔

失効リストの更新間隔日数を設定します。
0-4000日の間で指定します。

• ver1.9.2以降

0を指定した場合、次の更新（Next Update）は、CA証明書の有効期間の終了日時になります。

第7章 CA設定

. CA/CRL設定

この設定では、以下の項目が必須の設定項目になります。

バージョン(固定)
鍵長
Signature Algorithm
subject
・ Common Name
有効期間
パスフレーズ
失効リスト更新間隔

また、各項目に使用可能な文字は以下となります。

- ・ email
0-9, a-z, A-Z, -.@_
- ・ Common Name
制御コードを除く任意の半角文字
- ・ Organizational Unit/Organization/Locality/
State or Province/
ver1.8.4以前: 0-9, a-z, A-Z, -_
ver1.8.5以降: 0-9, a-z, A-Z, -_', .SPACE
- ・ Country
A-Z

各項目に入力後、「設定」ボタンを押してCA証明書を発行します。

CAの設定を一度おこなうと、以降、「CA/CRL」メニューを選択した場合、次の画面が表示されるようになります。



この画面では以下の操作をおこなえます。

CA証明書

CA/失効リストの表示

画面上部にある「CA」/「失効リスト」の選択ボタンを選んで「表示」ボタンを押すと、CAの内容または失効リストの内容が表示されます。

CAの削除

「削除」ボタンを押すと本装置で設定したCA証明書、CRL、各証明書を全て削除します。

設定情報の同期を設定している場合の注意

SLAVEでHTTPSサーバ証明書に「本装置の証明書」を設定している場合、SLAVEのCAの削除に失敗します。

CAの削除前にSLAVEのHTTPSサーバ証明書を変更して下さい。詳細については、「第8章 11. システム 9. 管理画面へのアクセス」を参照して下さい。

CA証明書の取得

CA証明書欄で「取り出し」ボタンをクリックすることによりCA証明書を取り出すことができます。この際、取り出す形式を PEM または DER から選択することができます。

失効リストの取得

失効リストの取得欄で「取り出し」ボタンをクリックすることによりCRLを取り出すことができます。

この際、取り出す形式を PEM または DER から選択することができます。

失効リストの更新

失効リストの更新欄で「更新」ボタンをクリックするとCRLが最新のものに置き換えられます。

・ver1.10.0以降

失効リスト更新間隔を、0-4000日の間で指定することができます。

デフォルト値は、CA証明書を発行した時に指定した値です。

0を指定した場合、次の更新 (Next Update) は、CA証明書の有効期間の終了日時になります。

失効リストが、失効リストの更新間隔で決められた日時よりも古い場合には、証明書自体が有効であっても証明書の認証は拒否されます。

失効リスト更新間隔で決められた期間中に一度以上、失効リストの更新をおこなうようにしてください。

また、RADIUS サーバに新しい失効リストを認識させるには、RADIUS (サービス) を再起動する必要があります。

証明書

ユーザ証明書、サーバ証明書の作成をおこないます。

先に「CA/CRL」メニューでCAが設定されている必要があります。

CAのメニュー「証明書」をクリックすると、現在作成されている証明書が一覧表示されます。



表示条件を選択することができます。「全て」を選択した場合は、全ての証明書が表示されます。「未失効」を選択した場合は、未失効の証明書のみが表示されます。

証明書の作成や失効などの操作をこの画面からおこなうことができます。

証明書一覧表示画面から「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。



証明書

バージョン

X.509のどのバージョンの証明書を発行するかを選択します。

- ~ ver1.13.1
バージョンは「1」または「3」を選択することができます。
- ver1.14.0 ~
バージョンは「3」を選択することができます。

鍵長

RSAの鍵の長さを選択します。

- ~ ver1.11.0
鍵の長さは「512」、「1024」、「2048」のいずれかを選択することができます。
- ver1.12.0 ~ ver1.13.1
鍵の長さは「1024」、「2048」のいずれかを選択することができます。
- ver1.14.0 ~
鍵の長さは「2048」を選択することができます。

「512」、「1024」は十分安全とは言えません。「2048」を推奨します。

Signature Algorithm

署名アルゴリズムを選択します。

- ver1.8.4 以前
「SHA-1」または「MD5」を選択することができます。
- ver1.8.5 ~ ver1.11.0
「SHA-512」、「SHA-384」、「SHA-256」、「SHA-1」、「MD5」のいずれかを選択することができます。
- ver1.12.0 ~ ver1.13.1
「SHA-512」、「SHA-384」、「SHA-256」、「SHA-1」のいずれかを選択することができます。
- ver1.14.0 ~
「SHA-512」、「SHA-384」、「SHA-256」のいずれかを選択することができます。

「SHA-1」、「MD5」は十分安全とは言えません。「SHA-256」を推奨します。

Subject

Subject には以下の項目があります。

- Common Name
CA Name として、認証局名称を設定します。
- email
認証局管理者のメールアドレス
- Organizational Unit
一般には部署名を設定します。
- Organization
一般には企業名、組織名を設定します。
- Locality
市町村名を設定します。
- State or Province
都道府県名を設定します。
- Country
国名を設定します。
日本国内の場合は、「JP」とします。

各項目に使用可能な文字は以下となります。

- E-mailAddress
0-9, a-z, A-Z, -.@_
- Common Name
制御コードを除く任意の半角文字
- Organizational Unit/Organization/Locality/
State or Province/
ver1.8.4 以前: 0-9, a-z, A-Z, -_
ver1.8.5 以降: 0-9, a-z, A-Z, -_', .SPACE
- Country
A-Z

有効期間

証明書有効期間の開始日時と終了日時を設定します。

終了日時は、CA 証明書の有効期間（終了日時）を超えることはできません。

日時は GMT(グリニッジ標準時)で指定します。

たとえば日本時間で 2006/12/31 23:59 まで有効にしたい場合には、「2006 年 12 月 31 日 14 時 59 分」と入力します。

パスフレーズ

パスフレーズ

パスフレーズは 5 文字以上 30 文字以下で入力してください。

X.509 証明書 v3 拡張 (RFC3280)

下記設定項目は、X.509v3 がサポートしている拡張機能になりますが、認証アプリケーションに依存した項目となりますので、本設定に関しては認証されるアプリケーションの仕様を確認の上、設定をおこなってください。

以下に、それぞれのパラメータの説明を記します。

Key Usage

証明書に含まれている公開鍵の使用目的を示します。KeyUsage には以下の項目があります。

- digitalSignature
デジタル署名の検証に利用できることを表しています。
- nonRepudiation
否認防止を目的としたデジタル署名の検証に利用できることを表しています。
- keyEncipherment
鍵を送信する場合に、鍵を暗号化して利用できることを表しています。
- dataEncipherment
データの暗号化に利用できることを表しています。
- keyAgreement
鍵交換で利用できることを表しています。
- keyCertSign
証明書の署名の検証に利用できることを表しています。
- cRLSign
失効リストの署名の検証に利用できることを表しています。

- encipherOnly
keyAgreement が指定されている場合のみ有効で、鍵交換をデータの暗号化でのみ利用できることを表しています。
- decipherOnly
keyAgreement が指定されている場合のみ有効で、鍵交換をデータの復号化でのみ利用できることを表しています。

Extended Key Usage

Key Usage より詳細に、証明書に含まれている公開鍵の使用目的を示します。

Extended Key Usage には以下の項目があります。

- serverAuth
TLS サーバ認証に利用できることを表しています。
- clientAuth
TLS クライアント認証に利用できることを表しています。
- codeSigning
コード署名のために利用できることを表しています。
- emailProtection
電子メールの保護のために利用できることを表しています。

CRL Distribution Points

失効リストの配布点を入力します。本装置から失効リストを配布することもできます。その場合は以下の URL を入力します。

http://(本装置のホスト名)/crl/crl.crl

Netscape 拡張

nsCertType

Netscape で使用される証明書のタイプを指定します。nsCertType には以下の項目があります。

- client
クライアント認証に利用できることを表しています。
- server
サーバ認証に利用できることを表しています。

- email
S/MIME のクライアント認証で利用できる
- objsign
Java 等のオブジェクトサインで利用できることを表しています。
- sslCA
SSL 認証局で利用できることを表しています。

- emailCA
S/MIME 認証局で利用できることを表しています。
- objCA
オブジェクトサイン認証局で利用できることを表しています。

nsComment

Netscape のコメントを示します。使用可能な文字は英数字およびハイフン("-)、アンダーバー("_")になります。

この設定では、以下の項目が必須の設定項目になります。

- バージョン
- 鍵長
- Signature Algorithm
- Subject
 - Common Name
- 有効期間
- パスフレーズ

バージョン 3 のサーバ証明書を作成する場合には、通常最低限以下を指定するようにします。

- Key Usage
 - digitalSignature
 - keyEncipherment
- Extended Key Usage
 - serverAuth

実際にどの Key Usage/Extended Key Usage が必須であるかは通信相手のソフトウェアに依存します。

各項目に入力後、「実行」ボタンを押して証明書を発行します。

発行可能な証明書の最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

証明書一覧表示画面において、「S/N」(シリアルナンバー)を押すと、次の証明書表示画面が表示されます。



この画面では次の操作がおこなえます。

証明書の取得

証明書を本装置からダウンロードします。取り出す形式と内容を指定して「取り出し」ボタンを押します。

形式

「PKCS#12」、「PEM」、「DER」から一つ選択します。

内容

「CA証明書・証明書・私有鍵」、「証明書・私有鍵」、「証明書」、「私有鍵」から一つ選択します。

PKCS#12 を選択した場合

証明書と私有鍵のどちらか一方のみは選択できません。

PEM, DER を選択した場合

証明書と私有鍵を同時に取り出すことはできません。それぞれ別々に取り出してください。

証明書の失効

プルダウンメニューで失効理由を選択して、「失効」ボタンを押すと、証明書が失効します。失効理由は以下の中から選択します。

- unspecified
理由を指定しません。
- keyCompromise
秘密鍵の漏洩などにより、証明書の信頼性がなくなったことを表します。
- CACompromise
CAの信頼性がなくなったことを表します。
- affiliation Changed
証明書の内容が変更されたことを表します。
- superseded
証明書が取り替えられたことを表します。
- cessationOfOperation
証明書がその目的では必要なくなったことを表します。
- removeFromCRL
失効リストから削除されたことを表します。

EAP-TLS 認証使用時に、失効させたクライアント証明書を RADIUS サーバに認識させるには、メニュー「CA/CRL」で失効リストの更新をおこなった上で RADIUS (サービス) を再起動する必要があります。

失効した証明書は取得できません。

第 8 章

管理機能

1. 基本情報

本装置の IP アドレスおよびデフォルトゲートウェイの設定をおこないます。

管理機能のメニュー「ネットワーク」から「基本情報」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。

基本情報		
Ether0	IPアドレス	192.168.0.254/24
	MTU	1500 編集
	通信モード	Auto
Ether1	IPアドレス	192.168.1.254/24
	MTU	1500 編集
	通信モード	Auto
Ether2	IPアドレス	192.168.2.254/24
	MTU	1500 編集
	通信モード	Auto
デフォルトゲートウェイ		編集

(RA-730 の設定画面です。)

Ether0 , Ether1 , Ether2

(RA-1300・RA-1200 は、Ether0 と Ether1 のみ)
インタフェースの設定を変更する場合は変更したいインタフェース欄の「編集」ボタンを押します。次の入力画面が表示されます。

基本情報

基本情報	
Ether0	
IPアドレス	192.168.0.254/24
MTU	1500
通信モード	<input checked="" type="radio"/> Auto <input type="radio"/> 10M Half <input type="radio"/> 10M Full <input type="radio"/> 100M Half <input type="radio"/> 100M Full <input type="radio"/> 1000M Full
設定	

IP アドレス

Ether ポートの IP アドレスとネットマスクを入力します。

ネットマスクは IP アドレスの後、' / ' (スラッシュ) に続けてビット数表記で入力します。例えば、IP アドレスが 192.168.1.10 で、ネットマスクがドット区切り表記で 255.255.255.0 であれば以下のように入力します。

入力例) 192.168.1.10/24

複数の Ethernet ポートに同一ネットワークに属するアドレスを 設定しないで下さい。正常に動作しないことがあります。

MTU

「Path-MTU-Black-HOLE」現象が発生した場合等は、この値を変更することで回避できます。通常は初期設定の 1500Bytes のままで利用してください。

通信モード

Ether ポートの通信速度・方式を選択します。

工場出荷設定では「自動」(オートネゴシエーション)となっていますが、必要に応じて通信速度・方式を選択してください。

デフォルトゲートウェイ

デフォルトゲートウェイ欄の「編集」ボタンを押すと次の入力画面が表示されます。

基本情報

基本情報	
デフォルトゲートウェイ	
設定	

デフォルトゲートウェイ

本装置のデフォルトゲートウェイとなる IP アドレスを入力してください。

各項目に入力後、「設定」ボタンをクリックして設定完了です。

設定はすぐに反映されます。

本装置のインタフェースのアドレスを変更した後は、設定画面にアクセスしているコンピュータの IP 設定もそれに合わせて変更し、変更した IP アドレスの設定画面に再ログインしてください。

2. スタティックルート

本装置のスタティックルートの設定をおこないません。

管理機能のメニュー「ネットワーク」から「スタティックルート」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。

No.	IPアドレス	ゲートウェイ	編集	削除
1	192.168.10.0/24	192.168.0.253	編集	削除

新規追加

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

スタティックルート新規追加

スタティックルート新規追加

IPアドレス

ゲートウェイ

設定

IPアドレス

あて先ホストまたはネットワークのIPアドレスを入力します。

あて先の範囲をネットマスクで指定します。

ネットマスクはIPアドレスの後、' / '(スラッシュ) に続けてビット数表記で入力します。例えば、IPアドレスが 192.168.1.0 で、ネットマスクがドット区切り表記で255.255.255.0の範囲であれば以下のように入力します。

入力例) 192.168.1.0/24

ホストを指定する場合は ' /32 ' は付けずに IP アドレスで指定します。

入力例) 192.168.1.1

ゲートウェイ

IPアドレス欄で指定したアドレスへ送信するパケットを中継する、ルータのアドレスを入力します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定はすぐに反映されます。

設定可能なスタティックルートの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

変更・削除

スタティックルート一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのエントリが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

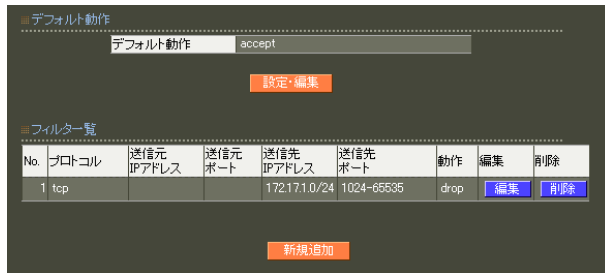
3. フィルタ

本装置はパケットフィルタリング機能を搭載しています。フィルタ機能を使うと、本装置が受信するパケットに制限を加えることができます。

フィルタは以下の情報に基づいて条件を設定することができます。

- ・ プロトコル(TCP/UDP/ICMP)
- ・ 送信元 / 送信先 IP アドレス
- ・ 送信元 / 送信先ポート番号

管理機能のメニュー「ネットワーク」から「フィルタ」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。

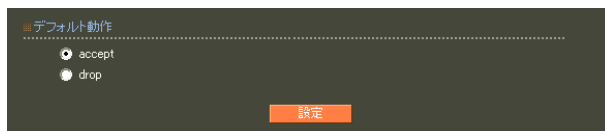


デフォルト動作

送受信されるパケットが、下のフィルター一覧のルールと全て一致しなかった場合のフィルタ動作が表示されています。

設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

デフォルト動作



accept

フィルタルールと一致しなかった時にパケットを通過させる場合に選択します。

drop

フィルタルールと一致しなかった時にパケットを破棄させる場合に選択します。

選択後「設定」ボタンをクリックして設定完了です。

設定はすぐに反映されます。

デフォルトを「drop」に変更する場合には、フィルター一覧で必要な通信が許可されていることを事前にご確認ください。特に本装置の設定画面へのアクセスがフィルタルールで許可されるように忘れずに設定してください。本装置が使用するポートには次のものがあります。

RADIUS認証ポート	UDP/(可変)
RADIUSアカウントングポート	UDP/(可変)
二重化・設定情報の同期	TCP/802 ~ 809
NTP	UDP/123
管理画面へのアクセス(HTTP)	TCP/80
管理画面へのアクセス(HTTPS)	TCP/443
ルート確認	UDP/33435 ~ 33435+(ttl*3)
SNMP	UDP/161
SNMP trap	UDP/162
DNS	UDP/53
LDAP	TCP/(可変)
SYSLOG	UDP/514
DHCP	UDP/67
切断要求	UDP/3799

フィルター一覧

フィルタルールが一行ずつ表示されています。本装置に送受信されるパケットはこの一覧の各行と上から順に比較され、最初に一致した行の動作がパケットに対して適用されます。どの行とも一致しなかった場合にはデフォルト動作が適用されます。

「新規追加」ボタンをクリックすると入力画面が表示されます。

フィルタ新規追加

No.

この入力内容を登録する場所を指定します。既に設定されているルールの最後にこのルールを追加する場合には、現在設定されているルールの数に1を加えた数を入力します。既にルールが登録されている番号を指定した場合には、今回作成するルールがその番号で設定され、既存のルールの指定された番号から下のルールは番号が一つずつ後ろにずれます。

プロトコル

フィルタリング対象とするプロトコルを any、tcp、udp、icmp の中から選択します。any を選択した場合は任意のプロトコルとマッチします。

送信元 IP アドレス

フィルタリング対象とする、送信元の IP アドレスを入力します。ホストアドレスのほか、ネットワークアドレスでの指定が可能です。

<入力例>

単一の IP アドレスを指定する：

192.168.253.19 (" /32 " は付けない)

ネットワーク単位で指定する：

192.168.253.0/24

送信元ポート

フィルタリング対象とする、送信元のポート番号を入力します。

開始ポートと終了ポートを指定することで、その間のポート番号範囲が指定されます。

特定のポート番号のみを指定する場合は開始ポートと終了ポートに同じポート番号を入力するか、開始ポートのみを指定して終了ポートを空欄にしてください。

ポート番号を指定するときは、プロトコルもあわせて選択する必要があります。

「icmp」または「any」のプロトコルを選択して、ポート番号を指定することはできません。

送信先アドレス

フィルタリング対象とする、送信先の IP アドレスを入力します。ホストアドレスのほか、ネットワークアドレスでの指定が可能です。

入力方法は、送信元 IP アドレスと同様です。

送信先ポート

フィルタリング対象とする、送信先のポート番号を入力します。

開始ポートと終了ポートで範囲を指定します。指定方法は送信元ポート同様です。

動作

フィルタリング設定にマッチしたときにパケットを破棄するか通過させるかを選択します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。

設定はすぐに反映されます。

設定可能なフィルタルールの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

変更・削除

フィルター一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのエントリが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

4. DNS

本装置が使用する DNS の設定をおこないます。

管理機能のメニュー「ネットワーク」から「DNS」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



The screenshot shows the DNS settings interface. At the top, there is a title bar with a hamburger menu icon and the text 'DNS'. Below this, there are two rows of input fields. The first row is labeled 'プライマリサーバ' (Primary Server) and contains the IP address '192.168.0.251'. The second row is labeled 'セカンダリサーバ' (Secondary Server) and is currently empty. At the bottom center of the form, there is an orange button with the text '設定・編集' (Settings/Edit).

設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。



The screenshot shows the DNS settings interface for editing. At the top, there is a title bar with a hamburger menu icon and the text 'DNS'. Below this, there are two rows of input fields. The first row is labeled 'プライマリサーバ' (Primary Server) and the second row is labeled 'セカンダリサーバ' (Secondary Server). Both input fields are currently empty. At the bottom center of the form, there is an orange button with the text '設定' (Settings).

プライマリサーバ
プライマリ DNS サーバの IP アドレスを入力します。

セカンダリサーバ
セカンダリ DNS サーバの IP アドレスを入力します。

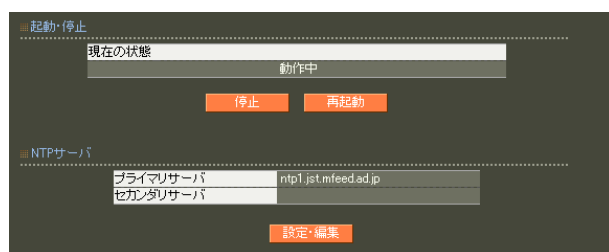
各項目に入力後、「設定」ボタンをクリックして設定完了です。
設定はすぐに反映されます。

5.NTP

本装置は、NTPクライアント/サーバ機能を持っています。

インターネットを使った時刻同期の手法の一つであるNTP(Network Time Protocol)を用いてNTPサーバと通信をおこない、時刻を同期させることができます。

管理機能のメニュー「ネットワーク」から「NTP」を選択すると、現在のサーバの状態と設定されている内容が表示されます。

**起動・停止**

現在NTPサーバが停止している場合には、「停止中」と表示されます。「起動」ボタンをクリックする事でNTPサーバが起動します。

NTPサーバが起動している場合には、「動作中」と表示されます。「停止」ボタンをクリックする事でNTPサーバは停止します。また、「再起動」ボタンをクリックするとNTPプロセスが再起動します。

NTPサーバ

設定されているNTPサーバが表示されています。設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

**プライマリサーバ**

プライマリNTPサーバのIPアドレスもしくはFQDNを入力します。

セカンダリサーバ

セカンダリNTPサーバのIPアドレスもしくはFQDNを入力します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

保存された設定内容を反映させるには、NTPサーバの再起動が必要になります。

「再起動」ボタンを押してください。

基準NTPサーバについて

基準となるNTPサーバには以下のようなものがあります。

- ・ntp1.jst.mfeed.ad.jp
- ・ntp2.jst.mfeed.ad.jp
- ・ntp3.jst.mfeed.ad.jp

6. SNMP

SNMP エージェントを起動すると、SNMP マネージャから本装置の MIB-II (RFC1213) の情報を取得することができます。

管理機能のメニュー「ネットワーク」から「SNMP」を選択すると、現在のサーバの状態と設定されている内容が表示されます。

The screenshot shows the SNMP management interface. At the top, there is a section for '起動・停止' (Start/Stop) with a status indicator '現在の状態' (Current Status) set to '動作中' (Running). Below this are '停止' (Stop) and '再起動' (Restart) buttons. The main section is 'SNMPサーバ' (SNMP Server) with a table of configuration items:

コミュニティ名	public
本装置の名称	RA-Series
本装置の説明	RADIUS_Appliance
本装置の設置場所	Location
本装置の管理者	Administrator
Trap送信先1	
Trap送信先2	
Trap送信先3	
Trap送信先4	
Trap送信先5	
CPU使用量閾値	90
メモリ空き容量閾値	16384

At the bottom right of the configuration table is a '設定・編集' (Settings/Edit) button.

起動・停止

現在 SNMP が停止している場合には、「停止中」と表示されます。「起動」ボタンをクリックする事で SNMP が起動します。

SNMP が起動している場合には、「動作中」と表示されます。「停止」ボタンをクリックする事で SNMP サーバは停止します。また、「再起動」ボタンをクリックすると SNMP プロセスが再起動します。

SNMP サーバ

管理者が設定変更できる項目について、現在の設定内容が表示されています。設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

SNMP

The screenshot shows the SNMP configuration form with the following fields and values:

- コミュニティ名: public
- 本装置の名称: RA-Series
- 本装置の説明: RADIUS_Appliance
- 本装置の設置場所: Location
- 本装置の管理者: Administrator
- Trap送信先1: (empty)
- Trap送信先2: (empty)
- Trap送信先3: (empty)
- Trap送信先4: (empty)
- Trap送信先5: (empty)
- CPU使用量閾値: 90
- メモリ空き容量閾値: 16384

A '設定' (Settings) button is located at the bottom right.

コミュニティ名

任意のコミュニティ名を指定します。ご使用の SNMP マネージャの設定に合わせて入力してください。

本装置の名称

本装置の管理上の名前を入力します。通常 FQDNなどを指定します。

本装置の説明

本装置についての説明を入力します。

本装置の設置場所

本装置の物理的な設置場所を指定します。

本装置の管理者

本装置管理者への連絡先などを指定します。

Trap 送信先 1 ~ 5

Trap の送信先 (SNMP マネージャ) の IP アドレスを設定します。

デフォルト値はありません。

未設定の場合は trap の送信はしません。

最大 5 個まで設定可能です。

CPU 使用率閾値

CPU 使用率の閾値を設定します。

単位は%で、有効な値は 10 以上 100 未満の整数となります。

デフォルト値はありません。

設定されない場合は、対応する trap は送信されません。

CPU 使用率は、設定内容及びご利用状況によって変わります。

運用中の実際の使用率を元に、適当と思われる閾値を設定してください。

メモリ空き容量閾値

メモリ 空き容量の閾値を設定します。

単位はkBで、有効な値は 1 以上の整数となります。

デフォルト値はありません。

設定されない場合は、対応する trap は送信されません。

メモリ空き容量については別項(後述)を参照して下さい。

メモリ空き容量は設定及びご利用状況によって変わります。

運用中の実際の空き容量を元に、適当と思われる閾値を設定してください。

各項目に使用可能な文字は以下となります。

- ・コミュニティ名、本装置の説明、本装置の設置場所
0-9, a-z, A-Z, -, _
- ・本装置の名称
0-9, a-z, A-Z, -, _, .
- ・本装置の管理者
0-9, a-z, A-Z, -, _, @, <, >, .

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存されます。

保存された設定内容を反映させるには、SNMP サーバの再起動が必要になります。

「再起動」ボタンを押してください。

メモリ空き容量

RA では、データの読み出し / 書き込み時にメモリをキャッシュという形で確保します。

一度キャッシュとして確保したデータは、メモリを介して処理が行われるため高速に動作します。

新たなデータの読み出し / 書き込み要求によりメモリ領域が必要とならない限り、キャッシュは解放されません。

(1.8.12 以降)

メモリ空き容量(csRASystemMemoryFree)には、このキャッシュが含まれます。

(1.8.11 以前)

メモリ空き容量(csRASystemMemoryFree)には、このキャッシュは含まれません。

したがって、連続して運用を続けると、メモリ空き容量(csRASystemMemoryFree)は逡減します。

SNMP trap

ユーザが設定した SNMP マネージャに SNMP trap を送信します。

送信される trap は以下の通りです。

- ・ SNMP サービスを起動した時

Cold Start trap を送信します。

- ・ CPU 使用率がユーザ定義の閾値を超えた時
- ・ CPU 使用率がユーザ定義の閾値以下になった時

CPU 使用率を一定時間毎(1秒)に測定します。前回の測定値が閾値以下で、今回の測定値が閾値より大きい場合に trap を送信します。測定値が閾値より大きくなったことがあり、その後の測定値が一定回数(10回)だけ連続して閾値以下の場合に trap を送信します。SNMP サービス起動直後に閾値より大きい場合は trap を送信します。閾値以下の場合には送信しません。

- ・ メモリ空き容量がユーザが定義した閾値より小さくなった時
- ・ メモリ空き容量がユーザが定義した閾値以上になった時

メモリ空き容量を一定時間毎(1秒)に測定します。前回の測定値が閾値以上で、今回の測定値が閾値より小さい場合に trap を送信します。測定値が閾値より小さくなったことがあり、その後の測定値が一定回数(10回)だけ連続して閾値以上の場合に trap を送信します。SNMP サービス起動直後に閾値より小さい場合は trap を送信します。閾値以上の場合には送信しません。

- ・ Ethernet インタフェースが link down した時
- ・ Ethernet インタフェースが link up した時

Ethernet インタフェースの link up/down に応じて trap を送信します。SNMP サービス起動直後に link down ならば trap を送信します。link up ならば送信しません。

- ・ 電源の状態が変わった時
(RA-1300 ・ RA-1200 のみ)

電源ユニットへの通電がなくなったり、電源ユニット自体が故障したりなど、注意が必要な状態になった場合に trap を送信します。また、注意が必要な状態から正常な状態に戻った場合にも trap を送信します。

- ・ RAID の状態が変わった時
(RA-1300 ・ RA-1200 のみ)

RAID で障害が発生した場合、リビルドが始まった場合、リビルドが終了した場合に trap を送信します。

CPU やメモリ、電源、RAID の状況は、GetRequest など取得できます。

例:

```
$ snmpwalk -v2c -c public 192.168.0.254 centurysys
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRASystemCPUUser.0 = INTEGER: 0
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRASystemCPUSystem.0 = INTEGER: 1
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRASystemCPUIdle.0 = INTEGER: 99
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRASystemMemoryTotal.0 = INTEGER: 4123252
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRASystemMemoryFree.0 = INTEGER: 4009080
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRAPowerStatus.0 = INTEGER: ok(1)
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRAPowerType.0 = INTEGER: type1(1)
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRARaidLdLevel.1 = INTEGER: raid1(2)
CS-RA-PRODUCT-MIB::csRARaidLdStatus.1 = INTEGER: ok(1)
```

7. DHCP (Ver 1.10.0 以降のみ)

ネットワークに接続するための情報 (IP アドレス など) を、DHCP を用いてクライアントに割り当てる (提供する) ことができます。

管理機能のメニュー「ネットワーク」から「DHCP」を選択すると、現在の DHCP サービスの状態、DHCP ネットワークの設定、および DHCP 固定割り当ての設定が表示されます。



起動・停止

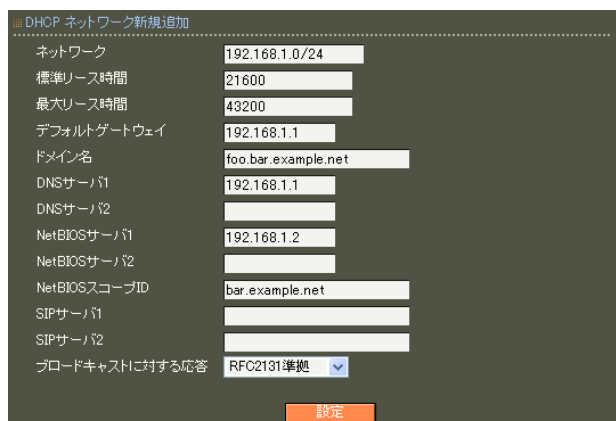
DHCP サービスの起動・停止・再起動を実行することが出来ます。

DHCP ネットワークが、どの Ethernet インタフェースのネットワークとも一致しない場合、DHCP サービスは起動しません。

DHCP ネットワーク

クライアントに割り当てるネットワークを定義します。設定可能なネットワークの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

「新規追加」をクリックすると、次の画面が表示されます。



ネットワーク (入力必須)
クライアントに割り当てるネットワーク・アドレスをプレフィックス表記 (A.B.C.D/M) で指定します。

「ネットワーク」のプレフィックス長は、「8」以上を設定してください。

「ネットワーク」は、他の「ネットワーク」と重複しないように設定してください。

標準リース時間 (入力必須)

IP アドレスの標準リース時間 (秒) を指定します。デフォルト値は、21600 (秒) です。

600-15552000 (秒) の間の整数値を指定します。最大リース時間以下の値を指定します。

最大リース時間 (入力必須)

IP アドレスの最大リース時間 (秒) を指定します。デフォルト値は、43200 (秒) です。

600-15552000 (秒) の間の整数値を指定します。標準リース時間以上の値を指定します。

デフォルトゲートウェイ (省略可能)

デフォルトゲートウェイを、IP アドレスで指定します。

「ネットワーク」に属する IP アドレスを入力します。

ドメイン名 (省略可能)

ドメイン名を FQDN で指定します。

最大長は、64 文字です。

DNS サーバ 1 (省略可能)

DNS サーバ 2 (省略可能)

DNS サーバを、最大 2 個まで、IP アドレスで指定します。

DNS サーバ 2 だけを指定することはできません。

NetBIOS サーバ 1 (省略可能)

NetBIOS サーバ 2 (省略可能)

NetBIOS ネームサーバ (WINS サーバ) を、最大 2 個まで、IP アドレスで指定します。

NetBIOS サーバ 2 だけを指定することはできません。

第8章 管理機能

ネットワーク

NetBIOS スコープ ID (省略可能)

NetBIOS スコープ ID を、FQDN 形式で指定します。
最大長は、64 文字です。

SIP サーバ 1 (省略可能)

SIP サーバ 2 (省略可能)

SIP サーバを、最大 2 個まで、IP アドレスまたは FQDN で指定します。

SIP サーバ 2 だけを、指定することはできません。

SIP サーバ 1 と SIP サーバ 2 は、同じ形式 (IP アドレスまたは FQDN) で入力します。

FQDN の場合、最大長は 64 文字です。

ブロードキャストに対する応答 (省略可能)

broadcast bit が「1」である DHCP パケットを受信した場合の動作を切り替えるために指定します。

「RFC2131 準拠」または「RFC2131 非準拠」を指定します。

省略した場合は「RFC2131 準拠」が指定されたものとして扱われます。

「RFC2131 準拠」を指定した場合、broadcast bit が「1」である DHCP パケットを受信した時の動作は RFC 2131 に準拠します。

応答 Ethernet フレームの宛先 MAC アドレスは、ブロードキャスト (FF:FF:FF:FF:FF:FF) です。

「RFC2131 非準拠」を指定した場合、broadcast bit が「1」である DHCP パケットを受信した時の動作は RFC 2131 に準拠しません。

応答 Ethernet フレームの宛先 MAC アドレスはユニキャストです。

なお、宛先 IP アドレスは、常にリミテッド・ブロードキャスト (255.255.255.255) です。

DHCP リースアドレス

開始アドレス	終了アドレス	削除
192.168.1.100	192.168.1.199	<input type="button" value="削除"/>

DHCP クライアントに割り当てる IP アドレス (リースアドレス) の範囲を、開始アドレスと終了アドレスの組で指定します。

アドレス範囲は、「DHCP ネットワーク」の設定に付与されます。

設定可能なリースアドレスの最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

DHCP リースアドレス新規追加

開始アドレス	192.168.1.100
終了アドレス	192.168.1.199

開始アドレス (入力必須)

終了アドレス (入力必須)

DHCP クライアントに割り当てる IP アドレス (リースアドレス) の範囲を、開始アドレスと終了アドレスの組で指定します。

設定の変更は出来ません。変更する場合は、削除・追加を順次行ってください。

開始アドレスは、終了アドレス以下となるように指定します。

開始アドレス・終了アドレス共に、ネットワークに属するアドレスを指定します。

開始アドレス～終了アドレスの間に「デフォルトゲートウェイ」を含まないように設定します。

開始アドレス～終了アドレスで指定される IP アドレス範囲は、他の IP アドレス範囲と重複しないように設定します。

開始アドレス～終了アドレスで指定される IP アドレス範囲に「DHCP 固定割り当て」で定義された IP アドレスを含んでいても問題ありません。

「固定割り当て」で定義された IP アドレスは「固定割り当て」で定義された MAC アドレス以外のクライアントには割り当てられません。

DHCP 固定割り当て

DHCP クライアントの MAC アドレスに対して、特定の IP アドレスを割り当てることができます。

特定の MAC アドレスに割り当てた IP アドレスが、別の DHCP クライアントに割り当てられることはありません。

設定可能な DHCP 固定割り当ての最大数は「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。



DHCP 固定割り当て新規追加	
MAC アドレス	01:23:45:67:89:AB
IP アドレス	192.168.1.201
設定	

MAC アドレス (入力必須)

DHCP クライアントの MAC アドレスを指定します。英数字 (A ~ F, a ~ f, 0 ~ 9) とコロン(:)のみ入力することができます。

入力例) 01:23:45:67:89:AB

IP アドレス (入力必須)

固定的に割り当てる IP アドレスを指定します。「DHCP リースアドレス」に、含まれない IP アドレスでも問題ありません。

「DHCP ネットワーク」に含まれない IP アドレスを指定した場合、当該 IP アドレスがクライアントに割り当てられることはありません。

1. 内蔵時計

本装置の時刻を合わせます。

管理機能のメニュー「システム」から「内蔵時計」を選択すると、現在時刻が表示されます。



時刻を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。



内蔵時計

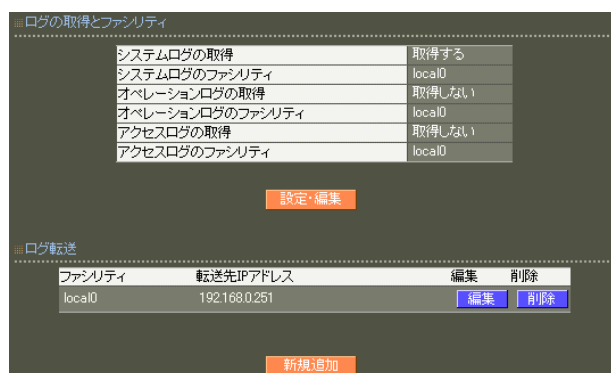
24時間単位で時刻を設定してください。

「実行」ボタンをクリックして設定完了です。

2. ログ

ログに関する設定をします。
また、取得した各ログの転送先を設定します。

管理機能のメニュー「システム」から「ログ」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



ログの取得とファシリティ

現在の設定内容が表示されています。
設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。

ログの取得とファシリティ変更



システムログの取得

システムログについて記録に残すかどうかを設定します。

システムログのファシリティ

システムログを「取得する」にした場合、システムログが出力されるファシリティを指定します。
プルダウンから選択してください。

オペレーションログの取得

オペレーションログについて記録に残すかどうかを設定します。

オペレーションログのファシリティ

オペレーションログを「取得する」にした場合、オペレーションログが出力されるファシリティを指定します。
プルダウンから選択してください。

アクセスログの取得

アクセスログについて記録に残すかどうかを設定します。

アクセスログのファシリティ

アクセスログを「取得する」にした場合、アクセスログが出力されるファシリティを指定します。
プルダウンから選択してください。

各項目に入力後、「設定」ボタンをクリックして設定完了です。
設定はすぐに反映されます。

ログ転送

各ファシリティ毎のログの転送先が一覧表示されています。

この画面で設定をおこなうシステムログ・オペレーションログ・アクセスログに加え、RADIUSサーバのメニューで設定した認証ログ、アカウントینگログも転送先の指定に従って転送されます。

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。

ログ転送新規追加



ファシリティ

転送したいログのファシリティを指定します。
プルダウンから選択してください。

転送先 IP アドレス

ログを転送するサーバを指定します。
指定したマシン上で syslog サーバを動かす必要があります。

転送先ポート

転送先の UDP ポート番号を指定します。
未指定の場合は、514 が指定されたものとします。

各項目に入力後、「設定」ボタンをクリックして設定完了です。
設定はすぐに反映されます。

設定可能な転送先 IP アドレスの最大数は
「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください。

変更・削除

ログ転送一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのエントリが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

本装置に記録できるログの数には上限があります
（「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください）。
継続的にログを取得される場合は外部の syslog
サーバにログを送信するようにしてください。

. システム

3. 設定情報の保存・復帰

本装置の設定情報の保存、および保存した設定情報の復帰をおこないます。

管理機能のメニュー「システム」から「設定情報の保存・復帰」を選択します。



「設定の保存・復帰画面」にて設定情報を表示・更新する際、本装置のRSAの秘密鍵を含む設定情報等がHTTPSを使用しない場合ネットワーク上に平文で流れます。

設定の保存・復帰は、ローカル環境もしくはVPN環境等、セキュリティが確保された環境下でおこなう事をお勧めします。

設定情報の保存

文字コード

設定を保存するときは、文字コードを選択してください。

「保存」ボタンを押すと以下の画面が表示されます。



「バックアップファイルのダウンロード」のリンクから、設定をテキストファイルで保存してください。

保存したテキストファイルには、本装置の設定がすべて記述されています。

このテキストファイルの内容を直接書き換えて設定を変更することもできます。

また、設定ファイルの一番上には次の情報が表示されますので、サポートへのお問い合わせの際にお伝えください。

- Version :
RAを表す文字列・バージョン番号・ビルド番号・ファームの作成日付
- Serial Number :
本装置のシリアル番号
- User :
設定ファイルを取り出したユーザ名
- Address :
設定ファイルを取り出したクライアントのIPアドレス
- Date :
設定ファイルを取り出した日時

設定情報の復帰

設定ファイル

「参照」をクリックして、保存しておいた設定情報ファイルを選択します。

利用可能な文字コードは、「EUC-JP」または「Shift_JIS」です。

「復帰」ボタンをクリックすると、設定の復帰がおこなわれます。



設定の復帰を実施した直後に本装置にアクセスした場合に、Webの認証画面が繰り返し表示される場合があります。

このような場合にはまだ設定の復帰が完了していません。しばらく待ってから再度アクセスするようにしてください。

復帰した時点で設定情報ファイルの内容が不正であった場合には復帰されません。

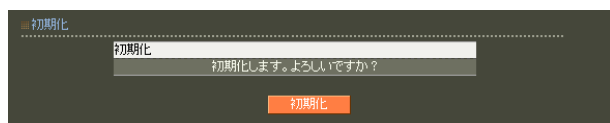
(RA ver1.8.5 以前のみ該当)

例えばRADIUSサーバ証明書の有効期限が切れているような場合には、不正な設定情報ファイルと見なされます。

4. 設定情報の初期化

本装置の設定を全てリセットし、工場出荷時の設定に戻します。

管理機能のメニュー「システム」から「設定情報の初期化」を選択します。



初期化

「実行」ボタンを押すと初期化が実行され、本体の全設定が工場出荷設定に戻ります。

設定の初期により全ての設定が失われますので、念のために設定情報の保存を実行しておくようにしてください。

5. ファームのアップデート

本装置のファームウェアのアップデートをおこないます。

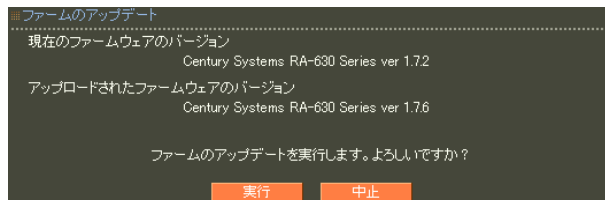
管理機能のメニュー「システム」から「ファームのアップデート」を選択します。



ファームのアップデート

「参照」ボタンを押して、弊社ホームページからダウンロードしてきたファームウェアファイルを選択し、「実行」ボタンを押してください。

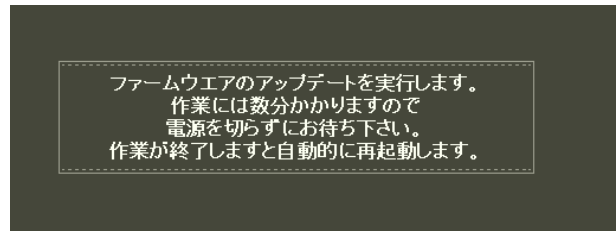
その後、ファームウェアを本装置に転送します(転送が終わるまではしばらく時間がかかります)。転送完了後に、次のアップデートの確認画面が表示されます。



バージョンが正しければ「実行」ボタンを押してください。

3分以内に「実行」ボタンが押されなかった場合、ファームは破棄されます。

「実行」ボタンを押した場合は次の画面が表示され、ファームウェアの書き換えが始まります。



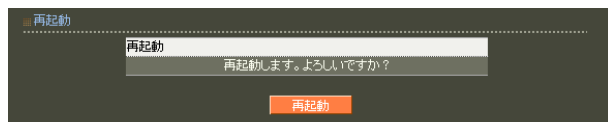
ファームウェアの書き換え後に本装置が自動的に再起動されて、アップデートが完了します。

アップデート実行中は、本装置へのアクセスはおこなわないでください。アップデート失敗の原因となることがあります。

6. 再起動

本装置を再起動します。

管理機能のメニュー「システム」から「再起動」を選択します。



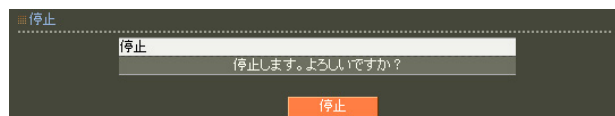
再起動

「実行」ボタンをクリックすると、再起動します。

7. 停止

本装置を停止状態にします。

管理機能のメニュー「システム」から「停止」を選択します。



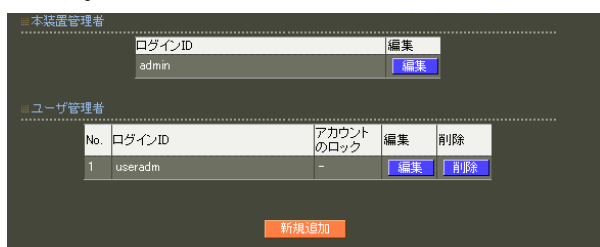
停止

「停止」ボタンをクリックすると、本装置は停止状態になります。

8. 管理者

管理者がログインする際のユーザー名、パスワードを設定します。装置のセキュリティ確保のために推測されにくいパスワードを設定してください。

管理機能のメニュー「システム」から「管理者」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



本装置管理者

本装置管理者のログイン ID が表示されています。

設定を変更する場合は「編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。新しいログイン ID とパスワードを入力してください。

本装置管理者変更



ログイン ID

使用可能な文字は英数字および以下の記号と空白文字になります。

!"#\$%&'()*+-. /<=>?@[]^_`{|}~

パスワード

使用可能な文字は、ログイン ID の入力可能文字と以下の記号になります。

,:;¥

「設定」ボタンをクリックして設定完了です。次のログインからは、新しく設定したユーザー名とパスワードを使います。

ユーザ管理者

本装置管理者の他に、RADIUS のユーザ情報の設定管理のみをおこなえるユーザ管理者を設定することができます。

「新規追加」をクリックすると入力画面が表示されます。ユーザ管理者のログイン ID とパスワードを入力します。

ユーザ管理者新規追加



ログイン ID

使用可能な文字は英数字および以下の記号と空白文字になります。

!"#\$%&'()*+-. /<=>?@[]^_`{|}~

パスワード

使用可能な文字は、ログイン ID の入力可能文字と以下の記号になります。

,:;¥

ロック

通常は「ロックしない」を選択します。一時的にユーザ管理者がログインできないように設定したい場合に、「ロックする」を選択するようにします。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押すと設定内容が保存され、一覧表示画面に戻ります。設定はすぐに反映されます。

設定可能なユーザ管理者の最大数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

変更・削除

ユーザ管理者一覧に登録されている設定を編集または削除したい場合には、そのエントリが表示されている行の「編集」ボタン、「削除」ボタンを押すことで実行できます。

9. 管理画面へのアクセス

本装置の管理画面へアクセスするために必要な設定をおこないます。

管理機能のメニュー「システム」から「管理画面へのアクセス」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。



HTTPSサーバ証明書

「本装置の証明書を使用する」欄の「表示」ボタンはHTTPSサーバ証明書で、「本装置の証明書を使用する」が設定されている場合にのみ表示されます。このボタンを押すと証明書の内容が表示され、証明書の取得等ができます。証明書の詳細については「第7章 CA設定 II. 証明書」を参照してください。

設定を変更する場合は「設定・編集」ボタンを押すと、次の入力画面が表示されます。



ポート番号変更

HTTP/HTTPSによるアクセスを有効にするか無効にするかを選択します。必ずどちらかは有効にしておく必要があります。

HTTPSサーバ証明書

デフォルトで設定されている証明書、本装置のCAで発行したサーバ証明書、外部のCAで発行されたサーバ証明書のいずれを使用するか選択します。

「本装置の証明書を使用する」を選択した場合には、証明書のシリアルナンバを入力して証明書を指定してください。シリアルナンバは、16進数で入力します。

「外部証明書を使用する」を選択する場合は、事前に証明書をインポートしておく必要があります。

「デフォルトの証明書を使用する」は、初期設定のための一時的な利用を想定しています。

できるだけ本装置で発行した証明書または外部証明書を使用してください。

証明書の鍵長・Signature Algorithm は、それぞれ 2048・SHA-256 を推奨します。

各項目に入力後、「設定」ボタンをクリックして設定完了です。

設定はすぐに反映されます。

10.HTTPS サーバ証明書

外部のCAで発行された証明書を、HTTPSサーバ証明書として使用するために必要な設定をおこないます。

管理機能のメニュー「システム」から「HTTPSサーバ証明書」を選択すると、現在設定されている内容が表示されます。

HTTPS サーバ証明書

「設定」ボタンを押すと入力画面が表示されます。

証明書・私有鍵などを入力します。

削除

インポートした証明書・私有鍵を削除したい場合に「削除する」を選択します。

パスフレーズ

私有鍵が暗号化されている場合にそのパスフレーズを入力します。

私有鍵

サーバ証明書に対応する私有鍵を入力します。必須です。

サーバ証明書

HTTPSサーバ証明書として使用したい証明書を入力します。

私有鍵に対応している必要があります。必須です。

CA 証明書 1 ~ CA 証明書 5

サーバ証明書を発行したCAの証明書をCA証明書1に入力します。

CA証明書1を発行したCAの証明書をCA証明書2に入力します。

以下同様です。

証明書・私有鍵はPEMファイルのみが入力可能です。

Ver1.11.0時点では、

公開鍵暗号方式としてRSA(鍵長2048bitまたは4096bit)のみがサポートされています。

署名方式はSHA-256, SHA-384, SHA-512のみがサポートされています(CA証明書はSHA-1も可)。

サーバ証明書・CA証明書1~CA証明書5のいずれかは、自己署名証明書(ルートCA)でなければなりません。

11. 設定情報の同期

概要

RAでは、元となるRAに対しておこなった設定情報の変更を、他のRAに同期させることができます。本機能によるRA間での通信は暗号化されます。

用語の解説

本機能では、以下の用語を使用します。

同期装置

設定情報の同期機能を用いて設定情報を共有する本装置を同期装置と呼びます。

同期コンフィグ

同期装置間で共有される設定情報です。1つの同期コンフィグは、1台のMASTERと1台のSLAVEで共有されます。

同期システム

同期コンフィグおよび同期装置によって構成される系です。各同期装置は、ただ1つの同期システムに属することができます。

親子連携機能

1つの同期システムに、複数の同期コンフィグを含む機能です。

装置種別

同期をおこなう本装置のうち、設定の元となる機器をMASTER、それ以外をSLAVEと呼びます。

親、子

親子連携機能における、MASTERを親、SLAVEを子と呼びます。

親子連携機能が「有効」「無効」の場合の、構成の違いおよび操作上の注意点は下記のとおりです。

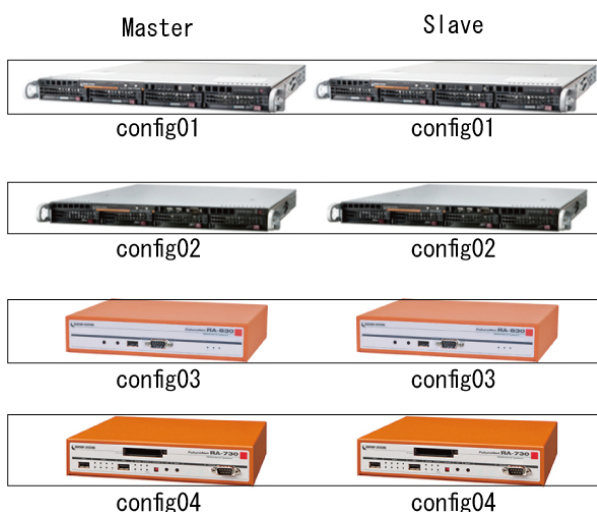
親子連携機能が無効

- ・1つの同期コンフィグ
- ・1台のMASTER、1台のSLAVE
- ・CAは1つ

CAに関連する操作(ユーザ証明書を含む証明書の発行・失効やRADIUSユーザファイル読み込みなど)は基本的にMASTERで行います。MASTERが存在しない状態ではこれらの操作をおこなうことができません。

CAに関連しない操作(RADIUSユーザの追加など)についても、基本的にはMASTERでおこないます。しかしMASTERが存在しない状態、または、MASTERとの通信が途切れていた場合でも、SLAVEで設定・変更など操作は可能です。ただし、その場合には、同期をおこなうRA間での設定情報の同一性は保証されません。

下記は、親子連携機能が無効な状態の同期システムの構成例です。



RA-1300とRA-1200の二重化・同期はサポートしていません。但し、RA-1200からRA-1300へのリプレイス等の一時的な同期処理は可能です。

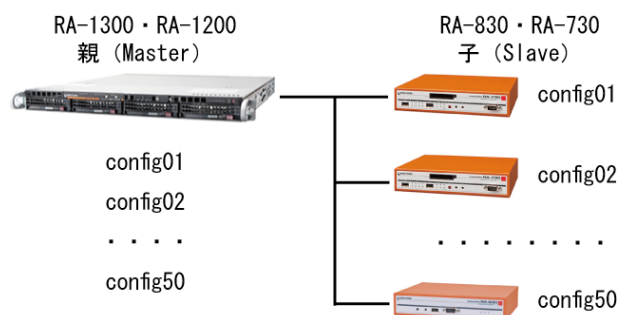
RA-830とRA-730の二重化・同期はサポートしていません。但し、RA-730からRA-830へのリプレイス等の一時的な同期処理は可能です。

親子連携機能が有効

- ・複数の同期コンフィグ(最大50まで)
- ・1台の親、複数台の子
- ・CAは1つ(同期システム全体)
- ・1つの同期コンフィグを2台の同期装置で使用(1台の親と1台の子)
- ・親は複数の同期コンフィグ、子は1つの同期コンフィグを保有

親子連携機能が有効の場合の操作上の注意点は、「付録G 親子連携」を参照してください。

下記は、親子連携機能が有効な状態の同期システムの構成例です。



同期構成におけるファームウェア更新

同期構成におけるファームウェア更新については、「付録F 同期・二重化構成におけるファームウェア更新手順」を参照してください。

同期構成における時刻同期

同期構成における各装置の時刻同期を行ってください。時刻同期にはNTP機能を利用することが可能です。

同期可能な設定情報・操作は下記の表のとおりです。

同期する場合でも、各設定項目によって動作条件が異なります。表中の印の意味を次に示します。

- 印：同期する。
- 印：同期する。親のみで実行可能。
- *印：同期する。Master 動作時のみ実行可能。
- 印：同期する。Master のみ実行可能。
- 印：二重化の設定に従う。

表．設定項目一覧(1/3)

(次ページへ続く)

同期処理			階層1	階層2	階層3 (各設定項目)
親子連携無効 (同期する)	親子連携有効	親子連携有効範囲			
同期しない	同期しない		RADIUS	サーバ	起動・停止
		同期システムで共有			基本情報
同期しない	使用不可				二重化
		同期システムで共有			アトリビュート
		同期コンフィグ毎			アドレスプール
		同期コンフィグ毎			クライアント
	使用不可				ActiveDirectory
	使用不可				LDAP
	使用不可				レルム
		同期システムで共有			ログ
		同期コンフィグ毎			ユーザプロファイル
		同期コンフィグ毎			ユーザ基本情報
		同期コンフィグ毎			認証アトリビュート
		同期コンフィグ毎		応答アトリビュート	
		同期コンフィグ毎		グループID	
		同期コンフィグ毎		証明書	
*		同期コンフィグ毎		ユーザ	
		同期コンフィグ毎		ユーザ(証明書の発行)	
	使用不可			ユーザ(個別設定)	
	使用不可			AD ユーザ	
*		同期コンフィグ毎		LDAP ユーザ	
*		同期コンフィグ毎		ファイル読み込み (証明書の発行以外)	
	同期しない			ファイル読み込み (証明書の発行)	
同期しない	同期しない			ユーザ検索	
*		同期コンフィグ毎		ユーザリセット	

表 . 設定項目一覧(2/3)

(次ページへ続く)

同期処理			階層1	階層2	階層3 (各設定項目)
親子連携無効 (同期する)	親子連携有効	親子連携有効範囲			
*		同期システムで共有	CA	CA/CRL	新規作成
*		同期システムで共有			削除 ()
*		同期システムで共有			失効リストの更新
同期しない	同期しない				証明書の取得
同期しない	同期しない				失効リストの取得
*		同期システムで共有 同期コンフィグ毎		証明書	発行
同期しない	同期しない				取得
*		同期システムで共有			失効
同期しない	同期しない			ネットワーク	基本情報
同期しない	同期しない				スタティックルート
同期しない	同期しない		フィルタ		
同期しない	同期しない		DNS		
同期しない	同期しない		NTP		
同期しない	同期しない		SNMP		
同期しない	同期しない		DHCP		
同期しない	同期しない		内蔵時計		
同期しない	同期しない		ログ		
同期しない	同期しない		設定情報の保存・復帰		
同期しない	同期しない		設定情報の初期化		
同期しない	同期しない		ファームのアップデート		
同期しない	同期しない		再起動		
同期しない	同期しない		停止		
同期しない	同期しない		管理者 (本装置管理者)		
同期しない	使用不可		管理者 (ユーザ管理者)		
同期しない	同期しない		管理画面へのアクセス		
同期しない	同期しない		HTTPSサーバ証明書		
同期しない	同期しない		設定情報の同期 (システム)		
同期しない	同期しない		設定情報の同期 (同期コンフィグ)		
同期しない	同期しない		設定情報の同期 (同期装置)		
同期しない	同期しない		設定情報の同期 (一括同期)		
		同期コンフィグ毎	設定情報の同期 (強制同期)		
		使用不可	設定情報の同期 (設定取得)		
		同期コンフィグ毎	設定情報の同期 (ログ同期)		
		同期コンフィグ毎	設定情報の同期 (ログ取得)		
		同期コンフィグ毎	設定情報の同期 (RADIUSサーバ起動・停止)		

「CA CA/CRL 削除」

SLAVE(または子)でHTTPSサーバ証明書に「本装置の証明書」を設定している場合、SLAVE(または子)のCAの削除に失敗します。CAの削除前にSLAVE(または子)のHTTPSサーバ証明書を変更して下さい。詳細については「第8章 11. システム 9. 管理画面へのアクセス」を参照して下さい。

システム

表. 設定項目一覧(3/3)

同期処理			階層1	階層2	階層3 (各設定項目)
親子連携無効 (同期する)	親子連携有効	親子連携有効範囲			
		同期コンフィグ毎	運用機能	ユーザ情報	ログイン情報
		同期コンフィグ毎			強制ログアウト
		同期コンフィグ毎			一括ログアウト
同期しない	使用不可				ADユーザ情報
同期しない	同期しない			ログ情報	システムログ
同期しない	同期しない				オペレーションログ
同期しない	同期しない				アクセスログ
		同期コンフィグ毎			認証ログ
		同期コンフィグ毎			アカウントングログ
同期しない	同期しない			ネットワーク テスト	到達性確認
同期しない	同期しない				ルート確認
同期しない	同期しない				パケットキャプチャ
同期しない	同期しない				名前解決確認
同期しない	同期しない				システム情報
同期しない	同期しない			サポート情報	DHCPリース情報
同期しない	同期しない				サポート情報

第8章 管理機能

. システム

「設定情報の同期」機能の設定をおこないます。

管理機能メニュー「システム」から「設定情報の同期」を選択すると、現在の設定内容が表示されます。

設定情報の同期

設定情報の同期	同期する
RA システム名	ra-system
RA 本装置名	ra-master
装置種別	MASTER

設定・編集

同期コンフィグ一覧

コンフィグ名	編集	削除
sample-config	編集	削除

同期装置一覧

コンフィグ名	同期装置名	IP アドレス	同期装置種別	削除
sample-config	ra-slave	192.168.0.1	SLAVE	削除

同期実行一覧

コンフィグ名	一括同期	強制同期	設定取得	ログ同期	ログ取得	RADIUS
sample-config	実行	実行	実行	実行	実行	起動 再起動 停止

設定情報の同期

同期をおこなうRA間でのシステム名・本装置名が表示されます。

同期コンフィグ一覧

設定を共有するためのコンフィグファイルの一覧が表示されます。

同期装置一覧

同期をおこなうRAの一覧が表示されます。

同期実行一覧

必要に応じて実行します。

本機能は、「設定情報の同期」を「同期する」または「親子連携」に設定したMasterにのみ表示されます。

設定情報の同期機能の設定

設定情報の同期

「設定・編集」ボタンをクリックします。

設定情報の同期

設定情報の同期

設定情報の同期 同期しない 同期する 親子連携

RA システム名

RA 本装置名

装置種別 MASTER SLAVE

設定

設定情報の同期

- 同期しない
設定情報の同期を行わない場合に選択します。
- 同期する
設定情報の同期を行う場合に選択します。
- 親子連携
親子連携を使用する場合に選択します。

RA システム名

同期をおこなうRA間でのシステム名を設定します (最大20文字)。
使用可能な文字は0-9, a-z, A-Z, -(0x2c), _(0x5f)です。

RA 本装置名

同期をおこなうRA間での本装置名を設定します (最大20文字)。
使用可能な文字は0-9, a-z, A-Z, -(0x2c), _(0x5f)です。

装置種別

本装置が、同期をおこなうRA間でMASTERとなるかSLAVEとなるかを選択します。
親子連携機能を使用する場合、RA-1300・RA-1200をMASTER、RA-830・RA-730をSLAVEに設定してください。RA-1300・RA-1200をSLAVE、RA-830・RA-730をMASTERに設定することはできません。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押して本機能の設定を完了します。

同期コンフィグの設定

同期コンフィグ一覧

「新規追加」ボタンをクリックします。既に作成されている設定を編集する場合は、「編集」ボタンをクリックします。「設定情報の同期」で「親子連携」を選択した場合には、「編集」ボタンは表示されません。

同期コンフィグ新規追加

「設定情報の同期」で、「同期しない」または「同期する」を選択した場合は、下記の画面が表示されます。



同期コンフィグ 新規追加

コンフィグ名

処理タイミング 即時実行 一括処理

設定

「設定情報の同期」で、「親子連携」を選択した場合は、下記の画面が表示されます。



同期コンフィグ 新規追加

コンフィグ名

設定

コンフィグ名

共有する設定情報の名前を設定します（最大20文字）。編集の場合は変更できません。

使用可能な文字は0-9, a-z, A-Z, -(0x2c), _ (0x5f)です。

処理タイミング

同期処理をおこなうタイミングを設定します。

同期を設定操作ごとにおこなう場合は「即時実行」、同期を設定操作ごとにおこなわず、後にまとめておこなう場合は「一括処理」を選択します。

各項目に入力後、「設定」ボタンを押して同期コンフィグの設定を完了します。

削除

同期コンフィグを削除する場合は、「削除」ボタンをクリックして削除してください。

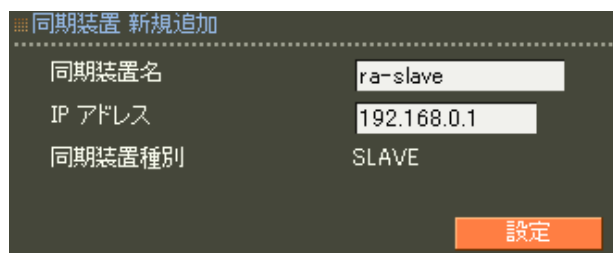
削除する同期コンフィグに同期装置が設定してある場合は、先に同期装置一覧を削除してください。

同期装置の設定

同期装置一覧

「新規追加」ボタンをクリックします。

同期装置新規追加



同期装置名	ra-slave
IP アドレス	192.168.0.1
同期装置種別	SLAVE

設定

本装置の装置種別を選択しなかった場合は、同期装置種別も選択可能になります。



同期装置名	ra-slave
IP アドレス	192.168.0.1
同期装置種別	<input type="radio"/> MASTER <input checked="" type="radio"/> SLAVE

設定

同期装置名

同期をおこなうRAの名前を設定します（最大20文字）。

使用可能な文字は0-9, a-z, A-Z, -(0x2c), _ (0x5f)です。

IPアドレス

同期をおこなうRAのIPアドレスを指定します（IPv4形式）。

同期装置種別

本装置が、同期をおこなうRA間でMASTERとなるかSLAVEとなるかを選択します。

本装置と同期をおこなう対向装置の両方の入力済みでしたら、「設定」ボタンを押して設定を完了します。

削除

同期装置を削除する場合は、「削除」ボタンをクリックして削除してください。

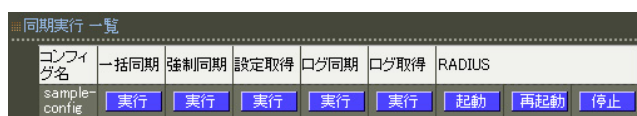
同期実行の設定

同期実行一覧

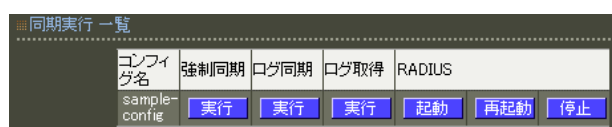
ここでは一括同期の実行や、対向装置の起動・停止等がおこなえます。

下記画面は、「設定情報の同期」を「同期する」に設定した **Master** にのみ表示されます。

「RADIUSサーバの二重化」「設定情報の同期」の両方が設定されている場合は、[ログ同期]と[ログ取得]が追加表示され、有効になります。



下記画面は、「設定情報の同期」を「親子連携」に設定した **Master** にのみ表示されます。



コンフィグ名

「同期コンフィグ一覧」で作成したコンフィグ名が表示されます。

一括同期

同期コンフィグの設定で処理タイミングに「一括処理」を選択している場合、クリックすると同期を終えていない情報の同期を実行します。

「実行」ボタンをクリックして同期を実行します。

強制同期

MASTERとSLAVEが異なる設定をしている場合、MASTERの設定情報をSLAVEの設定情報に上書きし、強制同期させます。

「実行」ボタンをクリックして同期を実行します。

設定取得

MASTER-SLAVE間で通信ができない状態のままSLAVE側で設定をおこなうと、MASTER-SLAVE間で設定の不一致が発生します。このような場合にMASTERはSLAVEの設定情報を取得し反映させることができます。

「実行」ボタンをクリックして設定情報を取得します。

「設定取得」で「RADIUS」メニュー「サーバ」に関する設定（基本情報、二重化、アトリビュート、アドレスプール、クライアント、ActiveDirectory、LDAP、ログ）を変更した場合、設定内容を有効にするためにはMASTER側RADIUSの再起動が必要です。

ログ同期

本ボタンが実行されると、対向のRAへログイン情報、認証ログ、アカウントングログが送信されます。ログイン情報にはアドレスプールの情報も含まれます。送信した場合には、対向のRAが持つログイン情報、認証ログ、アカウントングログはそれぞれ破棄されま

ログ取得

本ボタンが実行されると、対向のRAからログイン情報、認証ログ、アカウントングログが取得されます。ログイン情報にはアドレスプールの情報も含まれます。取得した場合には、自分自身が持つログイン情報、認証ログ、アカウントングログはそれぞれ破棄されま

RADIUS

本装置がMASTERである場合、SLAVEのRADIUSの起動・停止・再起動をMASTER側から指示することができます。各ボタンをクリックして動作を実行してください。

本機能により「RADIUS」メニュー「サーバ」に関する設定（基本情報、二重化、アトリビュート、アドレスプール、クライアント、ActiveDirectory、LDAP、ログ）を変更した場合、設定内容を有効にするためにはSLAVE側RADIUSの再起動が必要です。

同期の確認

同期が正常におこなわれているかは、「運用機能」メニュー「システム情報」の「システム情報」で確認してください。

第9章

運用機能

1. ログイン情報

現在ログインしているユーザ名を表示します。

運用機能のメニュー「ユーザ情報」から「ログイン情報」を選択します。

以下より説明する、各設定画面は、全て同画面で表示されます。

ログイン情報

各項目はRADIUSクライアントからのアカウントリング要求の情報に基づいて表示されます。

親子連携機能が有効の場合に限り、同期コンフィグ及び同期装置も記録されます。

Session Start Time	ユーザ	NAS-IP-Address	NAS-Port	Framed-IP-Address	Called-Station-Id	Calling-Station-Id	Device	切断要求	強制ログアウト
2018-05-27 18:05:11	confie user02	192.168.1.1	0				master	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

切断

接続されているユーザの「切断要求」欄の「切断」ボタンを押すことで、RADIUSクライアントへ切断要求メッセージを送信することができます。

RADIUSクライアントとして、NAS-IP-Addressの値が使われます。

送信先ポートは、UDP 3799 固定です。

切断要求メッセージには、以下の各アトリビュートが設定されます。

User-Name

Acct-Session-Id

削除

接続されているユーザの「強制ログアウト」欄の「削除」ボタンを押すことで、その接続を削除する事が可能です。

ここでの強制ログアウトとは、RADIUSサーバ内のログイン情報を強制的にログアウト状態に変更することを表します。

実際に接続をおこなっているRADIUSクライアント(無線LANアクセスポイント、認証スイッチ、NAS、RAS等)には、一切の通知をおこないません。 197

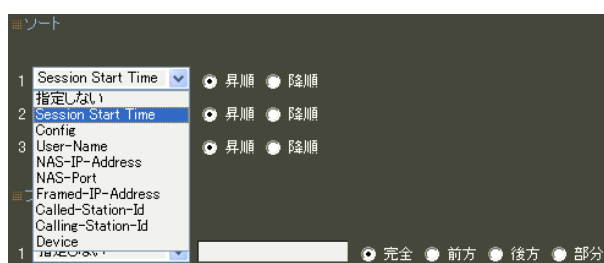
ソート

ログイン情報をソートさせて表示することができます。

ソート項目は、3個まで設定可能です。

それぞれ昇順、降順の指定が可能ですが、大文字、小文字の区別はしません。

複数のソート項目が指定された場合は、順にソートされます。



プルダウンからソートの対象項目を選択します。

指定しない

SessionStartTime

Config

User-Name

NAS-IP-Address

NAS-Port

Framed-IP-Address

Called-Station-Id

Calling-Station-Id

Device

ソートの順序を選択します。

昇順

降順

デフォルトは昇順です。

フィルタ

フィルタによる検索を実施することができます。
それぞれ、下記の指定が可能です。

- ・ 完全一致
(設定された文字列と完全に一致した場合のみ表示)
- ・ 前方一致
(設定された文字列が先頭に持つもののみ表示)
- ・ 後方一致
(設定された文字列が末尾に持つもののみ表示)
- ・ 部分一致
(設定された文字列を含むもののみ表示)

複数のフィルタが指定された場合は、それらの AND 結果を表示します。



フィルタの対象項目を選択します。

指定しない
SessionStartTime
Config
User-Name
NAS-IP-Address
NAS-Port
Framed-IP-Address
Called-Station-Id
Calling-Station-Id
Device

フィルタさせる文字列を設定します。

入力可能な文字列は、ASCII コードの 0x21-0x7e (ただし 0x22("), 0x25(%), 0x5c(¥) は含みません) です。
最大文字長は「20」で、デフォルト値はありません。

フィルタ条件を選択します。

完全
前方
後方
部分

出力先

表示出力先を「画面」「ファイル」の中から選択してください。



データが大量にある場合に、ファイル出力に失敗する可能性があります。

「ソートしない」、「フィルタを使用して出力する数を減らす」などの方法で回避することができます。

一括ログアウト

ログイン中のユーザを全てログアウトしたものと扱います。

画面表示されたユーザだけでなく、全てのユーザが対象です。

二重化している場合は、もう一方も全てログアウトしたものとします。

設定情報の同期をおこなう設定の場合、本設定は対向装置へ同期されます。



2.AD ユーザ情報

Active Directoryサーバに登録されたユーザを表示します。

認証に使用しているサーバの情報も併せて表示します (Ver 1.10.0 以降のみ)。

運用機能のメニュー「ユーザ情報」から「AD ユーザ情報」を選択します。

AD ユーザ情報

No.	lock	ユーザID
1		Administrator
2	x	Guest
3	x	krbtgt
4		user001
5		user002
6	x	user003
7		user004
8		鈴木一郎

RADIUS設定で「Active Directory」を「使用する」に設定している場合に、Active Directoryサーバに登録されたユーザのうち、設定された「ドメインネーム」・「所属グループ」に所属するユーザ名が表示されます。「所属グループ」が設定されていない場合は、「ドメインネーム」に所属する全ユーザ名が表示されます。

Active Directoryサーバでアカウントが無効に設定されているユーザは、lock欄に x が表示されず (ver 1.8.3 以降のみ)。

ユーザ名に日本語などが含まれる場合、正しく表示されないことがあります。

表示されるユーザが全て認証可能とは限りません。Active Directoryサーバの設定により認証できない場合もあります。また、日本語などがユーザ名に含まれるユーザも認証できません。

エラーメッセージ

Active Directory連携は未使用です。

ADユーザ情報

Active Directory 連携は未使用です。

「Active Directory」が「使用しない」に設定されている場合、または「Active Directory」が「使用する」に設定されているがRADIUSサーバが停止している場合に表示されます。

「Active Directory」を「使用する」に設定した上、RADIUSサーバを起動して下さい。

RADIUSサーバを再起動してください。

ADユーザ情報

RADIUSサーバを再起動してください。

Active Directoryの設定を変更したが、設定変更が反映されていない場合に表示されます。RADIUSサーバを再起動して設定を反映させてください。

サーバと通信できませんでした。

ADユーザ情報

サーバと通信できませんでした。

Active Directoryサーバと正常に通信ができない場合に表示されます。設定内容、Active Directoryサーバへのネットワーク到達性、Active Directoryサーバの設定などを確認して下さい。

ユーザが見つかりませんでした。

ADユーザ情報

ユーザが見つかりませんでした。

該当するユーザが存在しない場合に表示されます。

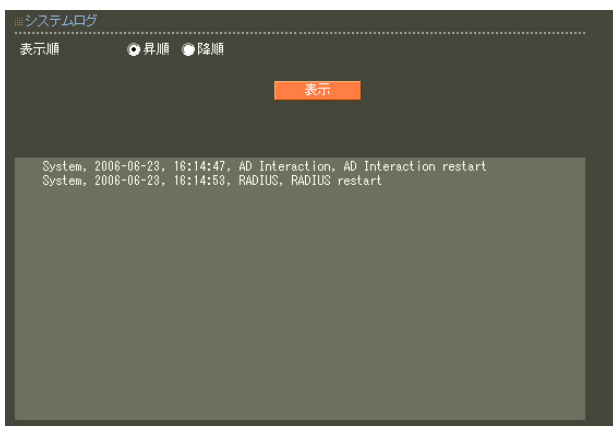
1. システムログ

本装置の稼働状況について記録されているログ情報を表示します。

本装置に記録できるログの数には上限があります
(「[付録 A 最大数一覧](#)」を参照してください)。

運用機能のメニュー「ログ情報」から「システムログ」を選択します。

システムログ



表示順を指定して「実行」ボタンを押すと最新のログが時刻順でソートされて表示されます。

システムログの表示内容

システムログには以下の項目がカンマ区切りで表示されます。

- ・日時
- ・分類
“RADIUS”, “NTP”などのログの種別。
- ・ログ内容

システムログの表示内容の詳細については、「[付録 E システムログ一覧](#)」を参照して下さい。

2. オペレーションログ

本装置の GUI で行った設定変更操作についてのログ情報を表示します。

対象は RADIUS ユーザのパスワード変更のみです。

設定情報の同期を使用している場合、最初に設定変更処理が実行される装置 (通常は MASTER) で記録されます。

本装置に記録できるログの数には上限があります (「付録 A 最大数一覧」を参照してください)。

運用機能のメニュー「ログ情報」から「オペレーションログ」を選択します。

オペレーションログ



表示順を指定して「実行」ボタンを押すと最新のログが時刻順でソートされて表示されます。

オペレーションログの表示内容

オペレーションログには以下の項目がカンマ区切りで表示されます。

- ・日時
- ・"operation"
オペレーションログであることを表します。
- ・ログ内容

```
result-string cmd (target-user)
  from 'username'@ipaddress
  [via slave-ipaddress] [(aux-string)]
```

ここでそれぞれの意味は以下の通りです。

result-string:
認証結果です。
設定変更成功時は *accepted*、
失敗時は *rejected* です。

cmd:
変更内容です。
例えば、管理者によるユーザ設定変更時は *updateUser* になります。
RADIUS ユーザ自身によるパスワード変更時は、*updatePassword* です。

target-user:
変更対象のユーザ名です。

username:
操作を行ったユーザ名です。

ipaddress:
接続元 IP アドレスです。

設定情報の同期を使用している状態で、SLAVE で、GUI 操作を行った場合、メッセージに *via slave-ipaddress* が付加されます。*slave-ipaddress* は、SLAVE の IP アドレスです。

補足メッセージとして、*aux-string* が付加されることがあります。
例えば、パスワードが変更されていない場合は、*password not changed* というメッセージが付加されます。

3. アクセスログ

本装置のGUIアクセスにおけるユーザ認証結果についてのログ情報を表示します。

GUI アクセスにおいて、ユーザ認証が成功した場合は、成功したことを表すログを記録します。

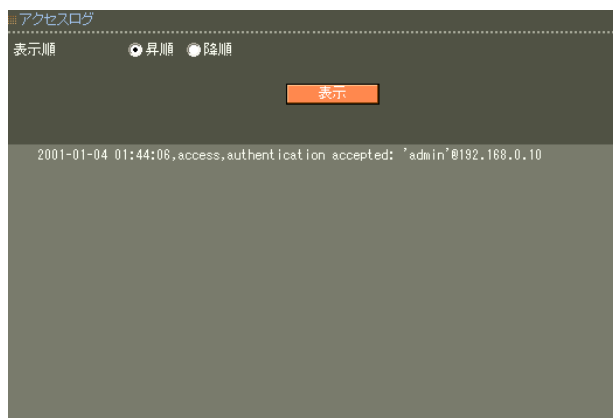
アクセスが継続している間は、15分に1回程度の割合で記録します。

ユーザ認証に失敗した場合は、失敗したことを表すログを記録します。
アクセスの度に記録します。

本装置に記録できるログの数には上限があります
(「付録 A 最大数一覧」を参照してください)。

運用機能のメニュー「ログ情報」から「アクセスログ」を選択します。

アクセスログ



表示順を指定して「実行」ボタンを押すと最新のログが時刻順でソートされて表示されます。

アクセスログの表示内容

アクセスログには以下の項目がカンマ区切りで表示されます。

- ・ 日時
- ・ "access"
アクセスログであることを表します。
- ・ ログ内容

ユーザ認証成功時:

authentication accepted: 'username'@ipaddress

ユーザ認証失敗時:

authentication rejected: 'username'@ipaddress

ここで、username、ipaddress は、それぞれ、ユーザ名、接続元 IP アドレスを表します。

4. 認証ログ

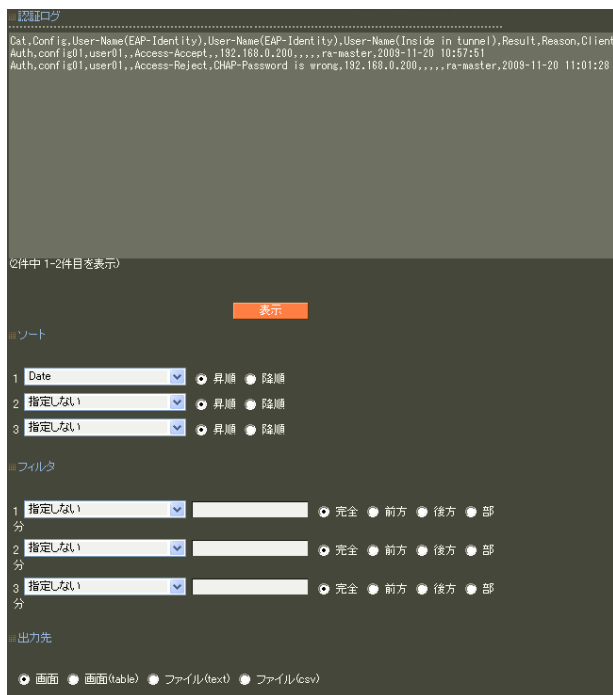
RADIUSサーバによる認証のログ情報を表示します。

本装置に記録できるログの数には上限があります
(「付録 A 最大数一覧」を参照してください)。

認証ログの reason メッセージについては、
「付録 H 認証ログの reason メッセージ一覧」を参照してください。

運用機能のメニュー「ログ情報」から「認証ログ」を選択します。

認証ログ



認証ログの表示内容

認証ログには以下の項目がカンマ区切りで表示されます。

- “Auth ”
認証ログであることを表します。
- 同期コンフィグ
親子連携機能が有効の場合のみ表示されます。
- 認証要求で送られたユーザ ID
- 認証方式が EAP-TLS/EAP-PEAP/EAP-TTLS
であった時に、phase 2 で送られたユーザ ID
- 認証結果
- 認証に失敗した場合の理由
- RADIUS クライアントの IP アドレス
- 認証要求で送られたアトリビュート NAS-IP-Address の値
- 認証要求で送られたアトリビュート NAS-Identifier の値
- 認証要求で送られたアトリビュート Called-Station-Id の値
- 認証要求で送られたアトリビュート Calling-Station-Id の値
- 同期装置
親子連携機能が有効の場合のみ表示されます。
- 日時

RADIUS クライアントに設定されていない IP アドレスを持つマシンからの認証要求を拒絶したログについては、認証ログではなく、システムログの方に記録されます。

ソート

認証ログを表示する順序を指定します。

プルダウンメニューで、ソートしたい項目を指定し、「昇順」または「降順」でその項目の並び順を指定します。

1 から 3 番のソート項目を指定することにより、1 番の項目でソートされた中をさらに 2 番の項目、3 番の項目でソートするという並び順になります。

設定後「表示」ボタンを押すことで最新のログが指定された順序で表示されます。

フィルタ

認証ログが表示する内容を絞りたい場合に指定します。プルダウンメニューで絞り込みの条件に使用したい項目を指定します。

隣の入力欄にその項目の検索対象文字列を指定します。最後にその文字列で検索をおこなう条件を指定します。

- ・完全

指定された項目が、検索対象文字列と完全に一致するログが表示されます。

- ・前方

指定された項目の最初の部分が、検索対象文字列と一致するログが表示されます。

- ・後方

指定された項目の最後の部分が、検索対象文字列と一致するログが表示されます。

- ・部分

指定された項目が、検索対象文字列を含んでいるログが表示されます。

1から3番に複数のフィルタ項目を指定することができます。複数のフィルタ項目を指定した場合には、全ての条件と一致するログのみが表示されます。

設定後「表示」ボタンを押すことで最新のログが指定されたフィルタ条件で表示されます。

一致するログが無かった場合には何も表示されません。

解除

フィルタを解除する時には全てのフィルタ項目で「指定しない」を選択して「表示」ボタンを押してください。

出力先

表示出力先を「画面」「画面 (table)」「ファイル (text)」「ファイル(csv)」の中から選択してください。

ファイルを選択した場合にはブラウザの指示に従ってファイルを保存してください。

ソート、フィルタ、表示出力先の指定は同時におこなうことができます。

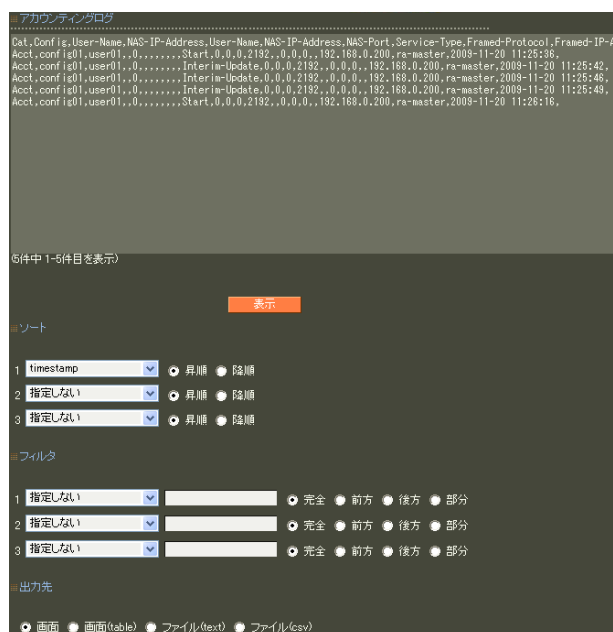
5. アカウンティングログ

RADIUSサーバによるアカウンティングのログ情報を表示します。

本装置に記録できるログの数には上限があります
 (「付録 A 最大数一覧」を参照してください)

運用機能のメニュー「ログ情報」から「アカウンティングログ」を選択します。

アカウンティングログ



アカウンティングログの表示内容

アカウンティングログには以下の項目がカンマ区切りで表示されます。

- “Acct ”
アカウンティングログであることを表します。
- 同期コンフィグ
親子連携機能が有効の場合のみ表示されます。
- 同期装置
親子連携機能が有効の場合のみ表示されます。

「RADIUS」のメニュー「サーバ」の「ログ」中のアカウンティングログの各項目。

具体的な内容は「第6章 RADIUS 設定 I. サーバ設定 10. ログ」を参照してください。

ソート

アカウンティングログを表示する順序を指定します。プルダウンメニューで、ソートしたい項目を指定し、「昇順」または「降順」でその項目の並び順を指定します。

1から3番のソート項目を指定することにより、1番の項目でソートされた中をさらに2番の項目、3番の項目でソートするという並び順になります。

設定後「表示」ボタンを押すことで最新のログが指定された順序で表示されます。

フィルタ

アカウントログが表示する内容を絞りたい場合に指定します。

プルダウンメニューで絞り込みの条件に使用したい項目を指定します。

隣の入力欄にその項目の検索対象文字列を指定します。

最後にその文字列で検索をおこなう条件を指定します。

・ 完全

指定された項目が、検索対象文字列と完全に一致するログが表示されます。

・ 前方

指定された項目の最初の部分が、検索対象文字列と一致するログが表示されます。

・ 後方

指定された項目の最後の部分が、検索対象文字列と一致するログが表示されます。

・ 部分

指定された項目が、検索対象文字列を含んでいるログが表示されます。

1から3番に複数のフィルタ項目を指定することができます。複数のフィルタ項目を指定した場合には、全ての条件と一致するログのみが表示されます。

設定後「表示」ボタンを押すことで最新のログが指定されたフィルタ条件で表示されます。

一致するログが無かった場合には何も表示されません。

解除

フィルタを解除する時には全てのフィルタ項目で「指定しない」を選択して「表示」ボタンを押してください。

出力先

表示出力先を「画面」「画面 (table)」「ファイル (text)」「ファイル (csv)」の中から選択してください。

ファイルを選択した場合にはブラウザの指示に従ってファイルを保存してください。

ソート、フィルタ、表示出力先の指定は同時におこなうことができます。

・ネットワークテスト

本装置の運用時において、ネットワークテストをおこなうことができます。

ネットワークのトラブルシューティングに有効です。

以下の4つのテストができます。

- ・到達性確認
- ・ルート確認
- ・パケットキャプチャ
- ・名前解決確認

ネットワークテスト

1. 到達性確認

ネットワークテストをおこないます。
指定した相手に ICMP echo パケットを送信し、相手装置から返信されたパケットを表示します。

運用機能のメニュー「ネットワークテスト」の「到達性確認」を選択すると次の画面が表示されます。

到達性確認



到達性確認

送信先

サイズ 56

DFフラグ あり なし

実行

送信先

到達性を確認したい相手装置の FQDN (www.example.co.jp などのホスト名)、もしくは IP アドレスを入力します。

サイズ

送信するパケットのバイト数を指定します。デフォルトは 56byte です。0-65507 の間で指定します。

DF フラグ

パケットの分割を許可したくない場合に「あり」を指定します。

各項目を入力後「実行」ボタンを押すと結果が画面に表示されます。

応答メッセージが表示されない場合は、DNS で名前解決ができていない可能性があります。その場合はまず、IP アドレスを直接指定してご確認ください。

ネットワークテスト

2. ルート確認

ネットワークテストをおこないます。
指定した相手にTTLを順に増やしながらパケットを送信することでパケットの送信経路を確認します。

運用機能のメニュー「ネットワークテスト」の「ルート確認」を選択すると次の画面が表示されます。

ルート確認



送信先

ルート確認をおこないたい相手装置のFQDN (www.example.co.jpなどのホスト名)、もしくはIPアドレスを入力します。

最大TTL

送信するパケットのTTLを最大いくつまで設定して送信するかをホップ数で指定します。
1-60の範囲で指定します。

名前解決

結果表示をおこなう際にIPアドレスをホスト名に変換して表示する場合には「する」を選択します。ネットワーク障害等によりDNSの名前解決ができない状況の時は「しない」を選択してください。

各項目を入力後「実行」ボタンを押すと結果が画面に表示されます。

応答メッセージが表示されない場合は、DNSで名前解決ができていない可能性があります。その場合はまず、IPアドレスを直接指定してご確認ください。

ネットワークテスト

3. パケットキャプチャ

ネットワークテストをおこないます。
指定したインタフェースをモニタし、送受信されたパケットの情報を記録します。

運用機能のメニュー「ネットワークテスト」の「パケットキャプチャ」を選択すると次の画面が表示されます。

パケットキャプチャ

インターフェイス

パケットキャプチャを実施するインタフェースを選択します。

パケットサイズ

キャプチャするパケットサイズを入力します。
デフォルトは1514byteです。
68-1514の範囲で指定します。

パケット数

キャプチャするパケット数を入力します。
キャプチャできるのは最大1000パケットまでです。

プロトコル

キャプチャするプロトコルを選択します。
「ANY」、「TCP」、「UDP」、「ICMP」の中から選択します。

ポート

キャプチャするポートを指定します。
プロトコルが「ICMP」の場合はポートの指定はできません。
複数ポートを指定したい場合には空白文字で区切って複数の数字を入力します。
空欄にした場合には全てのポートが対象となります。

設定画面へのアクセス

設定画面を表示するのに使用しているパケットがキャプチャされるのを防ぎたい場合に「キャプチャしない」を選択します。

出力先

「画面表示」「ファイル」のどちらかひとつを選択します。

- 画面表示
出力結果を画面に表示する場合に選択します。

- ファイル
出力結果をファイルに保存したい場合に選択して「実行」ボタンを押します。

名前解決

結果表示をおこなう際にIPアドレスをホスト名に変換して表示する場合には「する」を選択します。
ネットワーク障害等によりDNSの名前解決ができない状況の時は「しない」を選択してください。
出力先として「画面表示」を選択した場合のみ有効です。

リンクレベルヘッダ

リンクレベルヘッダの表示を省略したい時には「表示しない」を選択します。
出力先として「画面表示」を選択した場合のみ有効です。

データ表示

パケット内のデータをすべて表示したい時には「表示する」を選択します。
出力先として「画面表示」を選択した場合のみ有効です。

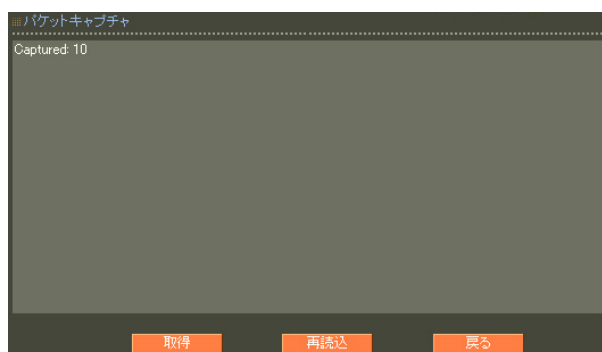
ネットワークテスト

詳細表示

パケットの内容をより詳細に表示したい場合に「する」を選択します。TTL やサービスの種類などが出力されるようになります。
出力先として「画面表示」を選択した場合のみ有効です。

各項目を入力後「実行」ボタンを押すと、キャプチャを開始します。

パケットキャプチャ



「取得」をクリックすると出力結果を pcap 形式で保存することができます。取得後のファイルは、「Wireshark」などのアプリケーションで表示させることができます。

「再読込」をクリックするとキャプチャ数を更新することができます。

ネットワークテスト

4. 名前解決確認

ネットワークテストをおこないます。
名前解決が正しくおこなわれるかを確認します。

運用機能のメニュー「ネットワークテスト」の
「名前解決確認」を選択すると次の画面が表示され
ます。

名前解決確認



DNSの正引きをおこないたい時

引き方
正引きを選択します。

ホスト
ホスト名(FQDN)を入力します。

入力後に「実行」ボタンを押します。

名前解決に成功すれば、入力されたFQDNに一致するIPアドレスが表示されます。

DNSの逆引きをおこないたい時

引き方
逆引きを選択します。

ホスト
IPアドレスを入力します。

入力後に「実行」ボタンを押します。

名前解決に成功すれば、入力されたIPアドレスに一致するホスト名が表示されます。

システム情報

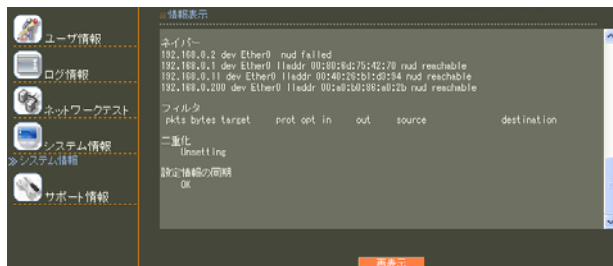
1. システム情報

本装置の機器情報を表示します。

運用機能のメニュー「システム情報」の「システム情報」を選択すると次の画面が表示されます。

情報表示

<親子連携無効時>



<親子連携有効時>



表示欄に以下の内容について表示されます。

ファームウェアバージョン

本装置の現在のファームウェアバージョンを表示します。

シリアル番号

本装置のシリアル番号を表示します。

IPアドレス

各インタフェースのIPアドレスやMACアドレスなどです。

送受信カウンタ

各インタフェースの通過パケット数等を表示します。

リンク

各インタフェースのリンク状態を表示します。

デフォルトゲートウェイ
デフォルトルート情報です。

スタティックルート

直接接続、スタティックルートに関するルーティング情報です。

ネイバー

ARP テーブルの情報です。

フィルタ

パケットフィルタに関する情報です。

第9章 運用機能

システム情報

電源 (RA-1300・RA-1200 のみ)
電源の状態を表示します。

製品のシリアルナンバによって電源ハードウェアに違いがあります。

Type: 1 シリアルナンバ ~ 10160000150
Type: 2 シリアルナンバ 10160000151 ~

ハードウェアの違いによって、表示が異なります。

(Type 1 の場合)

Status: OK

いずれかの電源ユニットが正しく装着されていて、電源ユニットにACが正しく供給されている。

Warning

いずれかの電源ユニットが故障している。
いずれかの電源ユニットに、正しくACが供給されていない。

(Type 2 の場合)

Status: OK

ふたつの電源ユニットが正しく装着されていて、電源ユニットに、ACが正しく供給されている。

Warning

いずれかの電源ユニットが装着されていない。
いずれかの電源ユニットが故障している。
いずれかの電源ユニットに正しくACが供給されていない。

Type, Statusの値は、それぞれSNMPでも取得できます (csRAPowerType, csRAPowerStatus)。

RAID (RA-1300・RA-1200 のみ)
RAIDの状態を表示します。

OK 正常な状態
Degraded/Rebuilding リビルド中
Degraded/Fault 障害状態

<親子連携無効時>

二重化

二重化の状態を表示します。

Unsetting 二重化設定をしていない
OK 二重化に成功している
NG 二重化に失敗している

設定情報の同期

設定情報の同期の状態を表示します。

Unsetting 設定情報の同期設定をしていない
OK 設定情報の同期に成功している
NG 設定情報の同期に失敗している

<親子連携有効時>

二重化・設定情報の同期

同期コンフィグ、同期装置毎に、二重化・設定情報の同期の状態を表示します。

Unsetting コンフィグが未設定
or 対向装置の設定が1件もない
OK 二重化に成功している
OK 設定情報の同期に成功している
NG 二重化に失敗している
NG 設定情報の同期に失敗している

NTP

NTPサーバとの同期状況を表示します。

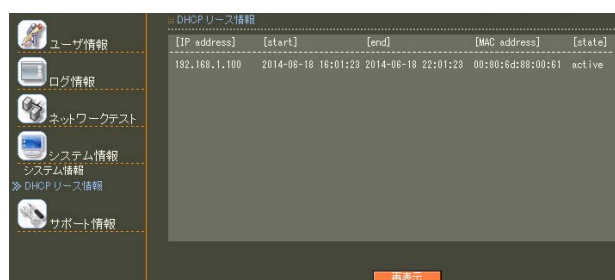
* 現在同期している
+ 同期候補である
- または x 同期候補から外れている
(サーバ選択アルゴリズムによる)
同期候補から外れている
(同期候補が多すぎる)
空白 同期候補から外れている
(応答がない、精度が悪い、stratum 値が大きい、など)

「再表示」ボタンを押すと最新の情報に更新します。

2. DHCP リース情報

IPアドレスのリースに関する情報を表示します。

運用機能のメニュー「システム情報」の「DHCPリース情報」を選択すると次の画面が表示されます。



[IP address]	[start]	[end]	[MAC address]	[state]
192.168.1.100	2014-06-18 16:01:23	2014-06-18 22:01:28	00:80:c8:d8:00:61	active

IPアドレスのリースに関する以下の情報を表示します。

- IP address (IPアドレス)
- start (リース開始時刻)
- end (リース終了予定時刻)
- MAC address (クライアントMACアドレス)
- state (状態)

サポート情報

本装置のサポート情報を表示します。

運用機能のメニュー「サポート情報」の「サポート情報」を選択すると製品サポートに関する情報が表示されます。

サポート情報



第 10 章

ユーザ管理者メニュー

第10章 ユーザ管理者メニュー

画面構成

ユーザ管理者のユーザ名とパスワードを用いてログインした場合、以下に示す初期画面が最初に表示されます。



本装置管理者のユーザ名でログインした場合には全ての設定メニュー項目が利用できますが、ユーザ管理者のユーザ名でログインした場合には、使えるメニューはユーザ設定に必要なメニューのみとなります。

ユーザ管理者でログインした場合のメニュー階層を以下に示します。

RADIUS	プロファイル	ユーザプロフィール
		ユーザ基本情報
		認証アトリビュート
		応答アトリビュート
		グループID
		証明書
	ユーザ	ユーザ
		AD ユーザ
		LDAP ユーザ
		ファイル読み込み
		ユーザ検索
		ユーザリセット

CA	CA/CRL	
----	--------	--

管理機能	システム	管理者
------	------	-----

運用機能	ユーザ情報	ログイン情報
		ADユーザ情報
	ログ情報	認証ログ
		アカウントングログ
	ネットワークテスト	到達性確認
		ルート確認
		パケットキャプチャ
		名前解決確認
	システム情報	システム情報
	サポート情報	サポート情報

設定ウィザード	ユーザ登録	
---------	-------	--

各メニュー項目の設定方法、設定内容については第5章～第9章を参照してください。

なお、同じメニュー項目でも以下のメニューについては本装置管理者とは利用できる操作が異なります。

「CA」 - 「CA/CRL」メニュー

CA証明書の参照はできますが、作成、削除はできません。

「管理機能」 - 「システム」 - 「管理者」メニュー

ユーザ管理者自身のパスワードの変更のみおこなえます。

「設定ウィザード」 - 「ユーザ登録」ウィザード

設定の保存はおこなえません。

第11章

ユーザメニュー

. ログイン

RADIUSメニュー「ユーザ」で設定されたユーザは、Webブラウザから本装置にアクセスして、自身のパスワード変更、および自分に対して発行された証明書の取得をすることができます。

管理者としてログインする場合同様、ブラウザのアドレス欄に以下のURLを入力します。

http://192.168.0.254/

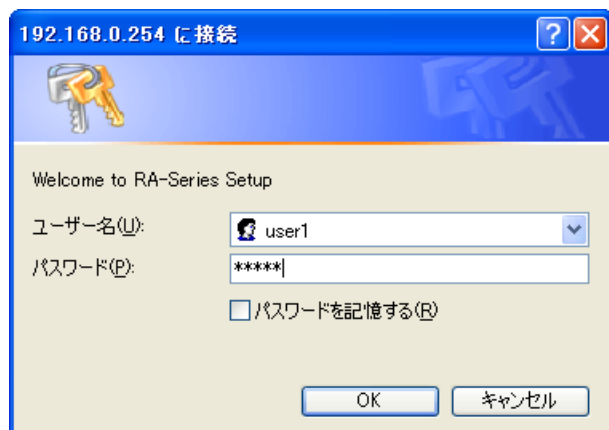
上記URLはHTTP(ポート80)でアクセスする場合のEther0ポートの工場出荷時のアドレスを使う場合の例です。

アドレスを変更した場合は、そのアドレスを指定してください。

HTTPS(ポート443)でアクセスする場合は、ブラウザのアドレス欄に以下のURLを入力してください。

https://192.168.0.254/

認証ダイアログ画面が表示されますので、RADIUSメニュー「ユーザ」で設定されたユーザIDとパスワードを指定します。



一度管理者でログイン済みの場合などで、ユーザを切り替えたい場合は、一度ブラウザを終了させてから、再度ブラウザを起動してください。

ユーザID、パスワードが正しければ次の画面が表示されます。



メニュー「CA/CRL」はCAが設定されている場合に表示されます。

メニュー「証明書」はユーザに対して証明書が発行されている場合にのみ表示されます。

次節からは各メニューについて説明します。

パスワード

メニュー「パスワード」を選択すると、次の画面が表示されます。

ユーザ変更

ユーザID	user1
パスワード

設定

パスワード

新しいパスワードを入力します。

パスワードは最大20文字まで入力する事が可能です。
使用可能な文字は、英数字および以下の記号と空白文字になります。

!"#\$%&'()*+,-./<=>@[]^_`{|}~.,:;¥

「設定」ボタンを押すとパスワードが変更されます。
次回のログインからは、新しく設定したパスワードを使ってログインしてください。

CA/CRL

メニュー「CA/CRL」を選択すると、次の画面が表示されます。



CA/失効リストの表示

画面上部にある「CA」/「失効リスト」の選択ボタンを選んで「表示」ボタンを押すと、CAの内容または失効リストの内容が表示されます。

CA証明書の取得

CA証明書欄で「取り出し」ボタンをクリックすることによりCA証明書を取り出すことができます。この際、取り出す形式を PEM または DER から選択することができます。

失効リストの取得

失効リストの取得欄で「取り出し」ボタンをクリックすることによりCRLを取り出すことができます。この際、取り出す形式を PEM または DER から選択することができます。

証明書

ユーザに対して証明書が発行されている場合に表示されるメニュー「証明書」を選択すると、ユーザの全ての証明書が一覧表示されます。

証明書

S/N\Subject	有効期間	失効日時
07 user1	2006-01-01 00:00:00	2006-12-31 23:59:00
08 user1	2007-01-01 00:00:00	2007-12-31 23:59:00

「S/N」(シリアルナンバ)をクリックすることでその証明書の詳細内容が表示されます。

証明書

欄には証明書の内容が表示されます。

証明書の取得

ユーザ証明書をダウンロードすることができます。取り出す形式と内容を指定して「取り出し」ボタンを押します。

形式

「PKCS#12」、「PEM」、「DER」から一つ選択します。

内容

「CA証明書・証明書・私有鍵」、「証明書・私有鍵」、「証明書」、「私有鍵」から一つ選択します。

PKCS#12 を選択した場合

証明書と私有鍵のどちらか一方のみは選択できません。

PEM, DER を選択した場合

証明書と私有鍵を同時に取り出すことはできません。それぞれ別々に取り出してください。

取り出した証明書はユーザのPCに保存して、RADIUSによる認証時に利用するようにします。

証明書の失効

この証明書が失効されているか否かが表示されます。

失効した証明書は取得できません。

同期可能な設定情報・操作

同期構成時に、同期可能な設定情報・操作は下記の表のとおりです。

同期処理	設定項目
同期する	パスワード変更
同期しない	証明書の取得

第 12 章

一般ユーザによる PC の設定

第12章 一般ユーザによるPCの設定

1. 設定例(EAP-TLS)

本装置を使って実際に認証処理をおこなう場合には、RADIUSクライアントである、NASや無線LANアクセスポイントの設定および、認証を受けるPCの設定が必要になります。

ここではEAP-TLSで認証をおこなう場合に必要なPCの設定について設定例を記述します。

なお、実際の設定にあたっては各ハードウェア、ソフトウェアに付属するマニュアルを参照してください。

本設定例では、サブリカントとしてWindowsXPに標準で含まれているサブリカントを使用します。

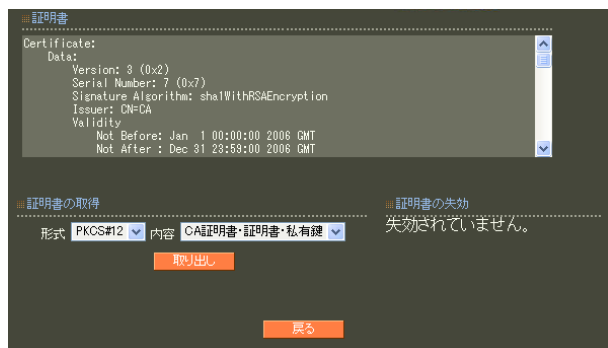
1 証明書のインポート

EAP-TLS認証で必要となる、ユーザの証明書をインポートします。

本装置管理者またはユーザ管理者から自分のユーザID、パスワード、証明書のパスフレーズを入手します。

本装置管理者またはユーザ管理者であればRADIUSのメニュー「ユーザ」でこれらの情報を確認できます。安全な手段でユーザに伝えるようにしてください。

与えられたユーザIDとパスワードを用いてWebブラウザから本装置にログインして、自分の証明書をダウンロードします。



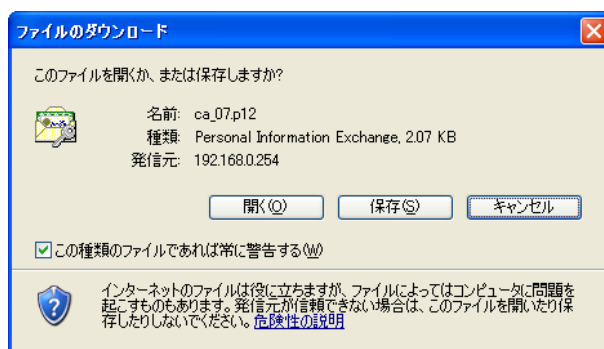
証明書表示画面へのアクセスの仕方についての詳細は「第11章 ユーザメニュー」を参照してください。

各証明書と秘密鍵が必要になるため、ここではPKCS#12形式で内容に「CA証明書・証明書・私有

鍵」を選択した場合で説明します。

「取り出し」ボタンをクリックすると、証明書のダウンロードが開始されます。

ダウンロードしたファイルをアプリケーションで開くか保存するかを確認する画面が表示されるので、「開く」をクリックします。



上記確認画面はブラウザによって異なります。

証明書のインポートウィザードが起動します。画面の指示に従って証明書をインポートします。途中パスワードの入力を求められるので管理者から入手したパスフレーズを入力するようにします。

以上でユーザの証明書がインポートされます。

第12章 一般ユーザによるPCの設定

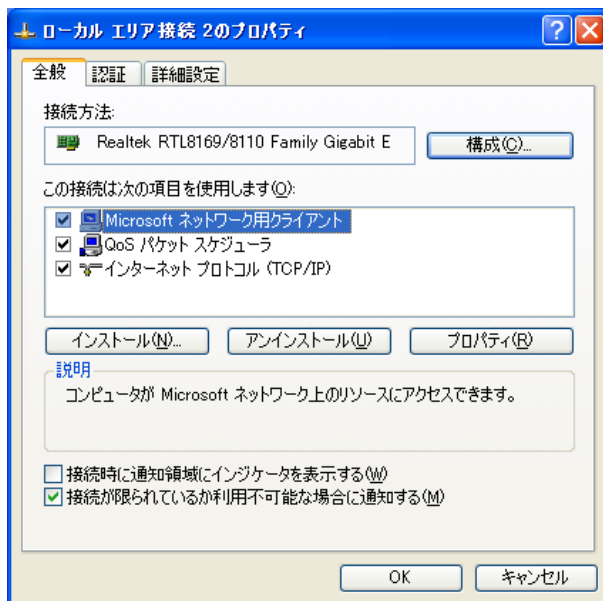
. 設定例(EAP-TLS)

2 EAP-TLSの設定

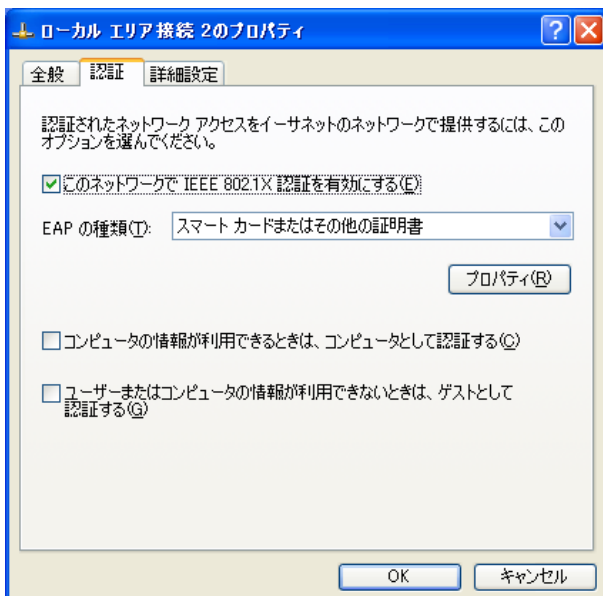
EAP-TLSの設定をします。

コントロールパネルから「ネットワーク接続」をダブルクリックします。

EAP-TLS接続を設定したいインタフェースを右クリックして「プロパティ」を選択します。次の画面が表示されます。



認証タブを選択します。



「このネットワークで IEEE 802.1X を有効にする」をチェックします。

「EAPの種類」で「スマートカードまたはその他の証明書」を選択します。

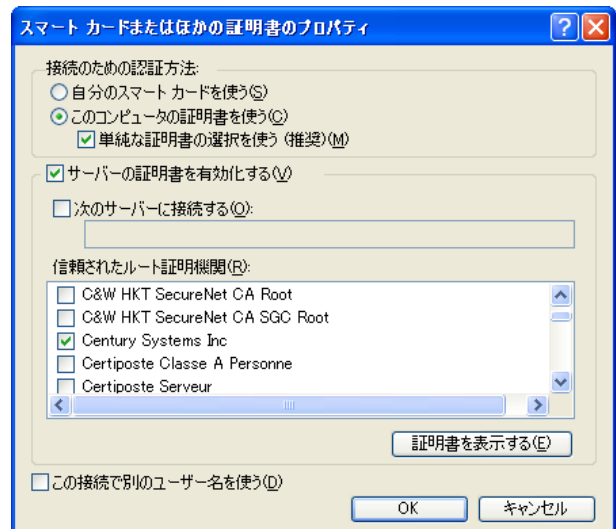
(EAP-MD5 認証の場合は「MD5-Challenge」を、EAP-PEAPの場合は「保護されたEAP(PEAP)」を選択するようにします。なお、サービスパックの適用状況によっては「MD5-Challenge」は選択できない場合があります。)

「プロパティ」ボタンをクリックして、保護されたEAPのプロパティを表示します。

以下の項目がチェックされていることを確認します。

- ・このコンピュータの証明書を使う
- ・単純な証明書の選択を使う
- ・サーバーの証明書を有効化する

「信頼されたルート証明機関」で、インポートした証明書を発行したCAの名前を選択します。



以上で設定は終了です。

EAP-TLS認証を必要とするネットワークにつなぐことで認証がおこなわれ、認証に成功すると通信がおこなえるようになります。

第12章 一般ユーザによるPCの設定

・設定例(EAP-PEAP)

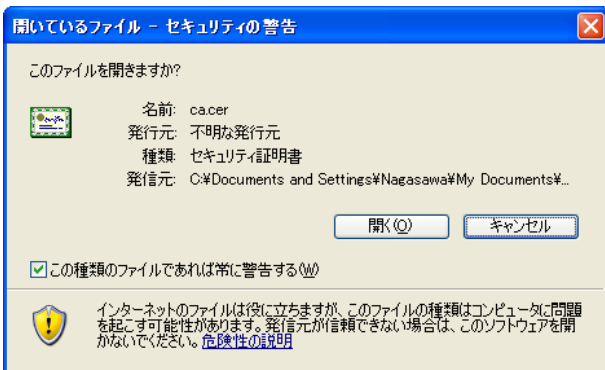
ここでは、EAP-PEAPで認証をおこなう場合に必要なPCの設定について設定例を記述します。

1 CA証明書のインポート

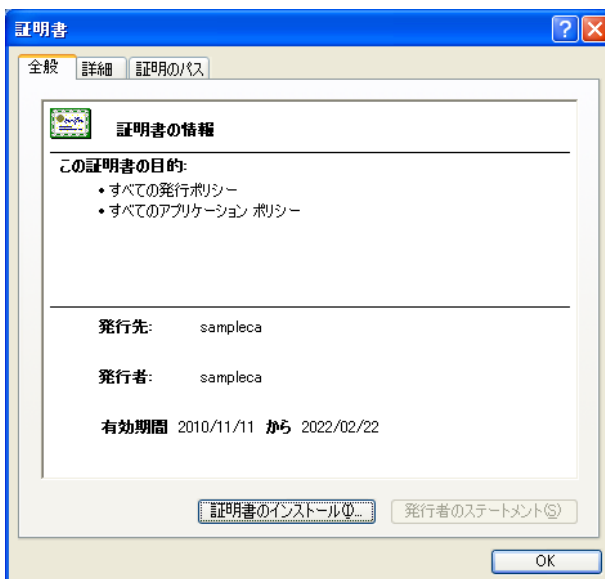
EAP-PEAP認証で必要となる、CA証明書をインポートします。

あらかじめ取得しておいたCA証明書をクリックします。

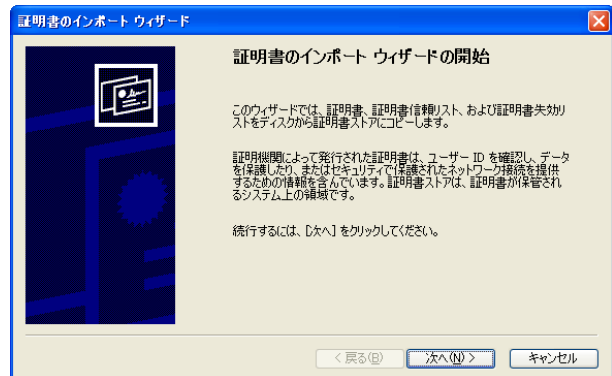
次の画面が表示されるので「開く」をクリックします。



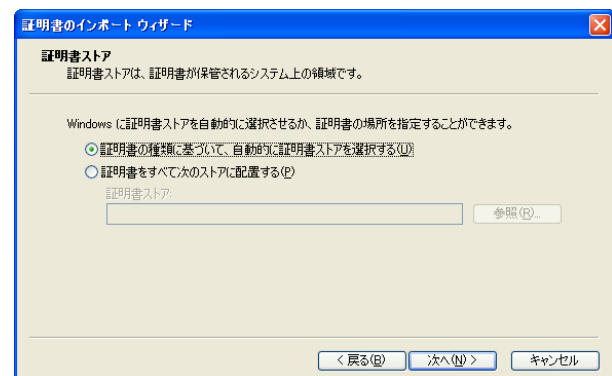
「証明書」の画面が表示されます。「証明書のインストール」をクリックします。



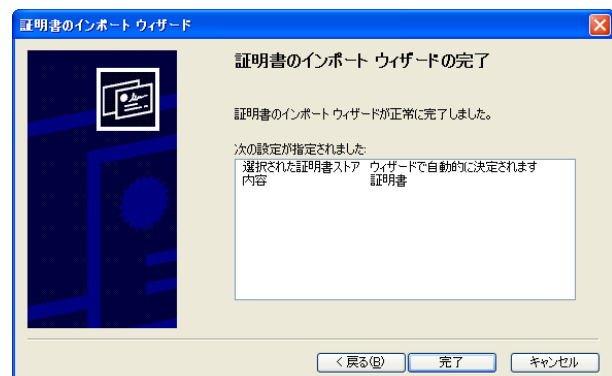
証明書のインポートウィザードが開始されます。下の画面で「次へ」をクリックします。



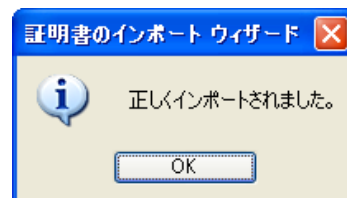
証明書ストアの画面が表示されます。「証明書の種類に基づいて、自動的に証明書ストアを選択する(U)」をONにして、「次へ」をクリックします。



次の画面で「完了」をクリックします。



証明書が正しくインポートされると、次の画面が表示されます。



第12章 一般ユーザによるPCの設定

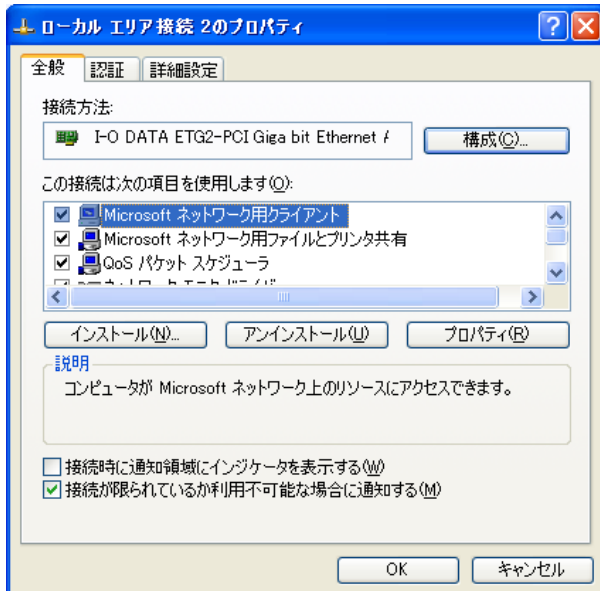
. 設定例(EAP-PEAP)

2 EAP-PEAPの設定

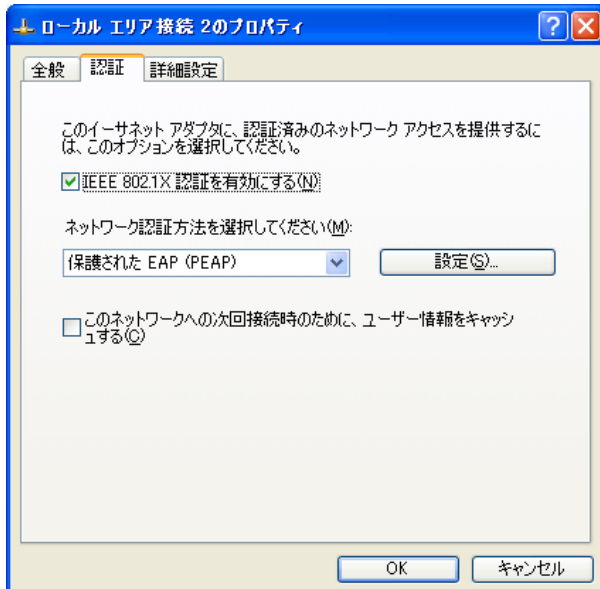
WindowsXPに標準で含まれているサブライアントを使用して、EAP-PEAPの設定を行います。

コントロールパネルから「ネットワーク接続」をクリックします。

EAP-PEAP接続を設定したいインタフェースを右クリックして「プロパティ」を選択します。次の画面が表示されます。

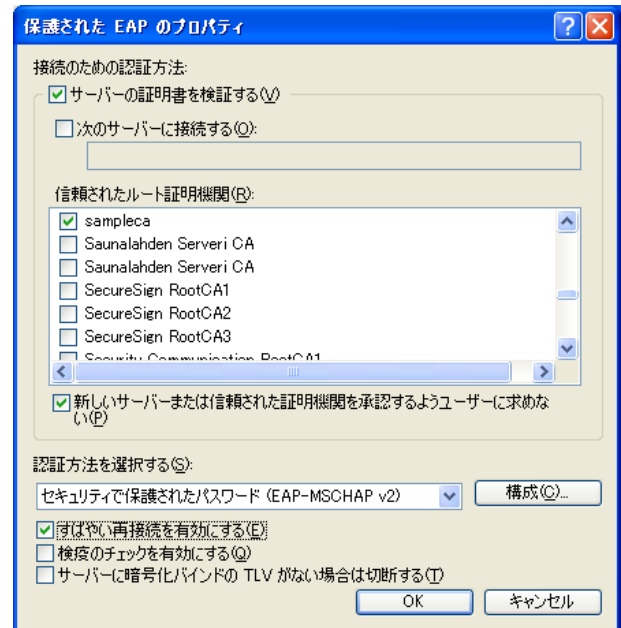


認証タブを選択すると、下記の画面が表示されます。



「IEEE 802.1Xを有効にする」をチェックします。ネットワーク認証方法として「保護されたEAP (PEAP)」を選択します。

「設定」ボタンをクリックします。「保護されたEAPのプロパティ」が表示されます。



「サーバーの証明書を検証する」がチェックされていることを確認します。

「信頼されたルート証明機関」で、インポートした証明書を発行したCAの名前を選択します。

「認証方法を選択する」で「セキュリティで保護されたパスワード(EAP-MSCHAP v2)」を選択します。

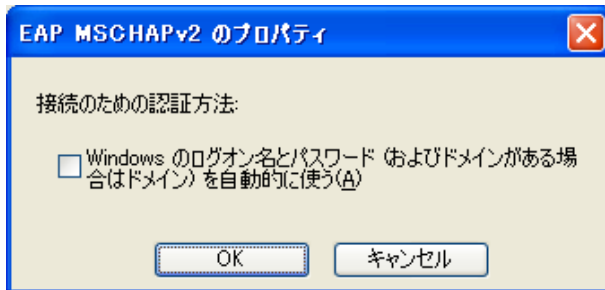
「すばやい再接続を有効にする」は、使用する環境に合わせて、ON/OFFを選択してください。(この例では、ONにしています。)

< 次ページに続く >

第 12 章 一般ユーザによる PC の設定

. 設定例 (EAP-PEAP)

「構成」をクリックすると、EAP MSCHAPv2 のプロパティが表示されます。



Windows のログオン名とパスワードを自動的に使う場合は、チェックボックスを ON にします。
(この例では、OFF にしています。)

以上で設定は終了です。

EAP-PEAP 認証を必要とするネットワークに接続すると、下記のポップアップ画面が表示されます。



ユーザ名とパスワードを入力して、OK をクリックすると認証が行われます。
(ログオンドメインが必要な場合は、ログオンドメインも入力します。)

認証に成功すると通信が行えるようになります。

第 12 章 一般ユーザによる PC の設定

. 設定例 (EAP-TTLS)

ここでは、EAP-TTLS で認証をおこなう場合に必要な PC の設定について設定例を記述します。

1 CA 証明書のインポート

EAP-TTLS 認証で必要となる、CA 証明書をインポートします。

CA 証明書のインポートについては、「第 12 章 一般ユーザによる PC の設定」の「. 設定例 (EAP-PEAP)」を参照してください。

2 EAP-TTLS の設定

Windows 標準のサブリカントは、EAP-TTLS に対応していないため、設定例は記載しません。

第 13 章

復旧操作

第13章 復旧操作

Init スイッチの操作

RA-1300・RA-1200・RA-830・RA-730の前面にある「Init スイッチ」を使用して、工場出荷設定に戻すことができます。

RA-1300

1. 本装置が停止状態になっていることを確認します。
2. 本体前面にある「Init スイッチ」を押します。
3. 「Init スイッチ」を押したままの状態、「Power スイッチ」をオンにします。
4. 「Init スイッチ」を約3秒間押し続けると「Init LED」が点灯します。
5. 「Init スイッチ」を放します。
6. 本装置が工場出荷設定で起動します。
起動が完了すると、「STATUS1 LED」が点灯()し、「Init LED」は消灯()します。

RA-1200

1. 本装置が停止状態になっていることを確認します。
2. 本体前面にある「Init スイッチ」を押します。
3. 「Init スイッチ」を押したままの状態、「Power スイッチ」をオンにします。
4. 「Init スイッチ」を約3秒間押し続けると「Init LED」が点灯します。
5. 「Init スイッチ」を放します。
6. 本装置が工場出荷設定で起動します。
起動が完了すると、「STATUS1 LED」が点灯()し、「Init LED」は消灯()します。

RA-830

1. INIT スイッチを押しながら電源を投入します。
2. STATUS3 LED が緑色点灯するまで、INIT スイッチを押したままにしておきます。
3. STATUS3 LED が緑色点灯したら、INIT スイッチを放します。
4. 本装置が工場出荷設定で起動します。
起動が完了すると、STATUS1 LED が点灯()します。

RA-730

「Init スイッチ」を押したまま電源切断 電源投入し、電源投入後20秒ほど「Init スイッチ」を押し続けると、設定が消去され、工場出荷時設定に戻ります。「STATUS LED 3」が点灯()していることを確認してください。

付録 A

最大数一覧

最大数一覧

RAの最大設定数を下記の表に示します。

階層1	階層2	項目	RA-1300	RA-1200	RA-830	RA-730	
RADIUS	サーバ	ベンダ	10	10	10	10	
		アトリビュート(ベンダあたり)	10	10	10	10	
		アドレスプール	100	100	10	10	
		アドレス(アドレスプールあたり)	2,000	2,000	2,000	2,000	
		クライアント(親子連携無効時、1.20.0~)	1,000	1,000	500	250	
		クライアント(親子連携無効時、~1.18.0)	1,000	1,000	250	250	
		クライアント(親子連携有効時)	1,000	1,000	250	250	
		LDAPアトリビュートマップ	10	10	10	10	
		LDAPサーバ	10	10	10	10	
		レルム	10	10	10	10	
	プロファイル	ユーザプロフィール	100	100	20	20	
		ユーザ基本情報プロフィール	100	100	20	20	
		認証プロフィール	20	20	20	20	
		認証アトリビュート(プロフィールあたり)	10	10	10	10	
		応答プロフィール	20	20	20	20	
		応答アトリビュート(プロフィールあたり)	10	10	10	10	
		グループIDプロフィール	50	50	50	50	
		証明書プロフィール	20	20	20	20	
	ユーザ	ユーザ(親子連携無効時、1.20.0~)	100,000	100,000	2,500	2,000	
		ユーザ(親子連携無効時、1.10.2~1.18.0)	100,000	100,000	2,000	2,000	
		ユーザ(親子連携有効時、1.10.2~)	100,000	100,000	2,000	2,000	
		ユーザ(~1.10.1)	50,000	50,000	2,000	2,000	
		ユーザ個別設定(認証)(ユーザあたり)	5	5	5	5	
		ユーザ個別設定(応答)(ユーザあたり)	5	5	5	5	
		ユーザ証明書(ユーザあたり)(親子連携無効時、1.20.0~)	10,000	10,000	2,500	2,000	
		ユーザ証明書(ユーザあたり)(親子連携無効時、~1.18.0)	10,000	10,000	2,000	2,000	
		ユーザ証明書(ユーザあたり)(親子連携有効時)	10,000	10,000	2,000	2,000	
	CA	証明書	証明書(ユーザ証明書を含む)(親子連携無効時、1.20.0~)	10,000	10,000	2,500	2,000
			証明書(ユーザ証明書を含む)(親子連携無効時、~1.18.0)	10,000	10,000	2,000	2,000
			証明書(ユーザ証明書を含む)(親子連携有効時)	10,000	10,000	2,000	2,000
管理機能	ネットワーク	スタティックルート	10	10	10	10	
		フィルタ	20	20	20	20	
		DHCPネットワーク	5	5	5	5	
		DHCPリースアドレス範囲(ネットワークあたり)	16	16	16	16	
		DHCPリースアドレス範囲(全体)	64	64	64	64	
		DHCPリースアドレス	8,192	8,192	1,024	1,024	
		DHCP固定割り当て	256	256	256	256	
	システム	ログ転送 転送先IPアドレス	5	5	5	5	
		ユーザ管理者	5	5	5	5	
		同期コンフィグ(親子連携無効時)	1	1	1	1	
		同期コンフィグ(親子連携有効時)	50	50	1	1	

備考

全ての設定項目を同時に最大数まで設定することはできません。

データ数が大量となる可能性のあるユーザやアトリビュートに関しては、以下のような内容を想定しています。

(RA-1300)

ユーザ:

- ・ 100,000 個程度まで (証明書総数が 10 個程度を超えない場合)
- ・ 10,000 個程度まで (証明書総数が 10 個程度を超える場合)

アトリビュート:

ユーザを 100,000 個設定するとして、

- ・ 認証・応答プロファイルおよび個別設定(認証・応答)全てを合計してユーザあたり 5 ~ 6 個まで
- ・ アトリビュートの値の長さは 50 文字 (25 ~ 50 オクテットに相当)まで

(RA-1200)

ユーザ:

- ・ 100,000 個程度まで (証明書総数が 10 個程度を超えない場合)
- ・ 10,000 個程度まで (証明書総数が 10 個程度を超える場合)

アトリビュート:

ユーザを 100,000 個設定するとして、

- ・ 認証・応答プロファイルおよび個別設定(認証・応答)全てを合計してユーザあたり 5 ~ 6 個まで
- ・ アトリビュートの値の長さは 50 文字 (25 ~ 50 オクテットに相当)まで

(RA-830)

ユーザ:

- ・ 2,500 個程度まで (証明書総数に関わらず)

アトリビュート:

ユーザを 2,500 個設定するとして、

- ・ 認証・応答プロファイルおよび個別設定(認証・応答)全てを合計してユーザあたり 5 ~ 6 個まで
- ・ アトリビュートの値の長さは 50 文字 (25 ~ 50 オクテットに相当)まで

(RA-730)

ユーザ:

- ・ 2,000 個程度まで (証明書総数に関わらず)

アトリビュート:

ユーザを 2,000 個設定するとして、

- ・ 認証・応答プロファイルおよび個別設定(認証・応答)全てを合計してユーザあたり 5 ~ 6 個まで
- ・ アトリビュートの値の長さは 50 文字 (25 ~ 50 オクテットに相当)まで

これらを超えて設定した場合、正しく動作しない可能性があります。

但し、あるユーザ群には 10 個以上アトリビュートを指定する代わりに別のユーザ群にはアトリビュートを指定しない、のような運用は可能です。

最大数一覧

また、大量のデータがある場合、想定内の設定数であっても操作内容によっては比較的時間が掛かることがあります（数分以上）。設定データによっては正常に操作を行うことができないこともあります。

ユーザプロフィールに割り当てられたユーザ基本情報プロフィールを別の基本情報プロフィールに変更する

ユーザプロフィールに割り当てた認証・応答・グループ ID プロフィールを別の認証・応答・グループ ID プロフィールに変更する（認証・応答・グループ ID プロフィールの新規割り当てや割り当ての解除も含む）

ユーザ基本情報プロフィール内の情報を変更する（値の変更）

認証・応答プロフィール内の情報を変更する（アトリビュートの追加・削除や値の変更）

グループ ID プロフィール内の情報を変更する（値の変更）

ユーザ個別設定（基本）の情報を変更する（値の変更）

ユーザ個別設定（認証・応答）の情報を変更する（アトリビュートの追加・削除や値の変更）

ユーザ設定情報をリセットする

などの操作が該当します。

RAで記録できるログの数の上限を下記の表に示します。

	RA-1300	RA-1200	RA-830	RA-730
認証ログ	100,000	100,000	40,000	40,000
オペレーションログ	10,000	10,000	10,000	10,000
アクセスログ	10,000	10,000	10,000	10,000
アカウントिंगログ	100,000	100,000	40,000	40,000
システムログ	10,000	10,000	10,000	10,000

付録 B

サポートについて

サポートについて

サポートに関する技術的なお問い合わせやご質問は、下記へご連絡ください。

- ・サポートデスク
電話 0422-37-8926
受付時間 10:00 ~ 17:00 (土日祝祭日、及び弊社の定める休日を除きます)
- ・FAX 0422-55-3373
- ・e-mail support@centurysys.co.jp
- ・ホームページ <https://www.centurysys.co.jp/>

故障と思われる場合は

製品の不良や故障と思われる場合でも、必ず事前に弊社までご連絡ください。事前のご連絡なしに弊社までご送付いただきましてもサポートをお受けすることはできません。

ご連絡をいただく前に

スムーズなユーザーサポートをご提供するために、サポートデスクにご連絡いただく場合は以下の内容をお知らせいただきますよう、お願いいたします。

- ・ファームウェアのバージョンとMACアドレス
(バージョンは運用機能の「システム情報」メニューで確認できます。)
- ・ネットワークの構成(図)
どのようなネットワークで運用されているか、差し支えのない範囲でお知らせください。
- ・不具合の内容または、不具合の再現手順
何をしたときにどういう問題が発生するのか、できるだけ具体的にお知らせください。
- ・エラーメッセージ
エラーメッセージが表示されている場合は、できるだけ正確にお知らせください。
- ・本装置の設定内容
- ・可能であれば、「設定のバックアップファイル」をお送りください。

サポート情報

弊社ホームページにて、製品の最新ファームウェア、マニュアル、製品情報を掲載しています。また製品のFAQも掲載しておりますので、是非ご覧ください。

お客様サポート

<https://www.centurysys.co.jp/support/index.php>

ダウンロード (FutureNet RA-1300)

<https://www.centurysys.co.jp/downloads/securityserver/ra1300/index.html>

ダウンロード (FutureNet RA-1200)

<https://www.centurysys.co.jp/downloads/securityserver/ra1200/index.html>

ダウンロード (FutureNet RA-830)

<https://www.centurysys.co.jp/downloads/securityserver/ra830/index.html>

ダウンロード (FutureNet RA-730)

<https://www.centurysys.co.jp/downloads/securityserver/ra730/index.html>

製品の保証について

本製品の保証期間は、お買い上げ日より1年間です。保証期間をすぎたもの、保証書に販売店印のないもの(弊社より直接販売したものは除く)、また保証の範囲外の故障については有償修理となりますのでご了承ください。保証規定については、同梱の保証書をご覧ください。

本製品にはフラッシュ、電池、FAN等「有寿命部品」が含まれる場合があります。

本製品の保守、保証期間内においても部品寿命に至った場合、保守、保証の対象外となります。

付録 C

ユーザ設定情報のファイルフォーマット

ユーザ設定情報のファイルフォーマット

RADIUSメニューの「ユーザ」-「ファイル読み込み」では、あらかじめ設定ファイルを用意して読み込ませることで大量のユーザをまとめて設定することができます。ここではこの機能を使ってユーザを作成するためのユーザ設定情報のファイルの形式について説明します。

ユーザ設定情報のファイルの形式には、旧形式と CSV の2種類があります。

このうち CSV については、FutureNet 製品活用ガイドをご覧ください。
<http://www.centurysys.co.jp/futurenet-tech-wiki/>

ここでは旧形式について説明します。

旧形式は、管理機能メニューの[システム]-[設定の保存・復帰]で作成される設定保存ファイルに準じたファイルフォーマットになっています。

利用可能な文字コードは、「EUC-JP」または「Shift_JIS」です。

ユーザ設定情報は以下のセクションに分けて定義します。

- ・[RADIUS| プロファイル | 基本]
ユーザ基本情報プロファイルの設定
- ・[RADIUS| プロファイル | 認証プロファイル]
認証アトリビュートプロファイルの設定
- ・[RADIUS| プロファイル | 認証アトリビュート]
認証アトリビュートの設定
- ・[RADIUS| プロファイル | 応答プロファイル]
応答アトリビュートプロファイルの設定
- ・[RADIUS| プロファイル | 応答アトリビュート]
応答アトリビュートの設定
- ・[RADIUS| プロファイル | グループ ID]
グループ ID プロファイルの設定

- ・[RADIUS| プロファイル | 証明書]
証明書プロファイルの設定
- ・[RADIUS| プロファイル | ユーザプロファイル]
ユーザプロファイルの設定
- ・[RADIUS| ユーザ]
ユーザの設定
- ・[RADIUS| ユーザ | 基本]
ユーザ個別設定(基本情報)
- ・[RADIUS| ユーザ | 認証アトリビュート]
ユーザ個別設定(認証アトリビュート)
- ・[RADIUS| ユーザ | 応答アトリビュート]
ユーザ個別設定(応答アトリビュート)
- ・[RADIUS| ユーザ | 証明書発行]
ユーザ証明書の設定

各セクション毎にファイル読み込みを実行する必要があります。

作成するデータが無いセクションについてはファイル読み込みを実行する必要はありません。

複数のデータを記述する場合、各データを空白行で区切る必要があります。

1回のファイル読み込みで設定できるデータは、以下のとおりです。

RA-1300	10,000 件
RA-1200	10,000 件
RA-830	2,000 件
RA-730	2,000 件

ファイルの末尾には改行コードが必要です。

各セクション内の記述の仕方について、以下順に説明します。

ユーザ設定情報のファイルフォーマット

[RADIUS| プロファイル | 基本]
ユーザ基本情報プロファイルについて記述します。

設定例

[RADIUS| プロファイル | 基本]

```
create basic
  config_id=config01
  profile_name=base01
  auth_type=2
  simul_conn_count=3
  ipaddress_allocate=2
  addrpool=pool01
```

データの先頭は create basic という行になります。以降の設定行と設定画面上の項目との対応は以下となります。

config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列を指定してください。省略も可能です。
profile_name	プロファイル名
auth_type	認証方式
0	PAP/CHAP
1	EAP-MD5
2	EAP-TLS
3	EAP-PEAP
4	EAP-TTLS/PAP, CHAP
7	EAP-TTLS/EAP-MD5
simul_conn_count	同時接続数
ipaddress_allocate	IPアドレス割り当て
0	未使用
1	RADIUSクライアント
2	アドレスプール
3	固定
addrpool	アドレスプール

[RADIUS| プロファイル | 認証プロファイル]
認証アトリビュートプロファイルについて記述します。

設定例

[RADIUS| プロファイル | 認証プロファイル]

```
create profile
  config_id=config01
  profile_name=auth01
```

データの先頭は create profile という行になります。以降の設定行と設定画面上の項目との対応は以下となります。

config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列を指定してください。省略も可能です。
profile_name	プロファイル名

プロファイル中のアトリビュートは次のセクションで記述します。

[RADIUS| プロファイル | 認証アトリビュート]
認証アトリビュートについて記述します。

設定例

[RADIUS| プロファイル | 認証アトリビュート]

```
create attribute
  config_id=config01
  auth=auth01
  attribute=Called-Station-Id
  value=000000000000
```

データの先頭は create attribute という行になります。以降の設定行と設定画面上の項目との対応は以下となります。

config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列を指定してください。省略も可能です。
auth	認証プロファイル名
attribute	アトリビュート
value	値

ユーザ設定情報のファイルフォーマット

[RADIUS| プロファイル | 応答プロファイル]
 応答アトリビュートプロファイルについて記述し
 ます。

設定例

```
[RADIUS| プロファイル | 応答プロファイル]
create profile
  config_id=config01
  profile_name=resp01
```

データの先頭は create profile という行になり
 ます。以降の設定行と設定画面上の項目との対応
 は以下となります。

config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列 を指定してください。省略 も可能です。
profile_name	プロファイル名

プロファイル中のアトリビュートは次のセクショ
 ンで記述します。

[RADIUS| プロファイル | 応答アトリビュート]
 応答アトリビュートについて記述します。

設定例

```
[RADIUS| プロファイル | 応答アトリビュート]
create attribute
  config_id=config01
  resp=resp01
  attribute=Reply-Message
  value=aaaaaa
```

データの先頭は create attribute という行になり
 ます。以降の設定行と設定画面上の項目との対応は
 以下となります。

config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列 を指定してください。省略 も可能です。
resp	応答プロファイル名
attribute	アトリビュート
value	値

ユーザ設定情報のファイルフォーマット

[RADIUS| プロファイル | グループ ID]
グループ ID プロファイルについて記述します。

設定例

```
[RADIUS| プロファイル | グループ ID]
create group
  config_id=config01
  profile_name=group01
  group_id=ggg
  format=
```

データの先頭は create group という行になります。
以降の設定行と設定画面上の項目との対応は以下となります。

config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列 を指定してください。省略 も可能です。
profile_name	プロファイル名
group_id	グループ ID
format	形式 (空文字列) UserID@GroupID ntdomain GroupID#UserID

[RADIUS| プロファイル | 証明書]
証明書プロファイルについて記述します。
設定例

```
[RADIUS| プロファイル | 証明書]
create cert
  config_id=config01
  profile_name=cert01
  version=3
  key_length=1024
  sign_algorithm=SHA-1
  subject_ou=
  subject_o=
  subject_l=
  subject_s=
  subject_c=JP
  not_before_year=2006
  not_before_month=5
  not_before_day=1
  not_before_hour=0
  not_before_min=0
  not_after_year=2006
  not_after_month=12
  not_after_day=31
  not_after_hour=23
  not_after_min=59
  digitalSignature=on
  nonRepudiation=
  keyEncipherment=on
  dataEncipherment=
  keyAgreement=
  keyCertSign=
  cRLSign=
  encipherOnly=
  decipherOnly=
  ExtendedKeyUsage=clientAuth
  CRLDistributionPoints=
```

ユーザ設定情報のファイルフォーマット

データの先頭は create cert という行になります。以降の設定行と設定画面上の項目との対応は以下となります。

config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列を指定してください。省略も可能です。	subject_ou	Organizational Unit
profile_name	プロファイル名	subject_o	Organization
version	バージョン: 1 または 3	subject_l	Locality
key_length 鍵長:		subject_s	State or Province
(~ ver1.11.0)	2048, 1024, 512	subject_c	Country
(ver1.12.0 ~ 1.13.1)	2048, 1024	not_before_year	開始日時 年
(ver1.14.0 ~)	2048	not_before_month	開始日時 月
		not_before_day	開始日時 日
sign_algorithm Signature Algorithm:		not_before_hour	開始日時 時
(~ ver1.8.4)	「SHA-1」または「MD5」	not_before_min	開始日時 分
(ver1.8.5 ~ 1.11.0)	「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」, 「SHA-1」, 「MD5」のいずれか	not_after_year	終了日時 年
(ver1.12.0 ~ 1.13.1)	「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」, 「SHA-1」のいずれか	not_after_month	終了日時 月
(ver1.14.0 ~)	「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」のいずれか	not_after_day	終了日時 日
		not_after_hour	終了日時 時
		not_after_min	終了日時 分
		digitalSignature	digitalSignature: on または 空文字列
		nonRepudiation	nonRepudiation: on または 空文字列
		keyEnciphermen	keyEncipherment: on または 空文字列
		dataEncipherment	dataEncipherment: on または 空文字列
		keyAgreement	keyAgreement: on または 空文字列
		keyCertSign	keyCertSign: on または 空文字列
		cRLSign	cRLSign: on または 空文字列
		encipherOnly	encipherOnly: on または 空文字列
		decipherOnly	decipherOnly: on または 空文字列
		ExtendedKeyUsage	ExtendedKeyUsage: serverAuth, clientAuth, codeSigning, emailProtection
		CRLDistributionPoints	CRL Distribution Points

ユーザ設定情報のファイルフォーマット

[RADIUS| プロファイル | ユーザプロファイル]
ユーザプロファイルについて記述します。

設定例

```
[RADIUS| プロファイル | ユーザプロファイル]
create userprofile
  config_id=config01
  profile_name=profile01
  base=base01
  auth=auth01
  cert=cert01
  resp=
  group=
```

データの先頭は create userprofile という行になります。以降の設定行と設定画面上の項目との対応は以下となります。

config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列を指定してください。省略も可能です。
profile_name	プロファイル名
base	基本情報プロファイル名
auth	認証プロファイル名
resp	応答プロファイル名
group	グループプロファイル名
cert	証明書プロファイル名

[RADIUS| ユーザ]
ユーザについて記述します。

設定例

```
[RADIUS| ユーザ]
create user
  config_id=config01
  user_id=user01
  password=pass01
  profile=prof01
  locked=on|off
  ipaddress=
  netmask=
  notes=
```

データの先頭は create user という行になります。以降の設定行と設定画面上の項目との対応は以下となります。

config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列を指定してください。省略も可能です。
user_id	ユーザ ID
password	パスワード
profile	プロファイル名
locked	ロック: on または off (空文字列は off と同義)
ipaddress	IP アドレス
netmask	ネットマスク
notes	備考 入力できない文字がある場合、それらの文字は削除されます。または=に変換されます。

ユーザ設定情報のファイルフォーマット

[RADIUS| ユーザ | 基本]

ユーザ基本情報の個別設定について記述します。

設定例

[RADIUS| ユーザ | 基本]

```
create base
  user=user01
  config_id=config01
  user_profile=profile01
  auth_type=2
  simul_conn_count=3
  ipaddress_allocate=2
  addrpool=pool01
```

データの先頭は create base という行になります。以降の設定行と設定画面上の項目との対応は以下となります。

user	個別設定をおこなうユーザ名。 グループ ID が指定されている場合、グループ名も含めて指定してください。
config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列を指定してください。省略も可能です。
user_profile	ユーザプロファイル名 このユーザに割り当てられているユーザプロファイルを指定してください。
auth_type	認証方式 0 PAP/CHAP 1 EAP-MD5 2 EAP-TLS 3 EAP-PEAP 4 EAP-TTLS/PAP, CHAP 7 EAP-TTLS/EAP-MD5
simul_conn_count	同時接続数
ipaddress_allocate	IP アドレス割り当て 0 未使用 1 RADIUS クライアント 2 アドレスプール 3 固定
addrpool	アドレスプール

[RADIUS| ユーザ | 認証アトリビュート]

認証アトリビュートの個別設定について記述します。

設定例

[RADIUS| ユーザ | 認証アトリビュート]

```
create auth
  user=user01
  config_id=config01
  user_profile=profile01
  attribute=Calling-Station-Id
  value=000000000000
  mode=override
```

データの先頭は create auth という行になります。以降の設定行と設定画面上の項目との対応は以下となります。

user	個別設定をおこなうユーザ名。 グループ ID が指定されている場合、グループ名も含めて指定してください。
config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列を指定してください。省略も可能です。
user_profile	ユーザプロファイル名 このユーザに割り当てられているユーザプロファイルを指定してください。
attribute	アトリビュート
value	値
mode	動作モード
override	上書き
remove	削除

ユーザ設定情報のファイルフォーマット

[RADIUS| ユーザ | 応答アトリビュート]
 応答アトリビュートについて記述します。

設定例

```
[RADIUS| ユーザ | 応答アトリビュート]
create resp
  user=user01
  config_id=config01
  user_profile=profile01
  attribute=Session-Timeout
  value=100
  mode=append
```

データの先頭は create resp という行になります。
 以降の設定行と設定画面上の項目との対応は以下となります。

user	個別設定をおこなうユーザ名。 グループ ID が指定されている 場合、グループ名も含めて指 定してください。
config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列 を指定してください。省略 も可能です。
user_profile	ユーザプロファイル名 このユーザに割り当てられて いるユーザプロファイルを指 定してください。
attribute	アトリビュート
value	値
mode	動作モード
	override 上書き
	append 追加
	remove 削除

[RADIUS| ユーザ | 証明書発行]
 ユーザ証明書を新規発行するための情報を記述し
 ます。

設定例

```
[RADIUS| ユーザ | 証明書発行]
create cert
  user=user01
  config_id=config01
  passphrase=password
  version=3
  key_length=1024
  sign_algorithm=SHA-1
  subject_email=
  subject_cn=user01
  subject_ou=
  subject_o=
  subject_l=
  subject_s=
  subject_c=JP
  not_before_year=2006
  not_before_month=5
  not_before_day=1
  not_before_hour=0
  not_before_min=0
  not_after_year=2006
  not_after_month=12
  not_after_day=31
  not_after_hour=23
  not_after_min=59
  digitalSignature=on
  nonRepudiation=
  keyEncipherment=on
  dataEncipherment=
  keyAgreement=
  keyCertSign=
  cRLSign=
  encipherOnly=
  decipherOnly=
  ExtendedKeyUsage=clientAuth
  CRLDistributionPoints=
  csr=--_____FILE
  -----BEGIN CERTIFICATE REQUEST-----
  MIIBEzCBvgIBADBZMQswCQYDVQQGE...
```

ユーザ設定情報のファイルフォーマット

```
...
...UB40rpxTVdU7TdMsrzALK6+WxaLrWi
-----END CERTIFICATE REQUEST-----
--_____FILE--
```

データの先頭は create cert という行になります。以降の設定行と設定画面上の項目との対応は以下となります。

user	ユーザ名。グループ ID が指定されている場合、グループ名も含めて指定してください。	not_before_year	開始日時 年
config_id	同期コンフィグ名 親子連携無効時は空文字列を指定してください。省略も可能です。	not_before_month	開始日時 月
passphrase	パスフレーズ	not_before_day	開始日時 日
version	バージョン: 1 または 3	not_before_hour	開始日時 時
key_length 鍵長:		not_before_min	開始日時 分
(~ ver1.11.0)	2048, 1024, 512	not_after_year	終了日時 年
(ver1.12.0 ~ 1.13.1)	2048, 1024	not_after_month	終了日時 月
(ver1.14.0 ~)	2048	not_after_day	終了日時 日
sign_algorithm Signature Algorithm:		not_after_hour	終了日時 時
(~ ver1.8.4)	「SHA-1」または「MD5」	not_after_min	終了日時 分
(ver1.8.5 ~ 1.11.0)	「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」, 「SHA-1」, 「MD5」のいずれか	digitalSignature	digitalSignature: on または 空文字列
(ver1.12.0 ~ 1.13.1)	「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」, 「SHA-1」のいずれか	nonRepudiation	nonRepudiation: on または 空文字列
(ver1.14.0 ~)	「SHA-512」, 「SHA-384」, 「SHA-256」, のいずれか	keyEnciphermen	keyEncipherment: on または 空文字列
subject_email	email	dataEncipherment	dataEncipherment: on または 空文字列
subject_cn	Common Name。ユーザ名を指定して下さい。 グループ ID が指定されている場合、グループ名も含めて指定してください。	keyAgreement	keyAgreement: on または 空文字列
subject_ou	Organizational Unit	keyCertSign	keyCertSign: on または 空文字列
subject_o	Organization	cRLSign	cRLSign: on または 空文字列
subject_l	Locality	enciperOnly	enciperOnly: on または 空文字列
subject_s	State or Province	decipherOnly	decipherOnly: on または 空文字列
subject_c	Country	ExtendedKeyUsage	ExtendedKeyUsage: serverAuth, clientAuth, codeSigning, emailProtection
		CRLDistributionPoints	CRL Distribution Points
		csr	証明書署名要求()

ユーザ設定情報のファイルフォーマット

ユーザファイル読み込み機能の独自機能として、証明書署名要求(Certificate Signing Request)を使った証明書発行ができません(ファイル形式がCSVの場合は未対応です)。

証明書署名要求を使う場合にはcsr行にPKCS#10(BASE64 encoded)形式の証明書署名要求データを指定するようにします。設定画面から証明書を発行する場合と同様に、本装置上で鍵生成をおこなう場合にはcsr行は空文字列にします。

証明書発行セクションのユーザID、バージョン、鍵長、Signature Algorithm、Common Name、終了日時の各項目は空欄には出来ません。空欄にした項目に対して証明書プロファイルでデータが設定されている場合には、証明書プロファイルのデータを使って証明書を作成します。パスフレーズを空欄にした場合は、ユーザに設定されているパスワードが使用されます。

ユーザ設定情報のファイルフォーマット

ファイル読み込みの実行例

ファイル1

```
[RADIUS| プロファイル | 基本]
create basic
  config_id=config01
  profile_name=base01
  auth_type=2
  simul_conn_count=
  ipaddress_allocate=0
  addrpool=
```

ファイル2

```
[RADIUS| プロファイル | ユーザプロファイル]
create userprofile
  config_id=config01
  profile_name=prof01
  base=base01
  auth=
  cert=
  resp=
  group=
```

ファイル3

```
[RADIUS| ユーザ]
create user
  config_id=config01
  user_id=user01
  password=pass01
  profile=prof01
  ipaddress=
  netmask=
  notes=

create user
  config_id=config01
  user_id=user02
  password=pass02
  profile=prof01
  ipaddress=
  netmask=
  notes=
```

ファイル1～ファイル3を順次読み込ませることで、ユーザ基本情報プロファイル“base01”の作成、ユーザプロファイル“prof01”の作成、“prof01”をプロファイルに指定したユーザ“user01”および“user02”の作成を行うことができます。

この例では親子連携が有効になっています（config_id=config01）。親子連携が無効の場合は、同期コンフィグ名 config_id に空文字列を指定してください。省略も可能です。

付録 D

用語説明

[Acct-Authentic]

アカウント記録用の RADIUS のアトリビュート。ユーザーがどのように認証されたか、Radius によるのか、NAS 自身でか、他の認証プロトコルでかを示すためにアカウント記録要求に含まれます。

[Acct-Delay-Time]

アカウント記録用の RADIUS のアトリビュート。RADIUS クライアントが今まで何秒間このレコードを送ろうとしていたかを示します。サーバへの到着時刻から引くことでこのアカウント記録要求が生成されたおおよその時間がわかります。

[Acct-Input-Octets]

アカウント記録用の RADIUS のアトリビュート。このサービスが提供されているポートで何オクテット受信したかを示すもので、Acct-Status-Type が Stop のアカウント記録要求レコードでだけ存在しています。

[Acct-Input-Packets]

アカウント記録用の RADIUS のアトリビュート。このサービスが提供されているポートで何パケット受信したかを示すもので、Acct-Status-Type が Stop のアカウント記録要求レコードでだけ存在しています。

[Acct-Output-Octets]

アカウント記録用の RADIUS のアトリビュート。このサービスが提供されているポートで何オクテット送信したかを示すもので、Acct-Status-Type が Stop のアカウント記録要求レコードでだけ存在しています。

[Acct-Output-Packets]

アカウント記録用の RADIUS のアトリビュート。このサービスが提供されているポートで何パケット送信したかを示すもので、Acct-Status-Type が Stop のアカウント記録要求レコードでだけ存在しています。

[Acct-Session-Id]

アカウント記録用の RADIUS のアトリビュート。ユニークなアカウント ID で、ログファイル中のスタートとストップの対応をとる事を容易にします。あるセッションの開始レコードと停止レコードは同じ Acct-Session-Id で記録されます。

[Acct-Session-Time]

アカウント記録用の RADIUS のアトリビュート。ユーザーが何秒間サービスを受けたかを示します。Acct-Status-Type が Stop に設定されているアカウント記録要求レコードにだけ存在します。

[Acct-Status-Type]

アカウント記録用の RADIUS のアトリビュート。アカウント記録要求がユーザサービスの開始または終了のどちらによるものかを示します。

[Acct-Terminate-Cause]

アカウント記録用の RADIUS のアトリビュート。どのようにセッションが終了したかを示すもので、Acct-Status-Type が Stop のアカウント記録要求レコードにだけ存在します。

[CA]

電子的な身分証明書を発行し、管理する機関。証明書所有者の鍵ペア（私有鍵と公開鍵）に対して公開鍵証明書を発行します。

[Called-Station-Id]

認証要求時に NAS から RADIUS サーバに送られるアトリビュートの一つで、ユーザがダイヤルした電話番号などが入れられます。802.1X 使用時には MAC アドレスが通常入れられます。

[Calling-Station-Id]

認証要求時に NAS から RADIUS サーバに送られるアトリビュートの一つで、電話をかけた側の電話番号などが入れられます。802.1X 使用時には MAC アドレスが通常入れられます。

[CA 証明書]

CA 自身の公開鍵証明書。CA 証明書に含まれる CA の公開鍵を使って、他の証明書の電子署名を検証することで、その証明書が正当なものであるかを検証することができます。

[CHAP]

PPP などにおけるチャレンジ・レスポンス方式を利用したユーザー認証方法。PAP に比べて、ユーザー名やパスワード情報をそのまま流さないで、安全性が高くなります。

[client IP address]

アカウント記録ログに記録する項目。RADIUS クライアントの IP アドレスが記録されます。

[clientAuth]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、本証明書がクライアント認証（SSL/TLS による認証時にサーバ側がクライアントを認証する）に利用できることを表しています。

用語説明

[codeSigning]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、本証明書がコード署名に利用できることを表しています。

[Common Name]

X.509 証明書が証明する対象である Subject の一部。ユーザ名、サーバ名等を記述します。

[Country]

X.509 証明書が証明する対象である Subject の一部。国名を記述します。日本であれば "JP" になります。

[CRL]

さまざまな理由により有効期間内に失効した証明書のリスト。

証明書、失効

[CRL Distribution Points]

CRL を配布する場所。URI (http://... 等) で指定します。
CRL

[cRLSign]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、本証明書が失効リストの署名の検証に利用できることを表しています。

[CSR]

証明書署名要求

[dataEncipherment]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、本証明書がデータの暗号化に利用できることを表しています。

[decipherOnly]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、鍵交換をデータの復号化でのみ利用できることを表しています。
keyAgreement が指定されている場合のみ有効です。

[DER 形式]

もともとバイナリ形式である証明書をファイル化するためのエンコード形式の一種。
Netscape 等で使用されています。

[DF フラグ]

このフラグを立てると IP パケットが配送途中で分割されないことを要求します。

[digitalSignature]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、デジタル署名の検証に利用できることを表しています。

[Distinguished Name]

ITU-T X.500 で定義されている、オブジェクトを一意に表現する識別子。

[EAP]

リモートアクセスによるユーザー認証の際に用いられるプロトコルで、PPP を拡張し、追加的な認証方法をサポートします。

EAP-TLS、EAP-TTLS、EAP-PEAP など、さまざまな方式があります。

[EAP-MD5]

EAP フレームワーク上で CHAP 認証をおこなう認証方式。

[EAP-PEAP]

EAP-TTLS のコアアーキテクチャをベースにしてシスコシステムズ、マイクロソフト、RSA セキュリティの 3 社により作成された認証方式。

[EAP-TLS]

TLS (Transport Layer Security) を用いて、電子証明書による相互認証をおこなう認証方式。

[EAP-TTLS]

サーバ側は証明書、クライアント側はユーザ名とパスワードを用いる認証方式。
IETF の Proposed Standard。

[emailProtection]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、電子メールの保護のために利用できることを表しています。

[encipherOnly]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、鍵交換をデータの暗号化でのみ利用できることを表しています。
keyAgreement が指定されている場合のみ有効です。

[Extended Key Usage]

KeyUsage より詳細に、証明書に含まれている公開鍵の使用目的を示します。

[FQDN]

ホスト名等を指定するときに、ドメイン名を省略せずに、トップレベルからのすべての情報を持つドメイン名を表記したもの。

[Framed-IP-Address]

RADIUS のアトリビュートの一つで、ユーザに設定されるべき IP アドレスを表します。

用語説明

[Framed-Protocol]

RADIUS のアトリビュートの一つで、PPP のようなフレーム構造を持つプロトコルを表します。

[HTTPS サーバ証明書]

本装置の管理画面に HTTPS で接続する際に使われるサーバ証明書。

[Key Usage]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれるフィールドで、公開鍵の使用目的を示します。

[keyAgreement]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、鍵交換で利用できることを表しています。

[keyCertSign]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、証明書の署名の検証に利用できることを表しています。

[keyEncipherment]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、鍵を送信する場合に、鍵を暗号化して利用できることを表しています。

[LDAP]

ディレクトリサービスに接続するために使用される通信プロトコルの一種。

[LDAP サーバ]

ディレクトリサービスを提供するサーバソフトウェア。

[LDAPS]

TLS (Transport Layer Security) のコネクション上でディレクトリサービスとの通信をおこなうプロトコル。

[Locality]

X.509 証明書が証明する対象である Subject の一部。市町村名を記述します。

[MIB]

SNMP で管理される機器が保持する自機の状態についての情報。MIB-II が RFC 1213 で規定されています。

[NAS]

ネットワークアクセスサーバ。RADIUSサーバに対してリモートユーザの認証やアカウントingを依頼する装置。
RADIUS クライアント

[NAS-Identifier]

RADIUS のアトリビュートの一つで、Access-Request を送信した NAS を識別するための文字列 (FQDN など) が入れられます。

[NAS-IP-Address]

RADIUS のアトリビュートの一つで、ユーザー認証を要求する NAS の IP アドレスを表します。Access-Request パケットでのみ使用されます。

[NAS-Port]

RADIUS のアトリビュートの一つで、NAS の物理ポート番号を表します。Access-Request パケットでのみ使用されます。

[NAS-Port-Type]

RADIUS のアトリビュートの一つで、NAS の物理ポート種別を表します。Access-Request パケットでのみ使用されます。

[Netscape 拡張]

ブラウザの一種である Netscape で使用される証明書のタイプを指定します。

[nonRepudiation]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、否認防止を目的としたデジタル署名の検証に利用できることを表しています。

[NTLM ハッシュ]

UTF-16LE でエンコードされたパスワードを、MD4 を用いてハッシュした 16 バイトの値です。

[OCSP]

証明書の有効性を確認するために、CRL を用いる代わりに、OCSP サーバ宛に証明書の状態を問い合わせるプロトコル。

[OCSPSigning]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、CA が発行した証明書の状態を OCSP レスポンダが返答することを CA 自身が委譲したことを示すために、OCSP レスポンダの証明書の使用目的に含めます。

[Organization]

X.509 証明書が証明する対象である Subject の一部。企業名、組織名などを記述します。

用語説明

[Organizational Unit]

X.509 証明書が証明する対象である Subject の一部。部署名を記述します。

[PAP]

PPP で採用されている認証方式の一種。ユーザ ID/ パスワードの送信を平文でおこないます。

[PEM 形式]

もともとバイナリ形式である証明書をファイル化するためのエンコード形式の一種。

[RA]

RA-1300・RA-1200・RA-830・RA-730 のいずれか、または全てを表す。RA-1300・RA-1200・RA-830・RA-730 に共通する機能等を説明する時に使用する。

[RADIUS]

ダイヤルアップユーザの認証システム。現在はダイヤルアップ以外の認証やアカウントिंगにも広く利用されています。詳細は RFC2865、RFC2866 等を参照してください。

[RADIUS Proxy]

RADIUS サーバが受信した認証要求やアカウントING 要求を他の RADIUS サーバへ転送する機能。RADIUS Proxy 機能を持った RADIUS サーバ (RADIUS Proxy サーバ) は、RADIUS サーバであるとともに RADIUS クライアントでもあります。

[RADIUS クライアント]

RADIUS サーバに対してリモートユーザの認証やアカウントING を依頼する機器。無線 LAN アクセスポイント、認証スイッチ、NAS (Network Access Server) などがあります。

[RADIUS サーバ証明書]

本装置のサーバ証明書。EAP-TLS 認証等で本装置の正当性を示すために用いられます。

[RADIUS 私有鍵]

RADIUS サーバ証明書の公開鍵に対応した秘密鍵。

[serverAuth]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、本証明書がサーバ認証 (SSL/TLS による認証時にクライアントがサーバを認証する) に使われることを示します。

[Service-Type]

RADIUS のアトリビュートの一つで、ユーザが要求する、またはユーザに提供されるサービスの種類が指定されます。

[Session-Start-Time]

ユーザが RADIUS プロトコルによる認証を受けた時刻。

[Signature algorithm]

証明書への署名に使うアルゴリズム。

[SNMP]

TCP/IP ネットワークにおいて、ルータやコンピュータ、端末など、ネットワークに接続された通信機器をネットワーク経由で監視・制御するためのプロトコル。

[StartTLS]

LDAP 内で TLS (Transport Layer Security) による認証および暗号化をおこなう通信方式。

[State or Province]

X.509 証明書が証明する対象である Subject の一部。都道府県名などを記述します。

[Subject]

X.509 証明書が証明する対象の情報。

[timestamp(epoc time)]

アカウントING ログに記録する項目。パケットを受信した時刻を表します。1970/01/01 00:00:00 からの経過秒数です。

[timestamp(yyyy-mm-dd hh:mm:ss)]

アカウントING ログに記録する項目。パケットを受信した時刻を表します。「2004年10月31日 19時05分20秒」であれば、「2004-10-31 19:05:20」のフォーマットで記録します。

[timeStamping]

X.509 v3 証明書の拡張情報に含まれ、タイムスタンプサービスが時刻証明に用いる公開鍵を証明するために使用してよい証明書であることを表します。

[User-Name]

RADIUS のアトリビュートの一つで、認証に用いられたユーザ名を表します。

用語説明

[VSA] ベンダ固有アトリビュート	[クライアント] RADIUS クライアント
[X.509 証明書 v3 拡張] X.509 証明書のバージョン 3 で新規に定義された拡張フィールド。 証明書の鍵ペアの使用方法等を定義可能になっています。 RFC 3280。	[グループ ID] ユーザ ID を "user@centurysys.co.jp" または "CENTURYSYS¥user" のように、所属グループを表わす文字列を付加して指定する場合の、追加文字列。
[アカウントिंग] RADIUS の機能の一つで、ログイン時刻や通過パケット数など、ユーザのサービス利用の事実を記録すること。	[グループ ID プロファイル] 本装置が使用するプロファイルの一つ。グループ ID に関する設定をあらかじめプロファイルに設定しておくことで、ユーザ登録時の入力を省力化するために用います。
[アカウントングログ] RADIUS のアカウントングに関する情報を記録するログファイル。	[コミュニティ名] SNMP エージェントと通信するために SNMP マネージャがパスワードとして使用する名前。SNMP マネージャの設定に合わせて設定します。
[アトリビュート] RADIUS サーバと RADIUS クライアント間で送受信される情報。属性とその値のペアで構成されます。	[サーバ証明書] サーバマシンに割り当てられる証明書。接続した相手 が正しいサーバであるかをユーザが確認するために用いる。 証明書
[アドレスプール] リモートコンピュータに割り当てる IP アドレスの範囲。	[最大 TTL] ルート確認の実行時に指定する、TTL (目的のホストまでのホップ数) の上限値。
[応答アトリビュート] 認証成功時に RADIUS サーバが RADIUS クライアントに返すアトリビュート。	[サブリカント] IEEE802.1X に準拠した認証を実現するために、ユーザの PC 上で認証機能を提供するソフトウェア。
[応答アトリビュートプロファイル] 本装置が使用するプロファイルの一つ。認証後に NAS へ返すアトリビュートに関する設定をあらかじめプロファイルに設定しておくことで、ユーザ登録時の入力を省力化するために用います。	[シークレット] RADIUS サーバと RADIUS クライアント間で共通で設定される文字列。RADIUS サーバクライアント間の認証や、ユーザパスワードの一時的な暗号化に用いられる。
[オブジェクトクラス(LDAP)] ディレクトリのエントリを定義するための型。	[システムログ] 本装置の起動 / 停止など、システム運用に関連したログ
[親、子] 親子連携機能における、MASTER を親、SLAVE を子と呼びます。	[失効] まだ証明書の有効期間内であるが、私有鍵が他のユーザに漏れたなどの理由により証明書を無効化すること。
[親子連携機能] 1つの同期システムに、複数の同期コンフィグを含む機能です。	[失効日] 証明書が失効した日。
[鍵長] 暗号に用いる鍵の長さ。一般に長い方が安全ですが、その分処理に時間がかかります。	

用語説明

[失効リスト更新間隔]

CRL を更新する間隔。

CRL

[失効理由]

証明書が失効した理由。

失効

[証明書]

公開鍵が本当に持ち主のものだということを証明するためのもの。電子的な身分証明書に相当します。

[証明書署名要求]

Certificate Signing Request (CSR)。

公開鍵に対する証明書を受けるために送られる、電子的な申請書。申請者の公開鍵など証明書発行に必要な情報が含まれており、CA による証明書発行に用いることができます。

[証明書プロファイル]

本装置が使用するプロファイルの一つ。ユーザ証明書に関する設定をあらかじめプロファイルに設定しておくことで、ユーザ登録時の入力を省力化するために用います。

[設定ウィザード]

本装置に必要な設定をまとめておこなうための設定ツール。本装置購入後最初に立ち上げた場合に起動する他、メニューから選択することもできる。

[装置種別]

同期をおこなう本装置のうち、設定の元となる機器を MASTER、それ以外を SLAVE と呼びます。

[対向装置]

本装置を二重化して使用する際のもう一台のサーバ。

[タイプ名 (RADIUS VSA)]

RADIUS のベンダ固有アトリビュートを定義する場合のアトリビュート名。

[同期コンフィグ]

同期装置間で共有される設定情報です。1つの同期コンフィグは、1台の MASTER と1台の SLAVE で共有されます。

[同期システム]

同期コンフィグおよび同期装置によって構成され

る系です。各同期装置は、ただ1つの同期システムに属することができます。

[同期装置]

設定情報の同期機能を用いて設定情報を共有する本装置を同期装置と呼びます。

[同時接続数]

RADIUS サーバで同時ログインを許可する数の上限。

[二重化]

RADIUS サーバを2台設置することで、障害対策をおこなう構成を取る事。

[認証アトリビュート]

認証時に、パスワードなどの情報の他に認証の可否に利用するアトリビュートを指定します。

[認証アトリビュートプロファイル]

本装置が使用するプロファイルの一つ。認証時に確認するアトリビュートに関する設定をあらかじめプロファイルに設定しておくことで、ユーザ登録時の入力を省力化するために用います。

[認証方式]

ユーザ認証の方式。

PAP, CHAP, EAP-MD5, EAP-TLS, EAP-PEAP, EAP-TTLS

[認証ログ]

ユーザの認証結果を記録するログファイル。

[バインド(LDAP)]

LDAP プロトコルにおいて、認証をおこなう行為。

[パスフレーズ]

私有鍵を使用する場合に必要な秘密の文字列。

[ファシリティ]

採取するログの分類。

[フォーマット (RADIUS VSA)]

RADIUS のベンダ固有アトリビュートを定義する場合のデータ型を指定します。text, string, address, integer, ipv6address があります。

用語説明

[プロファイル]

同じ属性の設定内容をグループ化して設定するためのもの。テンプレート。

ユーザプロファイル、ユーザ基本情報プロファイル、認証アトリビュートプロファイル、証明書プロファイル、応答アトリビュートプロファイル、グループ ID プロファイル

[ベンダ (RADIUS VSA)]

RADIUS のベンダ固有アトリビュートを定義する場合のベンダ情報。

[ベンダ ID (RADIUS VSA)]

RADIUS のベンダ固有アトリビュートを定義する場合のベンダ ID。

[ベンダ固有アトリビュート]

RADIUS プロトコルでアトリビュート番号 26 の値として定義されるアトリビュート。各ベンダにより独自に規定されており、動作はベンダによって異なります。

[ベンダ名 (RADIUS VSA)]

RADIUS のベンダ固有アトリビュートを定義する場合のベンダ名。

[本装置管理者]

本装置 (RA-1300・RA-1200・RA-830・RA-730) の全ての設定をおこなう権限をもつ RA-1300・RA-1200・RA-830・RA-730 のアカウント。

ユーザ管理者

[本装置の管理者 (SNMP)]

本装置管理者への連絡先。SNMP の管理情報の一つ。

[本装置の設置場所 (SNMP)]

本装置の物理的な設置場所。SNMP の管理情報の一つ。

[本装置の説明 (SNMP)]

本装置についての説明。ハードウェアの名称、バージョン、OS の情報などを指定する。SNMP の管理情報の一つ。

[本装置の名称 (SNMP)]

本装置の管理上の名前。通常 FQDN を指定する。SNMP の管理情報の一つ。

[有効期間]

証明書の有効期間。

[ユーザ]

RADIUS ユーザ。

[ユーザ ID]

RADIUS ユーザに対して一意に付けられる識別名。

[ユーザ管理者]

RADIUS ユーザの追加、編集、削除やユーザ証明書の発行、失効のみをおこなう権限をもつ RA-1300・RA-1200・RA-830・RA-730 のアカウント。本装置管理者によって作られる。

本装置管理者

[ユーザ基本情報]

認証方式、同時接続数、IP アドレスの割り当て方法、アドレスプールなど RADIUS ユーザに関する属性。

[ユーザ基本情報プロファイル]

本装置が使用するプロファイルの一つ。認証方式など、基本的な情報の設定をあらかじめプロファイルに設定しておくことで、ユーザ登録時の入力を省力化するために用います。

[ユーザ証明書]

ユーザが本人であることを証明する証明書。

[ユーザプロファイル]

ユーザに関する共通の設定情報をあらかじめ定義しておくことで、ユーザ登録時の入力を省力化するためのもの。ユーザ基本情報、認証アトリビュート、証明書、応答アトリビュート、グループ ID の各プロファイルからなります。

ユーザ基本情報プロファイル、認証アトリビュートプロファイル、証明書プロファイル、応答アトリビュート、グループ ID プロファイル

[レルム (realm)]

受信した要求の処理方法を決定するために RADIUS サーバが使用する領域。

本装置では、認証要求やアカウント要求に含まれるユーザ名 (User-Name) の最後に現れる @ より後ろの文字列をレルムとして扱います。

受信した要求に含まれるレルムの値によって、要求を本装置で処理するか、他サーバへ転送するか (RADIUS Proxy) を選択することができます。

付録 E

システムログ一覧

システムログ一覧

ログ

- (1) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,RADIUS,RADIUS start
- (2) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,RADIUS,RADIUS stop
- (3) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,RADIUS,RADIUS restart
- (4) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,system,peer up: PEER_DEVICE (A.B.C.D)
- (5) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,system,peer down: PEER_DEVICE (A.B.C.D)
- (6) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,system,peer up: A.B.C.D
- (7) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,system,peer down: A.B.C.D
- (8) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,system,[CFG_ID:PEER_DEVICE] invalid request found.
- (9) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,NTP,NTP start
- (10) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,NTP,NTP stop
- (11) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,NTP,NTP restart
- (12) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,SNMP,SNMP start
- (13) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,SNMP,SNMP stop
- (14) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,SNMP,SNMP restart
- (15) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,RADIUS,Unknown client A.B.C.D:E
- (16) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,AD Interaction,AD Interaction restart
ver1.8.3以降は出力されません。
- (17) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,DHCP,DHCP start
- (18) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,DHCP,DHCP stop
- (19) YYYY-MM-DD hh:mm:ss,DHCP,DHCP restart

ログ内容

- (1) GUI を用いて RADIUS サーバが起動された時に出力されます。
- (2) GUI を用いて RADIUS サーバが停止された時に出力されます。
- (3) GUI を用いて RADIUS サーバが再起動された時、またはシステム起動により RADIUS サーバが起動された時に出力されます。
- (4) 設定情報の同期に関して対向装置との接続性が確認された時に出力されます。
- (5) 設定情報の同期に関して対向装置との接続性が失われた時に出力されます。
- (6) 二重化に関して対向装置との接続性が確認された時に出力されます。
- (7) 二重化に関して対向装置との接続性が失われた時に出力されます。
- (8) 設定変更の要求が MASTER から SLAVE へ転送された場合に、SLAVE で要求が処理されなかった時に MASTER で出力されます。設定情報の不整合などが原因として考えられます。
- (9) GUI を用いて NTP サーバが起動された時に出力されます。
- (10) GUI を用いて NTP サーバが停止された時に出力されます。
- (11) GUI を用いて NTP サーバが再起動された時に出力されます。
- (12) GUI を用いて SNMP サーバが起動された時に出力されます。
- (13) GUI を用いて SNMP サーバが停止された時に出力されます。
- (14) GUI を用いて SNMP サーバが再起動された時に出力されます。
- (15) 未登録の RADIUS クライアントより認証要求があった時に出力されます。
- (16) AD 連携機能を利用し、RADIUS サーバが(再)起動された時に出力されます。
ver1.8.3以降は出力されません。
- (17) GUI を用いて、DHCP サーバが起動された時に出力されます。
- (18) GUI を用いて、DHCP サーバが停止された時に出力されます。
- (19) GUI を用いて、DHCP サーバが再起動された時に出力されます。

ログ項目説明

以下の番号は、ログ項番に該当します。

YYYY-MM-DD hh:mm:ss : 日時

(4)(5)

PEER_DEVICE : 対向の同期装置名

A.B.C.D : 対向の同期装置の IP アドレス

(6)(7)

A.B.C.D : 対向の装置の IP アドレス

(8)

CFG_ID : 設定情報の同期の CONFIG_ID

PEER_DEVICE : 対向の同期装置名

(15)

A.B.C.D : RADIUS クライアントの IP アドレス

E : RADIUS クライアントの送信元ポート番号

付録 F

同期・二重化構成におけるファームウェア更新手順

同期・二重化構成におけるファームウェア更新手順

二重化構成におけるファームウェアの更新手順を図に示します。この手順はいずれも両機器で同時にサービスが停止しないことを重視しています。まれにログの欠落・重複が発生する可能性があります。

図：二重化構成におけるファームウェア更新手順

Secondary、Primaryの順にファームウェアを更新		Primary、Secondaryの順にファームウェアを更新	
Primary / Master	Secondary / Slave	Primary / Master	Secondary / Slave
	(1) RADIUSサービス停止	(1) RADIUSサービス停止	
	(2) ファームウェア更新 (自動再起動)	(2) ファームウェア更新 (自動再起動)	
(3) ログ同期		(3') ログ取得	
	(4) RADIUSサービス開始	(4) RADIUSサービス開始	
(5) RADIUSサービス停止			(5) RADIUSサービス停止
(6) ファームウェア更新 (自動再起動)			(6) ファームウェア更新 (自動再起動)
(7) ログ取得		(7') ログ同期	
(8) RADIUSサービス開始			(8) RADIUSサービス開始

- (1) [RADIUS] - [サーバ] - [起動・停止]より「停止」ボタンを押下し、GUI画面でサービスが「停止中」になっている事を確認します。
- (2) [管理機能] - [システム] - [ファームのアップデート]よりファームウェアを指定して、「実行」ボタンを押下します。
- (3) (3') 情報表示 ([運用機能] - [システム情報] - [システム情報]) の [二重化 / 設定の同期状態] が「OK」となっている事を確認します。
- (3) 「ログ同期」([管理機能] - [システム] - [設定情報の同期])ボタンを押下します。
- (3') 「ログ取得」([管理機能] - [システム] - [設定情報の同期])ボタンを押下します。
- (4) [RADIUS] - [サーバ] - [起動・停止]より「開始」ボタンを押下し、GUI画面でサービスが「動作中」になっている事を確認します。
- (5) [RADIUS] - [サーバ] - [起動・停止]より「停止」ボタンを押下し、GUI画面でサービスが「停止中」になっている事を確認します。
- (6) [管理機能] - [システム] - [ファームのアップデート]よりファームウェアを指定して、「実行」ボタンを押下します。
- (7) (7') 情報表示 ([運用機能] - [システム情報] - [システム情報]) の [二重化 / 設定の同期状態] が「OK」となっている事を確認します。
- (7) 「ログ取得」([管理機能] - [システム] - [設定情報の同期])ボタンを押下します。
- (7') 「ログ同期」([管理機能] - [システム] - [設定情報の同期])ボタンを押下します。
- (8) [RADIUS] - [サーバ] - [起動・停止]より「開始」ボタンを押下し、GUI画面でサービスが「動作中」になっている事を確認します。

同期・二重化構成におけるファームウェア更新手順

Ver1.8.3以降のバージョンへのファームウェア更新

Ver1.8.2 以前のバージョンから Ver1.8.3 以降のバージョンへのファームウェア更新において、ログ同期・ログ取得を用いたログ等の引き継ぎに一部制限があります。

グループ ID(GroupID≠UserID)を使用するユーザが存在する環境下などでログ等を引き継いだ場合、下記のような不都合が生じることがあります。

- ・アカウント要求(Stop)を受信しても、ファームウェア更新前にログインしたユーザのログイン情報が削除されない。

このような環境では、ファームウェア更新時にログの引き継ぎを行わないでください。RADIUS クライアントでも、リセット(再起動等)などの操作を行なってください。

ログイン情報が削除されないことがあれば、必要に応じて強制ログアウトなどを行って下さい。

付録 G

親子連携

親子連携

親子連携機能を設定、使用する上での注意事項をまとめています。

親子連携機能の有効化

親子連携機能の有効・無効は、ユーザが明示的に設定します。親子連携機能を有効にする場合は、「設定情報の同期」を「親子連携」に設定します。



親に設定する場合の例



子に設定する場合の例

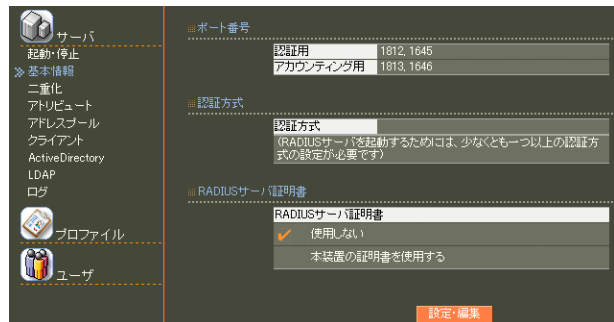
親子連携機能の有効・無効を切り替えるためには、以下の条件を満たすことが必要です。

- RADIUS サーバが停止していること。
- 同期コンフィグが存在しないこと。
- 同期コンフィグ毎の設定が存在しないこと。
(「第8章 管理機能 II. システム」の「表・設定項目一覧」を参照してください。)
- CA・証明書が存在しないこと。
- Active Directory を使用していないこと。
- LDAP を使用していないこと。

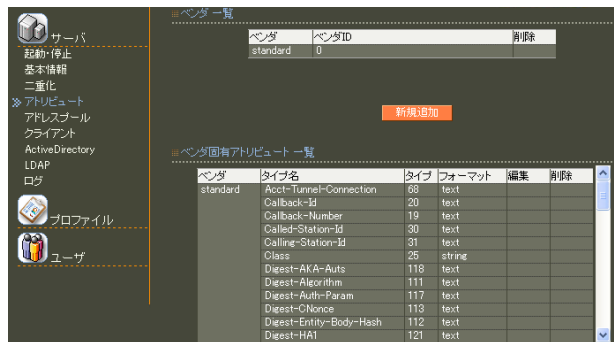
全ての同期コンフィグで共有する設定

次の項目に関しては、同期コンフィグ毎には設定できません。全ての同期コンフィグで設定を共有します。

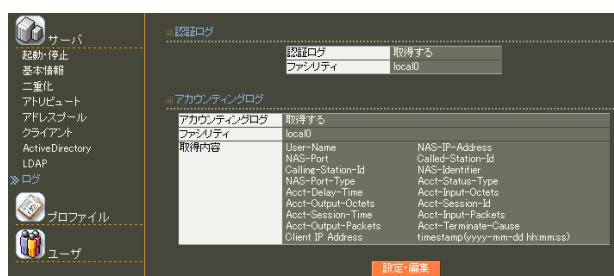
・[RADIUS]-[サーバ]-[基本情報]



・[RADIUS]-[サーバ]-[アトリビュート]



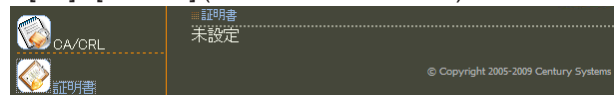
・[RADIUS]-[サーバ]-[ログ]



・[CA]-[CA/CRL]



・[CA]-[証明書](ユーザ証明書は除く)



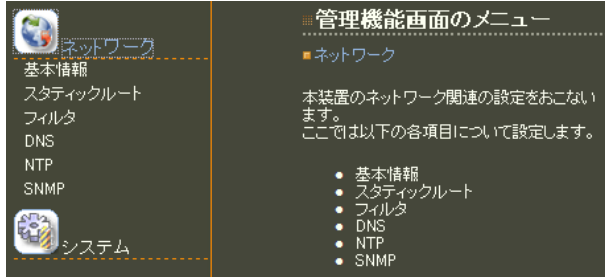
但し、証明書については同期コンフィグ毎の設定も可能です。

親子連携

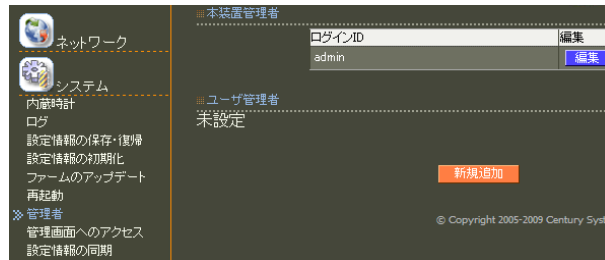
子での設定

親子連携機能が有効の場合、子で設定できるのは、以下の管理機能だけです。

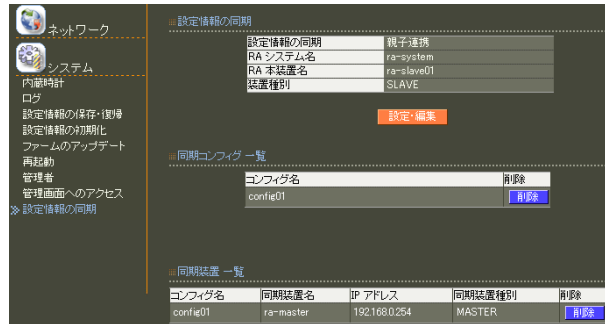
- ・[管理機能]-[ネットワーク]



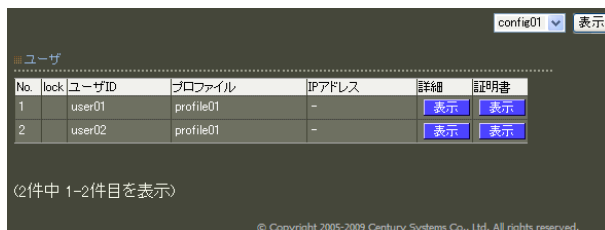
- ・[管理機能]-[システム]-[管理者]



- ・[管理機能]-[システム]-[設定情報の同期]



「第 8 章 管理機能 II. システム」の「表. 設定項目一覧」で、「親子連携有効」が の項目については、子では設定変更ボタン（「新規追加」「編集」「削除」等のボタン）が表示されません。



「新規追加」ボタンが表示されない例

親での設定

親子連携機能が有効の場合、設定（「新規追加」「編集」「削除」等は、全て親で行います。

「第 8 章 管理機能 II. システム」の「表. 設定項目一覧」で、「親子連携有効範囲」が「同期コンフィグ毎」の項目については、GUI 画面右上のプルダウンから、同期コンフィグを選択してから設定します。



右上プルダウンから同期コンフィグを選択

親から子（の一部）への reachability がない時でも、親での設定は可能です。「強制同期」するまで子には反映されません。

親子連携

「設定情報の同期」による冗長化

親子連携機能が有効の場合、[RADIUS]-[サーバ]-[二重化]の設定は無視され、常に同期処理・冗長化(二重化)処理を実行します。同期したくない時は同期装置を削除して下さい。

親子連携機能が有効の場合、[RADIUS]-[サーバ]-[二重化]の設定変更は出来ません。設定画面を表示することも出来ません。

設定可能な値

各設定項目について設定可能な値は、同期コンフィグ毎に独立していません。例えば、ユーザ名は同期システム全体で一意とします。

RADIUS クライアントの IP アドレスは、同期コンフィグ間での重複は許されません。

設定可能な数

各設定項目について同期コンフィグ毎に設定可能な数は、RA-830・RA-730 最大設定数と基本的に同じです。

ただし、同期システム全体で RA-1300・RA-1200 の最大設定数を超えることは出来ません。

たとえば、アドレスプールは同期コンフィグ毎に最大10まで作成可能ですが、同期システム全体では100を超えることは出来ません。

そのため、同期コンフィグの数を20とした場合、各コンフィグに設定できるアドレスプール数は、平均すると5になります。10ではありません。

設定可能な数は「付録 A 最大数一覧」を参照してください。

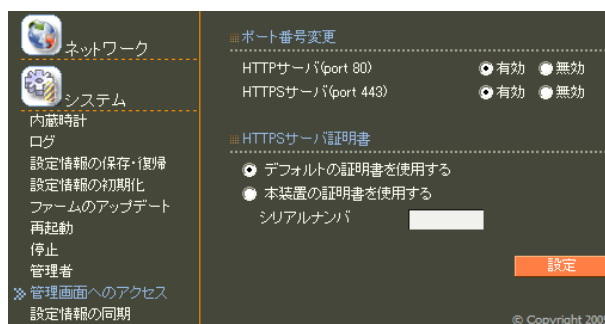
CAの数

同期システム全体でCAの数は1つです。

CAの削除

CAの削除を行う際は、全ての同期装置のHTTPSサーバ証明書の設定を「本装置の証明書を使用する」以外の設定に変更してください。

「本装置の証明書を使用する」の状態でのCAの削除を行った場合の動作は保証しません。



証明書

同期コンフィグ毎の証明書(ユーザ証明書以外)を失効した場合は、全同期コンフィグで共有の証明書に変更されます。

ユーザ証明書を失効した場合は、同期コンフィグ毎のままで変更はされません。但し、該当ユーザを削除した場合に、全同期コンフィグで共有の証明書に変更されます。

ActiveDirectory

親子連携機能が有効の時に、ActiveDirectory連携機能は使用できません。また、ActiveDirectory連携機能を使用中は、親子連携機能を有効にすることは出来ません。

LDAP

親子連携機能が有効の状態では、LDAPは使用できません。また、LDAPを使用中は、親子連携機能を有効にすることは出来ません。

レルム

親子連携機能が有効の状態では、レルム設定を追加することは出来ません。また、レルム設定が存在する場合、親子連携機能を有効にすることは出来ません。

親子連携

設定情報の同期

「同期しない」「同期する」から「親子連携」に変更する場合、または「親子連携」から「同期しない」「同期する」に変更する場合は、RADIUS サーバが停止している状態で行ってください。

同期コンフィグ

親子連携機能が有効の状態では、同期コンフィグを追加・削除すると、その設定変更はRADIUSサーバに即時反映されます。

同期装置

親子連携機能が有効の状態では、同期装置を追加・削除すると、その設定変更はRADIUSサーバに即時反映されます。

コンフィグ名	同期装置名	IP アドレス	同期装置種別	削除
config01	ra-slave01	192.168.0.1	SLAVE	削除
config02	新規追加			

同期装置を削除した場合、未転送のメッセージ(ログ、設定情報など)があれば、転送されずに破棄されます。

強制同期、設定取得、一括同期

親子連携が有効の状態では、設定情報の同期は「強制同期」のみ使用することができます。通常の自動的な同期処理は「即時実行」・「一括処理」ともに行いません。

設定情報の同期：同期する

設定情報の同期：親子連携

一括同期

親子連携が有効の状態では、使用することはできません。

強制同期

同期コンフィグ毎に行います。強制同期を行った場合、指定された同期コンフィグのみ初期化・設定を実施します。各種ログは削除されます。

設定取得

親子連携が有効の状態では、使用することはできません。

ログ同期

同期コンフィグ毎に行います。

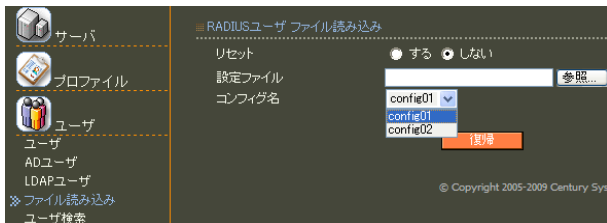
ログ取得

同期コンフィグ毎に行います。

親子連携

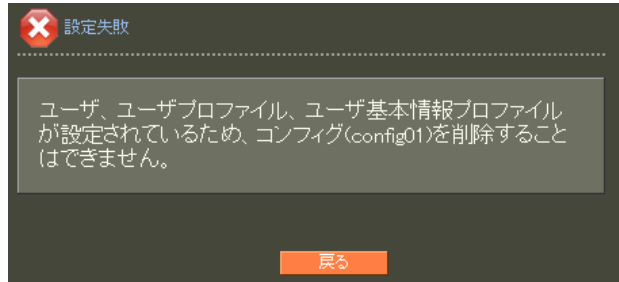
ユーザファイル読み込み

親子連携機能が有効の状態では、ファイル読み込みは同期コンフィグ毎に行います。子では、設定画面の表示は出来ません。



同期コンフィグの削除

同期コンフィグに属する設定がある場合、同期コンフィグ自体の削除は出来ません。



ユーザ検索

親で検索を実行する場合

「指定しない」を選択すると、全ての同期コンフィグが検索対象となります。

同期コンフィグを選択すると、選択した同期コンフィグが検索対象となります。

子で検索を実行する場合

そのRAが属する同期コンフィグのみが検索対象となります。



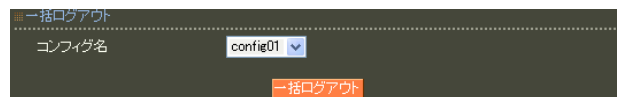
RADIUS サービスの起動・再起動・停止

親と子のRADIUS サービスの起動・再起動・停止は独立して動作します。一方を再起動しても他方は再起動しません。



一括ログアウト

一括ログアウトは、同期コンフィグ毎に行います。



付録 H

認証ログの reason メッセージ一覧

認証ログの reason メッセージ一覧

認証ログに記録する reason メッセージ、および当該 reason メッセージを記録する条件を以下に示します。

- (1) Incorrect password (*password*) [*type*] または Incorrect password [*type*]
ユーザが入力したパスワードが正しくない時に記録されます。
RADIUSクライアントのシークレットが正しくない場合にも記録されることがあります。
(*password*) が記録されるのは、認証失敗時のパスワードを記録するように選んだ場合、かつ PAP または EAP-TTLS/PAP の場合に限ります。
パスワードは最大 30 バイトまで記録されます。31 バイト目以降は省略されます。30 バイトを超えた場合は、(100000000000000000ong passwo ...) のようになります。
type は、認証方式またはそれに準じる文字列です (以下同じ)。
- (2) Empty password [*type*]
認証要求に含まれているパスワードの長さが 0 の時に記録されます。
- (3) No username in request [*type*]
認証要求にユーザ名が含まれていない時、または認証要求に含まれているユーザ名の長さが 0 の時に記録されます。
- (4) Too many sessions (*number*) [*type*]
ユーザ毎に設定された同時接続数を超えて認証要求があった時に記録されます。
number は同時接続数の設定値です。
- (5) User not found [*type*]
ユーザが RA や LDAP サーバ上に存在しない時、または RA 上に存在するがロックされている時に記録されます。LDAP サーバに正常に接続できなかった時も含めます。
- (6) Type not permitted [*type*]
認証方式がユーザの設定値と異なる時に記録されます。
例えば、EAP-PEAP に設定されているユーザが、PAP を使用した場合などが該当します。
- (7) Attributes unmatched [*type*]
指定した認証アトリビュートが認証要求に含まれていない時に記録されます。
- (8) No address [*type*]
払い出すアドレスがない時(アドレスプール)に記録されます。
- (9) No address (cannot connect) [*type*]
払い出すアドレスがない時(アドレスプール)に記録されます。
二重化構成時に、対向装置との接続に失敗した場合に記録されます。

認証ログの reason メッセージ一覧

(10) No address (response timed out) [*type*]

払い出すアドレスがない時(アドレスプール)に記録されます。

二重化構成時に、対向装置からの応答が一定時間内になかった場合に記録されます。

(11) TLS verification error (*string*) [*type*]

TLSクライアント証明書の検証で失敗した時に記録されます。

*string*はその詳細な内容を示す文字列です。以下に例を示します。

(a) unable to get local issuer certificate

・クライアント証明書がRA で作成したCA で発行されたものでない時に記録されます。

(b) certificate revoked

・クライアント証明書が失効済みの時に記録されます。

(c) certificate is not yet valid

・クライアント証明書の有効期限の開始日時よりRAの時刻が前の時に記録されます。

(d) certificate has expired

・クライアント証明書の有効期限の終了日時よりRAの時刻が後の時に記録されます。

(e) CRL is not yet valid

・クライアント証明書用の失効リストの最後の更新(last Update) よりRAの時刻が前の時に記録されます。

(f) CRL has expired

・クライアント証明書用の失効リストの次の更新(next Update) よりRAの時刻が後の時に記録されます。

(g) unsupported certificate purpose

・クライアント証明書にKey Usageが存在し、その値としてdigitalSignatureおよびkeyAgreementのどちらも設定されていない時に記録されます。

・クライアント証明書にExtended Key Usageが存在し、その値としてclientAuthが設定されていない時に記録されます。

(12) TLS alert sent (*level description*) [*type*]

クライアントにTLS alertを送った時に記録されます。

*level*および*description*は、alertの内容を表します。

詳細は、RFC 5246などを参照してください。

例えばクライアントから提示された暗号スイート(cipher suite)の中に、本装置で利用可能なものがなければ(fatal handshake_failure)となります。

(13) TLS alert received (*level description*) [*type*]

クライアントからTLS alertを受け取った時に記録されます。

*level*および*description*は、alertの内容を表します。詳細は、RFC 5246などを参照してください。

(14) Unexpected EAP-Message [*type*]

予期しないEAP-Messageを受信した時に記録されます。

例えば、RAを二重化構成で使用している状態で、EAP-TLSセッション途中でプライマリからセカンダリに切り替えが発生した場合などに記録されます。

認証ログの reason メッセージ一覧

- (15) Type not supported [*type*] または *Type not supported* [*type*]
サポートしていない EAP *type* を受信した時、RADIUS サーバ設定で有効にされていない認証方式を受信した時、受信した認証要求にパスワードが含まれていない時などに記録されます。
例:
Type not supported [PAP]
RADIUS サーバ設定で PAP/CHAP を無効にしている状態で、PAP を受信した時に記録されます。
Type not supported [???]
認証要求にパスワードが含まれていない時に記録されます。
Type not supported [EAP-TTLS/PAP]
RADIUS サーバ設定で PAP/CHAP を無効にしている状態で EAP-TTLS/PAP を受信した時に記録されます。
EAP-TTLS not supported [EAP]
RADIUS サーバ設定で EAP-TTLS を無効にしている状態で、EAP-TTLS を希望する Nak を受信した時に記録されます。
EAP-SIM not supported [EAP]
EAP-SIM を希望する Nak を受信した時に記録されます。
EAP-GTC not supported [EAP-TTLS/EAP]
EAP-TTLS/EAP-GTC を希望する Nak を受信した時に記録されます。
Type-41 not supported [EAP]
EAP-SPEKE を希望する Nak を受信した時に記録されます。
Type-0 not supported [EAP]
使用可能な *type* がないことを通知する Nak を受信した時に記録されます。
EAP-MD5 not supported [EAP-TTLS/EAP]
RADIUS サーバ設定で EAP-MD5 を無効にしている状態で、EAP-TTLS/EAP-*** を希望する Nak を受信した時に記録されます。
Type not supported [EAP-SIM]
クライアントが Identityなどを省略して、EAP-SIM を突然送信してきた時に記録されます。
Type not supported [EAP-MSCHAPv2]
EAP-MSCHAPv2 を受信した時に記録されます。
Type not supported [Notification]
Notification を受信した時に記録されます。
- (16) LDAP (*ldap-name*): Password not configured [*type*]
パスワードが LDAP サーバなどで設定されていない時、または LDAP サーバから取得できない時に記録されます。
例えば、認証方式が EAP-TTLS/CHAP、かつ管理者権限で平文パスワードが LDAP サーバから取得できない場合などに記録されます。
ldap-name は、本装置で設定した LDAP サーバの名前です(以下同じ)。
- (17) LDAP (*ldap-name*): Incorrect password (*password*) [*type*] または
LDAP (*ldap-name*): Incorrect password [*type*]
LDAP サーバを使用、かつユーザが入力したパスワードが正しくない時に記録されます。
(*password*)については、Incorrect password (*password*) [*type*] についての記載を参照してください。

認証ログの reason メッセージ一覧

- (18) LDAP (*ldap-name*): TLS error (*number*) [*type*]
LDAP サーバとの接続に、TLS が理由で失敗した時に記録されます。
number は理由の詳細を表す数です。
- (19) LDAP (*ldap-name*): Connection failed (*number*) [*type*]
LDAP サーバと接続できなかった場合に記録されます。
TCP 接続後、上位レイヤーで reject された場合（アクセス禁止など。パスワード不一致以外）に記録されます。
- (20) Remote server
RADIUS Proxy 使用時、転送先サーバからの応答を受信した時に記録されます。
- (21) Remote server: No response (*number*)
RADIUS Proxy 使用時、転送先サーバから時間内に応答がなかった時に記録されます。
number は待ち時間（単位：秒）です。
- (22) Active Directory [*type*]
Active Directory 連携時に記録されます。
- (23) Protocol error *number* または Protocol error *number* [*type*]
クライアントがプロトコルとして正しくないメッセージを送信してきた時に記録されます。
number は理由の詳細を表す数です。
- (24) Fatal error *number*
RADIUS サーバ内部で、致命的なエラーが発生した時に記録されます。例えば、メモリが確保出来なかった、などの場合に記録されます。*number* は理由の詳細を表す数です。

FutureNet RAシリーズ ユーザーズガイド Ver1.20.0対応版

2018年9月版

発行 センチュリー・システムズ株式会社

Copyright (c) 2005-2018 Century Systems Co., Ltd. All rights reserved.
